四月一日發行

女學世界

第十二巻
第五號

明治三十三年十二月二十五日（第三種郵便物認可）（毎月一回廿三日印刷納本）
明治四十五年三月廿三日印刷納本



博文館


花の便に言添へて 美顔水
顔も肌も美しう 楽しき春にあひけると
春告鳥の音の如き
美顔水
桃谷順天館
本舗
桃谷順天館

女學世界第十二巻第五號四月號目次

クラブ新聞

可笑な真似

岡田八千代女史談

此頃はよう俳優の化粧談と申す事が方々に出て居りまして、素人の方でも真似をなさひまして、こと〴〵しく眉を塗つたり紅をさしたりする方があるやうでございますが、俳優はやはり電氣の強い舞臺で一定の間隔を置いたならば、近くからも遠くからも美しく見えるやうに、赤男が女に見えるやうに、色の黒い人でも白く見えるやうに、化粧するので、自然の美を應用して夫を少しでも美しく見せやうとするのとは大層違ひますから、參考になさるのは結構ですが真似るのは如何かと思はれます。其しろしにはどうも役者の素顔と云ふものは、皮膚の色なども惡く反つて素人の方よりも穢いやうに見受けられると存じます、夫かと云つて幾度も洗ひさへすれば好い塗りさへすればよいと云ふのでは矢張り奇麗には見えません。少しでも丁寧に洗ふなり塗るなりした方が必ず美しく見えやうと存じます。妾は一體皮膚の弱い方で大低な化粧品は直ぐ障りますが、クラブは廣告的でなしに全く好いと存じます。少くも妾には大層よく合つてゐります。と存じます。

第一流の人は挙つてクラブ白粉の愛用者なり
有ゆる白粉の中クラブおしろいは最上の貝品

■心掛け一つ

時間を餘計に費さずして身體を清潔にし容姿を美しくするには何うすればよいかと云ふに、これは平常心を用ひて皮膚の自然美を充分に發揮して置けば何も化粧に餘計の手間をかける必要はないのでクラブ洗粉を用ひて皮膚を洗ひ清め、クラブ美身クリームをつけて更に其上へクラブ白粉で、床しい高尚な淡化粧を施せば夫で目的が達せられるのです。

●●●●●●●●●

●年額六千萬圓の金剛石　英領亞弗利加の金剛石鑛では年々五六千萬圓も掘り出すが地下千尺も掘り下げて居る所があるので頗る手數が掛るとの事です。

▲一日の中最も樂しきは入浴とクラブ洗粉使ふ時▼

渡し船

春風がソヨと渡つて岸の柳が芽を吹いた。今河岸を離れた渡し船が、藍を流したやうな水を切つて、河の真中に乘り出した時、艫の方に蹲踞んで居た一人の娘が、『オツノ〵』と風呂敷包を開いて『姉様買ひ給ひてよ』と取出したのを見れば何れも嬉しいクラブの品ばかりだつた。

川柳

歸省してクラブの通を振り廻し
歯磨もクラブでなけりや目が覺ず
出代りのクラブ洗粉買つて行き
白粉も矢張りクラブで御座んすか
白粉はクラブに限るネーあなた
伊勢屋ではクラブ洗粉下女使ひ

一口噺

妹「姉さん今年はきつと梅がいつもより白くよい香して咲く事よ」
姉「なぜ！」
妹「でも私れ今クラブ白粉を肥料にやつて來たんですもの。」

一筆示上𛀙

●●●

▲寄宿舎より　妾共の寄宿舎にも甲の白粉黨又は乙の白粉黨などゝさま〴〵有之候へども品質精良なるクラブ白粉黨が最も優勢を占め居るは誠に喜ばしき限りに御座候（よし子）

●●●

▲化粧室より　妾の化粧室は妾の別天地です妾は此別天地にクラブと親しむ時を最も愉快に感じますクラブクラブクラブ！汝は妾の親友であると同時に又妾の慰安者である（クラブ女史）

●●●

▲風呂屋より　錢湯は妾達の一種の社交倶樂部と申しても宜しく候が場所が場所とて平常の倶樂部にての話題は化粧品の品定めが多く毎度ながらクラブの評判宜敷は嬉しく存候（みつ子）

筝曲通信教授所御採定　琴曲大家御證明付
新案特許第六三四八五號

坂本式 琴糸しめ機

[illegible] 金三圓 送料十二

[illegible] 特色

一此琴糸しめ機は從來の物と異なり機械完全用方最も簡便にして御婦人方は勿論子供にても易くしめ得らるゝ様に出來て居りますから如何に素人のお方でも僅かに三十分時間にて十三の糸を自身の思ふまゝにしめたりゆるめたりする事が出來ます

一此機は少しも琴の糸をいためる事なく且つ其形を傷くる事なく之を裝置すれば反て裝飾となり從來の優美なる琴の形に一層の光輝を添ゆる者で有ります

一此機を備ふれば琴の音色が著しく良くなります

一例へば十圓の琴は二十圓以上の音色となります

一此機は三分時間にて糸をしめ又はゆるめる事が出來ますから合奏などにて三絃尺八其他の樂器と合奏を成すに琴柱を動かさずして自由に調子を上げ下げが出來ますから大なる便利を得られ且つ音色が良くなると調子の自由が利きますから假令琴をお持ち遊ばしても其効力は本間のお琴と異なる事はありません

此締器は種々の特長を有す愛琴諸賢は速に之を備へて斯界の[illegible]者と成り給へかし御注文の際は御所持の琴が生田流の琴か山田流の琴かを御書添へ被下度願上候

發賣元 福岡縣福岡市橋口町 振替福岡四四四番 **勝野樂器店**

毛生新藥 禿髪膏	三十日分	金一圓五十錢　送料金八錢
ニキビクリーム	同	金九十錢　送料金八錢
わきが止 腋臭粉	五十日分	金八十錢　送料金八錢
ソバカスクリーム	同	金九十錢　送料金八錢

詳細藥効能説明書あり郵券二錢御送附あらば直に呈上す

東京市深川區辨天町一番地　振替口座東京一二四九八番 **皮膚藥院**

直輸入香水

ホワイトローズ	二十五グラム	金五拾五錢
リリー	同	同
ヘリオトロープ	同	同
パイオレット	同	同
ホワイトパイオレット	同	同
デヤスミン	同	同
ペーラム	同	同
エウモンヘー	同	同
フロラザール	同	同
オポポナック	同	同
イランイラン	同	同
ジョッキクラブ	同	同
ソイプリー	同	同

右の諸品はフラワーエッセンスと稱し香原植物の花より採集したる天然香水にして其香氣の優美なるは彼の人工集成し、混合香水の遠く及ばざる處なり弊店に於て直輸入品の裝飾の容器に小分し直接御需に應ずるを以て其品質の良好なるに比し價格は頗低廉なり請ふ一度御試用あらんことを（送料一個金九錢）

東京市本郷區根津宮永町二十二番地　振替口座東京九二三六番 **芳香堂**

[illegible]いの一）

大和ごゝろ



田中三色版

最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦みなく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより(隱蔽放任して療治を怠るより病勢昂進)して身心共に衰弱し遂に不妊娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て(有効簡便に使用する適當の婦人藥)なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接に病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進歩は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて療治の目的を達するなり

獨逸の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は此等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて掻痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は(直)に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尚ほ梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其効最も大なり

定價

八球入五拾錢〇
拾八球入壹圓〇〇
四拾球入弐圓〇〇
特製百拾個入五圓
〇內地遞送無料

東京市本鄉區湯島天神町一丁目五十三番地
唯一丸發行所 中西葆光堂藥局
振替貯金東京口座、千五百番)電話 下谷五四七番)

◎全國至る所の有名なる藥店にて販賣す

（その一）

金張懷中時計景品付き大廉價發賣

時間正確ならざれば時計の効なく金張にして瞬時變色すれば眞の金張にあらず本品は夙に譽れ高き米國時計會社美人商標刻印付特製品にして兩面細密斜子刻み中蓋付三枚蓋龍頭卷引出し針廻し機械最新アンクル式寶石入四拾時間持16 17形要實披露の爲特別大割引

五圓五拾錢

■本品は製造會社が多年の實驗と斬新なる化學を應用して十八金張に製造したるものにして普通瑞西製メッキ側等の粗製品と異り眞の金張故に**十八金側**を凌駕し色は金色燦爛として殊に機械の要所には寶石を鏤めたるものなれば完全無缺にして進遲振止の憂なく故に機械は責任を重し**卅ケ年**の保險

附屬品には美術象眼入時計用メタル**景品**には舶來**鎖**及鹿皮の三品を進呈す望の方は女學世界廣告に依り御注文の旨御申越次第



注意 御入用の方は御來店現品御一覽の上御購求を乞ふ尚遠隔の購客は代金引換小包郵便にて送る送料貳拾錢▲爲替生玉局宛が現品御覽なく御購求後萬一實物に適せざる時は無割引他品交換又は代金返戻す▼

大阪市東區上本町五丁目 時計商 賣金屬

夏目時計商舖

新式 記憶術

速成通信教授 會費金壹圓貳拾錢

●本會の新式記憶術は心理應用精妙無限の新案にして、本術に依れば數十百個の事物にても單に一個の見聞を以て直に之を記憶し得るが故に本術を利用する學生諸氏は何程困難なる暗記問題にても默讀一通直ちに且つ永久に之を記憶するを得べし、而して本術には、何人にても容易に習得するを得ること、練習を要せずして直ちに用ひ得らるゝこと實地に應用して偉効を奏し得べきこと、の三大特色を有す。

教授概目

▲從來の記憶術▲現今の記憶術▲新式記憶術の原理▲原則的記憶術▲例外的記憶術▲數字、外國語、法律、地理、歷史及び其他の諸學科に對する各特種記憶術▲各種業務用記憶術▲娛樂的記憶術▲其他數十項

●詳細說明書は此書香揭載雜誌名記入の上申込あれば無料進呈す

大阪市南區周防町 御堂筋南へ入

大阪記憶學會

大阪小笠原病院長實驗皮膚病專門新劑

皮膚石鹼

久しく小笠原病院に於て患者に投與せられし者にして巧妙なる藥劑の配伍により眞に色を白くしキメを細かにし輕き皮膚病を治せしめ其他各種の病毒を豫防消滅するの力强大にして而かも香氣馥郁且價格低廉なるが故に今や衞生と經濟上不可缺物として各家庭に常備せらるゝの光榮を有するに至れり由來藥石鹼は常用せらるべき者にして發病後慌てゝ用ゆるが如きは愚の極なりと知らるべし

定價 一個五錢送費二錢 半打廿八錢送費四錢 壹打五十錢送費八錢

艶美羔

にきび並にざくろ鼻の特効劑なり由來此種の藥劑は汗牛充棟啻ならずと雖も眞にニキビを治せしむる効力ある者は本劑を措て他にあらざる事は愛用者諸氏の熟知せらるゝ所なるべし

定價 小八錢 中十五錢 大廿八錢 送費各二錢

皮膚軟羔

いんきんたむし、くさ、がんがさ、なまづ、ひぜん、かゆがり、ひび、くさ、肛門の痒み、いぼ、しもやけ等凡て痒みある皮膚病の特効劑にして奏効神の如しとの讚評は過言に非ず加之しゆます痛まず內攻せず蓋し天下の皮膚病の上乘なる者也

定價 小五錢 中十錢 大二十錢 送費各二錢

美膚練

わきがの防臭、用ひて奏効確實ひゞ、あかぎれ、頰手足のあれ等に用ひて卓効を現はす事世上に有り觸れたるアレシラズの比に非ず敢て試用を祈る

高等香油 エンゼル香油

毛髮を黑く艶かにしてフケぬけ毛等を防ぐ偉効ある逸品なり

定價 一十五錢送費六錢 二十五錢送費八錢 四十五錢送費八錢

本舖 大阪市東區本町一丁目 回天堂 ●東京小石川武島町廿一 回天堂出張店

●各地藥店にあり品切の節は本舖又は出張店へ御注文あれ

女(ろの二)

女(ろの三)


千代田香油
（嬉しいこと）
美ちゃんの赤い毛も、花ちゃんの縮れ毛も、芳ちゃんの脱毛も頭垢も、皆美しくなりました、之れ全く千代田香油の賜と喜んで居ります
CHIYODA
S.YAMAGISHI
定價
金七十錢
金三十五錢
金二十五錢
金十七錢
英國製スワン石鹸日本一手發賣元
本舗 東京馬喰町四丁目 振替東京二〇五〇〇 山岸三之助 電話浪花三七九三
大阪支店・・・・大阪南區堺筋鹽町二丁目七番地
英國製 スワン浮石鹸
家庭用
○入浴用にも化粧用にも安心して使へる最も純良な石鹸
○何處の御家庭でも盛んに愛用される最も重寶な浮石鹸
千代田香油本舗 山岸三之助
SWAN SOAP
WHITE FLOATING
SWAN SOAP
偽物ありスワン鳥に御注意を希ふ
六（ろの四）

さくら草



寺沢孝太郎筆


開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覽會に於て
太平洋博覽會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一番

(其の二)

新學期開講會員大募集

◉幸福なる生涯と一家の和樂とを得んとせば躊躇する事なく本會に入會せよ

女子大學家政講義

「入會の最好機逸するなかれ」

東京小石川

▲每月二回講義錄發行
▲講義簡明平易實質的
▲女子大學校特典提供

此際至急入會者に限り入會金全免の大特典あり

▲日本女子大學校家政科標準
▲講義修了期間は僅か二一年也
▲會費は一ヶ月金五十錢低廉無比
▲會員質問は懇切解答を與ふ
▲讀み易く理解に便なる事他に比しなし
▲每月一回附錄「家庭」無代進呈
▲講師は斯道專門の博士三十有餘

[illegible] 規則 申込次第無料進呈

編輯所 日本女子大學校

發行所 東京小石川 精美堂

振替東京二八三八番 電話番町九三二

（其の二）

全治 確證
わきが
新ミス 治ピヨ 療藥ン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及肉の組織に吸收せられ毒素を潔清驅逐せしむる其組織にある惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の重症難治のものにても決して再發せず

し甲寮特別製九用ひよ必ず全治し●ひぜん●たむし●なまづ●くさ●しらくも●等すべて類似の皮膚病に對し效驗あり四週七拾錢乙價壹圓卅錢特別頑固症用貳圓五拾錢

通經 經閉 新發名
月やく下し
ニピルジ

本劑は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三ヶ月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊にはひよ特製を用ゆれば極安全に流經す本劑は效能極て強烈なるも毫も子宮身體に害なくたやすく下る月經不順より起る子宮病血の道を全治し古血を一掃す近頃怪しき類似藥種々顯る用藥者館名に注意あれ●半劑六拾五錢壹劑壹圓卅錢特別製貳劑卅錢參圓五拾錢

全世痔痛全治する特效藥 治確證
ぢを治す

蓮痔脫肛又は痔瘻の初期等痔病一切に對して偉大なる効顯を奏す

從來迂遠なる內服藥に浚藏を委れ適切なる治方を講ずる者少し本劑は近世醫學界の貴重なる新藥を以て座藥に調製し之を肛門內に挿入するも少しも疼痛を覺えず體溫の爲め徐々適切に溶解し直接病巢に作用し穴痔、いぼ痔、烈痔

半劑八拾錢壹劑壹圓五拾錢特別製貳圓八拾錢

Comedo-Salbe
にきびそばかす

コメドザルベーは男女青春の時期に多く發生するにきび、そばかす、吹出物に對し最も特効を有する合劑なる事は專門大家の等しく認むる所にして是れを顏面に塗擦するも芳香無色にして人に知らるゝ憂なく皮脂の分泌を盛んならしめソバカスを除き適にしニキビを治し又皮膚の新陳代謝を盛んならしめ病因を根本的に全治せしむ適に用ひて天賦の美貌を全ふせよ●輕症用五拾錢●重症用壹圓●頑固症用貳圓

注意——各藥共に小包料拾貳錢と●ラビヨン●ハンドコロン●ベクネス●ニキビ藥●ぢの藥を御注文の方は外に小包實費三錢と都合拾五錢藥價の外に拂込下され度▲爲替は神田猿樂町局振宛

色の白くなる
ハンドコロン溶液

本劑は獨米貴婦淑女間に大好評を博したる新材料に依り組織したる新成液にして有觸たる白色藥と大に性狀を異にし本劑の力は皮膚の新陳代謝を盛にし且つ漂白性あるを以て其新陳代謝と共に次第々々に白色艶美となる價A印壹圓五拾錢特製壹圓

毛のはへる
原名ベクネス 毛髮生養液

本劑は最も進歩せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛根を刺戟し毛の發育を速にし完全なる毛髮叢生す又脫毛は拔毛を止むる效能著しく又常に脊油に混用すれば生際惡しきを直す●眉毛●口ひげ●其他すべて毛の乏しき人は速に試みられよ學理に適合せざる怪しき類似の賣藥に迷ふ勿れ價並製壹圓卅錢特別製貳圓

獨逸撰方効驗一夜に顯る
りん病
新治療藥 ギーロン

本劑は最新の治淋藥にして急性慢性の淋病にうかちも速に輕快を覺え膿血次第々々に止り痛を止め輕きは一劑重きは二劑分服にて全治す慢性には特製を用ゆ本劑は殺菌防腐液となり小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となりて淋菌を驅逐し人知れず病根を斷絶す輕症用六十五錢重症用一圓卅錢特製頑固症用貳圓卅錢

根治 新治療 確證藥
梅毒
ギーネル

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる新劑にして忽ち全身の毒も大小便と如何なる劇烈のもの●よこね●かんそう●ふきでもの●梅毒●のう毒●其他如何なる惡性の梅毒も必ず大効あり輕症は半劑重症は二劑用ゆ醫て奏効す藥價半劑八拾五錢一劑一圓六拾錢二劑參圓

新治療藥
らい病
ダービーの發見 DERVIN

本劑は最近歐洲の大家が最良藥と認めた有力藥品の成劑にして何人にも容易に服用し得る樣幾多の調劑の實驗に鑑み丸劑となしたる者なる本劑に優ろ者なしとして其有効確實なる試に一劑分丈けにとて必ず大効あり一劑廿日分三圓見よ一劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

専賣 東京神田區小川町四十
オリエンタル藥舖

女(はの三)

東京南傳馬町

大西白牡丹

四月一日より 第七回

髮かざり新形陳列會開會

通貨と同様の指環



金製無地指環

極印の外に證明書を添へ候
故恰も通貨同様の價値あり

一純金五匁付	金貳拾八圓五拾錢
一純金四匁付	金貳拾參圓拾錢
一純金三匁付	金拾七圓四拾錢
一純金二匁五分付	金拾四圓七拾錢
一純金二匁付	金拾貳圓
一純金一匁五分付	金九圓參拾錢
一廿金三匁付	金拾六圓參拾錢
一廿金二匁付	金拾壹圓貳拾錢
一廿金一匁五分付	金八圓六拾錢
一十八金三匁付	金拾五圓
一十八金二匁付	金拾圓、參拾錢
一十八金一匁五分付	金七圓九拾錢

但し指輪の裏面へ文字彫刻の節は一字に付金拾錢を増す
圖中（イロ）は平打（ハ）はあらし打（ニホヘ）は結婚指環
（送料實費）內地は十二錢臺灣朝鮮滿洲は三十錢申受け候

振替口座東京九二九三番

四月一日より 第四回

髮のゆひぶり競技會開催

（はの四）

風光る



竹久夢二筆

賀陽宮妃

カラーの型紙

……見たる夫の眞面目

●誤られたる女子教育

●挿花に就ての感想

▽…の氣を附けねばならぬ事々

▽昨夢（小説）

▽太平無事

▽家庭と滑稽趣味（滑稽の色々）

毎月一回一日發行

一冊十八錢

大倉書店

花よりも美くしき

THE GIRL'S GRAPHIC

少女畫報

第十一年四月號 定價十五錢 郵税一錢五厘 六冊共税九十錢 十二冊一圓七十五錢

畫報

▼花より團子、團子より本誌。
▼美麗で面白い本誌を御覧ください!(讀み下さい!)
●女學校(全土の風俗)◎春の野遊◎活動寫眞の撮り方
▼三公女殿下▼女學校の花見▼ハイカラさん▼和裝と洋裝
▼大師詣の一日▼未來の少女
◎小學校◎懸賞寫眞は愈々斬新奇拔!

●口繪 春蘭 武田壽氏筆 落椿 池田蕉園氏筆

讀物

■力一ぱい……倉橋惣三
■(小説)露子の夢……生田葵
■(小説)雪の梅……三宅花圃
■(小説)春の一夜……佐々木邦
■(お伽噺)少女と蒲公英……與謝野晶子
■(少女小説)養女……尾島菊子
■(小説)必要……岡田八千代
■(探偵小説)一人少女……松山秦一
■秋色櫻……そあむ
■活人畫……江風
■お花見……三輪田眞佐子 跡見花蹊 山脇房子

□學校參觀記……記者
□都の春と鄙の春……
□繪ばなし……白洋
□電車中の女學生……
□花下の運動會……春風
□お釋迦の甘茶……
□九重細工櫻の花……
□古葉書利用の色々……
□新學年日記……葉津子
□久留島先生訪問……
□ポンチ繪ばなし……
□光子と久子……我川
□少女ノートブック……
□綸手本……跡見玉枝
□字手本……多田令子
□文字遊戯のいろ／＼
□懸賞 作文 和歌 繪探 其他種々

東京麴町區飯田町四丁目四番地 東京社 電話番町二三三九 振替貯金口座東京一一八一八

女(仁の三)

女子の書簡文

婦人嬢子の日常必要を感ぜらるゝは書翰文なり、されど世には之に關する書籍數多あるも一として此必要を満たし得るもの無しとは、能く耳にするところ、是畢竟それ等の書籍が唯机上の空理に走りて實際と適合せざるが故なり。本書は大に其選を異にし、斯書の類に最も經驗深き内海先生が苦心を重ね、實際を主とし、悉く女子作家の文を基礎として、先生獨特の文才を以て補正參訂し。編著せられたるものなれば、一度繙けば春夏秋冬四季折々の便りは申すも更なり、日常百般の消息、心のまゝに思ひのたけを盡すを得べし。

文學士 内海弘藏先生著 ◉四六判九五百頁 上製順美本函入 正價九拾錢 送料拾錢

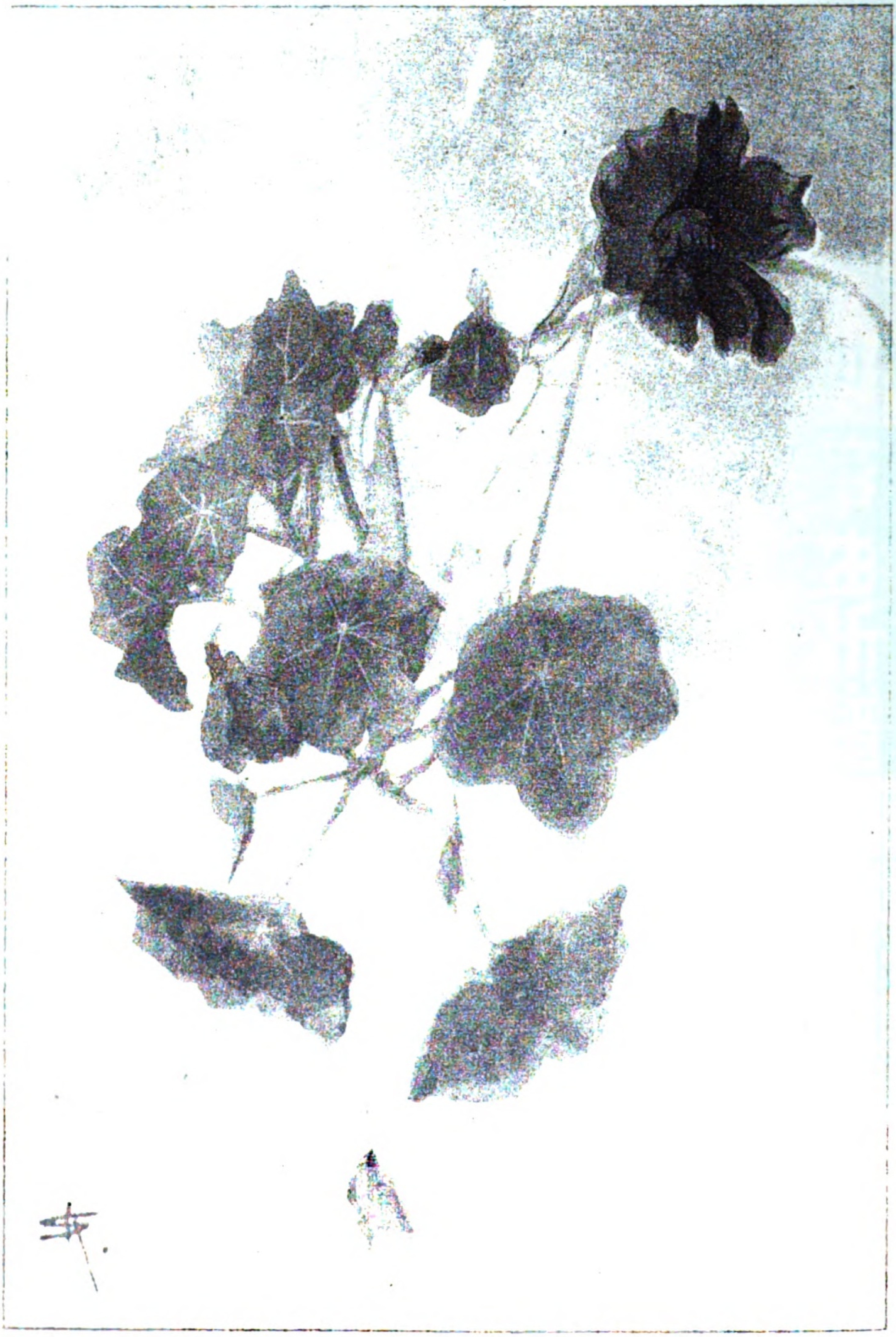
本書は婦人座右の玉手箱

女子書簡文の一大寶典

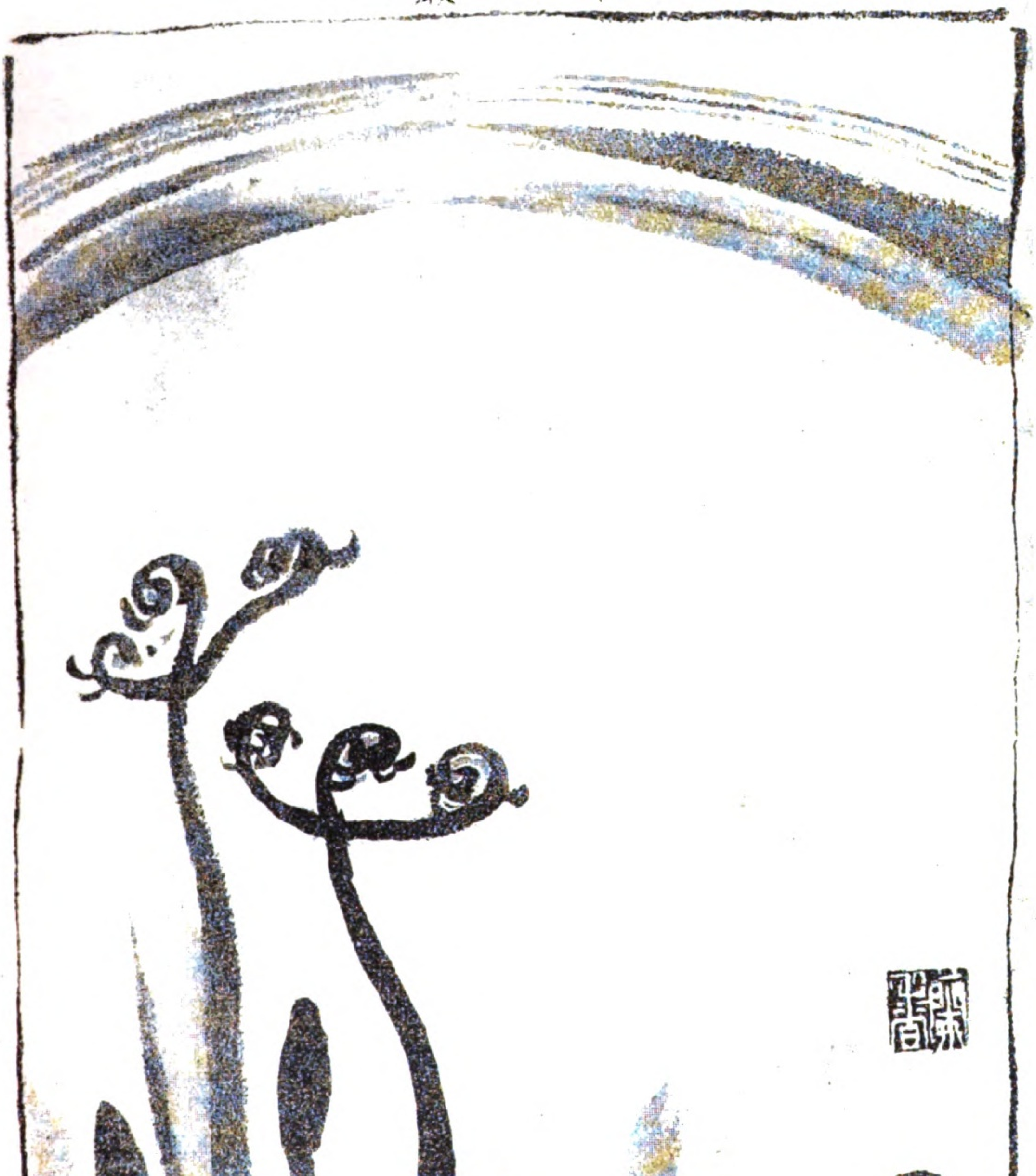


東京本郷森川町 振替四九六七 **文成社**

金蓮花



早蕨



河崎蘭香筆

最[illegible]箏譜本

井上胡生 生田流

箏曲新譜

著者 [illegible]

定價各六錢 代金引換 [illegible]

[illegible] 六段 八段 [illegible] の曲

[illegible] 六段 菊の露 [illegible] 残月 秋風 八重衣

[illegible] 八千代獅子、雪、九段、殿上の松 [illegible] 呎の曲 四季の詠め 夏の曲 秋の曲

箏曲之栞 第一輯

新譜 金壹圓 送料六錢 代金引換十六錢増

一 門松 ことぶき 春雨 六段 七草 摘草 [illegible] 御製の曲 水は [illegible] 千鳥 菊水 那須野 御國の箏外數曲

曲譜

山田流譜本

江の島	定價三十五錢
櫻狩	同 四十錢
住吉	同 三十五錢
那須野	同 四十錢
菊水	同 三十錢
松上の鶴	同 三十五錢
ほとゝぎす	同 三十錢
四季の艶	
今様朝妻船	同 三十五錢

送料各貳錢宛何れも説明附の頗る美本なり
此分に限り郵券代用を諾す但し二冊以上は小爲替送金の事

本書の特色と購求者の便利

一 以上各種の譜本は何れも調子の合せ方や音符休止符左右手法其他弾琴に必要の事は悉く平易明瞭に記載しあれば直接師に就きて習ふ通りであります

一 此譜本は西洋樂譜の心得無き人でも直ちに了解せられ且つ音譜記號を附記しあれば音符を知らぬ人も之に依りて彈奏せらるゝ事を得べく自然の間に完全なる樂則を覺え給ふに至るべし

一 本書の購求者は曲中の不詳は返信料封入へ質義あれば無料之が説明教授をなすべし

苟も琴を習はんと欲して師を得給ふに難きか或は一度習ひて忘れたりとて歎かせ給ふこと勿れ本書は是等の人々に多大の満足を與へ得べしと信ずればなり

琴調子笛 特製貳圓並一圓半
送料各八錢代金引換十四錢増

發行所 福岡縣福岡市外馬出 東公園博多座横 箏曲通信教授所

女(ほの一)

四月の巻發行 [illegible]

新婦人

繪畫及寫眞版

月の都 玉兎花に戯れ溫波春を溶して流る（油繪極彩色）……川村清雄筆

春意動く 美人嬌羞を含みて香膩肌に滿らんとす（石版極彩色）……福永耕美筆

今宵の主 三嬌は花に憧がれ花は二蝶に迷ふ（彩色入）……寫眞

久邇宮妃殿下 殿下附 久邇宮家女官 毛利子爵令孃●洋裝和裝の小笠原伯爵夫人●津久井大佐夫人●寺田法學士夫人●長崎

宮中顧問官夫人●原田羅光女史●女子大學 弦木芳江子 大和きく子孃

中山勝子孃●田中千代子孃●伊勢本久吉氏夫人●水野早苗孃●菲山

●上野あや子孃●松山棟庵氏令孃●高橋淺子孃●帝劇 柏木菊子女史其他

花美なるか新婦人美なるか艶陽四月の櫻

花號 昔時の墨堤と今の墨堤（大倉喜八郎）櫻と日本の（前田曙山）

女兒玉花外 美人花を嫉む（花笠絹子）國粹を咲く櫻

外人の眼に映せる櫻（林愛作）山の櫻の由來（井上與十郎）危險なる老廢（小野文學士）

如何にせば自由に男女見を擧げ得べきか●不得已獨身生活（尾上浪子）……

卷末附錄●家庭日誌四月分 溫度表 晴雨表 獻立表 來客控●九星暦添

新婦人見本 郵券一冊發 賣捌所は全國著名の書林雜誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 聚精堂 電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番

女(はの二)

新婦人叢書

新刊

第四編

日本艶女傳

兒玉花外氏著

女の妖なる、まさに多情男兒の心頭を恍惚たらしむべし
女の艶なる、まさに多恨英雄の情緒を攪亂せしむべし
女の妖なる者と、女の艶なる者とは、花外氏の妖艶なる筆によりて、最も詩的に、宛から散文詩なるが如くに描き出されたるは本書なり、夜闌け人靜なる時、獨本書を繙けば其妖と其艶とは、直に讀者の左右に來りて、喃々又嫋々、蜜の如き情話を囁いて盡きざるを覺ゆ。

袖珍型クロース表紙
定價金四拾錢
郵税金四錢

既刊

第壹編 **日本美人傳** 長谷川時雨女史著
袖珍型クロース表紙 定價金四拾錢 郵税金四錢

第二編 **現代男性觀** 小島文子女史著
袖珍型クロース表紙 定價金四拾錢 郵税金四錢

第三編 **名媛日記** 大平野虹氏著
袖珍型クロース表紙 定價金四拾錢 郵税金四錢

近刊

五篇 現代女性觀 無公子著
六篇 日本美男傳 田村とし子女史著
七篇 文章の栞 岡田八千代女史著
八篇 日本烈女傳 尾島きく子女史著
九篇 閨秀作家文粹 佐藤紫仙氏著
十篇 育兒の話 醫學士 唐澤光德氏著

女(ほの三)

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 電話下谷四〇七九番 電話下谷一六七二番 聚精堂



女（ほの四）

名流婦人



子爵岡部長職氏夫人坻子の方

花のすがた



紳商川崎芳太郎氏夫人ちか子


花笑ひ鳥歌ふ陽春の候萬物生氣横溢す
三光堂特製の蓄音器と象印舶來兩面盤を備へらるゝ家庭は生氣充滿す
東京市銀座一丁目
三光堂本店
長電話京橋九七八
九七九
支店
東京市淺草區駒形町
電話長下谷九八八番
振替貯金口座東京一九八八四番
大阪市南區順慶町四丁目
電話南三二八三番
振替貯金口座大阪一五一四七番
九州福岡
北海道小樽
定價表目錄は御一報次第贈呈

女(への一)

産科婦人科専門大醫 大和田宗順先生方劑
帝國大學藥學専攻藥劑士 玉應勝海謹製

月やく下し

快月丸は子宮を痛めずいか程長き月經とまりも容易に流下す三ヶ月滯りは一劑又は二劑にて下る半年以上のものは[illegible]り又は血塊にて特製を服用せば快く下る調合なり又子宮病血之道を治し血液を増加す

價一劑六拾五錢 二劑壹圓貳拾錢 特製貳圓

東京市小石川大塚辻町十七番地 天信堂藥局

●本法は

女髪結師安部歌子女史

二大奇方劑

多年の實驗を經たる證明秘法劑にて是迄の使用者をして悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

濟世園

●東京市麴町區三番町六十八

色黒

き人及ニキビ●リバカス等にて困る人は郵券四錢封入申込あれ

白色秘法最新美容のしるべと云ふ白色術を親切に述べたる冊子を呈す[illegible]申込あれ

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最精實…効能確保…有効無害…

●本劑は専門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて専用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



博士賞賛良藥

改良 月ぎらく 女月丸

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

肥滿病新藥

（米國新輸入）

●子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてより醜くぶと／＼肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ベンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと／＼ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顔赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は美顔美人となる艶白となり誓て窈窕たる



る事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

藥價 一劑一圓五十錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 四劑五圓半 送料十錢

…小宮愛生堂

女（への二）

婦人世界

四月一日發行　七卷第四號　一冊拾五錢　郵稅一錢五厘

◉家庭と酒

[illegible]　三輪田元道　園田[illegible]　服部金太郎　根本正

■嫉妬といふ字は男扁に改めたい……山脇房子

■女學校を卒業して結婚せんとする人に……慶應義塾長 鎌田榮吉

■氣むづかしい夫に事へる妻の心づかひ……下田歌子

■女の細腕で家運を挽廻した高田夫人……破川生

◎新婦人國記『福島縣出身の婦人』……蘇川漁郎

◎米國人に初めて訪問された我が家……工學博士夫人 小花鶴子

◎結婚媒介所に申込んだ記……婦人記者

◎ダリヤの培養法……磯部野人

◎お辨當のお菜……櫻井ちか子

◎お米の買ひ方……婦人記者

○四月の總菜　○出産と迷信　○滑稽百話　○廢物利用

▼家庭小說『子寶』……村井弦齋

東京南紺屋町　實業之日本社

新夫人の面影

紳商西野元氏夫人さわ子（實業家須藤諒氏令嬢）



花ぐもり

(左圖)理學博士佐々木忠次郎氏令孃千穗子　(右圖)銀行家山口保氏令孃ため子



女一代の衛生

久我侯爵 ‖ 伊東元帥 ‖ 東久世伯爵題字 ‖ 産科婦人科專門醫學士佐藤得齋先生述

處女の煩悶 ― 年頃になつても月經の來潮せぬ時、又は有つても經血の量が不規則で一定せず、或は[illegible]齟齬したり或は月經時に痛を感ずる様な事があつた場合には如何に處置す可きものか

新婦の恐怖 ― 新婚前後に於て最も罹り易き病氣の、原因及徴候は如何なるものか、若し醫療を乞ふ事の出來ぬ場合は手前療治で治す方法が有らうか、又良人に淋疾あれば何うして豫防するか

主婦の悲嘆 ― 夫婦共丈夫で居て結婚後幾年經ても姙娠せぬ婦人、只一回姙娠して途中流産し其後姙娠しない婦人、又幾回も姙娠するが何時も流産する婦人は何うすれば滿足に子寶を得られるか

婦人病者の心得
無代進呈
實驗報告書添附

姙婦の心配 ― 姙娠に惡阻は附き物の如く誤解して打捨ておく爲めに、早産流産死産等の不幸を招き甚だしきは命迄も失ふ婦人が尠くないが、其原因は如何なるもので何んな手當が必要か

病婦の苦痛 ― 永年子宮病血の道で醫者通ひ病院歩きこの藥あの妙藥と頭から浴びる程飲んでも一向効なく年中蒼白い顔して、ブラ〱不愉快な月日を送つて居る婦人は何うすれば治るか

老女の誤解 ― 月經閉止期前後に時々出血したり下物が有たり、足腰が冷へ、又は浮腫などの出來る様な事が有ても老人だから子宮病ではあるまいなどゝ平氣で居る婦人は何う云ふ危險が伴ふか

‖申込所‖東京市京橋區新榮町‖笹岡省三

ハガキにて申込あれば直ちに送本致します

女(一〇一)

女子文壇化粧問答顧問藤波芙蓉先生實驗發明

くせ毛ちゞれ毛根本治療 **美髪劑**

美顔神秘劑 **コールドクリーム**

美顔神秘劑 **艶肌劑**

●美髪劑定價 小三拾錢中五拾錢 大瓶壹圓▲同特製香油壹圓五拾錢各 小包八錢市内四錢

●クリーム定價 壹瓶金壹圓 小包八錢市内四錢

●艶肌劑定價 壹瓶金六拾錢 小包八錢市内四錢

●內地の外は送料各三拾錢●代金引換小包謝絶●郵券代用壹割增●本品は先生特許の化粧品なれば本社の外一切販賣店なし●本品は世間にある品と異り一切粧飾せず實用專一なり速に試みよ

專賣元 東京市京橋區大鋸町 振替口座壹七貳九 女子文壇社代理部

各種繪葉書調製

▲私製葉書、葉書文字印刷。寫眞版。コロタイプ版 石版、木版。三色版。浮出、ブロマイド。押繪其他繡巧細工。

弊堂製造部は繪葉書に關するものは總て葉書文字の印刷より彩色印行 [illegible]仕候。弊堂調達部は最新式 [illegible]なるは云ふに及ば [illegible]

毛ぬき 新劑

從來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘールピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘールピン
定價 壹圓
特製 參圓
內地送料十五錢
海外 三十五錢

飲色白くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し內服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ビオール錠は極て強度の清血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を清淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ビオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
內地送費十五錢

[illegible]合劑製藥所

女(との二)

女(との三)

花爛熳



（上圖）京都大極殿左近櫻　（中圖）安藝の宮島の干潮　（下圖）京都清水寺の舞臺

京都　今尾掬翠氏撮影

令嬢かゞみ



上圖　水野倭子孃（日本橋）　下圖　內田つぎ子（本郷）

美人と惡筆

美貌は女の寶です。併しいくら容貌が美くつても筆蹟が醜くければ折角の美人の資格も零です。容貌よりは筆蹟の美事な方が女として奥ゆかしいものです實に筆蹟の美事な御婦人達は一生涯幸福であります。併し今日多くの婦人方は常に自分の惡筆を嘆きどうしたらば字が巧くなるだらうと種々と苦心せられて居らるゝやうです。そういふ御方に良い方法を敎へ申しませう。



それは近頃非常に評判の高い專賣特許習字速成法で御練習なさると性來ドンナ字の拙い方でも僅かな間に見違へる程上達致します。現に同會は五十有餘萬の卒業者を出して居ります殊に本年は創立滿五周年のことですから、此際の入會者には種々の特典を與へるさうです。書者は御存じの小野鵞堂先生です。マア御試しに同會の見本を御覽なさい、それは東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會(電話下谷參貳壹〇番)へ「ハガキ」を御出しになれば見本附き會則を無代で送つて參ります。

[illegible]毛

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を得したる秘密藥を當舘主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に適する諸說を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賤著品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツホー、キリキズ跡の禿に生毛ぜしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用ニ割増の事

●●●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●●●

らい病

取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ注文アレ

醫師は癩病者を診察せは屆出る規則なれど藥劑師には其規則無れば決して他へ知れることなし安心服用あれ

ナノサール　一ヶ月分　貳圓

貧方ナノサール　一ヶ月分　壹圓

此らい病劑は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し當舘主が醫科大學[illegible]研究したる成績に考へ配劑したる有力劑なれば一度其效驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之が根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を[illegible]服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれは[illegible]一生[illegible]を免れ得る事は確實なり本劑は安價に[illegible]せんとする主旨に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする賣藥主義の賣藥に非ず

三河國碧海郡刈谷町

振替口座東京貳參壹壹

電話　刈谷參拾貳番

本舗　[illegible]　中島鬼之丞　監製

ライラック水



（日本政府登錄）
（美顏術實驗有効）

美しくなる素

コレが有名なライラック化粧水ヨー

お母さんや姉さんや私の艶々して美しいのは！自慢じやないけれど…

コレの御蔭です

ソレニお父さんも兄さんも四角張っていらしっても内々大の愛用家なのヨ

「男だつて綺麗に成り度いからナー」だつてホヽヽヽ

家庭の必要！

定價一瓶金五拾錢

送費　金八錢

新橋竹川町十二番地

ライラック東洋總代理店

理容白粉本舗　理容館

電話新橋二三〇二番

婦人之友

四月號（一日發行）一冊定價 二十八錢 郵稅一錢五厘（半年分郵稅共一圓八錢 一年分郵稅共二圓十錢）

●衣食住の問題……

■過渡時代の衣食住（本多靜六）

■外國から觀た日本の衣食住（原撫松）

■都會に於ける住居難（生江孝之）

■英國中流の衣食住（鈴木英子）

■中等生活に要する衣服の數（記者）

■東京に於る五十圓取の生活（一主婦）

■樺太士人の簡易生活（志賀重昂）

■かくて衣食住を改めた（羽仁もと子）

●自作の禍福……文學博士 三宅雪嶺

●悲觀と樂觀と……羽仁もと子

◉英國を嫁に持たる婦人姑の感想……鈴木母堂

◉若き人々へ……中島海軍大佐夫人

◉子供と幼稚園……加藤博士

◉女中の躾け方（四）……加藤夫人

◉お伽噺の話し方 羽仁もと子

◉學校の子供の兩合羽行 齋藤春代

▲懸賞

毎月引續き趣味あり實益ある懸賞募集をなす

（其二）一日卅錢宛の副食物費に家族四人一週間分の獻立を作れ

▲一等十圓▲二等五圓▲三等三圓▲詳細本號を見よ

婦人之友社

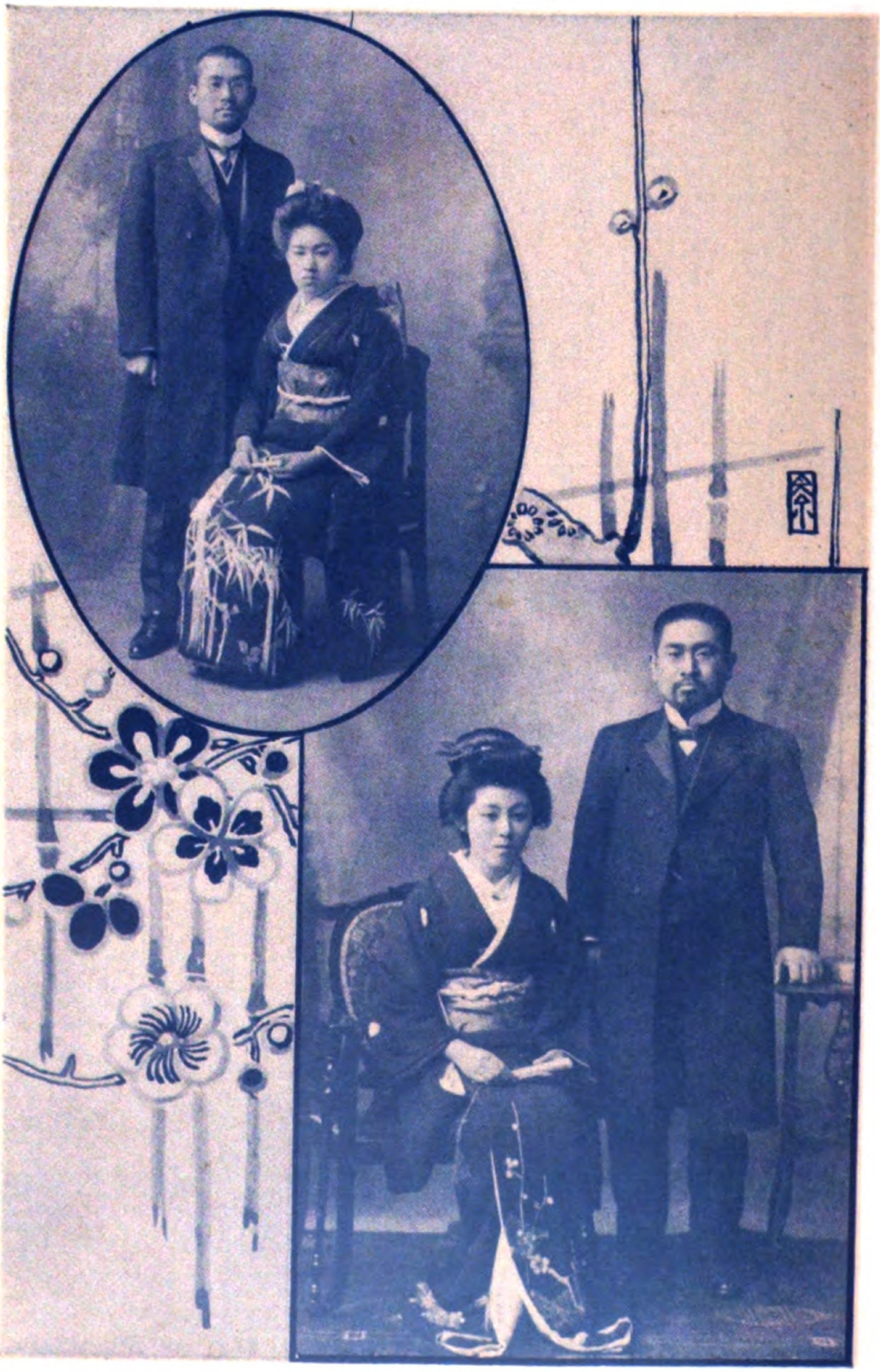
東京小石川雜司ヶ谷町 振替東京一一六〇〇番

電話番町三六九八番


水晶おしろい
無色透明
花にはかすみ月は朧水晶石鹸にて清々しく水晶おしろいにてほんのりと化粧し玉へと白す
東京
大和屋製

(ちの四)

若竹



（上圖）法學士寺田四郎氏と新夫人初代子　（下圖）衆議院議員松田源治氏と新夫人久子

野邊の友





ニキビ吹出物を根治し色白く美しくする内服藥

ニキビ吹出物其他皮膚ドス黒く色澤惡しき等概ね體内胃腸の變化より生ずる一種の毒素に原因す故に之を根治するには必ず内服藥を以て體内より治療するを要す然る時は奏效確實にして外用藥の如く内攻の恐れなし是現今皮膚病學上の定論なり本劑は此理由に依り製出せる内服藥にして既に醫藥學上確實に效能を證明せられたるに係はらず先般報知新聞其他東西十餘新聞紙上に於て社會的試驗の計畫を發表し累計壹萬人以上の患者に試驗し驚くべき好成績を報告せらる最早學理に於ても又實際に於ても一點疑ふの餘地なき有效藥たる事を確信するに至り茲に發賣す多數實驗上輕症は一週間普通半月より一月にて必ず全治す但し梅毒性に限り無效のことあり患者は只三錢郵劵十枚封入申込あれば直ちに送藥すべし

藥價 四日分三十錢●一週間五十錢●十五日分一圓

東京市下谷區上根岸町百十一番地

本舖 藥學得業士 金澤巖

振替東京四六七番電話下谷二二五九番

色黒く醜き婦人令嬢と雖

悲観するに足らず香粧化学に造詣深く斯道に自信を有する当館発売の塗料或は洗料を常用せばにきびそばかすを去り肉体を美白艶麗ならしめきめを細かくし日やけ白粉やけ等質の為色黒き人と雖窈窕たる美人と化す事疑なし塗料及洗料各大瓶[illegible]小瓶五十銭内地送料八銭

皮膚病新薬

[illegible]
●なまづ●わきが● [illegible]

薬剤師 色直太郎薬局

らい病

[illegible]

内用 月経球

[illegible]

月さらへ

[illegible]

▲全快確実なる月さらへ自宅療法▼

大阪市心斎橋筋 [illegible] 楽天堂薬院

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒 りん病 生殖器 諸病 神経衰弱症 婦人病 わきが ぢ

東京浅草瓦町廿八 浅草橋通 瓦町停留場横

中央醫院

諸病 ぢ 梅毒 下疳 横根 全身梅毒等 りん病 消渇

子宮病 血の道 月やく とまりたる病 子なき婦人

生殖器 神経衰弱症

記憶力減衰 思考力 生殖器病 萎縮 遺精 早漏 夢精 発育不充分症等

わきが 色の黒き人 にきび ふきでもの

そばかす あれ性 皮膚諸疾患 いんきんたむし 等症

▲病状記し郵券四銭送れば其病を速治する専門家中央医院々長処方の特効新薬説明書を送る

東京市浅草区瓦町廿八番地 浅草橋通瓦町電車停留場横

中央薬院

女(リの二)

女（りの三）



四月一日より

春季大賣出し

よせ切見切反物數千種取揃

●新製品陳列會

●五月人形陳列會

●餘興「うかれだるま」(コミツクオペラ)

松本幸四郎振付少女音樂隊出演

東京日本橋

白木屋呉服店


四月
女學世界
第十二巻
第五號



常識教育 新鶉衣

曙内侍

贈花嫁文

聞くならく、來ん櫻づきの黄道吉日には、花嫁のおん裝ひいみじく嫁ぎたまひなんとかや。嬉しき限りなれば滿腔の喜悦を以ておん祝ひまつりぬ。聊か御祝儀のしるしにもと思へりしも、かの鰹節は味こそあれ、色をも香をも美しからねば 如何があらん。眞綿は首に何とやらん御心地よき物ならねば、それも見合せぬべし。紅白の絹絲こそいと相應しき贈物なれと考へしに、出雲の神の有ちたまへるを盗みたるやうなれば、これも緣起わるし。されば唯だ百濟原のくだらなき言喧草をばいさゝか束ねて進らせん 夫れ一家の主婦となりて、夫に事ふるは易けれど、姑に事



ふるは難し。御身はすでに家政學の奥義を學びたまひぬれど、姑の肩を揉むべき按摩術をば習ひたまへりしか。御身の割烹術は此上なく美味けれど、いつも高價なる材料を用ひたまへるが玉に瑕の、此より平和のひゞも入りなん恐れあり。表情術には最も巧みなりと自信したまへるならんも、夫には愛、姑には敬の常習に出でゝは、これも災禍蕭墻よる起る基ゐなり。宜しく夫には敬、姑には愛の逆手を用ひたまへや。且つは常に夫には食道を以て慰め、姑には按摩道を以て勞りたまふを忘れたまはずば、一家の平和、舉げて御身が掌中に歸しなん。あなかしこ、必ず忘れたまふことなかれ。

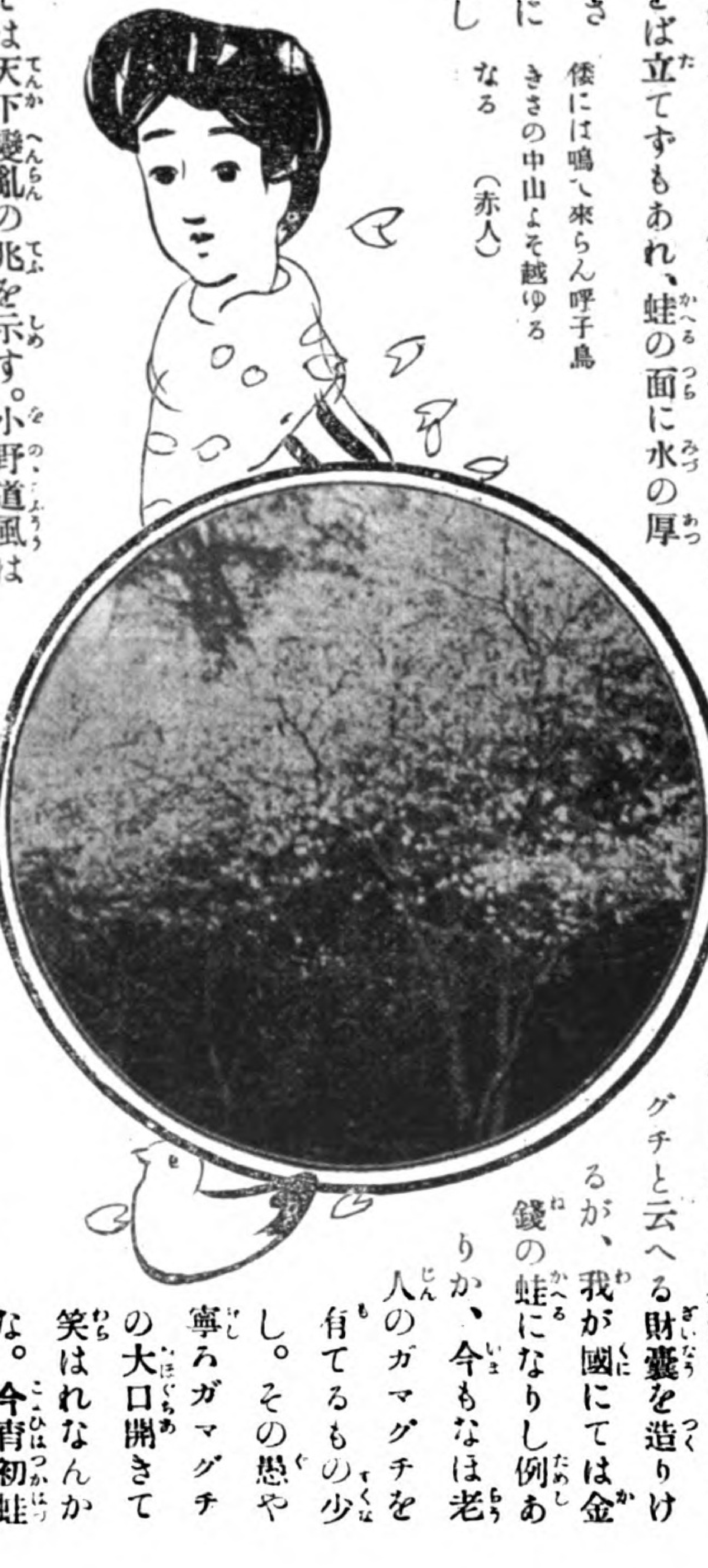
蛙の贊

へびは恐ろしく、蛞蝓は無下に卑しければ、古くより歌題に入ること稀れなりしに、蛙ばかりはその形たぐひなく愛嬌ある上、殊には心のほどもいと無邪氣なるものから、歌人となく、俳人となく、我れも他も此のものに親しみあひて、かはづ鳴く神南備川の神代より、世に蛙の持囃されしこと大方ならず。さればその名所といへるも數多ありけり。まづ和泉川の蛙、佐保川の蛙より指折りはじめて、扨ては井手の蛙、扨ては六田の蛙と數へ來れば、何やらん地方選出の議員に當てがましけれど日比谷の蛙に比ぶれば、もとよりみやび心の豊饒けさのほど、貫之ぬしも古今集の序文に裏書してけり。然るを世に落語家とて、浮世のアラに糊口する輩あり。春も

おぼろ月夜にお輕の下駄に踏まれてぎうと鳴きぬとやらん、蛙の眼玉に灸するゑてとやらん、税のかゝる口を吐きながら、扇子半開に踊り出すは、彼れを侮辱する骨頂なれども、それもしがない生業の餘儀なさよと思へば、憖じひに腹をば立てずもあれ、蛙の面に水の厚顏しき比喩に引出されては、心のうちに如何ばかりか口惜しくや思ひなん。

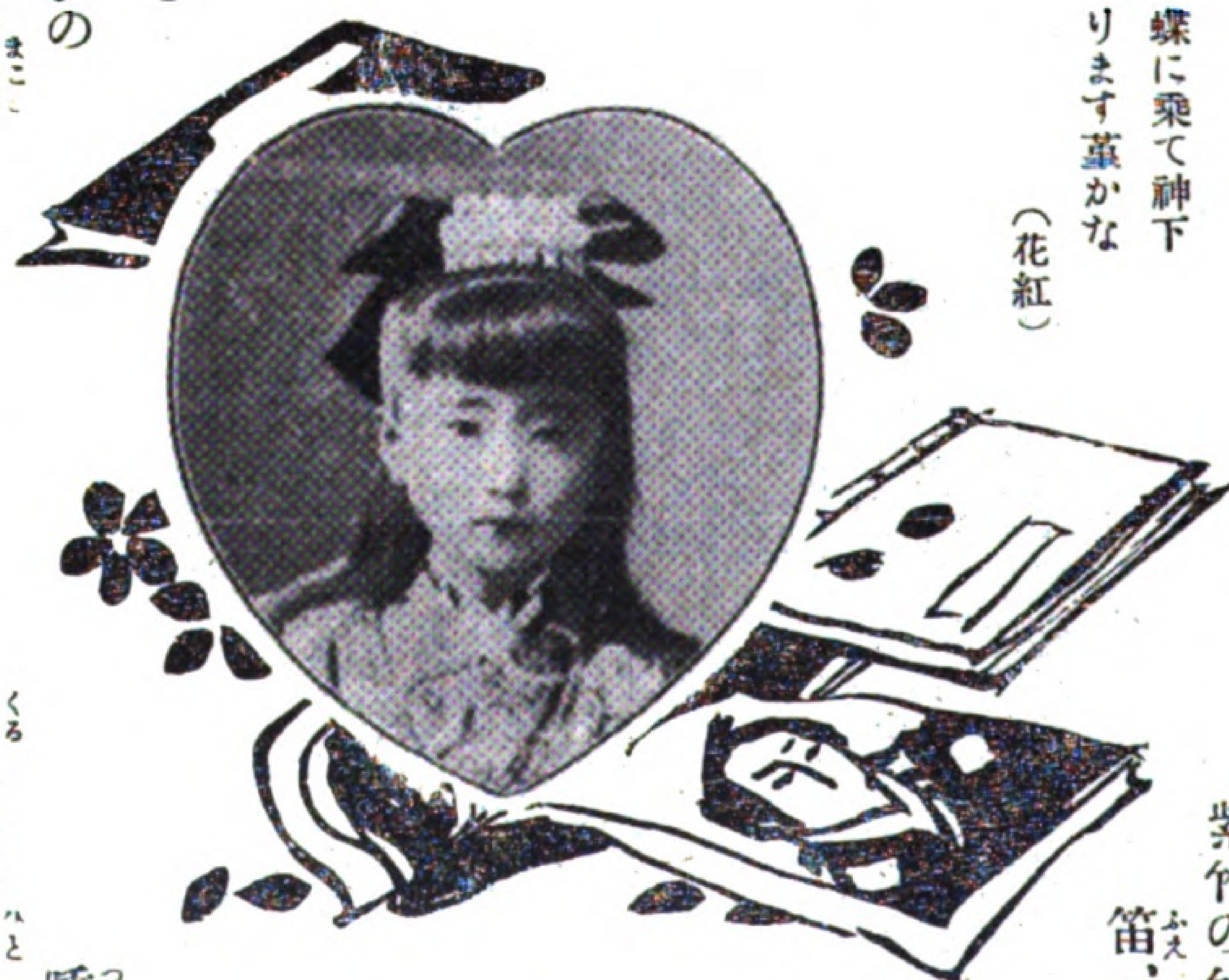
倭には鳴てゝ來らん呼子鳥
きさの中山よそ越ゆるなる　（赤人）

我れ今　蛙に代りて彼れの徳を述べんに、朝に鳴きいでゝは其日の晴雨を豫報し、夕べに合戰しては天下變亂の兆を示す。小野道風は柳の蛙を見て志を立て、芭蕉翁は古池に飛込む音を聞きて正風頓悟の門を開けり。加之もつらく彼れが容姿を覗るに、端然として靜座しつゝ、双眼高く天の一角を睥睨するさま、是れぞ孔子の所謂る溫、良、恭謙、讓の徳を備へながら志は宇宙を呑むの概ありとや云はまし。されば智に敏き西洋人は、何時しかその形のおもしろきに眞似びて、ガマグチと云へる財嚢を造りけるが、我が國にては金錢の蛙になりし例ありか、今もなほ老人のガマグチを有てるもの少し。その愚や寧ろガマグチの大口開きて笑はれなんかな。今宵初蛙の鳴く音を聞きて、飛びあがりの賛を作る。



筍の傳

なよ竹の、我がこのよをば知らずして、篁村の園生に生ひ出でしものならんも、やがて來ぬべき憂きふしには、なか〳〵に孝子が鍬に掛るこそ勝るべけれ。今その行末を惟んみるに、初夏の未だ若々しき頃は何處までも伸びんと天を衝く勢ひあれど、秋より冬にかけては、何時しか村雀の塒となりて、喧しきに耳や聾ひぬらん。殊に雪の白妙こぢたく降りしきる夜ごろは、身を堪忍の大地に平伏してこそ、苦節のほまれをも留むるぞかし。彼の人も羨む小さき姫君の居たまひしは、竹取物語の作者が假に設けし空ごとなれば取るにも足らざれ、彼の清談にあたら時間費えの七賢人こそ、眞や有りし事實なれども、今の世に於ては　さしづめ社會主義者の嫌疑を受けて、一樹の蔭に連る竹林さへも



蝶に乘て神下ります菫かな（花紅）

伐り掃はれん憂ひはあるなり。抑も斯くの如く述べ來りぬれば、生きて苦しみを受けんよりはと思ふめれど紫竹の竹にあらぬ限りは、本は尺八、中は笛、末はそもじの筆ともなり難く、大方は戀の中垣、距ての邪魔者と憎まるゝもあれば、物乾竿に日毎牛馬の努めをなすもあり。花筏、水馴竿との名は優しけれど、遡りわづらふ大堰川に、筏師の肩に押されて身も撓むばかりの苦しきには、如何なるものか是れに及ばん。一節づゝに切りはなたれて、灰吹に雲煙の龍を舞はすは愉快ならんも日ねもす夜すがら頭を叩かれ、痰唾を吐きつゞけられては、是れも苦しみの一つなるべし。唯だいさゝか樂なるは閑人が綸を垂れし釣竿か、或は垂髪兒が蜻蛉つりの竿ならんも　それすら能く〳〵考ふれば、束の間に生物

の生命を絶つこと、後生のほども恐ろしきわざなり。さあれ此世は竹に限らず、何をなすにもなよ竹の、起伏ごとに鶯の鳴くと知らずや。

掃拂の解

そも箒と塵拂とは宿世いかなる契やありけん、夫婦の仲らひいと睦じく、同じ部屋の隅に起臥するさへ既にめでたきに、つくづくと明けくれの勤めを比ぶれば、またおのづから異なる所なきにしもあらず。先づ塵拂に就て云へば、障子を拂ひ、鴨居を拂ひ、兼ねて箪笥長持などの、専ら高きところを清むなれど、箒は宗として疊縁側などの低きところを掃くぞかし。さは云へ假令高きところなりとも、塵拂の手の屆かぬ所は、箒を倒まにして天井の蜘網を拂ひ、假令低きところなりとも、箒の首の入りがたき所は、塵拂の手を伸して押入の奥をも拂ふ。更に臨時の働きぶりを述ぶれば、鼠を打つは塵拂の方便利多く、泥棒猫を逐ふは箒に如くものなし。久しく土藏に藏ひ置ける調度を取出しぬる砌には、先づ塵拂ぞ用あるべけれど、長尻の客を追ひ出すには、箒ならでは役に立ちがたし。かく互ひに足らざるところを補ひてこそ、夫掃婦拂の効をも奏すれ。我れ今こ



菜の花や月は東に日は西に（蕪村）



こに彼の解りにくき夫唱婦和　琴瑟相和の熟語を排し、以て新世紀式にして新世帶式なる掃拂の解を作りて、以て家憲の條下に加ふ。

頬の說

同じく顔の一部分なれども、眉目口鼻の類は・腹に於ける臍の如く胸に於ける乳首の如ければ、その境堺のほども判然として、美醜の關係いと大いなり。されど此の頬に至りては、胸の如く、腹の如く、何處をそれと境の定め難ければ、美醜の關係にも薄きやうなれども、渾然たる愛情の表はるゝに至りては、眉目口鼻の類にさへ劣るべからず。彼の吳王を愁殺せし西施は、痩頬を以て美益々美に、彼の玄宗を艷殺せし楊妃は、豊頬を以て麗愈々麗なりとかや。さりながら餘り豊けくしてお多福の假面の如くなりては蟲齒の惱みかとも思はれ、餘り痩せすぎて蟷螂の顔の如くなりては、また却つて地獄の亡者かと怪まる。然あれ頬と耳朶とは、大黑天のそれの如く豊けきを以て目出度き徵象とはすれど、あまり目出度さに過ぎて、却つて日の丸の旗を立つるに及びては、無下に卑しき面影ともなりぬべし。



庭櫻近きを捨て遠山に
あそぶも春の心なりけり
（千浪）

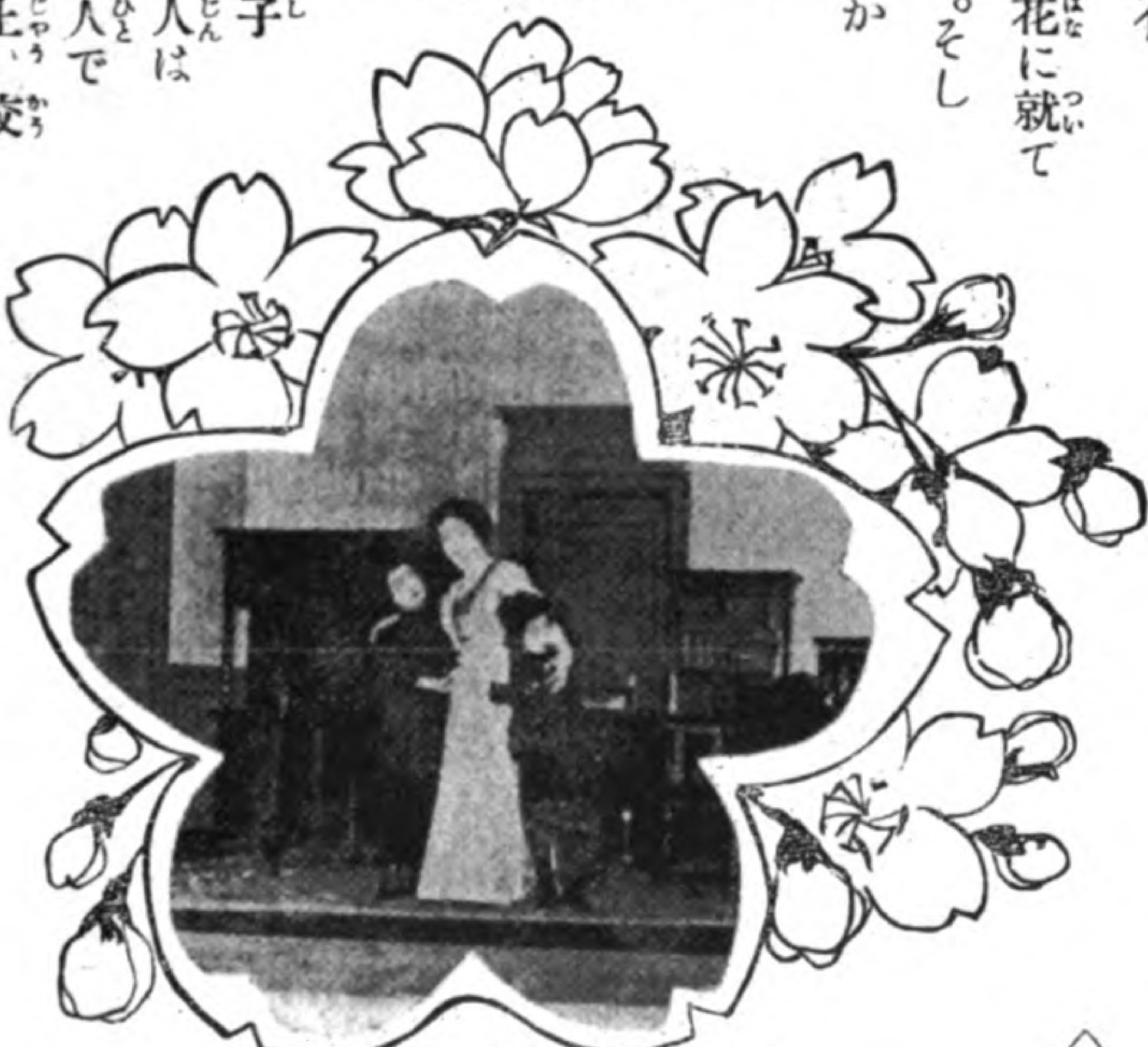
蝶々の黄に黄に白に三つ哉
花薺ひん拔く鶏の黄嘴哉

花の趣味

伯爵　大隈重信

△千紫萬紅の花

自分は花は大好きで、又花に就ては多大の趣味を持つて居る。そして婦人方は人間の花であるから、此の意味に於て自分はことに婦人を愛敬する。もし、婦人は大きらひだと云ふ男子があるとすれば、其人は餘程の偏屈人で普通の感情を備へた人ではないと思ふ。それと同樣に、男子はいやだ大嫌ひだといふ婦人はこれ亦精神的に異狀のある人であらうと思ふ。社會の發達上、交際上、また家庭の實際から云つても、婦人が之を圓滿に調和する偉大な力を持つて居る事は、恰も野に山に或は庭園に千紫萬紅種々の花が咲き亂れて、自然界を彩り、自然の美を現はして居るのと同じ事である。



女の子落花に遊ぶ餘念なき（牛後）

△花を愛する心

世界何れの國民でも、美しい花を愛せぬ者はあるまいが、文明人は野蠻人に比して、特に之を愛し、又之に對する趣味が深い樣である。昔から宗教的意識の上から考へて、神も亦花を好み給ふものとして、神前に或は佛壇に花を献供するのみならず、人間社會の吉凶の典例には必ずそれにふさはしき花を飾つて、以て祝意を表する一の方便とする風習が行なはれて居る。

正月の床飾りに、芽出度い松竹梅、福壽草などを用ふるのも其の實例である。そしてこの花を愛する人に、決して惡人はないやうである。自然の恩惠、天然の妙手に依つて造られた花を愛する其心は、即ち親善の德であつて、善を尊び惡を憎むところの誠に美はしい、心の萌芽といはねばならぬ。

△花は愛せらるるによりますます美なり

今日は園藝術が進步して、自然に其花が有つて居る色香を其儘に咲き出るものは、ほんの僅かで、世の愛花家が、此花を愛する其心が、栽培法の研究となり、園藝術の進步を促して、彼のダーリヤの如き、ローズ若しくは我國の菊の如き、其他諸種の花卉に至る迄も、單瓣のものが複瓣となり、色も形も、或は香り迄も人工に依つて左右する樣になつて來た。


花盛とひくる人のしるへして主かほなる春の山風（季廣）

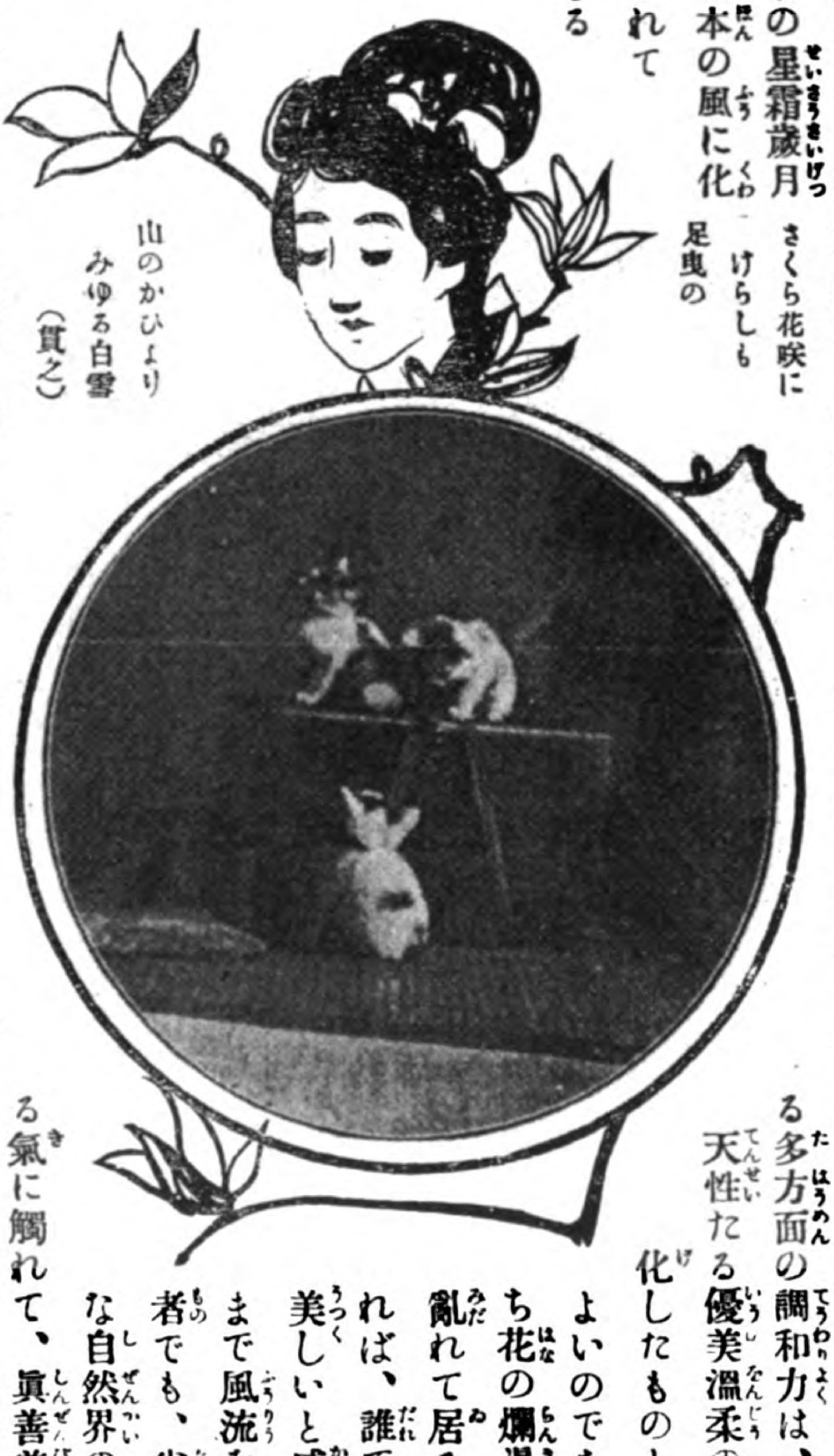
畏れ多くも我が皇室の御紋章を表して居る菊の花も、元來日本固有の花ではなくて、支那の交通の盛んであつた唐の世に我が留學生や遣唐使などが、其花を持ち歸つたもので、これが愛玩され栽培されて、遂に今日の誇る可き日本の菊花と咲かしむる樣に成つて來たので、其種類も今日では殆んど數千種の多きに上つてゐる。

皇室に於て行なはせらるゝ二つの花の御宴、即ち、觀櫻の御宴、觀菊の御宴などは、觀光の爲めに日本へ

來る外人達が、陪観の榮を得て以て光榮とし紀念とせんが爲めに、其の季節を期して來朝する位であるが、此他に梅、牡丹、芍藥なども、往時支那から渡來したもので、それが幾返りの星霜歲月を經て、遂に我が日本の風に化し、日本人に愛玩されて今日に至つたのである

△多方面の調和

婦人の性質は誠に審美的の優美なものである。其しとやかな點は、とても男子には見られない。そして之が硬的な亂暴な男性に與へる感化力は非常なもので、それが調和となつて、行ひが溫良圓滿となるのである。昔或時代には、此の婦人の感化力が働き過ぎて、男性の強き心を軟化した樣な結果を見せたので、經世家は、女性は一種の魔力を有するものであると迄言つたが、而かも人間社會に現はれて居る多方面の調和力は、婦人の天性たる優美溫柔の德が權化したものといつてよいのである。即ち花の爛漫と咲き亂れて居るのを見れば、誰でも嘻々美しいと感じ、さまで風流を解せぬ者でも、尚ほ長閑な自然界の偉大なる氣に觸れて、眞善美の貴き默示を與へらるゝと同じことであらうと思ふ。



△花を愛する利益

花を愛するに依つて得る恩恵は、實に偉大なものである。自分は最も花を愛する方で、一つの蕾をもどうか美しく咲かせたいと思つて十分肥料を與へる、水をやる、といふ風に、自然と運動をするので、非常に健康の助けになる。又此の爲めに多數同好の知人を得て、談話を交換する裡に、交際の樂しさを味ふ事が出來る。そして尚ほ尤も高尚なる自然美を解する事が出來るのである。のみならず自家應分の庭園に四季折々の花卉を栽培すると云ふ事は、精神上には忍耐、勤勉、努力の美德を養ひ、艶麗なる花　滋味ある果實に、其の努力の結果を見て、一家和樂の快樂を味ふ事が出來るのである。人間の花たる婦人方も、天然に受け來つた美しい心の花を開かせ、且つよき實を結ばんと希ふならば、常に其の心してたへず培ひ、たへず灌水して、彼の人工栽培の結果種々の良種を得る樣に、時勢にかなひ時代に最も適切なる花を咲かせ、結實する樣に盡されたいものである。



女優森律子と其令姉（岩谷夫人）

△貴人は語少くして貧子は却て話多し

△事に臨めば三たび思ふべし

△大任に當らんと欲はば必ず篤實なるべし

△人自ら恕すべからず亦人をして我を恕さしむべからず

△一利を興すは害を除くに如かず一事をふやすは一事を減すに如かす

△必ず行ふべからざるの事は必ず妄りに經營を作すこと勿れ

△心を盡す時は愧ぢなく、心を平にする時は偏ることなし

婦人の氣轉

海相夫人　齋藤春子

△いろ〳〵の手加減

家の内のことも、社會の變遷に伴れて、自然に變るでせうが、さうひどく變るものではありません。けれども、家庭の外のことは、時々刻々變化をして居りますから、一家の主婦たる者は唯舊來の習慣にのみ拘泥せず、平素の素養に依つて、其の時々に臨んで機宜を失はぬやう、萬事に氣を利かせねばなりません。ことに世の進むに伴れて、婦人の務めは段々煩しくなつ



咲そめし時より後は打はえて世は春なれや色のつねなる（貫之）

てまゐりますから、家庭の責任を負ふて行く主婦は意志をつよくし、知識を廣くし、且つ感情は鋭敏でなければなりません。舅姑に對し、子供に對し、小舅小姑に對し、また親族、友人に對して、それ〳〵心配がございませうが、これらは最も婦人の力むべきところであります。また子供を育てるにつきましては、母の慈愛を以て臨むと共に、時には父のやうな嚴重な考へを以て育てるといふやうに、寛嚴の手加減が肝心でありますそして、子供は、自分の事は自分でせよ、召使などの手を借りてはならぬといふ風に躾けた方が宜しからうと思ひます。

△自分がしてもまごつく

それから家庭を和ぐる本は、矢張り同情と忍耐であらうと信じます。いくら他の事が立派でも、此の二つを離れては、家庭は決して立派に立ち行くものではありません。殊に婦人に取つては、忍耐程大切なものはなからうと存じます。主婦にそれがなくて、朝から晩まで　ぶつ〳〵言つて居るやうでは、到底一家を愉快にすることが出來ぬのみか、良人の出世を計ることも難かしうございます。子を育て、人と交り、人を使ひますにも、思ひ遣りがあつて、其の人々の心になつて行かねばなりません。主人も、人に接し人を使ふには全く同情と忍耐が大切である、此れがなくして、自分の思ふ儘に、人を使ふと云ふことは、大變な間違ひだ例へば一寸下女に御飯を炊しても、さあ焦げた、やれ硬過ぎる、やれ軟か過ぎると云つて、頭からガミ〳〵云つては仕樣がない、自分がしたからと云つて、さううまく行くものではない、自分がしても、隨分失敗もあれば、まごつくこともあるものだから、一々他人のした事を叱りつけてはならぬ　とよく申して居ります。私は此の心持で日常召使に接して居るのでございます。



燕や落花の塔に花逆き　（禾水）

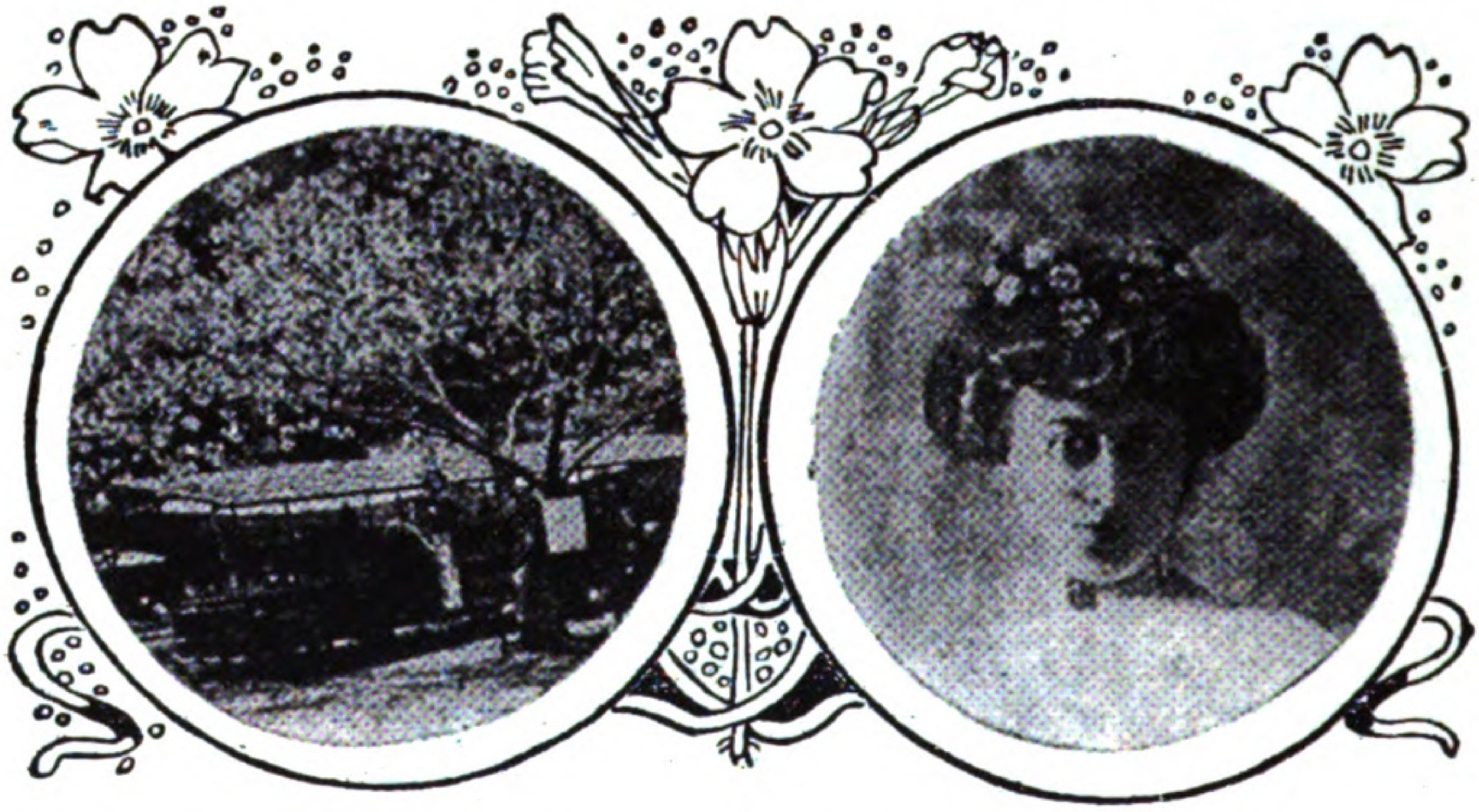


花見と美人

◎薩摩侯島津光久の奥方陽和院は、姿も心も美しくて、敷島の道にも堪能でした。初め後光明天皇に仕へて、勾當の内侍でしたが、光久が之を娶らうと所望に及ばれると、内侍は斯う申しました。『禮儀を厚ふしてお迎へ下さるならば、參らぬ事もありません。』そこで光久は金子一萬兩を結納として、萬事念の上にも念を入れて、いと鄭重に迎へられたといふ事ですが、流石に偉い奥方で、其の女中達を戒められた言葉の中には、今日でも尚ほ傾聽すべきことがあります。

『やれ花見、やれ寺參りと、若い女の綺羅を飾つて出て行くのは、皆人に見られに行くので、女の行儀ではありません。昔も今も内裡では檜扇を開いて翳し、姿を人に見せないのが、女御達の禮であります。それに何ぞや、今時の若い女は、顔を繕ひ、曠れに裝ふて見てくれがしに振舞ふのは、誠に恥かしい次第であります。尤も男は心が美しく女は姿が美しいものと申せど、唯姿のみが美しいとて、心が美しくなくては、眞の美人ではありません。それに粧のみに心を入れて姿の美しいところのみを人に見せるは、心の醜いのを證するまでの事であります。それゆゑ花見に行くなら、人の居ない所の花を見るが宜しく、寺へ參れば、本堂より奥に入るべきでありませぬ。』

◎家康も三代目には人のものとか、徳川氏も三代頃には世は泰平の夢に醉ふて、上下奢侈に遷る中にも、千代田城の大奥は殊に風儀が驕奢に流れ、女中達は皆着物の裾を長く曳いて、只管綺羅を競ひました。春日局は深く之を憂ひて、或時大勢の集まつた時に之を戒めて申しました『着物の裾を長く曳くのは、一つには絹が汚れ易く、色が變つて人に對しても不敬でござります。又二つには、大奥にお使へ申す身のかく華奢に流れては大に實務の妨げとなりませう。尚ほ又遊惰の風が下々に傳はつては、其の弊害は夥多しうござりませう。今より以後は御互に



注意し、下々の手本とならうではありませんか。』かくて間もなく其風俗は改まつたといふ事であります。また或時局は終日奔走に取紛れ、夜に入つて歸館した事があります。其の時平川口の城門に差かゝると、門番の初鹿野傳右衛門は、本丸の御留守居から何等の通知がないとて容易に門を開きませんでした。供の者は局を笠に着ての威たけ高、『春日局樣でござるぞ』と言つたけれども、傳右衛門はいと嚴しく聲張り上げ、『春日でも天照大神でも印鑑なくては通しませぬぞ』と取りつく島なき斷乎たる答に、局は大に其の硬直に感じ入り、家光に此事を語り、法の好く行はれて居る事と、人物の適所に用ゐられて居る事とを歎賞し、褒美の品を傳右衛門に贈り、其の職務に忠實なるべき事を奬勵されたといふ事であります。

◎上野公園清水堂の東南に當りて一個の井戸があります。其の傍に一株の古木の枝垂櫻があつて、棚を廻らして『秋色櫻』と書いた木札を建てゝあります。これは寶井其角の門にあつて女流俳人の譽れの高かつた秋色女が十三歳の折に吟じた櫻の名木です　秋色は名を阿秋といひ江戸堀江町の菓子商某の妻ですが、其の幼い頃、上野の山に櫻を見て、觀音の後の井の傍にある櫻を題に『井の端の櫻あぶなし酒の醉』と口吟して人に知られ、後其角の門に入りました寛永寺の門主はその句を許して秀逸の作となし、これより屡々阿秋を召して俳諧の趣味を探り、名を秋色と賜ひ、且つその櫻を秋色櫻と名づけたのであります。

◎園女は伊勢松坂の度會氏の女で、後大阪の醫者で俳句を能くする岡西惟中に嫁し、年四十の時、夫に別れて後、江戸に上り、芭蕉に就いて專ら俳道を學びましたが、其の性の磊落なのに似ず、堅く女の道を守つて、俳諧の席でも、男子と竝んで坐らず、多くは障子を隔てゝ之れに列つたと申します。園女が尚ほ幼い頃、大阪の伯母を訪れて、浪華の春を樂んだ事があります。折しも伯母の家の前栽に、今を盛りに爛漫と開く一株の八重櫻あり、餘りの美しさに道行く人も思はず足を停めたが、心なき人は、一枝二枝と折り取つて行くので、園女は『めづる人手折りそ花の惜しければ、只見るのみぞ家づとにせよ』と短册に記して枝に釣るしたといふことですが、此の年頃から既に此の風流心があつたればこそ後日名を成すに至つたのでせう。

女の引込み思案

三輪田元道

△女の潜在能力

婦人の能力に就て、女子は生理上男子と同等の職業に從事する事はできないと云ふ說と、女子も男子と同等で、能力に於ては差異はないと云ふ說とあるが、此は何れも根據のない說であります。男子が優つて居ると云ふのも、女子が劣つてゐると云ふのも、根據のない僻見が先入主となつて、引いて、女子は家庭外の活動に携はる能力がないときめるので、女の一人々々の能力を取り調べた上の議論でもなく、其の能力を充分修養し、發揮させて見て、男女個人同士の能力を比較して見た上で言ふ事でもない、只机上の議論に過ぎないのです。男女共に、何れにも、長所も短所もあるから、それ〴〵天性特長を研究して見たら、女にも潜在して居る多角な能力が或は活現さるゝかも知れません。それを出來ない〳〵と云つて婦人を竈の隅にばかり置いては、何時になつても果しがない譯だから出來る、出來ないにかゝはらず、兎に角に、女子に自由に天性を發展せしめ得る境遇を與へる必要があらうと思ひます。



三よし野のみすゞかもとは風冴てまだ萠出ぬ春の早蕨（泉樹）

△熱心と勇氣

又女子自身も。他人の爲めではなく、自身の幸福を

女（ぬの二）



少女の必讀書

和歌入門

佐佐木信綱著

全一冊洋裝四六判
上製紙數百八十餘頁
正價金五十五錢
郵税六錢

東京本町 博文館

第十四回

新學期開講

會長陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

通信教授 產婆看護 講習生募集

規則要郵券三錢

產婆科六ヶ月卒業
看護科四ヶ月卒業

東京四谷區內藤町一

東京產婆看護婦講習會

美術

造花材料

三國屋

關口商店

東京市淺草區駒形町十四番地

電話下谷四〇五一番
振替口座東京一一六四二番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送ノ事

音聲

どもる人

に至治美音となる獨逸博士ローマン氏最新發見自宅療法藥說明書を進呈す郵便切手二錢封入申込あれ

● 東京市牛込區赤城元町三三

好生藥院

造花用

器具材料

練習初學兼用 拾九點木箱入 一揃

定價金貳圓七拾錢

一組送料金廿錢

中外用達合資會社

大阪市東區淡路町三丁目

振替大阪貳七六貳番

女(ぬの三)

定價金參拾錢
送料二錢五厘

◀四月特別號▶

[illegible]號三百頁美装

女子文壇

大阪東京優劣論

▲[illegible]

▲大坂の食物と東京の食物……[illegible]

▲大坂の郊外と東京の郊外……加藤朝鳥

▲大坂の結婚と東京の結婚……澤田撫松

▲大坂人の性質と東京人の性質……船井梅南

◎自由に過る女學生の行動……菊池幽芳

食味の感想（高村光太郎○小川未明○木下杢太郎○田村俊子○森川葵村○秋田雨雀○水野葉舟○兒玉花外○久保田萬太郎○三木露風○鈴木三重吉○川路柳虹○服部嘉香○生方敏郎○金子薫園○福田夕咲○島村苳三其他）

小説

▲森鷗外作（父と妹）……

▲森田草平作（ふぢ娘）……

▲黒き手套……北原白秋

▲原町の家……澤村文學士

▲春の地上……河井醉茗

▲鎌倉より……磯萍水

◎繪日記……竹久夢二

◎元祿時代の花見……春波

◎江戸大阪風流言葉合せ……一覧表

◎耳袋……猿丸太夫

◎桂公爵夫人の平生……福原夫人

◎女優の情操……森律子

▼櫻の名所▲

◎小説 破談……佐藤萬壽子

暗い心 明るい心

▲暮ゆく空▲死んでも放さぬ拜領の名劍▲新しき出發點▲大島の渚より▲帝劇の一夜▲黒き罪▲自然と結婚と▲世間話▲春宵怨▲婚約日記▲親展▲おみくじ▲明るい印象▲銀の寛が誘ひに來る▲月下に憐める產婦を救ふ▲奇遇其他

[illegible] 女子文壇社出版 （振替貯金口座東京第壹七貳九番） 賣捌各地書店◀

女（ぬの五）

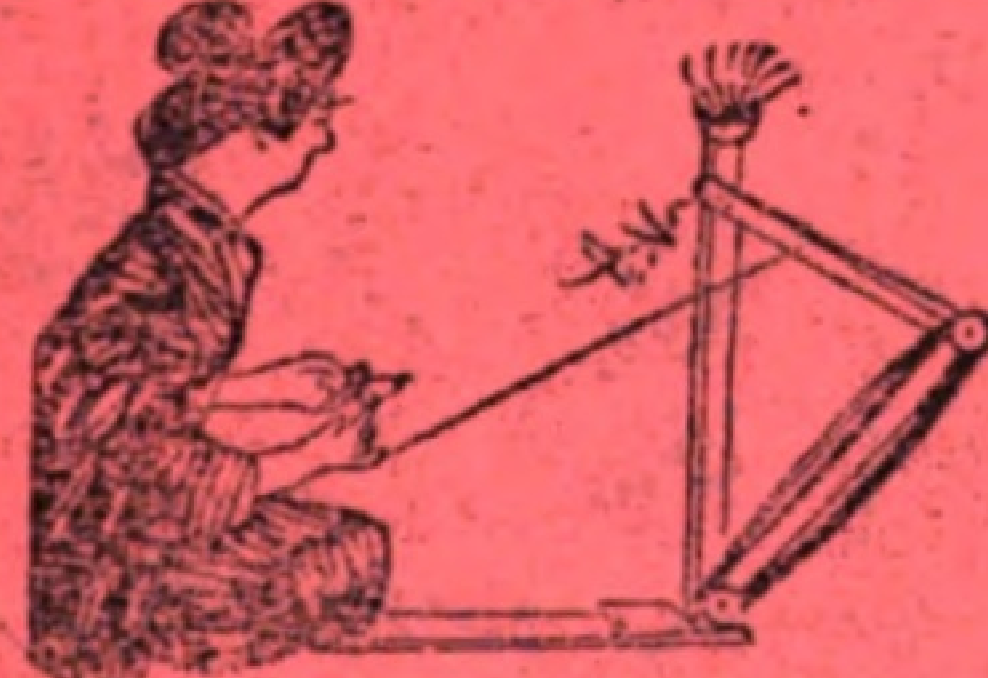
特許竹中式絲掛付絎臺

御婦人方の新福音！・

弊店發賣のくけ臺は御婦人方の毎日針仕事に綛糸を糸巻にまき取る時し一々人様の雙腕を煩はし其上に糸が亂れたり「ヨゴレ」たりするが如き不便更になく御使用後は「ヲリタヽミ」も輕便で且つ針差しや尺度を自由に「シマイ」得る樣に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用としては輕便此の上もありません。

使用法

此絲掛付絎臺は下圖の如く下部にある二個の絲掛車を絲の輪の長短に依りて「ネジ」鋲を以て自由に「シメ」絲口を中央にある輪に通して絲巻にまく時は二個の絲掛車は自由に回轉して他人のお手を煩はさず絲の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に絲巻にまくことを得て輕便此の上もありません是非御試用を願ひます。



定價

御誂朱塗製	金七十錢
御誂黒塗製	金六拾錢
特製	金參拾錢
上製	金廿五錢
[illegible]製	金[illegible]錢

美麗なる箱入なれば進物用に好適也●市内は一本にても御一報次第配達す●送料地方は拾錢

[illegible]

各女學校御用品

新案特許 一九五〇三

ハイカラタスキ

（御使用法注意）

時代の要求に應じて生れたるハイカラ襷は御覧の通り袖が自由自在いろいろになります女學生、女子事務員、奥さん、女中さん共に必要



片たすきの圖



はすにせなかへかけたる圖



そでを前へかけたる圖

特色

一今までの襷とちがひ袖へ（しは）のつく心配がなく掛けはづしにも面倒でなく便利です右

一せなかへ（はす）に掛けると袖がうしろへ引かれる故水仕事の時には最もよろしく腕を充分に出さうとするには袖口の近くへ（ばね）を御付になれば自由に出ます又十文字になりませんから暑中などにも衣類へあせが付かずわずか一尺五寸位の紐さへ御取りかへになれば永年御使用が出來て甚だ御經濟です

御使用の節は必ず兩袖へ（ばね）を一つゞつ付てから後でいろいろに御掛になればよろしいのです

拾個入金七拾五錢四箱迄送料八錢
五個入金卅八錢送料六箱迄八錢
一組定價八錢送料弐錢

女（ぬの六）

肺病の强敵

本書は著者自ら肺結核に苦しみ百方療養の結果全快したる實驗に基き最新の學理を參照し完全なる自宅療法を詳記したる物郵券二錢封入申込者に無代送本すべし

●東京市下谷區上根岸町 衞生書院●

やせる藥

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの人に害なく●やせて●中肉美容となる新藥なり試みたき方は郵券二錢送れ詳細報知す

東京市牛込區赤城元町三三

池田製藥所

ちゞれ毛 くせ毛

赤毛は何程の癖毛も直に根本的矯正黒化し良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に敎授し習て美髮に治して差上升

東京 麻布區材木町 岩阪澄子

春と婦人衛生

婦人科専科某病院長の談話（安全堂主人筆記）

若い令孃方が初期の月經を見るのは多く此春季ですが此際には餘程御注意なさらないと意外の病氣に罹る事がマ、御座い升、初は誰も親に話すのが恥かしい者ですから、ツイ不潔な物で用をたして病毒に侵され子宮病やヒステリー等に罹るのが多ふムい升、私の患者にもコンナのが澤山有升、ソシテ其人達は皆良家の令孃方なのです、其一人は病毒を含むだ手巾から（多分其家に癖疾の方が有たのでせう）若い身空で消渇になつて居るのです、其他月經初期の婦人でなくとも不完全な防經を爲さるゝ爲めに傳染性の病氣に罹る人が澤山有升、併作ら予が友藤川藥學士の發明された安全帶は歐米婦人の月經帶と同一ですから是を御常用になれば前陳の危險より全然脫する事ができます



本舖 東京下谷區池ノ端七軒町四二 安全堂

關西代理店 大阪阿波座上一電車道角 洋々堂分店

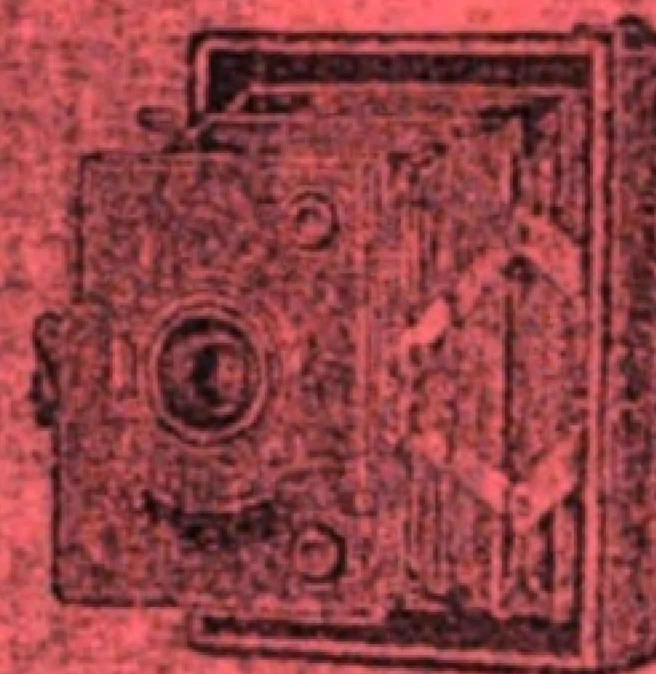
定價（安全帶●甲壹圓廿錢●乙八拾錢●丙五拾錢（各一本で四五年使へます）安全衣●壹打金四拾錢●內地送料一組（帶、衣共）金八錢、餘は一組每に貳錢增し代金引替は廿錢外國臺灣清韓卅錢

女（ぬの七）

誰にでも寫せる

ポケット寫眞器

ミニマムアイデヤカメラ



名刺形壹組　九圓五拾錢

高尚優美で自分で樂み人をも樂ませ又遠方の親戚や友人を樂ませ喜せる事の出來る娯樂が寫眞の他にありませうか？寫眞と申せば子供や御婦人には出來ないものと思はるゝも此ミニマムカメラは誰にでも易く寫せるのが特色で價格安くて玩弄品でない事を皆樣に御吹聽したいのであります

御器械の新しい説明書は郵便貳錢御送り下さればば無代で發送致します

東京本町二丁目

寫眞器械　製造販賣　石版材料　輸入商　**小西六右衛門**

電話本局　長八三七番　[illegible]

優等くせなほし



定價	
廿回分罐入金拾五錢	送料
試用分袋入金五錢	三錢
（郵券代用一割増）	

此癖直し「のびる」は容易にちゞれ毛くせ毛を直すのみならず艶を生じ惡臭を去り快感を與へ且つ浴生病毒を防ぎ又用法頗る簡便なれば毛髮の攝養劑としてこれに及ぶものなし

東京市京橋區中橋廣小路三番地

本舗　**川上化粧品部**

電話京橋[illegible]

取次店　全國の小間物雜貨店に在り

謀る爲めであるから、其れ丈けの實力があり、又實を擧げ得ると云ふ抱負のある婦人は、短い人性に遠慮氣兼するには及びません、進んで自己に適したる手段で、高等な智と、感情と、意志とを養ひ、家庭か社會に實際の活動を試みて、婦人が男子と對等の能力を持つて居ることを證據立てゝ貰ひたいものであります。

物ほしや袋の中の月と花（芭蕉）



然るに婦人には熱心と勇氣とがありません。自己の行動を萬事周圍に左右されて居る傾きがあります。けれども自分の行つて居る事が人の爲め、世の爲めに利益のあることであつたならば世人が何と批難しても、おそれるに及びません。百難を排して、倒れて後止むと云ふ迄での決心があつてほしいものであります。從來の婦人は、獨立し得る實力がなかつたから、生活難を逃れるの道がなく、自然、結婚をも誤れば、爲めに、自己の立場を失ふと云ふ點もあつたでせうが、これから少しく反省して自ら働くやうにあつて欲しいものであります。

△教育機關の解放

今後の婦人は、從來の習慣に甘んせず、非常な發奮と努力とを以て境遇を開拓して往くことが大切であります。そして或る事が自分の能力に適する以上また、それが自分及び、社會の生活に貢獻がある以上は、如何なる種類の職業に從事してもよいと思ひます。それと共に世間の識者も、女敎師を三分の一以上採用してはならぬとか、女醫開業試驗を許さないとか云ふ樣な規則を破つて、自由に敎師たることを許し、女醫專門學校を設立せしめ、或は帝國大學を解放するとか、女子の事は一切女子で濟ませ、又濟まさせる樣に婦人の前途の開拓に骨を折つてほしいものであります。



春野ゆく道のすさみに引みれとまた手もきらぬ若蕨哉（千濱）

△自ら卑うして人之を侮る

從來は婦人が自から活動して獨立で事を行ふことは稀れでした。概して、男子の指揮監督及び、保護を受けて、其の範圍内に於て、働いてゐるに過ぎなかつたやうです。こんな風に婦人が男子にばかり賴つてゐるやうでは、古語にも「自から卑うして人之れを侮る」と云ふ如く、迚も社會に於ける婦人の地位を高めることは出來ません。例へば廢娼問題が起つたとしても、婦人は

全く傍觀の體であります。我々同性間にあんな者を置かれては困る、と云ふ樣な意見が、起つてよさゝうに思はれるが、全くすましたものであります。これでは婦人が蔑視さるゝのも無理はありません。男子は教育や旅行に依て見聞を廣うし智識に富んでゐるが、女子は殆んど生地のまゝ放置されて居るのであります。どうか婦人も社會的の智識を吸收し、社會の實相を解釋して公平な意見を立て得るやうになつて欲しいものであります。

△眼孔狹小の結果

歐州の婦人は、僅かに男子に匹敵する丈けの社會的智識を有つて居ります。其の爲めに缺點もあるが、又利益もあります、故に婦人の教育は彼の長を採り、我が短を補ふを以つて、目的とせねばなりませぬ。即ち文明の長所を採り來つて、智識を與ふると同時に、社會の眞相を知悉せしめねばならぬのであります。この社會的の智識を得るには、今日のやうに、婦人が社會的に働らくのを忌む風があつてはなりません。今日の如く、一切家庭外に出ないで、始終深窓に閉ぢ籠つて居て社會と觸れないでは、徒らに嫉妬、猜疑、狹量、偏見等の性癖を増長せしむるに過ぎません。婦人は感情的で、神經質であるとされて居るが、之れは果して、生來の特質であるか何うかは疑問で、恐らく世界眼の狹い所から來てゐるものと思ひます。平生社會の公道に當つて居ないから、家庭上いろ〳〵の事情に遭遇する毎に、少からず刺激されて、余儀なく感情的にされたのではないかと思ひます。



眉の如く山匂ふ也
春の草（月斗）

△いろ／＼の講演會

で、何うしても或る點までは、新しい智識を吸收せしめ、理解を公平ならしめ、判斷を明確に下す樣に爲さしめなければならぬが、其の手段として、種々の講演を開催して、新しい智識を與へるのが急務であらうと思ひます。例へば文部省で設けてゐる通俗講演會の如き、又は婦人衞生會或は婦人矯風會の如き講演を屢屢各地に開いて、いろ／＼新智識を注入するのがよろしいでせう。是れまでに、さう云ふ樣な會は屢々開かれる樣であるが、何時も聽衆者が少ない樣に見受けます。これは何故かと云ふに、我が國婦人は尙新智識を受け入れる丈の素養が出來てゐません。即ち智識の田園を開拓されて居ないから、折角講師が有益なる道德、倫理、其他學術上の講演をしても、此方に其れを咀嚼消化するだけの力がありません。從つて興味も感じない。遂ひ面白くないから、出席を見合せると云ふのが原因の一つであらうと思ひます。尙ほ一つの原因は、現時我が國の家庭には時間の觀念が薄くて、朝から晩まで、たゞ齷齪として忙はしいので、さういふ所へ出てゐる暇がないからです。家事を成るべく整頓して、規定の時間を得るやうにし、特に會合して說く者も、又聞くものも心身上の慰藉を



言の葉の道のゆきゝのしなりにも引入多し青柳のいと　（千浪）

得る様にしたいものであります。

△歐洲の習慣

歐洲では、基督教の會堂があつて、必らず日曜日には男女老幼が集つて教を聞くと共に、相互ひに智識の交換をしたり、又は談笑して身心上の怡樂を得ると云ふ事が一つの習慣となつて居ります。何うか我が國でもさう云ふ風にしたいものであります。固より宗教にのみ、限りません。學術に就ても技藝に就ても唯屢々斯の如き會合を開催して、婦人を開發して行つたならば、必らず善良なる、且つ新鮮なる智識を獲せしむる事が出來ると思ふのであります。

梅林を桃山にせし佐麗ら　（碧童）



▲西洋人の見た日本の踊

日本の踊りは盛大な儀式の中に行はれ踊子の體は廣がつて居る大きな着物の中に埋まつて居る。黒い髪は金の玉をつないだもので飾られて居る、而て小さな身振りでどんなことを踊るかと思へば、蝶の踊、花の踊、雨の踊、茶の踊、扇の踊、酒盃の踊などであるとは隨分無邪氣な觀察ではないか。

花見と汐干（其一）



花見と汐干（其二）



中華民國の婦人

清藤秋子

△外交手腕に長じた支那婦人

一寸考へますと支那の婦人は室内にばかり閉ぢ籠つて居て交際などゝ云ふ事は甚だ振はない樣に思はれますが、實際は大きな相違で、男女間の交際こそありませんが、婦人同志の交際は頗る盛んなのであります支那は日本と異りまして、兄弟五人あれば五人が妻を迎へても矢張り一家の中に住むのであります、たゞ棟が分れ、室が異つて居るのみで全く同居なのですから、その嫁同志の交際、嫁の親戚との往來と云ふ風に、殆んど毎日招いだり招かれたりして暮して居るのです、そしてこれらの交際は大抵夜で、良家の令孃などでも駕籠に乘つて夜中行くのであります。これは女子の交際ばかりでなく、男子の方もその通りで、私が或時領事館の役人と午後三時に會ふと云ふ約束をしまして、丁度その時間に訪問しましたら、まだ寢て居られるから取り次ぐ事は出來ないと云ふのです、何時頃に目が覺めるのかと問ひますと、七時頃でなければと云ふ挨拶なのです、七時頃に目を覺して、それから一日の活動を始めるので、これ等は全く日本と異つた風習なのであります、處で支那婦人の交際上手と申したら、實に



ことならばさかすやはあらぬ櫻花みる我さへにしづ心なし（貫之）

先天的に外交手腕があると云ふのでせうか、それはとても我國の婦人などは、比べものになりません、もとより智識の程度は低し、見聞も狹いのですから、話題などはごくつまらないくだらない事でありまして、例へばあなたのお召物は大層模様が美しく上つて居るとか、今日はお髪が綺麗に結へたとか、或はお化粧が、よく出來たとか云ふやうな種類で一時間でも二時間でも乃至三時間でも客を飽かせずに面白く愉快にもてなすのです如何して家にばかり引つ込んで居る婦人でこんなに交際が巧いのかと驚かれる位です、勿論夜會とか招待會とか云ふ公の會、男子と同席する會へは外交官の夫人か何かでなければ出ません、それですから公の會でも男子は男子だけ婦人は婦人だけで開くのです、男女七歳にして席を同じうせずと云ふ聖人の言葉は、今もなほ嚴しく守られて居るのです、男女のお客がありましても食事まで別室に設けられると云ふ風で殆んど男子との交際はないと云つて宜しいでせう



姉妹の談話む纏足殺白し（哭室）

△革命を喜ぶ

何處でも未開の國には往往極端な婦人があるもので支那にも隨分烈しい婦人が多いやうです、西太后などは支那の代表的婦人と云はれましたが、併し支那婦人が皆々あゝ云ふ風



枝よりもあだに散にし花なれば落ても水の泡とこそなれ（高世）

には行きません、けれども一體に支那婦人は物に激し易い、一時ぱつと熱すると云ふ傾きがあります、それ故に今度の革命の如き事件に對しては、寧ろ喜んで仲間入りをすると云ふ風です、それも何處迄も國家を思ふとか世界の大勢を見て動くとか云ふやうな目先が見えてゞはありません、元來支那人は婦人に限らず國家的觀念などは皆無なのですから、婦人が革命に投じたのも勿論國家の前途を考へてしたとは思はれません、それ迄の智識もなし思慮もないのですから先づ一時の狂熱的雷同的と見たら間違はありますまい、但し大膽な事は實に驚く計りで惡く云へば圖々しい位ですが、こゝだけは流石に大陸の國民だと思ひます、支那婦人が智識の方面に幼稚で理解力の乏しいにも似ず語學の進歩が早いと云ふのも少しも恥かしがらず大膽にやつてのけるのが原因でせう、この大膽で強いことは恐らく男子も及ばないので、いざとなると命などは顧みないと云ふ風です、まあ一口に評しましたら大膽で突飛な性質と云ふのでせう。

△新政府に對する婦人の態度

革命軍に投じた壯烈な婦人も大分多くあつたやうですが、一と先づ動亂も鎭まりましたから、これらの婦人達は果して今後如何なる態度をとるであらうと云ふ事は、今こゝに斷言するわけには行きませんが、この國の婦人に別だん政治的頭腦があるのでもありませんしまあさう大した活動はあるまいと思はれます、狂熱的の情感は、さう永續きのするものではありませんから革命が治まれば又直ぐ元の通りに消えて仕舞ふでせう、併し一般の婦人から申しましたら敎育は進歩するに相違ないと思ひます、革命後の新政府はどんな方針をとるか分りませんが從來の如き壓迫も束縛も除かれるでせうし、學校なども諸所に設けられる事と考へますからさうなりましたら、支那婦人の性質上必らず長足の進歩を見る事は想像外であらうと考へます。孫逸仙は婦人に選擧權を、與へると云ひますがそこら迄極端に走る事はあるまいかと思ひます又選擧權を得た

花のいろに霞にこめてみせずとも香をだにぬすめ春のやまかぜ（宗貞）



所で今の所婦人もそれを如何する事も出來ないでせうこんなわけですから新政府に對して何時迄革命當時の意氣がつゞくかと云ふ事は疑問です、しかし今迄の支那婦人の教育と云ふものは秩序も何にもなく至つて不完全なものであつたので、堂々たる師範學堂などでさへ普通學は高等女學校よりも程度が低くそれで心理學だの倫理學だの或は敎育學だのと云ふ六ケ敷學科をも詰め込む風であつたのですが今後は著々改善を加へて行くでせうから進み方も早いと思ひますからして支那婦人が進歩すると云ふ事は東洋の爲に甚だ喜ぶ可き現象であらうと考へますので、我々日本婦人もこの際十分なる同情を以て出來る丈の應援をしてやる責任があるかと思ふのです。

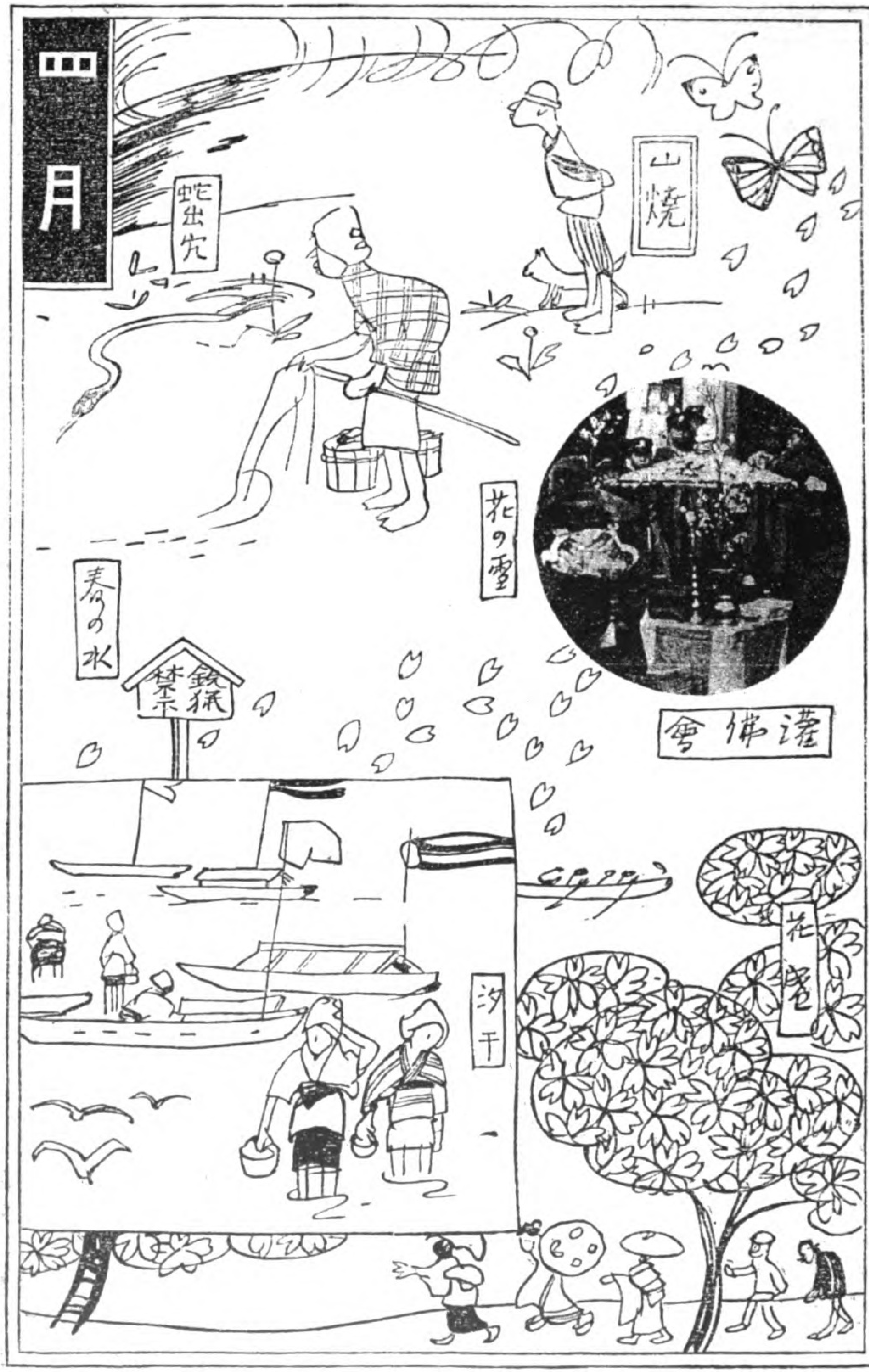


神秘の鍵

▲鳥の羽毛▼

鳥の羽毛は從來突羽根、寢具、座蒲團、叩帚などに用ゐられて居たが近來大分用途を增し、上州方面の蠶糸家は蠶帚に拵へる爲め七面鳥、鷲、鷹等の羽を買ひ又醫科大學でも鳥の羽を買上げて居る尙ほ弓術、茶道の勃興に連れて鶴、鷹、梟 白鳥・ 鷄なども需要が澤山ある。

月花を一時に見する卯月かな



各國皇后陛下の御好み
（英、獨、露、伊、蘭それ〴〵の御調度）

△歐洲では自分の國の皇后さまを二樣に崇め奉るのであるが、一には國民の母として皇帝陛下のおつれあひとして他は慈悲溢れ平和に滿つる一箇國の美の代表者として崇めいそしみ奉るのである、だから皇后さまの御裝ひは一國を代表する美裝でなくてはならぬ、民間の粹筋麗はしき人々が、たゞ〳〵己が美貌を研いて美裝を擬らすとは、霄壤の相違がなくてはならぬ、國體の上に咲く華く麗はしき精華として、陛下を仰ぐ國民の心持を受けさせられて歐洲列國の皇后さま方には、それ〴〵その道に精通した宮內官共々、如何にしてかその王宮の深き由緖を辱めず、その國の美をも輝かさんものをと千々に心を碎かれる。

△隨つて御調度の品々も、時に一顆の寶玉に數十萬金をも惜ませられぬは珍らしからぬが、通例一年間の御服裝を主とする御用度は先づ大英國のマリー陛下すら御立后以來、未だ日淺く詳しくは解らざれど先づ約二萬圓を越えざるべしとのこと、而も御用品中の多くは他國の物を用ゐられず殊に御帽及び御下著類は總て英吉利製品に限られ、巴里より取寄せらるゝは僅に髮飾りの一部のみであるさうな。

△露國皇后アレキサンダー陛下にも普通御用度の年額は英吉利のマリー陛下と殆ど同額で略ぼ二萬圓ばかりにて春夏秋冬の四季に各二揃ひづつの華麗なる時候服を巴里に御誂へになるのを定例とせらる、素より露都に於ける御用の店へは種々御新調の御註文が絕ゆる時なき有樣であるが茲に露國皇后陛下に就て特記すべきことがある、それは陛下が最も巧者なる女仕立師の一群を宮中に持たせらるとて、仕立師は一度袖を通されたのを美しく形を變へ、裝ひを變じ全く仕立て直して陛下に捧げ參らせる朝夕御會合のある貴婦人達すら陛下の日々の御新裝の實に巧なる仕立直しであることを知つてゐるものは殆どないといふ話だ、陛下及び侍臣侍女等の最も深く注意せら

る丶事は、流行の變化最も多き時候々々の御帽が各國の大公使夫妻などの眼に流行遲れと映ぜざらんとに努めらるゝ一事であるが、陛下は巴里より各季節流行品の最優品等八種位で著るしいのは十種宛を御取寄せあるを常とし、御常服には英吉利のものを最も多く御採用あらせらる。

△御常用費の年額に於て歐洲中の皇后方の中で最も格段に多いのは和蘭女皇陛下である、陛下は御身の廻りに一年四萬餘圓を費さるゝが、その御用品の最も多くは巴里及び倫敦から來る、次に何一つとして巴里の製品を採用せられないのは獨逸皇后陛下の御特徴で、各國皇室間に名高い事實で、維納及び倫敦へ御用のある外は世界流行の中心たる巴里と全く沒交渉で、多くは自國の獨逸製品を用ゐられる。而もそれが御服裝萬端あたりを拂ふ一代の美彩と貴品！伯林に在る列國大公使大官等に渇仰せられつゝある同陛下の優秀なる社交的御手腕はカイゼル陛下の外交軍事上の御怪腕と共に歐洲大陸の各皇室中での一異彩と仰がれてゐる

△次に伊太利皇后エレナ陛下には御用度年額約三萬餘圓に登り、最も意を用ゐらるゝは四季折々の長上衣であるさうで、美はしきレース及び縫模樣のために時に他皇室の思ひも及ばぬ高き費用を惜しませられず、御會合の列國の大官等は陛下の御選擇の御眼の高く且鋭いのに感嘆することも屢々あるが何ぞ計らんこの若き陛下の御趣味の素養は陛下がまだ一皇女としておはします時分に針仕事の御稽古に一時音樂、語學、其の他高等の學問をスッかり打ち捨てゝ熱中せられた結果、如何なる婦人服も立派に獨で御仕立遊ばすまでに御上達あつたのに因る、誠に陛下は寶石の五彩の輝き四邊を拂ふ伊太利國母陛下の王冠をソッと脫がせ、市井の破屋に御降りあつても確に一個のニードルマン（裁縫師）として恥しからぬ御手腕を有せらるゝとのことである、尙最も慶賀に堪へぬ一事はこれら賢明なる各國皇后陛下のその殆ど總てが我が同盟國なる英吉利の皇室の御連枝方であることである。

四月カード





四月

神武天皇祭
（三日）

日	月	火	水	木	金	土
7. 14. 21. 28.	1. 8. 15. 22. 29.	2. 9. 16. 23. 30.	3. 10. 17. 24.	4. 11. 18. 25.	5. 12. 19. 26.	6. 13. 20. 27.

柳櫻をこきまぜて、都は錦爛漫たり、墨堤の嵐に裳吹きかへすさくら花、朱雀の菜種に奔馬逸する青柳の風。歌に句に幾代の春や日經ぬらん、厚脂濃容血も迸るたをや女の、春や闌、實にこそ艷なる景色なりけれ。

東天の鳶西郊の柳かな　禾水

灌佛會



曇り日のにぶき日射しに、櫻の花は雪と降りくる、
お佛の慈愛は天地を包み、少女の眼には平和かゞやきぬ。

賃機織から數十萬の富を造つた婦人



婦人記者

數年前には、瓦斯風通や新大島なぞの重寶な織物を案出して、世間の需要を充たし、近くは平民的でしかも優美なモスリンやセルも盛んに織出て、一ヶ年の產額百餘萬圓に上り、職工約五百人を使用し、一個人の事業でありながら、四大モスリン會社と肩を並べて國家の財源となりつゝあるのは、本所柳島の栗原紡織工場でございます。この工場がかやうに發展しましたのは、當主の腕前に依ることゝ勿論ですが、その源は母堂で、本年還曆に當るいね子といふお方が、棟割長屋で賃機を織つた時代から三十餘年間苦戰奮鬪された結果でございます。いね子刀自は實に一世の女傑ですが、お目にかゝつて見れば少しも角のない、お嫁や孫さんに慕はれる優しい御婦人で、「無學文盲な私が申上てもお話が前後いたしますから」と御子息にゆづられる所など、一しほ床しうございます。今主人の語られた刀自の閲歷を左に

▲幼い内からしつかり者

母いね子の生家は栃木縣安蘇郡、佐野在、伊保內村(今は鑛毒地です)で、農業の傍ら雜穀、荒物、太物を商ひまして、通り名を店和喜と呼び、先づ指折の資產家の中でした。母は嘉永五年に此家の長女に生れ、土地の習ひで幼い內から主に家の用事を手傳ひ、その暇に女大學位は習つたのです。そして家では賃機の元方をいたして居りましたから、母も門前の子僧で早くより機に親しみました。其頃は高機の初期で、結城木

綿なぞは母の少女時代に盛んに織つたものです。母は一體勝氣の性質で、鞠、羽根に夢中になる少女の頃から働らき者、しつかり者と評判され、年頃の息子を持つ親達は皆目をつけた位でしたが、これがために母の身に意外の事が起つたのです。

▲犠牲の嫁入り

母の祖父は中々のやり手で、先祖ゆづりの商業を擴張し、拂下の官林も手に入れて材木伐出しの事業も始めましたが、跡取りの母の父は極のお人よしで、追々商賣に拔目は出來るし、山林の監督も行屆かないと云ふ風で、次第に左前になつて、母が十五六の頃に



は多額の負債ある家となりました。

此の時母は何うかして元の店和[illegible]にしたいと少さき胸を痛めて、朝は早く起き夜は遲く迄も働いて雇人を指揮し、一所懸命に家連の挽回を計り家内の者を勵ましましたが、まだ肩揚の取れぬ小娘の事で雇人達を思ふ樣に引廻して使ふ事が出來なかつたので、早く歲をとりたい、若し自分が五つか六つも歲が多かつたなら、雇人達も指圖通り働いて呉れるだらうと、切りに自分の歲の若いのを恨んで歎息したさうです。

丁度母が十七歲の折債權者の質屋から、是非母を嫁

に與れろと懇望されましたので、母は餘儀なく質屋へ、嫁入りする事になりました。この家は息子が放蕩で八釜しい二組の舅姑で、多くの小姑があり、もしあの家に嫁が居ついたら煎豆に花だと評判されたので、舅姑は名譽回復のため働きものと評判のある母を嫁にとつたのださうです。ところが肝心の婿殿は噂にまさる放埒者で、家を外にして女狂ひをすると云ふ始末で母も色々と胸を痛めましたが、何時迄も斯う云ふ風では終へには家運の傾むく基であると思つたので、自分が家に居なければ良人が好いた女を妻として入れるだらうから自然放蕩も止むであらう、舅姑にはすまないけれ共自分が居ない方が、良人のためにも家のためにも安全と考へて、時の地頭へ駈込み願ひをいたし、離婚を請求しましたが、呼出された姑は實の娘よりも嫁の方が大切であるから、次第に依つては、吾娘を不殘追出してもこの嫁は離さぬと言張つた。併し泣子と地頭には勝たれず遂に離婚の運びになりました。

▲再婚の夫のために賃機の内職

母は出戻り早々諸方から緣談の申込がありました、かく人氣のあつた母は何故か夫運が惡かつた、間もなく田沼と云ふ所へ再婚しました、私はこゝで生れたのですが、その良人（私の父）は極お人よしの方でつまり母とは性格が合ひませんでした、母も一方ならず苦勞を致しましたがその内或事情の下に已むなく二才の私を懷ろにしてこの家を退ぞきました、此時の母の心中は迚も形容する言葉がありませんさうでした。その後幼兒を連れて加藤と云ふ家に嫁しました、けれ共母は片田舍の商賣位では滿足して居られない性質でしたので、良人と共に東京で一稼ぎをしやうと相談して、有金を懷ろにし幼兒をつれて出京したのは母が二十七才の時でした。未だ汽車のない時分でしたから兩國橋まで蒸汽船で參り、知己の家に草鞋を脫いだのです。

夫婦はいろ〳〵と職業の方針を考へて居る內、良人は懷の金に氣がゆるみ、蠣殼町の米相場へ手を出し忽ち有金をすつて了つたので、本所二葉町の棟割長屋

を借り、良人と共稼ぎをする事になつて母は機を一臺借りて一所懸命に織りました。いくら稼いでも賃機位では限りが有りますからと母は自分で糸を買入れ、二子を織つて賣る事を始めましたので、ボツ〱と儲の緒が明き、少し餘裕が出來たので、林町へ引移り、三圓づつの織機を十二臺買入れた時には、造作その他の費用で、百圓の有金は盡きて了ひました。併し織物の方の仕事は益々多忙となり、前途有望の境遇となつたのです。



▲花に嵐の母の煩悶

その時代には義父も母に力を合せて働きました。母は晩の四時から夜の十一時まで女工に渡す機の下拵えにかゝり切りで、義父は賃捌の傍ら勝手元を働らき、又幼き私の面倒を見ると云ふ工合で、一寸變則ではありましたが。内幕は誠に琴瑟和合で、人の羨やむ家庭でした。ところが好事魔多しで、金の廻る處から義父は或婦人と關係して子迄設ける仲となりましたので、自然私や母は冷遇される事になりました。夫運の惡いのを諦らめた母は凡てを忍んで、良人の隱し子を引取り善後策を講じて見ましたが、冷えた良人の心を温むる術も盡きました。母はこの儘で夫婦煩悶を重ねるより、いつそ財産を二つに分けて別居し、互に愛兒を育てた方が却つて双方の幸福であらう

と決心して、良人に相談すると、叔父は物怪の幸と悦こびました。一體この家の財産は母が産み出したものですが、兩分について母は凡てを良人に讓り、云はれるまゝに任かせ、唯機臺だけを貰らひ受けたのです家財なぞも大抵は良人に呈して了ひました。

▲三百圓の借金が今日の基礎

母が獨立したのは三十七歳の時でしたが、夜を日についで十二臺の機を運轉し努力精勵した結果、四百圓で若宮町に土地家屋を求め、工場を擴へました。併し流動資本が一文もなくなりましたので、その土地家屋を抵當として三百圓の金を借りたのが今日の基礎となつたのです、その頃の取引は、日本橋の中島商店や下村商店で、織物は主に瓦斯二子でしたが、追々新案の織物、風通お召なぞを織出して、その後工場を八百坪に廣げ、ジヤカードを買ひ入れて、絽風通、紋甲斐絹、瓦斯風通等の器械機に著手しました。

▲綾織の研究に苦心する

ジヤカードの取扱ひには非常に困難しました。實驗一方の母には勿論學理の分る筈もなく、店の帳合や仕事の手傳に忙殺されて十分普通學を修業する暇もなかつた私にも、悲しいかな顧問の力がない。京都からわざ〳〵賴んだ技師は、例の西陣式の男で、偏狹な秘密を守り、少しも理窟を敎へて呉れません。且つ少し不平でもあると自分で機械を狂はして運轉を止め、母子を嚇すと云ふ風でしたから、母も奮慨して私を毎夜高等工業の敎授の私宅へ通はせ、學理を研究させました。

私はこの師の許で一通りの物理化學を研究し、繻子、平織、斜紋の三つは、彩色の三原色と同じく織物の三要素であつて、これより千種萬様を織出す綾拾ひの方法を形紙で習ひましたが、實地でサンザ苦しんだお蔭に存外早く會得する事ができました。同時に母も深川に居る綾織の名人について學びました。かやうに母子が熱心に研究し、尙學理を應用して仕事の手數と時間を省く方法を考へ出しましたので、實用的な瓦斯

風通や新大島、七子の片側帯などを極廉價に織出し、世間の大好評を得ました。これは今より十年前で、商標は母の名に因んでいね丸印を用ひました。

▲戰後の打撃、毛織物に著手

仕事は著々歩を進めてジャカードを二百臺に殖やしました。ところが日露戰役の二三年前から埼玉の織物業が長足の進歩をなして非常な安値で賣捌いたゝめに、物價の高い東京の織物業者は直段の競爭に辟易し始めました。母は普通の織物に見込なしと覺つて、テープ、バンド、ヅボン釣り、毛布など巾一インチから五十六インチまでの毛織物をやり始め、倘ほ毛糸の襟卷も織りました。毛糸の襟卷には綾織を應用して大好評を得ましたが、これは八月から十二月までの短期事業で十分の見込もなかつた。その内戰爭の不景氣に遇ひ、母は愈々著尺物を思ひ切り、モスリンの手織に著手し、八十の機臺を買ひ入れ、先づ一安心したのは明治三十八年の二月でございます。



▲寧ろ雞口となれ

毛織物に方向を改めた母は、二百臺のジャカードは未練なく捨てゝ了ひました而して新方針に向つて進みましたが、モスリンの手織は糊付が困難の上に、モスリン會社の機械織と値段の競爭が追つかず、一度安心した事業は又候暗雲に閉ざされて來ました。そこで私は事業を縮小して不動産から生ずる利益で蓄財する方が安全で

あると思つて母に相談を致しますと、事業好きの母は熱心にさへやれば必ず會社と競爭ができると云つて私を勵ましました。

其後某會社の社長が私共へ合同の相談がありましたが、母は會社と合同すれば儲けたところで勞働者の位置であるし、損をすれば責任が重い。これまで苦戰して單獨に經營した事業だからどこ迄も獨立で通したいものと申して、寧ろ雞口となることを主張しましたその內柳島のタオル會社が倒れかゝりましたので、交渉の結果會社の建物(現工場)を買受まして四十年の末こゝへ引移り、三井物產から機械を買入れてモスリンの機械織を始めましたので、追々京阪地方迄も販路が擴まり、百六十臺の機械を買入るやうになりました。

▲關稅改正の打擊と母の苦心

事業の發展するに從ひ打擊も强く苦勞も大きくなるもので、私方でも右の如く計畫を遂げて母子はホッと息をつく間もなく、一昨年の議會で關稅改正の議案が通過して、これまでより原料糸の輸入稅が上ることになりました。

ところがモスリン會社へ輸入するトップと云ふ紡績原料は無稅ですから、紡績機械を具へて居ない私方では輸入稅に追ひ倒されて、會社と値段の競爭は出來なくなつた。扨かうなると會社の賃機を織るか、紡績事業を始めるか、二つに一つの決心をせねばならない然るに紡績事業を始めるには、器械買入より工場の設置等に、莫大なる資金を要するので、母は躊躇して居る場合でないと、自身勸業銀行に出向き、全財產を抵當として資金を借入れる事になりました、それで外國から機械を買入れ紡績事業を始むるやうになり、漸く今日の位置になり得られましたので、これ全く母が苦心奮鬪した賜と感謝して居ります。

▲水害當時の母の活動

一昨年の大洪水の折、丁度八月の十二日の事でした

工場は全部水に犯され形勢不穏と見ましたので、私も母も早朝から大勢の者を指揮して、原料糸入りの箱を土手の上に運び出し、舟へ積む仕度をして居りましたが、刻一刻に増水する勢ひに中々手が廻りません。その中に職工達の家族が家財が流れるから歸つてくれとわめいて來る職工等は名々自家を案じて逃足になるのを見た母は、老體を甲斐甲斐しくいで立ち、手に鳶口を携へて胸を沒する濁流の中に突立ちまして、「お前達の家財が流れたら悉皆償つてやるから、主家のために働らけ」と勵聲疾呼した。

職工達は一同奮ひ立つて必死に働らき大部分を運び出しました。その中水は益々加はり首を沒する位の有



樣て生命にもかゝはりさうですから、一同母を伴ふて事務室の二階へ避難しましたが、この日の働らきは實に目ざましいものでありました。その夜は十六疊の室へ人間や家財が追ひ重なり、ひつそりと暗き四隣は、唯ゴー〳〵と迫る濁流の音、溺れ往く悲哀なる犬の叫び、救を求むる人聲ばかりで、物すごき事譬へやうもなく一同は生た心地もありませんでした。その中で母は獨り泰然として、「命のある間は決して勇氣を落すな」と衆を勵ましてくれたのです。其夜逃げ後れた隣家の家族が悲鳴を擧げて救を求めたが、水が深くて救ひ上る術に困じて居ますと、母は豫て用意した細引を力綱に投げて救ひ上げました。浸水中は

毎日母は盥へ乘り工場の周圍を漕ぎまはつて指圖をいたし、疲れた私を勵ましました。他の工場に比べると、案外損害高の少なかつたのは、天祐もありませうが、一つには母が活動してくれたお蔭であります。記者は伺へば伺ふほど刀自の勝れた御氣性に感じ入りました。お嫁御は側から大抵の年寄は少し身代が出來れば氣樂に暮したがるのが常でございますのに、宅の姑は今日でも昔を忘れずに毎日筒袖で工場を見廻たり、夜半にも一度は見廻りに起きます。全く姑は事業で生きて居る人でございませう。こんな強い氣性であり乍ら同情が極深い方で、家族は素より職工達の家族の病氣や出産の世話なぞ、よく行届いたものでございます。

人形の花嫁御

或日本人が印度の國ある市の大商人を訪ふと其日は主人の婚禮日と云ふので非常に忙しい樣子だが懇意な中とて兎も角其夜は一泊せよとの事に其儘其家に滯在した愈々夕景になつて嫁御の輿入とあつて門前ザワ付くのを何心なく見て居ると軈て行列に送られて來た輿の中から顯はれたのは花も恥らう美人かと思ひの外大きな人形である、此人形を式場に運び入れ婚禮式、いろ〳〵とあつて目出度くお開きになつた、不思議な事もあればあるものと思つたが夜が明けると夜前の歡喜に打つて變つて人々が憂愁の色を湛えて居る、愈々不思議に思つてると今度は彼の人形の花嫁は又も別の輿に納められ涙ぐめる人々に送られてお寺に行くは正しく葬式である、餘りの訝かしさに家人に前夜來の事を尋ねると印度では第一、第二の妻が何れも病死した其跡に第三番目の妻となる女は厄鬼に纒はれると云ふ迷信があるので其際には第三の妻として人形を迎へ立派な儀式を濟せた翌日、今度は病死したと云ふ事にして之を寺に葬り、其上で本當の嫁を第四の妻として迎へると云ふ事になつて居る、恰かも此家の主人は丁度斯う云ふ場合に當つたので其日から三日の後に來て熱望して居た近所の美人と眞の結婚式を擧げたと云ふ事である。

懐かしきこと思ふ花の夕べ哉



百介譜

その一

あけぼの

花は櫻木、人は武士、貝ならば蛤ぞ此上なからん。その形のいと美しきに吸物にして佳く、膾にして佳く、燒蛤にして更に佳し。殊にその殼は、たとひ千萬相雜りても、己れが外に合ふものなければ、貞婦二夫に見えぬ徴象となりて、女の嫁入道具とはなるぞかし。されば古へより九重の雲深き邊にも、貝合せの御遊びの催されて、貴き秘傳の一つに數へられしも目出度し。

蜆は己が身の數ならぬを侘びて、蛤の大いなるには並ばんともせず、ひとへに小さく縮み居れるは、世の塵に染まぬ處女に似たり。されば戀の歌に數多うたはれしも宜なるかな。

おだやかなる海の中に、潮吹蛤のみ頰を脹らませて潮を吹けるは、如何なる不平のあるにやあらん。さるにても獨り怒りたりとて、甲斐の無かるべきに。

八百八街を白きものゝちら／＼と降り來る朝、淺蜊殼淺蜊と賣りありく聲の細く冴えては、子を思ふ母や涙の種ならん。空に銀砂子撒ける浪速の夕まぐれ、蠣船に紅き灯影を望めば、そゞろに暖かき心地ぞすめる。いづれか好詩題、好畫題ならずとせん。



世に情なきは鮑の貝の片戀なるに、己が身は乾されて壓しのばされつして、熨斗となりて他の祝言を壽ほぐは、いかに辛くやあらん。且つは現し身のもぬけの殼さへ、幾代久しく猫の椀を勤めんとは。

その二

春や來し、梅の花貝まがきの島に咲けば、鶯貝の密と訪づれ、霞の浦に櫻貝のどかに匂へば、胡蝶の貝の爭で宿らざるべき。撫子貝、朝顔貝などの、波の底なる花園を飾れるとき、美し乙姫のそゞろ歩きぞ、いかばかり麗はしくは在さん。風も吹上の濱の簾貝には、誰が袖貝の影さへ微見え、藤壺貝の内には、あてなる女房の潛むとぞ覺ゆる。

磯貝を嫁の笠と云へるは、花嫁の被れる笠にも似て、いと優しく聞ゆれど、嫁の皿と云へば、姑に睨まれし哀れさのほども想はれて、いぢらしきこと此上もなし。

むかし業平は富士の嶺を眺めて、その形鹽尻に似たりと云へりしが、こゝにも鹽尻貝とて、鹽尻に似たるいと小さき貝あり。一は雲煙を脚下に踏める三國一の名山にたとへられ、一は有る甲斐もなき小濱の貝屑の名となる。大小の距離、なんぞ夫れ甚だしきや。

白貝、綠貝、紫貝などゝいへば、その貝の姿さへ優にやさしく聞ゆるに、たゞ赤貝ばかりは、いかにしても美しくは聞えず。さりながらその味ひの佳なること、百介に冠たり。人の阿呆は物の後に立たざれど、馬鹿の柱は天下一品の珍味にて、王侯の口にさへ恥かしからず。



その三

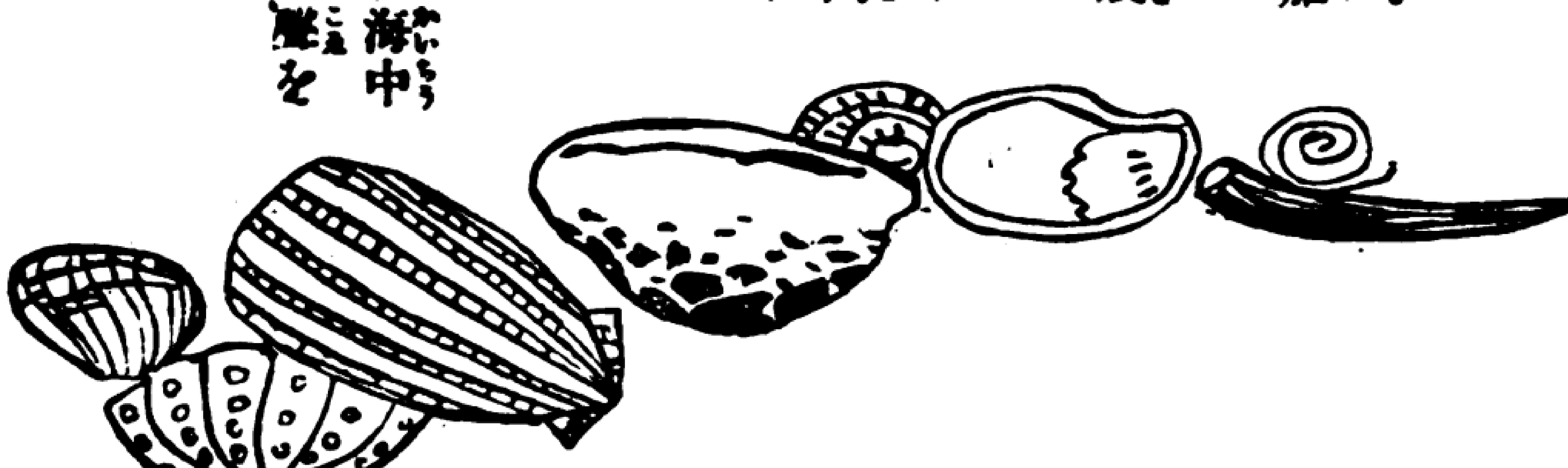
榮螺こそいと可笑しけれ。拳を固めて嚴く裝ひ、いかなる敵にも恐れざらむ振を示しながら、なか〳〵に門戶を固く鎖せるは、臆病者の骨頂と見えたり。然あれ銀燭まばゆき雛の節句に、白皿に盛られし犧牲の姿は、覺悟を決めし節婦の面影に似、床見世に晒しものの憂目を身の終りとして、やがて火あぶりに芳ばしき香を止むるは、お七が戀の浮名を殘せしとは比ぶべくもあらず。

赤辛螺の美しく磨かれて、長門守が秘藏の根付となりしは、いかばかり心に恥しかりけん。伊勢屋が床に飾られてこそ、肝膽相照す光彩をも放ちしならんに。それに引換へて同じ一族の長辛螺は、まづ第一に小兒の夜泣を止むることその功淸正の名にも劣らず、且はその歿に至るまで、線香の薫を高からしむるぞ。

海松貝は常に海松を食めるものから、世に海松喰ひと呼びぬ。例の仰々しき名を好める支那人は、この貝を指して東海夫人とぞ呼びける。然るにても意地の穢き夫人なるかな。

世には柄にもなき大風呂敷を擴げて、駄法螺を吹く人あり。その心、知りがたし。それ海中の法螺貝は、山に入りて千年の功を積み、再び海に入りてこそはじめて三軍を叱咤すべき聲をも發するなれ。一朝一夕の法螺にては、その利目薄かりなん。

その四



子安貝こそいと貴けれ。產婦の守となれるさへあるに、昔は貨幣に用ゐられしとかや。「賄」「賂」「贈」などの文字の、悉く貝篇に從へるは、是れが爲めなりとぞ。「貝」の文字さへ、熟々に之を眺むれば、やがて子安貝の象形に似たり。燕の巢より子安貝を求めなば、妾は御身が妻になりなんと云へりしは、赫耶姬が昔の言葉なれど、財產だに數多有ちたまはゞ、妾は御身に侍づきまゐらせんとは、何時の世にも變らぬ女の心ぞかし。

海螄といふ貝あり。その肉は餘り甘からざれど、千倍萬倍の語呂に因みて、むかし商家にては必ず除夜の酒肴に供しぬ。彼の市井に住める苗字を見るに、楠、新田など云へば、何となく懷しく聞ゆれど、足利、高などゝ云へば、また何となく憎らしく思はれて、やがては其人の禍福にも關はるなんめり。海螄も亦た斯かる類ひにやあらん。

酸ゆき酢皿の中にありながら、雌雄相逐ふ蛤貝こそ、いかに心の樂しきものならん。異名を想思子といふも、おもしろき名の一つなるべし。

鹽からきは人の厭ふ所なるに、蟶貝ばかり可笑しきはなし。一摘みの鹽を密と其穴に抛げ入るれば、忽ち浮かれて出づるぞかし。この折に蟶貝の待て少時と云ひて捉へんとすれば、早や底深く隱れゆくなり。隱顯の妙、砂地に蹉跎して悔しがるとも、及ぶべからず。

その五

寄居子の憎きは何に譬へん。さゝがにの蜘蛛の蛛網を張る巧智もなきに、猥りに他の殼を盜みて、ひそかに主人顏を裝へるは、宛ら主家を奪へる奸臣に似たり。これに比ぶ



れば、帆立貝こそ古への聖賢の俤をば傳ふるなれ。春風そよ吹く長閑なる日には、ひとり帆を張りて心のまゝに樂しみ、一度捕へられて貝杓子となりては、煑物の毒を消して却つて人を欣ばしむ。彼の歴山大王を驚かせしダイオゲネスの哲も、彼の怨みに報ゆるに德を以てせしクリストの仁も、唯だこの貝の中には含めり。

海膽は其形いが栗に似て、一向見好げならぬものなれど、腸に千金の味ひあり。節操を賣る男子、虚榮に咒はるゝ女、海膽の腸に對して恥づべくや。

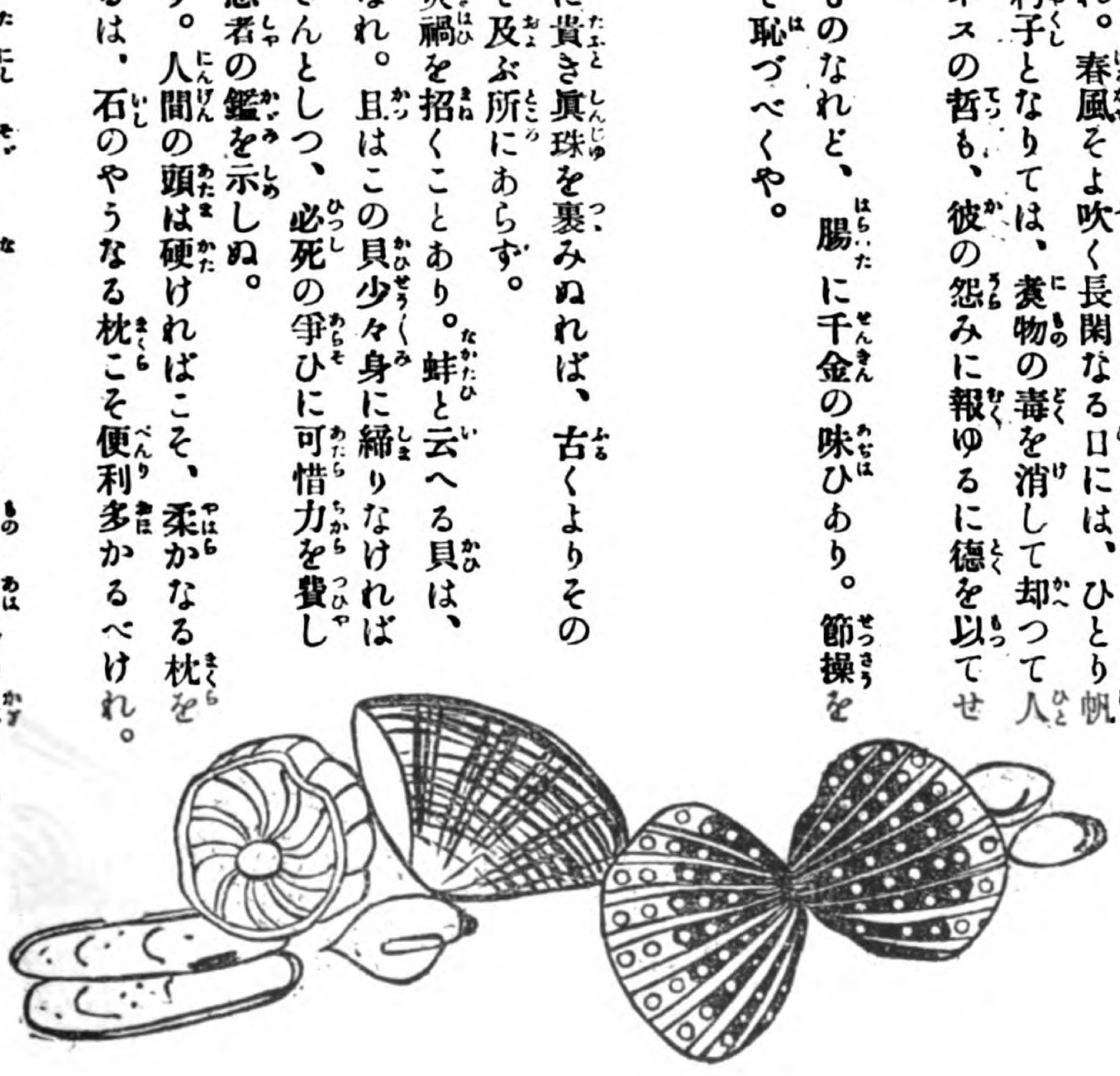
その六

阿古夜貝は、その殼美しからぬに、なか／＼に貴き眞珠を裹みぬれば、古くよりその名よく聞えたり。徒らに外貌のみ好きものゝ企て及ぶ所にあらず。

さりながら身に財寶を抱けるものは、思はぬ災禍を招くことあり。蚌と云へる貝は、珠を抱けばこそ屢々龍に襲はるゝ憂目をも見るなれ。且はこの貝少々身に締りなければ時折午睡の扉を忘れて、鷸の嘴に危き命をば墜さんとしつ、必死の爭ひに可惜力を費したる揚句、却つて漁夫の獲物となりて、徒らに愚者の鑑を示しぬ。

蛸の枕は、何やらん土瓶敷の如く、いと硬かり。人間の頭は硬ければこそ、柔かなる枕を必要とすれど、蛸の頭の云ふばかりなく軟かなるは、石のやうなる枕こそ便利多かるべけれ。硬軟の和、感ずるに餘りあり。

春も櫻のおぼろ月夜に、拾ひのこされし小田の田螺の坐ろに鳴きいづるは、物の哀れの限りなる





大木五臟圓こそ全く日本人の身體に適合する唯一の滋養強壯劑である、其理由は既に各大家の賞讃と幾億人に愛服せられたる實驗に徵し充分證據だてることができる、されば痩せ衰へたる虛弱家多病を嘆く不幸家、過度に精神を費す心勞家等に此の大木五臟圓が極適當である

（主効）

身體虛弱症	肺病肋膜	●たんせき●	精神過勞症
病後の衰弱	心臟病諸症	●ぜんそく●	老衰
貧血諸症	婦人血の道	氣力缺乏症	一般衛生家

●藥價 ○四日量三十錢○七日量五十錢○十五日量一圓○廿四日量一圓半

本舖 東京神田鍋町大通り 大木合名會社 振替東京四八〇番

天下の婦人必讀

「月やくの滯り又は不順は何うすればよいか

月やくの滯るのには種々の原因がありますが、兎に角婦人に取つては、甚だ心配な事でありまず何うしよう何うしよう、と迷ふて居る中に愈々重くなつて、愈々困難になり、危險が加はり遂に之れが基となつて生命に關する樣な重態に陷る例が尠くありません。故に月經の滯り又は不順の人は此際一刻の猶豫もなく川本學士の發見劑月調を服用なさい、斯道大醫直接の方劑を仰ぐと同じ効能があつて確實に流下する秘藥であります、郵劵參錢添へ申込あれば詳細お知らせ致します、故に二三ケ月も滯り又は血塊などと稱へ永年經水のなき人は直ぐに申込まれよ。

藥價
●一劑 八十錢●二劑 一圓五十錢
●三劑 二圓十錢●別製 參圓
送費封入八錢附送

發賣元 東京市京橋電話局橫 笹山積愛堂藥房 振替東京一五八四番

女(るの一)

博通社　㊢　特賣品

安心の出來る買物は博通社に限る!!!

御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!

家庭用活動寫眞機械



一、本器は玩具に非ず稍小形なれども舶來活動大寫眞器に遜色なし
二、本器は映畫フキルムを約三千六百坪の面積に擴大せられ而も撮影力光も明瞭なり
三、本器は家庭又は地方會員組織をなす會合又は學生諸君等團欒的完全なる娛樂品として本器に勝るものなし
四、飛行機、蓄音器、活動寫眞機械の三流行兒中教育的娛樂品として家庭用活動寫眞機械尤も卓越す

●荷造送料内地卅五錢　臺、樺、清、朝六十五錢

●無代進呈 活動寫眞器械說明書及フキルム目錄希望者に

●家庭用活動寫眞機械及アセチリン瓦斯發生器並フキルム貳本付
壹組特價拾七圓五拾錢

●映畫フキルム長短に不拘一尺に付　拾五錢替

千代田火のし



缺點多き在來品を進歩的技術を以つて大々的改良を加へたるが故に和服、洋服を問はず一切の織物の縫でも折目でも縮ち縫形なく纖細になり殊に實質を損ぜぬのが本器の特色であります、尚少量の炭火で長時間の使用に堪へ溫度加減自在なる而已ならず體裁頗る優美にして價格又低廉實に理想的火のしであります

●千代田火のし美麗箱入壹個　特價貳圓卅錢

▲荷造送料市内無料、內地廿錢、臺樺清朝四十五錢

夜光置時計

第一號　　第二號





歐米各國に於て盛んに流行しつゝある不思議の夜光時計は即ち本品なり如何に暗夜と雖も燈火を要せず直ちに指針が何時を指し居るかを知る事を得る極めて不思議にして實用的なる置時計であります

●一號型夜光置時計　特價五圓五拾錢

●二號型夜光置時計　特價五圓貳拾錢

▲荷造送料內地十五錢　臺、樺、清、朝、卅五錢

大橋メール、オーダー、ビジネス

博通社

電話本局六百十四番
振替口座東京五〇番

東京の貴婦人はナゼ美しいでせう!!!
▲其れはこの樣にしてみがき立てるからであります

美顏と化粧法

定價送料共 金三十七錢 切手代用は金四十錢

目次の大略▲色白くなる方法▲赤き顏を櫻色にする方法▲シワのよらぬ方法▲キメを細かにツヤを出す方法▲日にやけるを防ぐ方法▲齒を白くする方法▲手の色を白くする方法▲髮の毛を黑くする方法▲毛のぬけるを止める法▲毛をのばしつやを出す方法▲ふけを去る方法▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法▲あるべき所に毛なきを生ずる方法▲やせる法ふとる法▲鼻を高くする方法▲聲をよくする方法▲入浴の方法▲化粧品の撰び方▲おしろいのつけ方▲衣服の模樣と縞柄▲衣服の撰び方▲衣服の着方

此外いろ〳〵の事が書いてありますが皆どなたにもすぐ出來る事ばかりで其効果も面白い程あらはれます。私方へ二錢切手十五枚又は一錢五厘切手廿枚御申越し下されば一千冊限り特別に御分ち申上げませう

本書著者 東京神田錦町三ノ二 高柳孝子

色白くなる

私事色々樣々の化粧品など用ゐても効なき處今回ふとした藥にて色白くなりました。嬉しさの餘り皆樣に御實驗を願ひました處、澤山の御禮狀を戴きました。返信料封入御照會あれば委しく御知らせ致します。

東京神田錦町三ノ二 高柳こう子

文學士下田次郎監修 文學士今井政吉著

泰西名著婦人叢書第一編

婦人解放論

■全一冊袖珍美本裝幀優美 定價卅五錢郵稅四錢

女學世界評―本書は獨逸人クレ、パッ女史の著にして婦人解放の危險、及び、バーグ女子著「眞の婦人解放」を基礎として泰西の婦人解放に於ける諸思想を綜合統一して紹介したるもの今や婦人問題の喧傳せらるゝに當りて本書を得たり最も現代的の書として江湖の一讀を薦むるや切なり

泰西名著婦人叢書第二編

▲西洋女大學 (目下印刷中)

米國フィンク原著藤本斑嶺譯

▲戀愛の研究 定價金五十錢 郵稅金六錢

文學博士坪内雄藏先生著

▲所謂新らしき女 (目下印刷中)

(東京 本町 博文館) (東京 小石川 精美堂)

女(ろの三)

岡田八千代女史編

閨秀小說十二篇

▽最新刊▽

洋裝四六判三百餘頁
裝幀瀟洒優美
定價金四拾五錢
郵稅金六錢



源氏の大作枕の草紙の雄篇現れたる平安朝は知らず才媛の輩出近時の如きは蓋し未曾有の事なり殊に筆を小說に染むる閨秀に至りては未だ今日の如き盛觀はあらず、本書は現時の傑出せる作家より特に十二篇を選びたるもの感覺の鋭敏にして感情の優婉に觀察の微細なる別に一境地を拓けり就中個々各異彩を放つて紅紫爛熳たる處近時出版界の美觀と云ふべし。

東京本町
博文館

女(ろの五)

色白く美人

[illegible]なる内服外用の二種新奇薬を輸入致す内服[illegible]に飲んで體内の悪血毒血悪液を體外に排泄し[illegible]を清浄にし根本的に肉色を純白艶美ならし[illegible]る奇効[illegible]薬也外用薬はきめを細に艶を出し[illegible]を滑に擁え飾し色白くする特効薬也[illegible]方併用[illegible]に偉大の奏効忽ち顕る内服[illegible]九拾銭外用壹剤貳圓拾銭着金即刻小包送薬す

月經閉止

つきやくとまり

[illegible]にて困難せる婦女子に告ぐ 如何程長き頑固の月やく不順閉止停滞及び流經する最新發見奇薬は[illegible]にて忽ち快通[illegible]わり早く試よ峻烈偉大なる[illegible]に顕る[illegible]用七拾銭貳剤壹圓廿銭[illegible]特別製分貳圓廿銭近時無効[illegible]多し御注意を乞ふ

腋臭根治新薬

わきがねきりしんやく

いか程頑固慢性の腋臭も誓て根治し決して再發せず[illegible]は他病に變ぜざる最新發見奇薬あり他薬にて効なきを患者は速に試み病根を斷絶せよ薬價輕症用九拾銭重症用貳圓拾銭頑固慢性症用特別製分五圓卅銭着金小包送す郵券代用は必ず貳割増しの事

腦病根治 記臆増進剤

腦病神經衰弱に基因し記臆力消衰し物事忘れ易く讀書するも理解せず記臆力思考力缺乏し常に頭痛逆上して諸事あき易く根氣なく困難せる患者は當舗多年實驗發見せる新薬（記臆増進丸）を試よ忽ち頭腦明晰優秀となり記臆力増進し元氣旺盛となり理解力判斷力思考力を増る強健ならしむる可驚峻烈卓効あり裁判官辯護士新聞記者學生銀行會社員劇務者早く試よ愉快に執務せよ小九拾銭中貳圓四拾銭大参圓七拾銭特別製分四圓七拾銭

（奇効顯著）

（最新發明薬）

あざ 及入墨 ほくろ

は約廿日

そばかす。なまづ。いぼ は約拾日

除去すること美麗に的確なる新薬にて患部の大小輕重を問ず容易に根治し痕跡を殘さず除去し得らる假令顔面たりとも但し其製劑を二種に區別し一はあざ。入墨。ほくろを除去し又一はそばかす。なまづ。いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記し申込あれば其症に適應する薬を撰定送付す價は各試用劑壹圓拾銭小劑參圓拾銭中劑五圓拾銭大劑拾圓拾銭づゝにて郵券代用貳割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻送薬す

（奇効顯著）

毛生新薬

本劑（薬名ヘアーグロース）は多年研究實驗の結果發見したる毛髪速生薬なり即ち男女共禿[illegible]物の痕はつぼうはげの痕やけどの痕頭髪及はえぎわの薄き人陰部の毛なき人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人用ゆれば毛髪蒼々と速生する特効あり本劑は世にありふれたる種々雜多の毛はへ薬とは其効大に異なるに付幸に玉石混同視することなく速に試み偉大なる奇効を知られよ價小瓶壹圓廿銭中瓶二圓卅銭特別製分五圓卅銭着金即刻送薬す

美容 やせる薬

壹劑參圓廿銭貳劑六圓二十銭特製九圓拾銭本劑（薬名コードチサン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく贅肉を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効薬なり故に彼の見苦しくふとりたる諸君は速に本劑を用び其驚くべき偉大なる特効を知られよ

以上七薬専賣

東京市神田區五軒町十九番地

日新館薬房

電話下谷五四六番

振替東京壹九貳四六番

女（へろの七）



レーベン

レーベンの特色と効能

レーベンは常持醫學士の發見に係るものにして米食人たる東洋人種に適合すべく和漢洋法を折衷して得たる植物性の藥物にして「リンサン」の多量に加味せる絶好の良劑なる事は醫學博士岡田、森戸山腦病院長、等の證明による明白なる事實なり。

醫治効用 は回性、興奮、鎮痙の三作用を兼備せる最新式の錠劑なれば腦、神經衰弱、頭痛、眩暈、逆上、便秘、不眠ヒステリー等を治癒し心神爽快元氣旺盛ならしめ殊に陰萎遺精、早漏夢精、生殖器神經衰弱等にて交接不能となり人生の快樂を奪はれて長へに悲歎憂愁の涙に暮るゝの人は皆何れも腦神經衰弱其婦人にありてはヒステリー患者なればなり故に以上記載の其一を患ふる人は最後の試藥として

レーベン百錠乃至二百錠を試みよ其効神速に顯はれて平靜和樂の健康體となり、得も云はれぬ愉快に其日を送る事を得べし、夫の大黄の下劑を主とせる粗藥にあらず、論より證據今直に試みよ

●本病患者には腦神經衰弱自然療法と精神療法とを發行所へ「ハガキ」にて申込次第進上す

各藥店にあり無ば發行所へ全國送料無料信用なき藥店にて他藥を賣付んとす注意

定價		
三十錠 三十錢	五十五錠 五十錢	百錠 八十五錢
二百錠 一圓六十錢	四百錠 三圓	八百錠 五圓五十錢

發行所 東京銀座弓町二二 電話京橋三二〇八 弘濟藥院 中南定太郎 貯金口座東京七七七七番

べし。さりながら彼の蜷といへる貝の、不圖田舍屋の壁などに塗りこめられたるが、二年三年、死にもやらで獨り身を悶ふるに比ぶれば、なほ些かは慰みぬべきか。彼れに小督の悲しみあれば、此れにはジャンが牢獄に囚へられし悶へあるぞかし。

▲新撰六歌仙貝▼

蟬貝の聲かと聞けば村松の岸うつ浪のひゞきなりけり　讀人不知

打よするみるかひありてよさの海のあそびの浦に頃も經ぬべし　讀人不知

浪あらふ衣の浦の袖がひを汐干に風のたゝみおく哉　西行

波よする白良の濱にからす貝ひろひやすくも思ほゆるかな　西行

漕ぐ人もなぎさに寄する舟貝は吹きくる風やつなぐなるらん　讀人不知

水底の玉にまじれる礒貝の片戀のみぞ年は經につゝ　人丸



お玉ヶ池(1)圖



繪もの語

鵙の草莖

太田三郎

お玉が池

古い昔のお話です。その頃奥州街道の上り下りに、一たび武藏の國櫻が池の邊を通つた旅人で、汀に茶を賣るお玉の艶容を印象せなかつた者は、誰一人として無かつたとのこと。

はら〳〵と散る花を浴びての優婉な立居振舞は、其飲料の芳醇な匂ひよりも色よりも、先づ人々に賞で囃されて、若草の綠に敷く緋毛氈には、毎時客の絕へ間がありませんでした。

と、茲に二人の美くしい男がありましたが、其二人が偶然等しく彼女に戀慕して、激しう競い合ひました。何れもまだうら若い身の、思ひ詰めては矢も楯も堪らす、日に夜に我劣らじと附き絡はつて、互に搔き挘らるゝやうな胸の苦しさを訴へるのでありました。

恁う慕ひ寄られて、女も有繫に心を動かさずには居られませんでした。が、如何にせん受ける情は二つで



お玉ヶ池(2)圖

すのに、酬ゆべき身は一つです。もとより眞の愛は二つにし得べきもので無い。と云つて相均しい熱情の其何れに赴くべきか。一を悦ばして一の涙を見るのは、氣の弱い昔の女の堪へ得ぬところ、お玉はもうひたと當惑して了いました。

する中にも男達は、愈々強く双方から迫ります。可憫さうに彼女は、受け兼て然も拒みかねた愛と愛とに挾まれて、氣も心も亂れるばかり思ひ侘びましたが、

鶍の嘴(1)圖



終に其重い苦痛の堪へがたさを、或夜櫻が池の水深く沈めて了いました。

今の神田お玉が池邊が、即ち其美くしい優しい心の形見の地なのであります。

鶍の嘴

河内の國に、麻福田丸といふ至て貧しい少年がありました。家に近い或る富豪の令嬢に思ひを寄せて、及ばぬ望みに身を焦して居りました。と、貴賤を隔てず通ふのは靑春の戀の純潔な血潮、令嬢も何時しかそれと覺つて、窃に其胸を、春の小鳥の彩翅のやうに震はせるのでありました。

が、怜悧な令嬢は、如何に熱烈な愛情も、彼の社會の制裁とか云ふ醜い手に虐げられねばならぬ事を知つて居りました。で、いろ〳〵と思ひ惱んだ末、醜さに對する醜い手段として不圖考へ附いたのは、彼少年を僧にするといふ事です。云ふまでも無く昔階級的制度

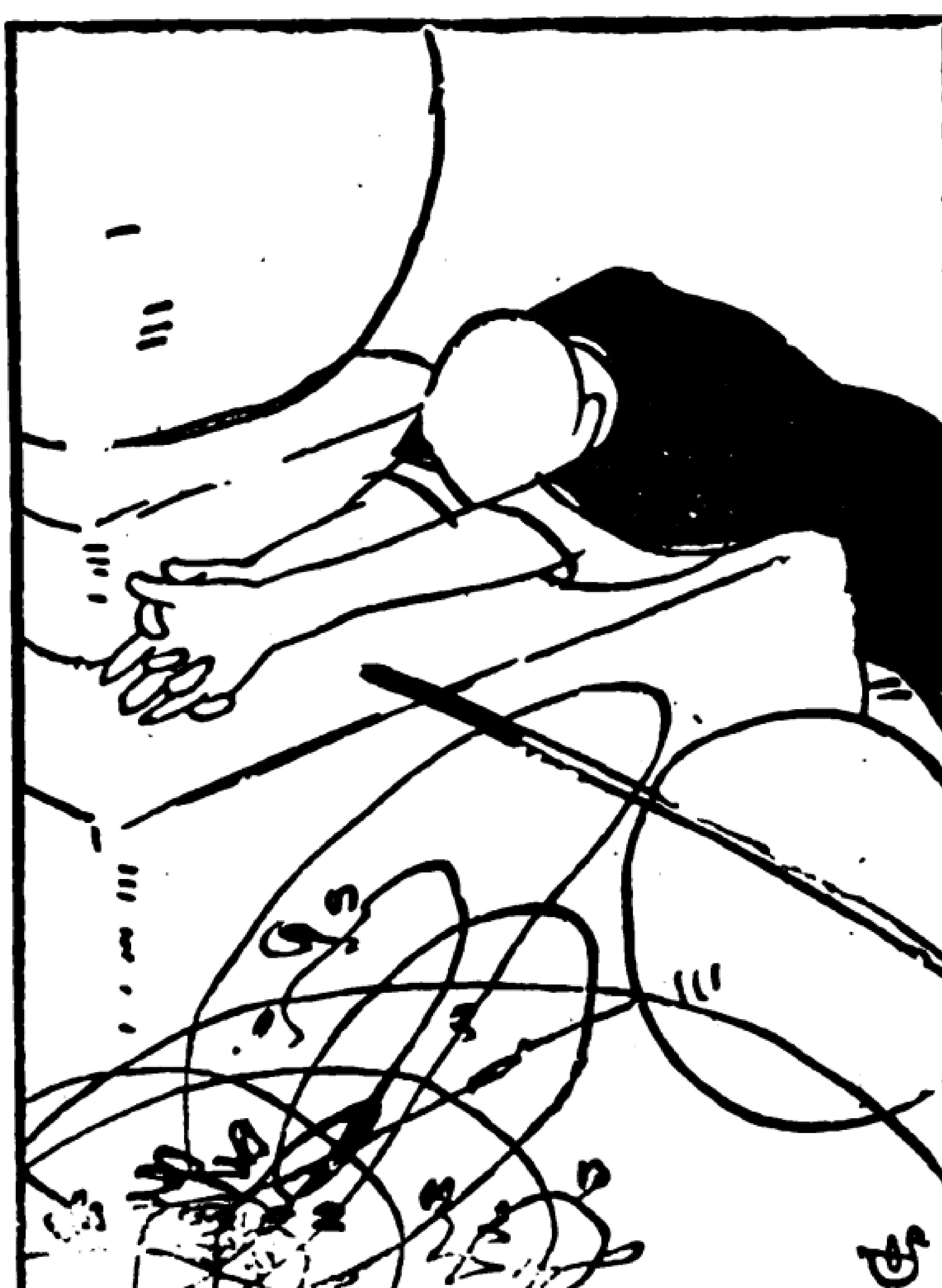
の甚しかつた時に於て、卑賤の者が立身の捷徑として選んだ職業は僧侶でした。で、若し少年が幾年の後世の信仰を繋ぐに足る僧となり得たならば、二人は憚り無く接近せられやう。其時こそ百花亂れ咲く歡樂は齎されやう。と斯う思つたのです。彼女は夫れを窃かに、腹心の侍女をして少年に囁かせました。

男の歡びは譬ふるに物がありません。直に佛門の人となり、戀の一念から殆ど寢食を廢して、一向業を勵みました。軈て益々其身に箔附ける爲に、諸山を遍廻るべく、懷しい女の地を後にしました。

すると茲に痛ましい事が起りました。殘つた女は妙齡の身の數多い婚嫁の話を、彼方に逃れ此方に避け、少年の成功一日も早かれと待ち佗びて居りましたが、する中に、其悶々の懊惱や處女期の或る壓迫が因で、終に白玉樓中の人となつて了つたのであります。

けれど、少年は素よりさうした事を知らう筈もありません。渠は櫛風沐雨あらゆる艱苦を甞めて、諸山に學び歩るいたのであります。而して斯うする事五年の後、事成れりとして、其圓い頭の中に、將に摑まるべき歡樂の想像を様々に秘めながら、いそ〳〵と鄕里の土を踏みました。と、しなしたり此次第です。其驚き其嘆き、それは敍するだけ贅でせう。

かくて五彩絢爛の夢から、遽然慘澹たる暗黑裡に墜落した渠は、其瘉へ難い傷手の苦痛を、せめて少時忘るゝよすがにもと、益々僧侶の業に熱中しました。——世に名僧と稱せられる智光法師は、此失戀の子の事



[illegible]の[illegible]（2）圖

であります。

海松と貝

今は昔、京に一人の男がありました。心の清い妻を持つて居りましたが、ふと他に増す花を得てからは、よろづに情無く當つた末、終にそれを去つて了つて、只管新らしい女の色香に惑溺して居りました。

此男ある時十日ばかり保養の旅をして、西の方へ赴きましたが、一日難波の海邊を逍遙して居て、面白い物を見附けました。それは殻に房々と海松の生へた貝です、海の無い山城の國の都會人は、いたく夫れを珍らしがつて、拾ひ採つて旅宿へ歸りましたが、果ては其興の央ばを愛する女に分つべく、召使ふ小童に持たせて京へ上せました。



海松と貝(1)圖

すると、偶然にも其贈り物は、使の者の粗忽から思はぬ女即ち本の女の許へ持つて行かれました。去られたる寂しい人は、意外の事に少時呆れ惑ひましたが何は兎まれ、忘れ難い昔の男からと聞くに先づ胸も躍つて、直にそれを水盤に入れ、爽やかな潮の香を朝夕に懐しむのでありました。

する中に男は京へ歸つて來ました、ところが今の妻は素より夫れを知らぬ事、つい一言も彼の物に就いての話をしません。で、不審つて旨を語りますと、女は思ひも懸けぬ目差して、

「もし來つたならば、貝は燒いて海松は酢にして食つたものを。」

との答です。渠は案に相違して、慌しう小童を呼び立てましたが、次第を夫れと知つてもう烈火の怒、後とも云はず今更ぐに取り返して來、と罵りわめくのでありました。

間も無く件の海松と貝とは、陸奥紙に包まれて元の儘、男の手に戻りました。すると、紙に何か書いて有ります。見ると、

蜑のつと思はぬ方にありければみるかひも無く返しつるかな

讀み行く男の面は、其一字々々に激怒の表情を失なつて行くのでした。見る甲斐もなく返しつるかな。ややあつて哀憫の情緒は、露となつて瞳に現はれました見る甲斐も無く返してこした憫しさ、加之、今の妻の言葉の貝は燒いて海松は酢にしてとのさもしさに引換へて、懸うしてありし儘に眺め暮した床しさ。渠はもう堪りかねて、夫れを手にしたまゝ一散に懐しい女の許へと馳せ附けました。‥‥軈て其家からは、絶へて久しい笑ひ聲。勿論後の妻は、それきりに棄てられて了つたのであります。

魂の戀

童貞の寂しさの中に世を去つた女の性が、形となつて其本來の嚴肅な欲求を滿たした話。

尾張の國清洲に小山田紀内といふ男があつて、日の夕暮毎に薄明の門に立つては、何と無しに往來を眺め



海松と貝（2）圖

魂の戀（1）圖



やるのを例として居りました。すると四五日續けて同じ時刻に西から東へ過ぎて行く女がありました。たそがれの紫にくつきりと白い被衣姿、男の瞳は毎時火のやうに輝くのでしたが、する中、遠くて近いとか云つた言に洩れず、若い美くしい男と女とは、或る日つい一言二言の應答を媒として、わりない契りを結びました。

それからと云ふもの、女は夜ませに來、夜毎に來、果ては晝もとゞまつて、家の內よろづ甲斐々々しく取計ふやうにさへなりました。斯くて夢のやうな怡しみの中に、一二年の歲月は慌しう過ぎました。

ところが或夜のことです。女は男の許へ來るや否わつとばかりに泣き倒れました。軈て淚ながらの物語。約めて云へば、彼女は實は現世の人で無かつたので。もと飯田某の娘、十七にして病歿して、既う明日で三年の月日に滿ちる。然るに死者の靈が中有に在る事は其三年を限りとする故に、二人の契りも亦今宵に絶たねばならぬ。と喞うなのです。男は聞いて、身も魂も一時に崩るゝ思ひ、假令姿は幻の果敢ない影であるにもせよ。日頃の情の數々を思ひ廻らすと、どうして此儘に別れられやう。いとせめて今一年なりと、狂へる人のやうに興奮して泣き叫ぶのでありました。けれど天地の間に自ら定められた生死の理は、如何ともせんやうがありません。惜しむ時間は猶早く經つて、閨の隙間のほの白う別離の期は愈々迫りました。女今はとて泣く〱。

戀の畫（2）單



俤のかはらぬ月に思ひ出でよ契りは雲の他所になるとも

と立上る。男は堪らず。

待ちいづる月の夜な／＼そのまゝに契り絶えずなわが後の世も

とばかり、颯と翻る袂に打震ふ手をかけました。けれど其手はむなしく大氣を掴んで、さらばの聲はもう空虚からでした。

後、男はそれが基で重い病に囚はれましたが、態と藥餌を斥けて、幾程も無く愛人の靈を追ひました。暗憺たる冥路の裡、二人の性は果して再び相會ふを得たでせうか。

或大名の使者、或家へ使ひに參りましたが、折柄丁度晝飯時分のことゝて膳部を出されました、使者は箸を取つて飯を食べて居りましたが、如何うかしたはずみに頬へ飯粒のついたのを知らずに澄して食事をして居りますのを給仕の者が見て可笑しさを堪へつゝ、朋輩に其事を知らせましたので、皆々面白半分に障子の隙間などから覗いて笑を忍ぶけはひに、使者は初めてそれと心附きましたけれども今更取るのも間が惡いと思ひ一寄の後、給仕に料紙を乞ひ何かさら／＼と書き認め、頬の飯粒にて封をして從僕に渡した。

女の様々



はなれた態度

並木英子

○

黒く細い線が、黄ばんだ皮膚の上を縦から横に溝を掘つたやう。腐りかけた落葉にも似た、見苦い手となりました。右の無名指には、胝が二つもされて、眞綿などにふれるとバサ〳〵と鳴ります。赤い肉、柘榴のやうなとは少し大袈裟過ぎるけれど、水使ふ度に骨まで沁みる。臺所の仕事も、樂なものではありません。先日、三田行の電車の中に、不意と家政の安川先生にお目に懸つたら、先生は挨拶もそこ〳〵、私の手をぎゆつと握りしめて、「ヲヲ〳〵これでこそ私のお教へ申した効があります、奥さんが綺麗な弱々した手なぞして居るのは耻ですよ」と言はれたので、私は默つて、手首ばかりなら四十位にも見えさうな艶のない指先と、優しい先生の目元とを見比べて、仕方なしに微笑みました。

賞められたうれしさ、それは寂味の多い滿足でしたけれど、其後私は、ザラザラした手のどこかに、ひそんだほこりがあるやうに思はれて、袂や風呂敷でかくして歩いたことなぞありません。

「ヤー嫌やになつちまふ、世帯持になると、そんな汚なくなるんでせうか」

遠慮の無い波津子さんは、會ふ度に、かう云つてはキャッ〳〵笑ひますが、まさか手や髮の美を保護する爲めに、戸棚の隅に塵を浮かせたり、竈の中を煤煙や灰で埋める事もできぬから、かうして臺所や掃除にばかり屈託する世話女房になつて仕舞ひました。理想と實際の生活がどうの、新家庭の感想はいかがのと、難しい問を出して、太い腕の女を困らして下さいますな。

毎日、三時頃になると、白い前掛、それも時々は茶や鼠色の斑點あるのを羽織の上からしめつけて、小風呂敷片手に、大豆三合、玉葱二錢などと、買ひ歩く姿を、何家の女中さんかと、他の人は興ない瞳子で眺めることでせう。自分でも、あまり感心した容子でないと知つては居ますが、これでも、三年間習つた家政學を應用するつもりで、買物は一切現金の主義を實行して居るので、長火鉢の前に端然と坐つたまま、肉屋さんロース半斤、八百屋さん蕪と里芋を大急ぎで、などと、顋で命令なさる奥樣方と同視にされちや……なんて、貧乏學士の妻が負け惜しみの大氣焰、お笑ひ下さいまし。

○

無學な卑しい料理番、巴里の修道院の何とかだつたといふブウザー、ローレンスは、敬虔の念に富んだ、美しい信仰の人でした。自分の心靈上の實驗を語つて「私には、忙しい料理場も、森嚴な神壇も區別がない、地上に落ちた屑一つ拾ふ事も、私に取つては、牧師が多くの人に向つて說敎するのと同じ聖なる仕事であ

る」と云つて居ります。其の日常の行爲には、光がありました。其の凡々たる務は、宗教のレンズを通して麗しく色彩られて居たのです。此の世の職業には貴賤は無い。大臣が國家の爲に盡すのも、下女が主家の米を炊ぐのも、神の御心を奉じて爲す場合には同じ價値であると信じて、心から働いたローレンスの生涯を、私は貴く思ひました。

狹い臺所を天地とし、朝から晩まで齷齪して居る今の生活に、何の意義があらう、價値があらう、生涯この手綱から逃れられぬ女の運命かと、煙に咽びながら、皿洗ひながら、修練されない若い私の感情は度々迷ひます。

聖なる晩餐式に列して、靜かに跪く時も、騷々しき房厨に立つて、牛酪や乾酪の濃厚な、香に包まれて居る時も、私の心持は何の相違もないと、卑い務をも清麗い感謝の滴で洗つて天にささげた異國の勞働者の前に、私は汚點多い心の暗を恥ぢずに居られません。

○

「野上先生お早やう。」「伊奈先生お早やう」

小さい唇からこぼれる可愛い聲が、板塀一つ越えて五月蠅ほど聞える。

「おはやう」の「は」を長く引くのが、少々耳障りで、七十何人かの幼稚生の口吻が、一つ型にはまつてゐるらしい。五つ六つの兒童の言葉、角張つて攻めるの

ではないか、教師に向つて「御早やう」とは。ちと粗雜過ぎはしないでせうか。亂暴な中學生が登校の中途、朋輩同志で交はすに、適當した云ひ方で、赤いリボンをつけたお孃さん 、マント著て女中さんの迎へを受くる坊ちやん方の言葉には相應はぬでせう。矢張「先生お早やう御座います」と、丁寧に言つた方が、奥床しいひびきを他の人にも與へるやうです。

「小使御湯頂だい。」「小使水おくれ」などと吐鳴るのも、また下品に聞えます。「小使」などと呼び捨にする學校に居なかつた私には、始の頃は不思議に思つた位でした。使ふ爲めに雇つた雇人なれば、「小使」で不足もあるまいけれど、「さん」位の敬語を用ゐた方がよくないでせうか。

○

女學校の一年時代、少年僧正とかいふ譯文の小説を讀んだことがあります。今はその書さへ忘れて仕舞つたが、幼い記憶の底に刻まれて、今もその時の感じを明瞭と繰り返すことが出來ます。生れ落ちるとすぐ不遇な境涯に弄ばれて、兩親の情、他人の涙の一滴にさへ沐した事なく、賑やかな人通りの忙しい街頭に立つて、掻拂ひや掏摸を仕事にして飢ゑを充してゐる浮浪兒、今ならば早速感化院にでも打込まるべき不良少年が、或る時教會の石段に立つて、はからずも僧正の優しい慈悲あふるる眼の光に接した。

少年はその優しい眼の印象を忘れられないで、歸つてから、同じ仲間の母親に

向つて、こんな意味の言葉をもらした。

「俺がお母も、きつとあんな優しい目をしてたと思ふよ。俺らア、おッ母なんちうものは知らねいけんど」

ふくよかな柔かい感情は磨滅して、荒み狂つた少年の胸にも、母親は、「自分の母親は優しい愛深い人であつたらうよ」と思はせます。人並の清いなつかしみが、少年のただれた想ひの一端に漲つたのでせう。私は愛の缺乏から曲つた性情に生くる書物の上の可憐な不良兒の爲めに、惜しまず泣きました。罪惡の孵卵所とも目されて居る淺草邊には、此の種の少年が多いと聞きます。不足ない愛情に育てられてゐる方々は幸福です。

「故郷と、たづねてゆかん方やいづこ、亡き御父よ、亡き御母よ……」

卒業文學會の夜、はなやかな電燈の下、あの廣い講壇に立つて、兩親の亡い柳原さんが高く低く朗吟つた時、細い透つた聲の悲哀に、私は眼を閉ぢました。此の方は在學中、先生にも友にも、一番多く氣をもませた人で、一時は自暴自棄になつて校則を蹂躙し、隨分思ひ切つた行爲もなすつた。歸り行く家も故郷もなく强ひて人の情から離れ、自分一人、拗ねた世界に、師をも友をも呪つたのでしたけれども矢張弱い女です、其の反抗に疲れた後は、口には强い大い事をいつても寂しいつて孤獨の境に泣くのが常でした。卒業から一年足らずの今日、此の人はもう立派な奥様になつて。母亡き身の、母と呼ぶ人與へられしうれしさ、お察し



下され度し」と、近頃の手紙に書いてありました。私は友の圓滿な生活を祈つてゐます。

○

楓の葉を三つ五つ、藍に浮かせた手拭二すぢ、氷のやうな水にひたして、私は今熱氣に燃ゆる良人の頭を冷やして居ります。數分經つとすぐ生温くなるのを、ゆるく絞つて、また赤らんだ額にあてた。空氣ランプの笠から流れる青い光が、病める人の半面に凄い影を落してゐる。枕がけと、黒い天鵞絨の襟の間から、苦しさうな寢息がもれる。

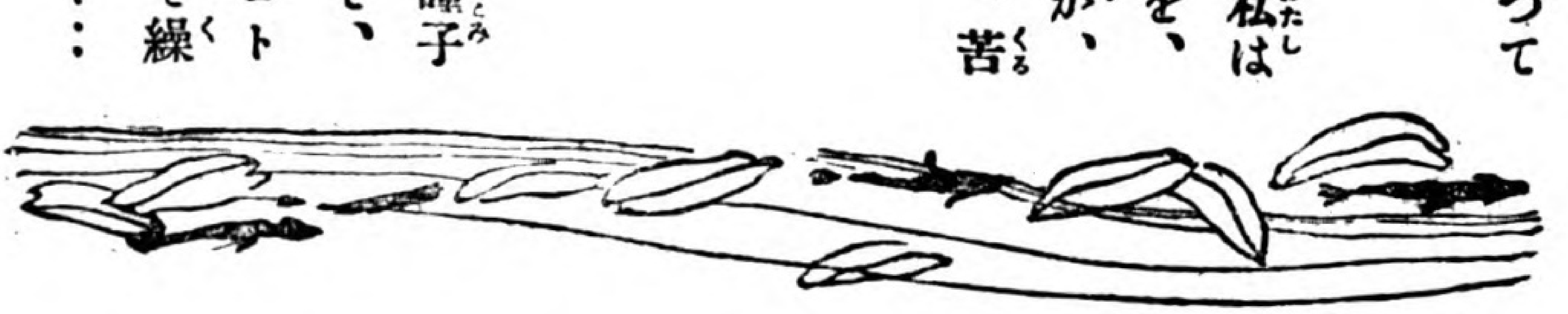
「痛ッ……」

「どこで御座います?」

「左の耳が……」

「中耳炎ぢやありませんかしら?」

と云ひかけて、ランプの心を明くする。床の間の水仙が動くと見えたのは、瞳子が重いからでした。十一時を打つて、山手の夜は、靜まつた。とガラ〱つて、空車が、暗を縫つて通る、水を取り換へやうと戸を開けて、男下駄引かけてコトコトと氷つた道を井戸に行く。月のない星の空、人も世も眠つた中に、握つて繰る車井戸の綱が、醒めた響を水底に傳へる。三十三、厄年……、もしか……?恐ろしい曇が、後から肩をつかんで、ニッと笑つた。



破鏡の歎

みどり



在外の姉よりの手紙――

なつかしき母國を去りて早や三年。雲山萬里相隔てたる異郷の空、誰一人力とたのむ者もなく、今春以來生別死別の悲しみに逢ひては、いよ〳〵寂しさの身にしみ〴〵と袖に涙のかはく間もなき折柄、御心こめられての御文。かくてこそ肉身の情はあれと、一句々々讀み行くごとに、胸せまりて溢るゝ涙に身の漂ふばかりひた泣きに泣き申候。切なき妾の心中、察しての優さしき御言葉のかず〳〵、誠に嬉敷、御禮はとても拙き筆にはつくしがたく候。元よりかくなり行も皆神樣の御指圖と、覺悟は致し居り候へ共、時折は思ひ出さるゝ我身の越し方、舵を折られし捨て小舟の、何をたよりに浮世の荒浪とたゝかひ申すべき。さらでだに弱きは女の身、まして人並ならぬ虚弱の生れ、あれや是れやを考へ候時は、心細さの限りなく、之も皆己が心の淺果なる考へより良人や可愛き子供を捨てし罪の報ひとひたすらに身を責め居候へ共、しかすがに諦めかぬる女の悲しさつひ物にふれ折につけては、我身の不幸をかこち居候。私今後の身の處置につき何時も御心にかけさせられ、こま〳〵との御心添へ、今更ならぬ御深切しみ〴〵嬉敷存候、御許樣仰の通り、何か獨立の職業に從事致し度、あれこれ考へ居候へ共、何分箇樣の土地とて、思はしき事もなく、只今雇はれ居候當店も、將來の見込だに立たばよろしく候へ共、當地も打ち續く不景氣に、商業思はしからず、主人も

更に他に一大改革致すやも知れず。私も今の内に何とか方法考へ置ずばと、思案致居候。私知人に、海軍士官の未亡人にて、看護婦致し居らるゝ方有之、大に私の不幸に同情寄せられ、いつそ看護婦となりて献身的世の爲につくしては、如何とすすめられ候へ共、御承知の通りか弱き身にては、よく任務に堪へ忍ばるべきや否やと懸念致し居候。さらば御言葉に甘へ、御地に参り度は山々に候へ共、今更私もかく落ぶれたる姿、知人にさらすも面目なく、女ながらも箇様に遠くふみ出候上からは、何か一と旗上たる上ならでは、再び故郷の土をふむまじと固く決心致し居候。仰の通り世の誘惑もとより有之べくと、深く覚悟致し居候。私の心は石に御座候。いかでおめ〳〵彼等の手に乗るべくも候はず、此段御安心下され度



候。（後略）

私は繰り返し讀んで泣いた。

あゝ女の身として此上もなき侮辱。あらぬ罪名の下をに良人より疑がはれては、いかで妻の身として默つて居られよう。まして姉上の氣質として、ぢつとしては居られぬ。一言二言の爭ひより、風波は常に家庭に堪へぬ。姉上は遂にそが疑問の中心となりし乳兒を携へて家を出られた。あゝ波瀾多き姉樣の身の上。

出立

愈々明日は姉樣が出立なさるといふので、女子師範の寄宿舍へ私に逢にゐらつしたのは、春まだ淺きさらぎの、白きものさへちら〳〵降り出でし寒い日であつた。姉上は其頃やつと流行しかけた吾妻コートに、藤色縮緬のお高祖頭巾めして、大きい毛のショールをすつぽりと覆つてゐらしつた。私は飛んで面會室に行き、姉樣の御顏を見ると、もう胸が一杯になつて、暫くは續く言葉も出なかつた。

「姉樣、どうしても嫁つておしまひなさるの……」

「えゝ私もね、行きたくはないのだけれど、今更どうすることも出來ないし、思ひ切つて行きますわ。御身は身體を大切にね、しつかり勉强して、一人前になつて下さい。私そればかりが御願ひよ。」

二人の眼からは熱い淚がほろ〳〵溢れた。

未だろく〳〵御顏さへ見覺えぬ幼き時兩親に別れた私は、兄樣を父上、姉樣を母上と思つて、互に助け合ひ、どんな事にも相談したものを。愈々今日限り姉樣が長崎へ嫁つておしまひなされば、私は此先どうしよう。兄樣も優さしい方だけれど、男だもの、細かしい相談は出來ないし、私もいつそ從いて行きたい、姉樣と別れるのは嫌々と駄々をこねて見たが、今更仕方がない。

「そんな心細いこと言はないで、しつかり勉强して下さいよ。何も外國へ行くのではあるまいし、逢たい時には何時でも來られる。私だつてみどりさんの樣に身體さへ達者ならば、十分に勉强も出來るのだけ

れど、ほんとに私はあなたが羨しい。」却つて姉様からさんざ言はれたけれど、悲しくて其夜一夜はまんじりともしなかつた。翌日も姉様の出立を見送ることも出來ぬと思へば、なほ悲しくて、授業もろく／＼耳にはいらぬ。放課後は机に突伏したまゝ思ひはそれからそれへと果しがない。元來が勝氣で負け嫌ひの姉様は今度の嫁入も本意ではないけれど、父母なき後少しあつた財産も人手に渡り、兄妹三人落魄した身には、兎角僻み心が出て、皆の人が自分等を馬鹿にする様思はれてならぬ。他の立派なお友達を見ては、



ア、私等にも父上や母様があつたらと、幾度悔し涙を呑み込だか知れぬ。それ故姉様は生れ故郷に居てなまじひ人に彼れ是れ言はれるより、いつそ知らぬ他國で暮した方がよいと、兼々言つてゐらしつた處へ、今度の縁談先は長崎の材木問屋で、數萬の資産ある家の次男、商用で當地へ來たのがふとした縁で兄様と知り合となり、私等兄妹の不幸に同情して、是非姉上をといふのであつた。併し私の家は昔しから商家とは縁遠い方であつたので、財産があるとはいふもの〻、別に深い教育のあるやうでもないし、それに遠方ではあり

兄樣も餘り贊成なさらなかつたにも不係、私などにはろくに相談もなく決めてお仕舞なされた。あゝ姉樣もやはり虚榮の捕虜となつたのであらう。少なからぬ仕度萬端して貰つて、親戚や知己の家へ告別の挨拶に廻つた時は、さすが誰だつて「まあ御立派ですこと、文子さんは御幸福ですねえ」と、姉樣の出世を羨まないものはなかつた。此の時こそ始て姉樣は快心の笑を禁じ得なかつたのでせう。併し私は何となく姉樣の身が案ぜられてならなかつた。姉樣はよく一人で長崎へ行く氣になれたものだ。一寸逢つたばかしでは、何だか言葉もわからぬあんな人達の中へいつて、どうなさるだらう。義兄樣となる人の氣心もよく知れても居ないし、幾ら着物や時計が買つて貰へるからつて、私などとても行かれやしない。姉樣は兄樣や私を捨てしまつてどうしてそんな處へゐらつしやるのだろ。姉樣も不人情者だ？　いや〳〵これも皆父上や母上がないからである。姉樣とて一人でどんなに心細いか知れないけれど、常々言はれた言葉もあり、わさと涙隱して心強く行かれたのであらう。思へばおいとしや。此先私しは何でもしつかり勉強して、姉樣のいはれた言を忘れぬようにしよう。

新家庭

其後姉樣から、新婚の立派な寫眞數枚、親戚の間へ分けて與れとて送つて來た。そして私には兼々欲しいと思つて居た女持の可愛い時計や、反物や、半衿など色々送つて下すつた。其外に小遣ひにと、五圓の爲替劵が封入されてあつた。實際私はそれ迄兄樣の手許が豐かでないので、五圓とまとまつたお金を貰つた事はない。さすがに私も此時は嬉しくて、何に此お金を遣はふか知ら。あれも欲しいし、これも欲しいと迷つた程であつた。早速姉上の寫眞と時計を机上に飾つて、ひそかに友人間に誇とした。

其後も度々着物だの、小使ひだの送つて貰つたのみならず、兄樣にも是非長崎へ來て、商業に從事しては如何か、薄給の官吏など止めたがよいと、度々言つて

來たので、到頭兄樣も其頃勤めて被在た役所を辭して遂に彼の地へいつて仕舞はれた。私も共に行きたいのだけれど、官費の學校とて中途で止める譯にも行かず其内私は卒業して或る小學校へ奉職することゝなつた。同時に姉上には女の子が生れた。あの弱い姉樣に如何して子供が生れたらう。私は始めての姪に逢ひたくてならぬ。飛んでも行きたいのを漸く我慢して、暑中休み早々いつて見た。



一年餘逢はなかつた姉樣は、どんなに御變りなされたであらう。赤ちやんはどんなに可愛い子供か知ら。きつと姉樣に似て美しい子に違ひない。早く抱いてやり度いものなどゝ想像して見た。果して姉樣は昔しの束髪姿に引き替へ、滴る樣な丸髷に緋の手柄、大きな中形の浴衣に華美な帶締めた姿は、前より幾層倍も美しかつた。義兄樣といふのは先に一寸逢つたばかりだつたが、商家で育つた人だけに、何時もニコ〳〵と愛嬌のいゝ氣のよささうな人であ

る。今は別家して材木屋など眞平とて、道樂で覺えた寫眞屋さん。別に技術がある譯でもないのに、大當に繁昌した者だから、大の得意で贅澤の仕放題である。本店の方は當主が未だ小さいので、姉婿が總ての監督をして手廣く商業して居る樣である。私の兄樣は其方に被在のだが生憎此時臺灣の方へ商用で旅行中であつた。

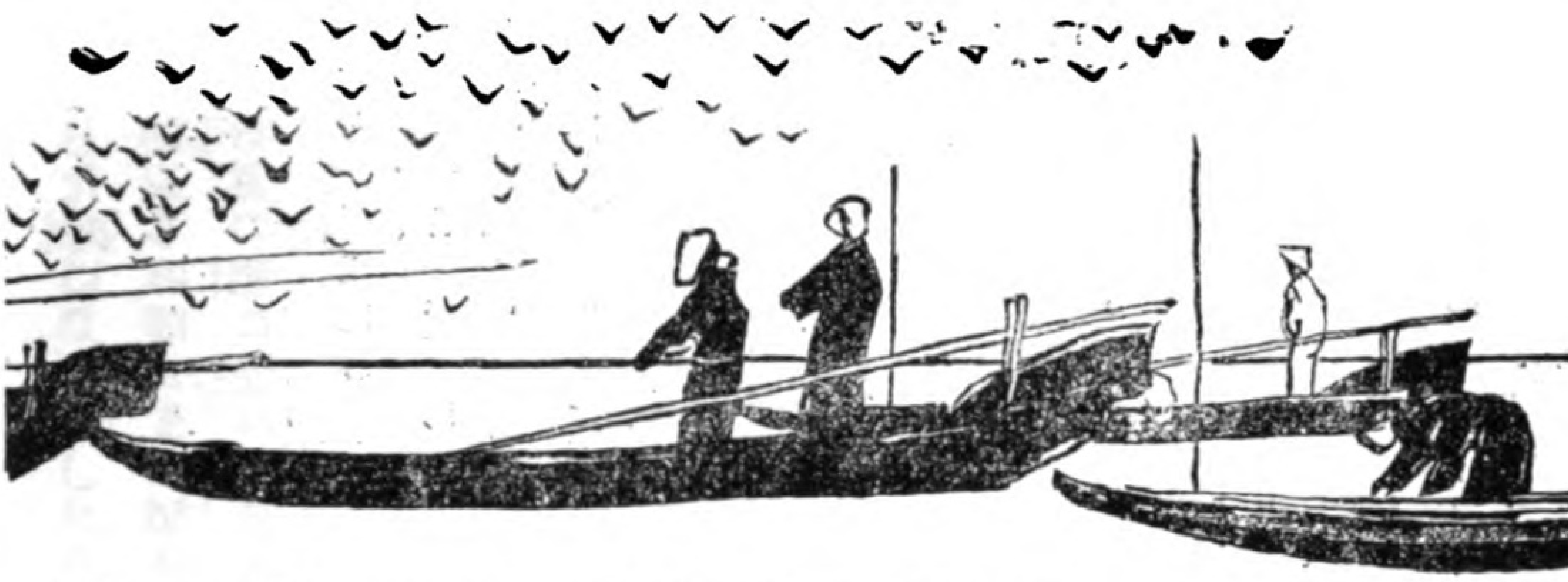
赤ちやんは君子といつて可愛らしい子だが、姉上の乳不足で、乳母にまかしてある。自然愛情が薄い樣だ。むしろ義兄樣の方が君坊々々と大騷ぎ、姉上はひまがあると、私は勉強が出來なかつたからと、徒然草だの枕草紙だの、好んで讀むで被在るけれど、義兄樣はそんな事はきらい。別に咎めもなさらぬけれど、長唄、義太夫そんな事が好きだ。でよく近所の人を集めて義太夫會をやつたり、幻燈會をやつたり、隨分遊び好で無駄遣ひをする人である。今迄質素につゝましく生活して來た私には、日々浪費される金錢が勿體なくて、時々姉樣にこんな風では行末困ることがないともいへないから、少しは注意したらいゝでしようと言つて見たが、姉樣は只笑つて被在るばかり。

破鏡の歎

樂しかりし一と月も、夢の間に過ぎて、私は又もとの寂しい一人ぽつちとなつた。軒端にすだく蟲の音しげく、秋はます〳〵深くなるにつけ、夜靜かに机の前に坐ると、何時も姉上の事が思ひ出さるゝ。皆の人は文子さんはお仕合だといふけれど、私の眼にはどうもさうは思はれぬ。姉樣は心から義兄樣を愛して被在かどうだか、それが第一疑問だ。それに姉上と義兄樣は思想が合はぬ。何れか一方へ同化さるればよいのだが平常は溫順しい義兄樣も、いざとなると中々剛情、姉上も亦負けぬ氣の一歩も讓らぬ。あゝいふ風では自然面白くない事も起るであらう。どうか行末幸福であればよいが、萬一事變のあつた時は何となるであらう。あゝ私が幾ら心配したとて、なる樣にしかならないのだもの。兄樣も近所に被在るのだから、案ずる事もあるまい。それよりは自分の事だ。別れる前夜姉樣と

語り明した時に、「女といふものはつまらないものよ、みどりさんも私の様に物質の慾に憧れては駄目ですわ、財産など幾らあつたとて何になる、女はどうしても良人になる人が肝心、私はこれでおしまひだけれど、みどりさんだけは、どうぞ立派な人を良人に持たせたい」としみ〲いはれた其言葉、私は今なほ忘れることは出來ぬ。春風秋雨早や一と昔。趣味の衝突は如何しても免れる事は出來ぬ。二人の間には何時とはなしに隔りが出來た。其れに此春近くなつた子供を持つ前、姉樣は何となく身體が優ぐれぬので、君子を連れて一ヶ月ばかり湯治に出掛た其時である、今日の悲しい運命の動機をつくつたのは。隣室に居た文學士とやらと親しくした爲、義兄樣からあらぬ疑ひ受けて、二人の中は益々冷やかになつた。出産して後も罪なき子迄疑はるゝ悲しさ。姉上は今日迄の我慢がこらへ切れなくなつたのであらう、自分の潔白を示して良人の疑ひ解かんともせず、遂に其の子を抱いて兄樣の許へ。

兄樣も一時商業に從事されたものゝ元よりなれぬ業とて失敗のみ多く、餅屋は餅屋がよいと、又筆を力の官吏生活。早や三人の子供さへある。さすが兄樣も肉身の事とて、姉上に同情されぬではないが、何故自分の潔白を告げぬ、女の身としてさる疑受けて家を出るといふ法はない、可愛い子供さへあるものを、一先づ罪を謝して歸るがよいと、懇々言はれた。私も復歸をすゝめたけれど、姉上は頑としてきかぬ。あゝ私の悲しい想像は遂に眞實となつた。今姉上は遠い異鄕の空にさすらひの身。御氣の毒なは義兄樣。思想の合はぬ妻を持て嘸悔んで居られるであらう。別て不愍なは君子である。母なき女の子ほどみじめなものはあるまい明け暮母戀しく過して居るであらう。あゝ結婚について配偶の選擇これほど大切なことはあるまい。一片の事情や、容貌の美、財産の有無についての結合は、兎角不幸の結果が多いもの。私は幸に姉上が案じて下された爲であらう、巨萬の富こそなけれ、德望高き良人を持ち、可愛い四人の子供からは、母樣々々と慕はれて居る。只朝夕心にかゝるは姉樣の身の上。あゝ今頃如何じて被在やるだらう。次の音信を待としやう。

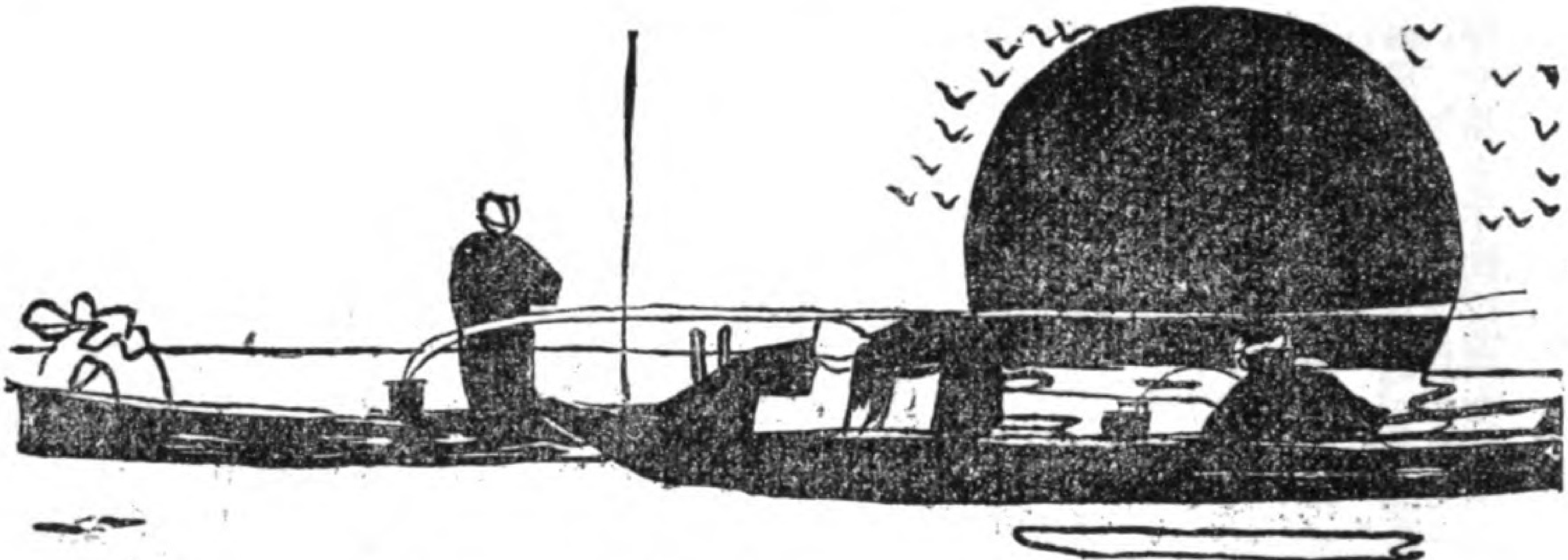


潮干狩と貝類



普通の貝類のうちで一番水の淺い所に住むのは蜆と蜊である。此の二種類は全く潮の干く淺い所にも棲息するから、滿潮の時も手で採ることが出來る。其中蜆は最も淺い所に居る。海底の砂の多い所に好い種類が出來るので其底質に因つて貝の色は赤褐もあり、黒もあり、飴色のもある。肉も矢張土質に因つて異ふが、白に鼠を帶びた色が一番多い。蜆は江州瀨多産のものが最も風味美く、東京附近では利根川筋のものが好いとしてある。

蜊は蜆よりも稍々沖の方に棲む。東京灣には可なり多い。又風味も美い。是れも海底の土質に因つて貝や肉の色が異ふ。又た貝にある斑紋によつて、種類が違ふ。それから又沖に棲むのはバカである。是れも土質により、色も斑紋も異ふ。バカの中に碁石バカと云ふ一種類がある。其殻で碁石を製るから此稱がある。此種類は東京灣には甚だ少ない。房總の外洋に多いやうである。バカは最も砂の多い深い所に居るので、九十九里からアノ外洋沿岸が名所である。バカの居る所にはサルボーが屹度居る。是は關西では藻貝と稱ふ。主にアシモと稱ふ海藻に附着して生長するからである。それから又沖の方に赤貝が居る。是は赤貝、血貝の二種と、其他に名の無い一種と都合三種ある。此は餘程上品で貴紳の食膳に上る。例のハシラの如きなかなか珍味としてある。ハシラは貝の双方を結附けるもので、靭帶と共に開閉を司るものである。長い舌のやうなものは彼は足である。貝類には皆足があつて運動し、足の根に肝臟があり、其外側に卵巣があつて生殖を司るのである。



凡て貝類は自分から食餌を漁るのではなくして、潮水が伴ふて來る極く微細な餌料を攝取するに過ぎない。故に餌料の多い水中に棲むものは肥えて、少ない處の者は痩せて居る。又年所を經た者は貝が厚く、素人でも注意して視ると年輪が能く分かる。大抵六七月頃に産卵するが、卵を有つやうになると味が惡くなり、生んでしまつた後は肉が痩せて味も無論惡い。恰度今が食べ頃である。

蛤も沖の方に棲む。伊勢の桑名の燒蛤と云へば何人も知つて居るが、昔桑名侯は幕府に獻上する爲に海中に杭を樹て、區劃を設けて卵を放ち、種々養殖の方法を講じたので、桑名のは粒も大きく揃つて且澤山出來る。すべて蛤に限らず何の貝でも相當の方法をさへ設ければいくらでも繁殖さする事の出來るもので、今では日本國中隨分貝類の繁殖方法を行つて居る所がある。

今行はれつゝある方法は、先づ淺い所の貝の種を採つて、稍深い所へ蒔付ける。一年位で取り上げて更に深い所へ數を少くして放つ。段々と數を少くして深い所へ放ち攪廻はして上のを下へやり、下のを上へやる。是れは餌料の行渡るやうにするのである。大概四年位で普通の大きさになるが、六七年位か賣買の手頃である。三年位から子を生み始める。

貝類の養成繁殖は、東京灣中千葉縣に屬する方でもやつて居るが、岡山の兒玉灣では灰貝、藻貝の外、有明灣から揚卷貝を移して養成して居る。島根縣の中海では藻貝を盛んに養つて居ます。有明灣でもなか〳〵此事業が盛んである。支那でも貝類を非常に養成し揚卷を放つてある所を蟶田と稱し、藻貝を蚶田と稱して居る。



榮華の夢の跡

御殿女中の實歷談



私は或る中藩の家老職の二女と生れましたが、今とは大變な相異で世は誠にゆるやかな大樣なもので御座いましだ。若し私が世嗣の男子であつたならば、生れ立ての赤ん坊でも千石の知行頂戴が出來て、江戸詰ならばお邸内のお長屋を戴いてそこに住つて居られるので御座いました。丁度十一の春からお小姓で御殿奉公に上りましたが、殿樣は高十五萬石の御格式で格別に裕福なお邸でしたが、其時分の奥向の役柄を記憶の儘に申て見ますれば老女即ち御年寄(二人)若年寄(又は中老)二人お側(五人)お小姓(三人)表使、お使番、御祐筆、呉服の間、と申ので先づこゝ迄が御目見えが出來ますが、以下お三の間御仲間、お末とかうなつてまゐるので御座います。

◎長局生活

お年寄となりますと奥向の總取締で隨分度胸のいゝ薙刀も出來れば、なか〳〵腕の立つ方が多かつた樣で御座います、若い時から勤め上て一生奉公で仕上て來た方なんぞは、奥方樣でも構はずにずん〳〵役向を果たして、表の御役人などを手古摺らせる程の見識を持つた方が多かつた樣で御座います。お中老は其下で、お側などから昇進して行くので、先づお年寄が五十代、

お中老が三十四五から四十代の人で、何れもお襯に前帶、地赤に白を重ねて、紅絹裏の裾を曳いたところは誠に上品なもので御座いました。それからお小姓は十歳位から上るので稚兒髷に振袖で勤めますが、十六七にもなると御守殿風の島田髷に結ひます。椎茸たぼで白のくず引をかけまして袖は矢張り振袖ですが、お側となると、元服をして眉を剃つて鐵漿を付けて、一尺二寸位の詰袖で。髪は片外しなどに結んだもので御座います。元服後は袖の長いのは下品だと申て、十人が十人一尺二寸より長いのは著ない様であつたと思ひます。



其次の表使と申のはお表の役人と應接をする役目ですから年を取つた男勝りの氣分の方でなければ勤まりません、お使番はお奧以外に御親類などへ對して御使者をするので、中年頃の人がつとめます。又御祐筆と申すのは只今で申せば書記の役で、御親類御一家への書狀の代筆を致しますから、手を達者に書く人が上るので御座います。

奥服の間は奥向一方の衣服係りと申たらよろしう御座います。つまり四五人の人でもつて裁縫萬端を掌つて居るので御座います。其他お三の間お仲居などもお掃除をしたりいろ〳〵御殿の御用を致します。お末は奥方のお乘物を擔ぐ役目がありますから、御召抱への時に丈の高い屈强な者でなければいけなかつたので御座いました。此樣な風でお小姓からお側、お中老、お年寄と一生奉公の積りで御奉公致しますれば、御主人の方では重寶に思召て老年になつて御役御免となつても、御長屋を下された上に御扶持が下るのですから、餘命を安樂に過す事が出來ます故、全く世の中の波風も知らず、苦勞の味も嘗めずに暮して行けたので御座います。

大名の奥に勤める女中の種類はざつと此位で、御邸によつて人數に多少は御在いますが、加賀樣の御奥なんぞは大したもので御座いました、私が十三の年に或親類筋の者で御奥勤めを致して居る者の部屋へ泊りにまゐりましたが、餘りにお廣いので途を間違へて、子供心にも困つたものだと思つたことを今に覺えて居ります。

何れのお邸でも大槪は此通りでしやうが、長局に幾部屋も〳〵とあつて、お年寄を初め、女中は役柄に依つて幾つかの部屋を戴いて居りまして、其部屋の入口には、例へば中老尾上と云つたやうに役柄と名前を記した札が打つてあります。是等の人は自分の召使を二人なり三人なり使つて、食事萬端の世話をさせたもので御座います。これを「またもの」と申ました、彼の芝居でする鏡山のお初は、中老尾上の召使で「またもの」であつたので御座います。凡て奥女中の出仕には、出番と非番が御座いますので、お勤めが終つて部屋に下る刻限には、旦那樣のお迎ひといつて、此召使が送り迎ひを致したもので、夜分には定紋の附いた箱提灯を持つて先に立ち、お廊下を草履でバタリ〳〵と歩いたもので御座います。

加賀樣の御奥は、御廊下などもなか〳〵長いので、狸などが出てはいたづらをすると申すので、度胸の据

つた女でなくては、御奉公に上れないと申て居りました、今から考へると隨分馬鹿氣たもので御座います。私共が御奉公に上つた時にも、二人女中を連れてまゐりましたが、自分はじめ召使の食器萬端、簞笥・長持・鏡臺、種々雜多な小道具迄持込みますので、下方の嫁入よりもなか〳〵費用がかゝつたもので御座いました。

　商人はお邸に依つて、出入りが極まつて居りますから、呉服小間物なども、いつでも用達が出來ますし、何の不自由もなく非番の時には、老女方でも部屋著の儘で、圍碁や



香花を樂んだり、女中を相手に細工物などをするとか、双六などを出して遊ぶとか、物の値段などは、全く識らずに、勿體ない程の暮しを致したので御座います。

◎御殿女中の服裝

　中老以上になりますと、平常でもお裲ですから、地赤の紋縮緬、或は緋綸子に紅絹裏の通し、裾は一寸五分位ふかせたのに白無垢を重ね、前帶で御前をつとめます。そして午後二時、即ち昔の八つ過から部屋に下れば、縞物の八丈などを着て居てもお構ひなしの掟で御座います。お小姓で

も矢張り白無垢の下著に紅絹裏の模樣物の振袖、お側の衆でも下著は白無垢に裾模樣、腰模樣、總模樣何れにしても、紅絹裏のもので、帶は六寸五分位の幅のを立矢の字に結んで居りました。御使番や御祐筆は、毎日御目見えする事もありませんけれども、服裝などはやはり大同小異で御座いました。

總じて只今は御臺樣、御簾中樣、奥方樣方でも萬事がお輕く、お成り遊ばしたが、昔はなか〳〵掟が御座いまして、重々しい御取扱ひを申上たもので御座います。そして、御勤め申上る女中達の著物でも、大した、立派なもので御座います、けれ共これはお上からの拜領物が多いので、呉服の間で調達申上げた奥方の御召物でも、一通りお召し遊ばしたら、翌年またそれを召すなんて事はありませんで、皆お下げになるので御座いますから、頂戴物を仕立直して間に合ふ位、永年御奉公致した人は、衣類などは澤山にあつたもので御座います。それ故嫁に行くとか何とかで下る時なんぞは、下方では思ひも寄らぬ頂戴物のかず〳〵で、私共の樣な不束な者が、あんな結構なことの出來たのは全く御家門の御かげで、太平な御代とは申しながら、全く罰が當つた話しで御座いました。

◎愼ましいお側の御奉公

お側の役目は、只今で申す御小間使ひ、御相手と申役柄なので、朝の五つ只今の八時頃迄には身ごしらへをして、奥方樣の御目覺めを待ちます。昔は御寢まりの襖一重隔てたところに、不寢番がお護りを申上て居たので御座いますが、御目覺めになると、御寢召を一寸御替へ遊ばして、御化粧の間に御出遊ばします。御み嗽口から、御顏洗ひ、それからお髮を上げます。昔は、髮結がお邸へ出入は叶はなかつたのですから、お髮はお側の者が代る〴〵に致したので御座います。お鐵漿を召して御化粧を遊ばして、今度は本當に御召替へになりますが、人形の樣にきちんと御坐り遊ばして御出になるところを、側からいろ〳〵と仕てお上げ申したので御座います。お風呂などでも、下から火を

燃して湯を沸かせるので無く、手桶に湯を入れて風呂に入れて、後から〳〵冷めぬ樣に湯を加へたもので御座います。これは火の用心からかういふ掟になつて居たので御座います。お居間のお掃除は、御化粧の間に御出遊ばす內にしてしまひますが、緋綸子なんぞの立派な御夜具に、眞綿の入つた溫かな御かいまき、香をたき込んだ御召物の薫りは、今でも思ひ出されるので御座います。御食事などでも、御料理番が拵へたのを、御賄掛りの役人がお毒味、お年寄がお毒味を申上てから、初



めて御前へ差上るので、お上の御料理はいつも三人前拵へたものでした、いろ〳〵な品數ですから、一寸お箸が付く丈でもう下へおさげ遊ばすので御座います。そして其都度都度秤で召上りの量を計つたので御座います。殊にお三日などの儀式立つた時、御二前樣御揃ひの時などは、氣の張つたもので、平常から摺り足で疊の緣などは踏みませんし、物は目八分に捧げて步きますし、小笠原流の御行儀正しく、少しも亂れた事はなかつたので御座いました。

思ひ出しますのは、私の勤めたお邸でお妾を御抱へ

遊ばす時の試驗で御座いますが、先づ髮をほどいて洗はせて、頭に傷の有る無しを調べ、今度は御風呂に老女が取合せの上で入れて、身體に傷のあるなしを嚴重に調べます。そして御目通りの上、御意に協なつてもすぐ御側勤めは出來ません。身體の汚れを見ると申して一二ヶ月は其儘お差置になり、いよ〳〵よろしいとなつて御つとめ申上るので御座います。

御子樣をお持申してもやつぱり妾は妾で、萬一御家督の若殿樣が、御跡目御相續にでもなれば、お腹といふので、別に御殿を戴いて何院樣と申される樣になつて初めて氣樂になれるので御座いますが、妾奉公なんぞは決して上るものぢやないと申して居たのを、小供心にも覺えて居りました。

◎追懷の多き維新

私はさした越度もなく廿一歳の春迄お奥のお側を勤めまして、其頃羽振のよろしかつた旗本某と申しまして當時本所に邸が御座いましたが、そこへ嫁いだので御座いました。大名の家老などは石高が多くても陪臣ですけれ共、旗本は小身でも公方樣御直參と申すのでなか〳〵威張つたもので御座います。其家には兩親と妹が御座いましたが、兩親は早くから隱居で、身分の氣樂さに加へて陽氣な人でしたから、謠をやる、邸に能舞臺を作つて能狂言もする、時には淸元の師匠などを邸へ召して、召使ひ共に稽古をさせて見て樂しむといつた有樣、妹はなか〳〵しつかりした娘でしたが、これは和宮樣へ御奉公に上つた程の發明な娘で御座いました。

主人も名前を申せば少しは人にも知られた深切な人で御座いましたが、維新の時に實家の父は主人と共に官軍、主人は德川方であつた爲め表向離別を致して實家に戾りましたが、主人は戰爭で討死を致しました。それから明治の世となりまして父は病歿、兄は士族の商業で失敗つゞき、昨日迄御家臣で扶持を頂戴して居たものが、木から落ちた猿同樣、何をする事も出來ぬ上に、豆腐屋を呼び留める事さへ出來ない氣位の高さ

經[illegible]創刊

商業工藝界好指針

第一巻第一號

四月十五日發行



四六倍判二百四十八頁
口繪三色版二色版各一丁
寫眞版光澤紙刷十二頁

正價三十錢

郵稅三錢

『地球』は東洋空前の大計畫を抱いて我が經濟財政の指導者となり我商工業の顧問と爲り殖產致富策研究の論理たり且つ最新智識の府たる可く朝野知名の學者實務家の贊助の下に四月十五日を期し第一號を創刊す形式に於て我が國に於ける最高の輿論と學說を蒐集すること尙ほ『太陽』の我が出版界に重きをなすが如く議論の方法態度の標準亦た相同じ之を內にしては經濟を說く可き途に導き外に對しては直ちに日本帝國の實業に關する公論の存する所を代表す其品位の貴きに於て其の實質の卓越する事に於て蓋し我が財界唯一の發光體なり

前金

●三冊金八拾五錢(郵稅九錢)

●六冊金壹圓六十九錢(同十八錢)

●十二冊金參圓二十錢(同卅六錢)

●今回新刊の三大雜誌「地球」「淑女畫報」及「演藝俱樂部」の三種若くは一種の御注文にても下の割引券を適用す

●館友は館友規定引の外割引せず

●本券は前金注文の外は効用なし

●申込の節は博文館小賣係宛のこと

●本券は一回一枚限り有効として數枚御送附あるも割引の步合を增すものに無之候

(切取線)

此券封入の方には各雜誌所定の前金より五分引の事

博文館三大創刊雜誌

割引券

有効期限 四十五年五月卅一日

(切取線)

東京本町 博文館

次(その一)

雑誌

●婦人界に推奨す●

畫報

●讀物

△結婚法と外國の實例……伯爵 林董
△侮辱された日本の花嫁……覆面記者
△近世花見衣……室町小督
△奥様繁昌記……佐野湊子
◎小説 愛妻……須藤南翠
◎小説 露芝……關雎
△畫家の見た女の服裝……小山正太郎
△謠曲の踊と唱歌の踊……池村赤子
△宰相の戀物語……西施
△女學生の交際ぶり……河井道子
△京女風俗辯……川村文芽
△花見覺帳……坪谷水哉
△醜婦サンチップの性格……安藤鐵腸
△女大學を現代的に改訂せよ……嶋山春子
△三つの迷ひ……胡蝶
△懸賞生花合せ
△跡見、棚橋、三輪田三女史の功蹟……磯野幸代
△最も有効なる髪の洗ひ方……陽炎
○蝶ものがたり

四六倍判口繪光澤紙寫眞版四十頁石版三色版數頁本文百頁 正價廿五錢 郵税二錢五厘

前金 五錢（郵税十五錢）●三冊七拾錢（郵税七錢五厘）●六冊壹圓卅 ●十二冊貳圓六拾錢（郵税卅錢）

區本町三丁目
東京二四〇番

博文館

女（その三）

演藝界の寫眞を満載せる

創

[illegible]



第一巻第一號

四六倍判口繪光澤紙寫眞版
卅六頁最美麗木版及コロタイプ版數頁本文二百八頁

正價三十錢 郵税三錢

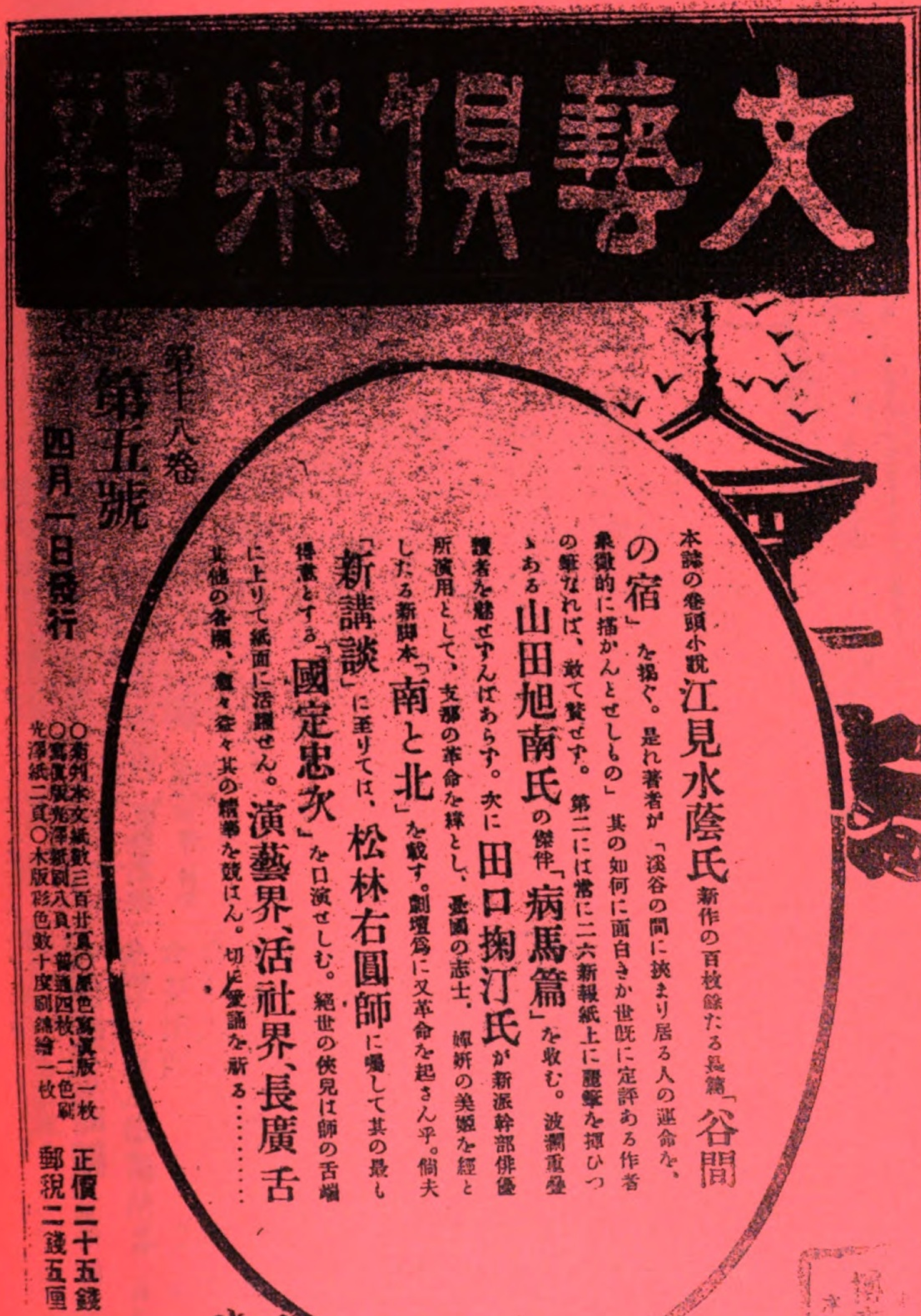
東京市日本橋
振替貯金口座

發行所



刊雜誌
見聞の快を得ん
倶樂部
＊女優養成に就て 生田葵
＊東京劇壇の三傑……永谷幻花
＊劇界漫言……岡鬼太郎
＊帝國劇場劇評……岡田八千代
＊市村座劇評……幸堂得知
＊明治座劇評……山崎紫紅
＊歌舞伎座劇評 伊原青々園
＊本郷座劇評……足立朗々
＊作者としての櫻癡居士……田村成義
＊昔のおでゝこ芝居……関根默庵
＊狂言方……福原雨六
＊開帳場の芝居……山野芋作
＊（演藝）俳神樂……田中煙亭
＊（講談）音羽屋火事 細川風谷
＊（落語）片側町……三遊亭圓喬
＊先月の劇曲脚本
＊能樂正面觀……花帽子
＊雲人道氣焰縱横 市村俱佛
＊長唄通……中内蝶二
＊評判名家選……森曉紅
＊正義會見聞雜記……鈴木春浦
＊十一階演藝……若栄胡蝶園
＊文藝活動寫眞會……瀬戸闇太郎
＊現下の活動寫眞界 吉山旭光
■前金
●參冊金八十五錢（郵税九錢）
●六冊金一圓六拾五錢（同十八錢）
●十二冊金參圓二拾錢（同卅六錢）
四月一日發行
區本町三丁目
東京二四〇番
博文館

女（その五）


文藝倶樂部
第十八巻
第五號
四月一日發行
本誌の卷頭小說江見水蔭氏新作の百枚餘たる長篇「谷間の宿」を揭ぐ。是れ著者が「渓谷の間に挾まり居る人の運命を、象徴的に描かんとせしもの」其の如何に面白きか世既に定評ある作者の筆なれば、敢て贅せず。第二には常に二六新報紙上に健筆を揮ひつゝある山田旭南氏の傑作「病馬篇」を收む。波瀾重疊讀者を魅せずんばあらず。次に田口掬汀氏が新派幹部俳優所演用として、支那の革命を緯とし、愛國の志士、婥妍の美姫を經としたる新脚本「南と北」を載す。劇壇爲に又革命を起さん乎。倘夫「新講談」に至りては、松林右圓師に囑して其の最も得意とする「國定忠次」を口演せしむ。絕世の侠兒は師の舌端に上りて紙面に活躍せん。演藝界、活社界、長廣舌其他の各欄、愈々益々其の精華を競はん。切に愛誦を祈る……
○菊判本文紙數三百廿頁○原色寫眞版一枚
○寫眞版光澤紙刷八頁、普通四枚、二色刷
光澤紙二頁○木版彩色數十度刷口繪一枚
正價二十五錢
郵稅二錢五厘

文藝倶楽部 第十八巻第六號 增刊

講談落語 名妓揃

菊判紙數三百二十頁口繪極彩色
錦繪及艶麗美人寫眞版十數葉挿入

正價金廿五錢 郵稅二錢五厘



古今名妓として世に知られた者は、尠からずあります。就中粹中の粹を拔いて、之を一堂に集めたものは、この『名妓揃』です、時は陽春四月櫻花爛熳の折柄、玆に物言ふ花有つて、大方諸君の傍へ侍べらうとするのであります。風にも散らず、雨にも萎れぬ不斷の花は其數合せて二七十四、とり〴〵美しき色を愛で玉へと申す。

口演者氏名

▽邑井貞吉　▽春風亭柳枝　▽三遊亭圓喬
▽早川貞水　▽神田伯山　▽橘家圓藏
▽猫遊軒伯痴　▽一龍齋貞山　▽柳家小さん
▽錦城齋典山　▽桑々齋桃葉　▽小金井蘆洲
▽三遊亭圓右　▽古今亭今輔

□四月十五日發行□

東京本町 博文館

女(その七)

婦女界

四月號

◎女の力　文學博士 谷本富

▲青年女子に告ぐ　文學博士 …弘之

▲婦人と茶道……

▲日曜日の休養

▲婦人と見物の知識

▲獨身の獨身生活

▲…女史の…

◎女性美　高島平三郎

▲小説 犬の死と失踪　野上臼川

▲お伽噺 相撲屋　岡田八千代

◎育兒實驗談　鳩山春子

▲寄操された女

▲新世帯の記

▲睡眠と夢　大槻學士

▲形紙附錄 オペラバッグの裁ち方

◎卒業生を送る辭

◎妻となる覺悟

◎…問題の人　下田次郎

◎文藝其月々　沼波學士

◎花に(英詩)　若月學士

◎四月の園藝

▲洗濯の出來る帽子

▲手輕に出來る總菜

◎觀櫻會西洋料理

◎日常の作法

◎醫者を迎へるまで　伊藤學士

◎實用向の流行品

◎花吹雪……　鏑木清方

◎不忍池畔…　柳田利雄

一冊十五錢 郵税一錢五厘 六冊九十錢

東京神田 同文館 振替東京一三五五番

女(その八)

で、とても町で買物なんぞも致し得ませんし、昨日の榮華は南柯一炊の夢と化してしまつたので御座いました。

それから明治五年に、二度目の縁に付きましたが、どんな前世の因縁か、又も主人は西南戰爭で討死致しましたので、私はよく〳〵自分の罪業の深さを知りました故、頭を剃つて亡夫の冥福を祈る事に決心致しましたので御座います。

榮枯盛衰は世の習ひとは申しながら、室咲の花の樣に世の波風を知らぬ三百年の太平に馴れた御殿女中が、旗本の家内となり、御維新の大改革



後急轉直下、飛花落葉の淋しい浮世の辛苦を味はつたので御座います。

先日も人の話しに御主人の御縁つゞきの津輕樣の姫樣が赤坂邊で藝者稼業を遊ばして御出になるし、其親御の殿樣は四谷の駄菓子屋の二階に侘住居とうけたまはりましたが世が世なれば多勢の者に侍づかれて、荒い風さへお厭ひ遊ばす方々が、そんな淺間しい御身分にお下り遊ばしたかと思ふと、誠にはや何とも申上樣が御座いません。私などはお聞き申してさへ、ほんとに胸が一杯になつて、涙が出る思ひを致します。



春駒

「一」

小桃

大野原、月に白く、
薄がすむ、春の一夜、
笛の音も、洩れてなつかし、
たれのすさび……？
春の生命、春の運命、
春は花、花は御吉野、
人はそれ二八の少女……
春こそは實に、少女の生命、
歌ばすや、聲ほがらかに……

廣く、遠く、野は霞にかすむで、今宵はさながら大海原。誰がすさびか、笛の音はやわらかい空氣にたゞよふて、心地よく響く。若き胸、若き少女。靜かな夜の大氣に、フツ〳〵と音律正しく血しは湧く音。







憂も無く、惱みもあらず、得云はれぬ嬉しい心地。
朧月夜、春の女。
又續く笛の音。……庭下駄つつかけて、飛び石の彼方、くれつた梅の古木に身をよす。
そよ吹く風に流るゝ二尺のふり。そつと袂を口にくわへて、立てる姿を、つくづく眺め入る。歌よ、詩よ。誰か我が爲めに春の曲をばかなですや。
春よ、花よ、月よ、少女よ……
あゝいつまでも、いつまでも、此の詩の境を離れざれ。
仰げば高し、つばさあらば身を投げても見まほしい月の海原。

「二」

十七の誇りは去つて、十八の、更に新らしい望みを抱いて、去年の梅の木陰にまた月を見る。文金の高島田……、印した影は、眞に繪のやう。
此の庭も今宵が見納めと思へば、妙な心地。されどまた嬉しい笑みに、人氣きあたりをそつと見返つては、明日の 幻 に迫はる。
結ぶ千歳の松のゑにし……高砂の……常磐の……
花と飾つた大廣間に、藤業の大振袖。矢の字に脊負つた帶、胸許につなぐ金光……電燈の光まぶしく、星と輝く人々のひとみを集めて、うら恥かしき中に、得云はれぬ心の誇り。
クワツくと蹄の音……
遠く起つて、かすかに、消えて行く。
何もかも打ち忘れて、心はひづめの後を追ふ。
おぼろ月夜、駒嘶ふ聲、
明日嫁く我が身……
靜かな春の一夜は、斯くて行かんとす。



貧家の夕

夜泣石

讀みかけた文學全書を投げて、あゝ〳〵駄目だ何の事だかさつぱり分りやしない、適々註が有れば分り切た事許書て有てと復呟いた、夫れが聞えたのか「文學全書は本文だけ見る爲の物だ枕草紙の委しい註釋が見たけりや春曙抄がいゝだらう」と君は有仰る。あゝ春曙抄が見度いと思ふけれどもさて買ひ度いとはいへぬ。これさへ有ればと散歩の歸りやつとの思ひで買つて喜んで持つて來たのは文學全書で有る物をと思ふと胸はふつと詰まる。隣の時計が早五時打つたのに驚き其の話はそれ切にして夕飯の支度に取りかゝる。堅い乾大根を刻む間も、七厘の口を扇ぎ立てる間も、お汁の加減を見る間も、お膳を出し御飯を盛る間も、絶えず心の底には春曙抄が横つて居た。只二人の差し向ひでお箸を取り乍ら話をする。

「辻はまた向の家へ來て居る。子供なら構はず內同志飯を食ふけれども、歸ら無けりや內の者も食ふ事が出來無いだらう。」

「亭主が居無いから御飯時に坐り込で居ても御馳走には成れ無いでせう。」

「あゝいふ奴は、さあもう飯にしやうか、といつても歸ら無いだらうか。」

「ほゝ、それはどうも每度で、とか何とかいつて坐り直すかも知れませんね。辻の嫁さんはお常さん所へ昨日お餅の水に漬けたの二切でも三切でも可から貸して

呉れづて來ましたつて、水に漬けたのは無いつていひましたら、堅いのでも善御座いますからつて取つて行つたんですつて、大方何も食べる物が無いだらうつてお常さんいつて居ました。」

「其樣な物貸して呉れつて取て行て返すだらうか、」

「まさか、此の間も御燈明の油貸じて呉れつておかわらけ持つて來て居ました。始終〳〵借りに來られてお常さんも困りますでせうね。」

「お常さん所は困るだらうけれど向の家では御馳走に成ても可よ、どうせ拂は無い借り倒しだから、貸す商人が馬鹿さ。」



「商賣人つて馬鹿で御座いますね、左樣いふ所へは幾干でも借して其の埋め合せに善お花主から無闇に取らうとするのですもの。」

御飯は濟むでも話の尾を切り度く無くて片付けもせず其の儘坐つて居る。君は本を出して廣告の所を見て居らつしやる。

「あなた紫式部と淸少納言と何方か面白い人だとお思ひになつて。」

「それや淸少納言が面白いさ、お轉婆だから。」

「春曙抄は幾干位します。」
「七八十錢するだらう。」
「そんなに。」
「價を聞て思案するのか。」
「買ひませうか、あの古新聞を賣て。」
と思はずいつて直ぐ惡かつたと思ふ。我が家の小い問題と成つて居る古新聞は貫十八九錢に賣れば一圓近くも有るだらう。四五日前主人の手で綺麗に束ねられて棚の上に在る。これを全部賣つて自分の物買つては近頃の問題が餘り淋しく終る譯だと思つて居ると君は。
「本を買つて來て後で新聞を賣つても可い、何樣しても同じだ。」
といつて居らつしやる。
「まあ〳〵止しませう。さう急いで買はなくても他に讀む物も有るからもつと先で買ひませう。」
といひ直す。君は火鉢を抱いて相變らず本の廣告を見て居らつしやる。何か物算用が有るらしい。
「散歩にはいらつしやいませんの。」
「さあ行かうかどう爲樣かと思つて居る。」
と初めて目を上げる。
「いらつしやいまし、お供しませう。」
とわざといつて見ると夫なら止さうといふ樣な顏をして。
「行くなら一人でなきやいけない。」
「まあさう爲仰らずと行きませう、私は八百屋迄行きますから其所迄でも御一緒に、さあ。」
といつて急いで洗ふ物は洗ひ總て食器を片付ける。君は帶を締め直して先へ出られる。自分も其のまゝショールを卷いて燈火を消して後を追つて出る。
「餘り遲くならない位にお歸りなさいましね。」
といつて其の儘分れる。少しでも安いのを便りに遠いは構はず店を選んで明日無くてはならぬ物許買ひ集めて可成大きく成た包を抱て薄暗い道を辿りぽつ〳〵と歸る。道すがら此のしがない世渡りを思ふと心は重苦しく悲しい。いかに貧しいとはいへ大切な時間を僅

な金に代へて働いた所が何になる。矢張生活に費う迄の事働くといへば、つまらぬ人に頭を下げて厭な〱思をする上に何一つ學ぶ暇も無い月日のどんなに惜しいか、さう思つてよりはやう〱爲懸けた事も何も打ち捨てゝしまつた今日、何を思ひ煩ふ事が有らう。行き詰める所迄行く迄だ。只々書物を讀まうと、家に歸つて燈火を點けて手近に有る書物をそれやこれやと讀むで見るけれども、今宵は少しも心の引き立つ物が無い。もしも此の場合思ひ懸け無く春曙抄買つて來て下さらばと竊に思つて見る。頼みもしないのに買つて來て下さる譯は無いけれども、もし買つて來て下すつたらどんなにうれしからう。また買つて來て下さら無かつたらどんな淋しからうと思ふと待たれもし待たれもせぬ。常の通りならばまだ〱と思つて居るのに何だか足音がする樣だ、まさかと思ひ乍ら耳を澄ますと矢張御歸りらしい、聞き覺えの足音が近寄つて來る。



梅林を桃山にせし花麗ら　碧童

茶を摘むや山一藍の山青し　禾水

料理食品文盲手引（四）

小泉迂外

△ぜんざい

ぜんざい、粟の善哉……と斯う申上げると食嗜のお綺麗な方は、ア、梅園のは御滋味いワ、と直ぐ召上つた當時を御連想あそばしませう。梅園、殊に木原店の店の善哉は實に天下一品で、いつ戴いても温かく結構でございます。

一體此善哉といふ餅はいつ頃から製りまして、其名稱の起りは何からであるといふと、是れには中々趣味ある小話が含んで居ります。

頗る遠い昔の事でございますが、豐太閤が未だ茶道に精しくない時に、千利久と曾呂利新左衛門を召して一夕茶會を催した事がございました。其際に秀吉は、何にか甘味の物が欲しいと云はれ、しかも其れが大の難題で、汁で無く、菓子でなく、蒸した物で、甘い物を席を動かずに作れとの命令でした。此席を動かずといふのは、有合せ物で作れとの意味なので、利久は早速委細承知とお受して、日頃秀吉が粟饅頭を好む處から思ひつき、幸ひ獻上の粟が有るのを利用して、是れを茶の湯の釜の上で即座に蒸し、同じく有合せのあづきを餡に作くり此粟の上に掛け、一種の不思議な品を侑めました。



ところが秀吉は非常に滿足して利久が頓才を賞賛され、さて一體此品は何と申すものぢやとの詞でしたから利久もハッと思ひましたが、そこは例の奇轉で、其名は善哉と申升る。その譯は、只今殿下が召上つた時、善哉善哉と仰せあつた故斯く名付けまする次第と憶せず答へたとの事で、これが抑々善哉餅の起りだと傳へられます。

江戸へ賣廣めましたのは梅園の先代が元祖でございますが、大阪では古くから商はれました、當今でも大

阪では汁粉屋といふものが無く、皆善哉屋の看板を出して居ります處を見ましても如何に渇仰されて居るかが分りませう。

△初　鰹



小判一枚を惜氣もなく投げ出して、初鰹を賞翫したといふ趣味は既に過去のものとして葬られましたが、しかし初鰹といふと未だ東京の方は珍重される癖が抜けません。

元來此魚は品位からいへば極めて上等料理には用ゐられぬ魚で、又調理の仕方によつては胃腸を害ふといふ憂ひがあるので、衛生上から申しますと、あまり近づくべからざる品でございます。

之れを刺身に作るには卸した肉の端に一寸竹串をさし、紐で釣し暫く置き、悪血を垂らし冷水で洗つて刺ると危險くございません。又喰き方も昔は銀皮造りと申して、皮をつけて三分位に切り、辛子味噌をつけたもので彼の英一蝶の句に、

初鰹からしが無くて涙かな

といふのが見えますのでも分ります。

今日でも鰹の刺身には、辛子か或は大根卸しかの二種の中を添えるのが法式で、鯛やひらめのやうに山葵では喰きません。

又土佐の地方では、鮮らしい鰹をゑびやうしと稱へ、卸した肉を焚火で身の廻り一分位焼き、水で洗ひ上げ、小口刺りにして、卸し大根をつけ橙酢で食くさうですが、之れは至極面白い趣向です。

△觀花辨當

重箱に鯛押しまげて花見哉　　成美

といふ句の通り、江戸時代の花見には必らず重詰の御辨當を携へたもので、今日のやうに手ブラで花を觀るといふ事は尠かつたのです。

勿論今日は時世が違ふので、散りくる櫻の下に緋毛氈を敷きつらねて、悠然と盃を廻らせるなどの風流はとても能きますまいが、さりとて、葭簾張りの茶屋で賣る食品は、くわゐにしろ團子にしろ浴びるやうな、砂塵をうけて居るので、衞生上から見れば實に危險千萬でとても口には入れられぬ物ばかりですから、どうしても沓を郊外に踏み出すには、此辨當が必要で、殊に家族的遊山のやうな場合には缺くべからざるものでございます。



それで此辨當の料理には何が適當であるかと申せば、持運ぶ時間が長いので、なるべく、燒物、煮物を擇ぶ事で、刺身の如き味の變り易いものは避ける方がよろしうございます。

詰める時は汁氣のある品は能く汁を切つて甲の品へ乙の味が移らぬやうに仕切を入れます。又品によつては大根卸を盛込む事がありませうが、之れは絶對に不可能で、數時間經つて開く場合に一種妙な匂ひを生じ、肝心な玉子燒とか揚物類に迄其臭氣を及ぼす害があります。

又重詰の飯は和か過ぎると不味くなるので、白飯なれば、紫蘇の粉、黑胡麻或は海苔を揉んでふりかけると、冷えても滋味く喰けます。

若し鮓ならば海苔卷で、之れには干瓢の代りに、ハムか牛肉の佃煮等を加藥に入れますと極めて妙です。ただ注意すべき事は斯のやうな加藥を入れた時は普通より飯を餘程減らしてお卷きにならぬと、海苔の合目が離れます。

△惡食珍食

堤食ひといふのは熊本邊で行はれる一種の惡食會で、それは五人なり六人なり集つて今日は堤食ひを行らうとなりますと、醤油、酢、味噌などを用意して田舍道へ出掛けます。

其の中の一人を先達と極め、其人が先きに立つて歩きながら、往來に有る物で食だけさうな品を物色して



味噌なり醤油なりつけて即座に口に入れますと、續いた他の人々が皆其通り行らなければならぬ規定なので、堤の上を歩き嫁菜、芹、土筆、田螺など手當次第種々な物を喰くので堤食ひと稱へるさうです。これは随分亂暴ですが、或る程度迄改良すれば面白い慰みだらうと思はれます。

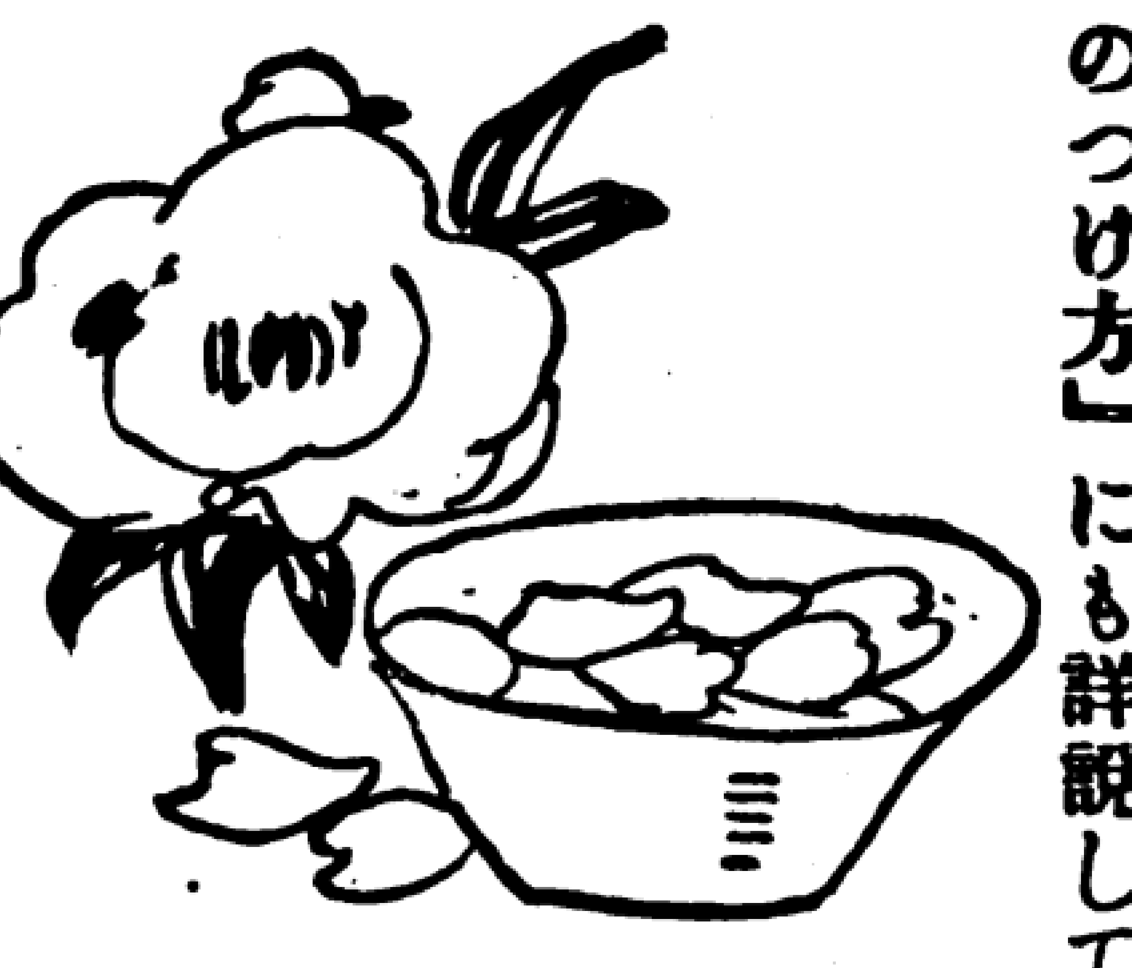
小波先生の御話ですが、伯林のフリードリヒ町にあるグランド、レストラン俗に穴倉といふ小料理屋では蛙のロースを出すといふので好事家の贔負が多いさうですが、一寸氣味の悪い料理です。

又佛蘭西では蝸牛料理と稱へて、巴里あたりでは食くべき蝸牛は特別に養殖してあるので、是れは殻ぐるみコンガリと燒き、二股の少さき肉叉で引出してバタをつけて喰くさうです。さる洋食通の話に横濱のオリエンタルホテルでも好みによつては侑めるさうです。

△牡丹の鮨

牡丹は當季の花もので、其積極的な濃艶な風趣がいかにも心地よいものです。此花は毛茛科の植物ですが、食用に供しても決して毒にはなりません。のみならず支那では立派に調理されて食膳に上せます。

之を鮨に應用致したのは筆者の創案で、嘗て拙著『鮓のつけ方』にも詳說してございますが、鮨に致す花瓣は必ずしも咲きごろのを無慘に切らずとも、十分眺め飽きた後で、花瓣がグッタリとしたのでも差支なく、それを幾枚か入用だけ笊に並らべて熱湯を注ぎ、四五分も放擲つて置きますと、艶麗な色素は大概とれて了いますから、それを固く絞つて三杯酢に浸してつかふのでございます。



これには普通の飯でもよろしうございますが實驗致した結果は、普通のよりも寧ろ、豆腐粕に味をつけて飯の代りに致した方が遙かに滋味うございます。

△朝鮮の食事



之れはちと受賣のお話ですが、朝鮮人は未だに三度三度の食事を致すといふ事は稀で、上流社會は別でございますが、中流以下は大概二度の食事で腹を滿たして、跡の一回は、蕎麥とか餅などの類ですませて置くといふ事です。

それで膳部に並らべる食器は多く眞鍮製で箸、匙、飯器、汁器、湯呑等を除くと、陶器製の物は僅に香の物入れ位ださうです。飯碗は丁度日本の含嗽茶碗よりも大さく且つ腰が高いもので、汁椀も含嗽茶碗位あるさうです。それで朝はその飯器に粟飯を枕飯と稱へて小山に盛り、お菜は味噌汁と香の物を添へるばかりの極く簡單で、夕餐は、小豆飯に南瓜汁と小海老の鹽漬、昆布の油揚、燒豆腐、鹽引の魚などを、いろ〳〵に配合せて喰くので、香の物は大根と朝鮮菜の二種を季節によつて一種添えるさうで又唐芋といふのを必ず何の膳部にも出すといふのが彼地の風ださうです。

中流以下の活計では、斯様な粗食に甘んじて居らねばならぬと思ふと涙がこぼれるやうです。

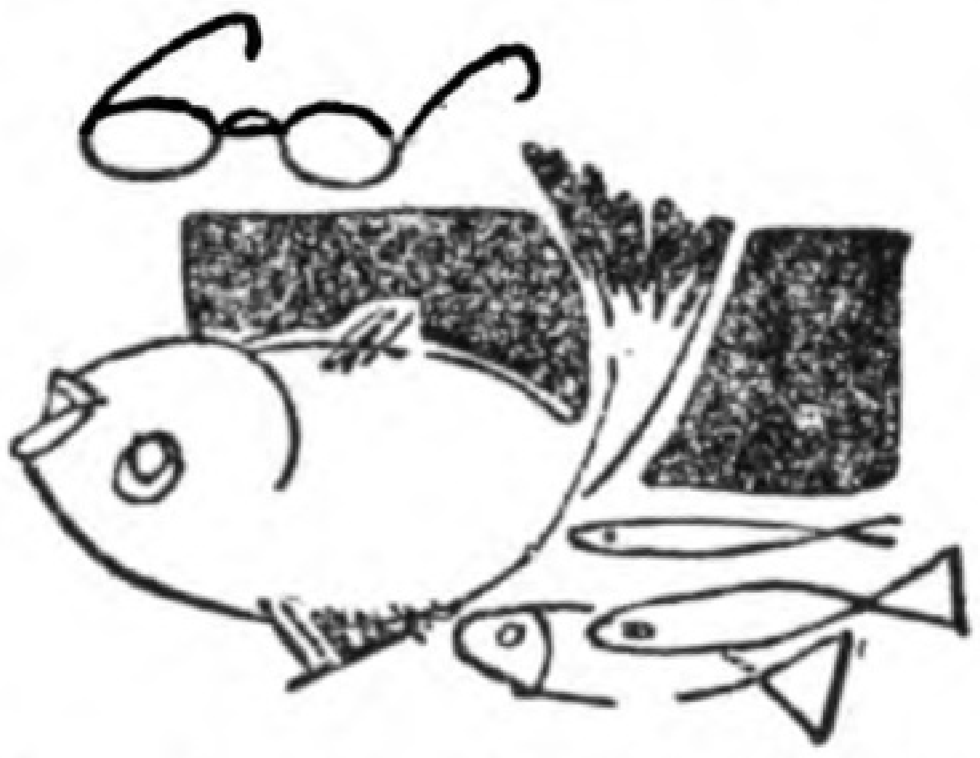
それから一つ感服すべきは小豆飯の炊き法ださうで、强からず、柔かゝらず、よく中庸を得て、其熟練な工合は内地の夫人方に御目にかけたいくらゐださうです。

△魚の鑑別

毎日御惣菜をお仕入れになる時、一番御注意あそばさなくてはならぬのは魚類の御選擇です。いかに御調理の鹽梅が御上手に能きても、肝心の魚が惡いときにはお骨折が皆ムダに歸してしまひます。それに目下は春から夏に及ばうとする際で、魚類の手返しが一番む

づかしい季節ですから、殊に御注意を要すべきです。

今魚類の二三を擧げて、筆者が實驗上から得た簡易な鑑別法を御傳授致しませうならば、先づ鯛を御覧になる時、其魚の全身が櫻色を帯び、鱗の上に銀色の斑點がキラ〳〵として、眼色が黒かつたらば新鮮しいので、面部は糊のやうなドロ〳〵したものが浮出で、眼玉や鱗が白らつちやけたのは不良品でございます。しかし狡猾な魚屋は紅殻で色をつけて新らしいやうに見せかけますから、少し怪しいと思召たら、ちつよと水で一度御洗ひになれば分ります。



鮪の切身は切口が薄紅く、時間が經つに從つて漸次紅色を増して、遂に黒味を帯びてくるのが新らしいので、よく世間で、切口が赤黒く羊羹色のが新しいなどと申しますのは嘘でございます。

鰈は腹の中から先きに腐れ初めますから、指で肉を押して、黒い汁が出た魚は腐敗れかゝつた魚と思召あそばせ。鯖は青色がかつて身の堅いのは新鮮で、灰白色、軟いのは不良品です。松魚は背が青光にキラ〳〵と光澤のあるのがよいので、白つぽいのは悪い魚です。

蛸は死んでから四回色が變るもので、最初は赤く、少し經つと赤白の斑ちで、其次は眞白となり、遂には疣が黒くなつてしまいますから、疣の黒いのは御注意ものです。茹蛸は、赤くなつて皮が綺麗に殘り、引張つても容易に切れないのが新鮮らしいのです。蝦は新らしいと鰭や尻尾に赤味を帯びて居りますが、古いものは黒色を帯びて居ります。蟹は甲羅の兩脇を押して軟かいものは不良品でございます。

△茶人の料理

古筆了悦といふ人は、平生は極く儉約をして居りましたが、いざ茶會に客を招くといふ時は、魚屋、八百屋から先づ價値を聞かずに、材料の善い品を擇んで庖

刀を取り後とで初めて其の材料の直値をたづね勘定をすませるといふ遣り方でした。これは初めに價値を聞くと、自然魚なり、野菜なり、上等のものが買ひ惡くゝ、安い方で間に合して置くのが人情ですから斯くするのだといふ話です。



嘗て筆者が師事して居りました故石塚宗通といふ老人の話に、昔の茶人は皆自分で會席の料理を作り、菓子迄拵らへるので、時によつて料理人にさせる場合には、今日は手廻り兼ねて申付けましたから、加減が如何でございますか、なぞと客に詫る有樣で、客はイヤ〳〵さうではございますまい、此加減の好さは中々料理人には能きぬ事でございますと挨拶するのが常であるのに、今日の茶人は大概料理人任せにして、偶々自家で料理する時は、今日は手製ゆゑ甚だ不加減でございますがと、言譯をしながら侑めると、客は又此の御風味は御素人には能きない業で、きつと仰付られましたのでせうなどゝ御世辭を振まくといふ工合に昔とは全く反對になつてゐつたのは可笑しいといはれました。

△鮨　賣

蒲原有明さんがいつぞや讀賣新聞に『小歌四篇』といふお得意の詩を出されましたうちで、

夏の日ざかりの鮨賣、こはだのすし。
いなせ男の姿いまはなし。
江戸ははや灰となる。大江戸は。

といふ言葉がありましたが、失禮ですが有明さんは、當時の風俗をよく御存知なくお作りになつたのかと思はれます。

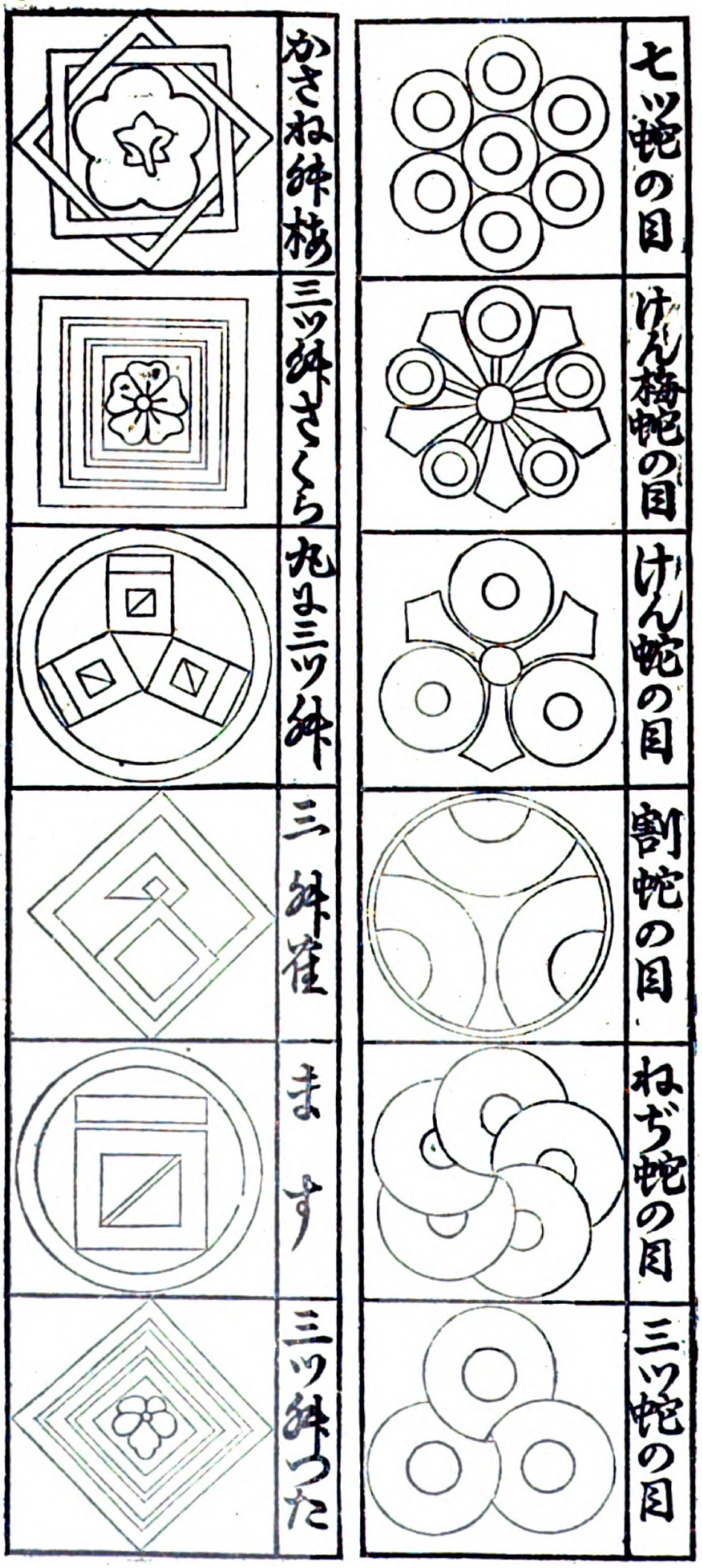


一體鰶の鮨を行商したのは嘉永安政頃からの風俗で、之れは正月松の内に限り、『鮨や、すうし、小鰭のすうし』と美しい聲で呼び歩くので、客は行裝

の綺麗なのと美音に惚れて、味の善悪は第二として購求つたのでございます。
それで松の内が過ぎますと暫く影を潜して、再び櫻の時分に、小鰭の外、海苔、玉子、鮪等を仕込んで上野や向島等に荷を卸し、白酒の肴として賣つたのでございます。
尚申上げるのは、鰶は晩秋から翌年二三月頃迄の魚で、夏の、しかも日盛などと申す頃には昔も今も絶て見る事は能きぬ魚類でございます。

青柳や水筋違ひに五大橋　禾水

模様の様々



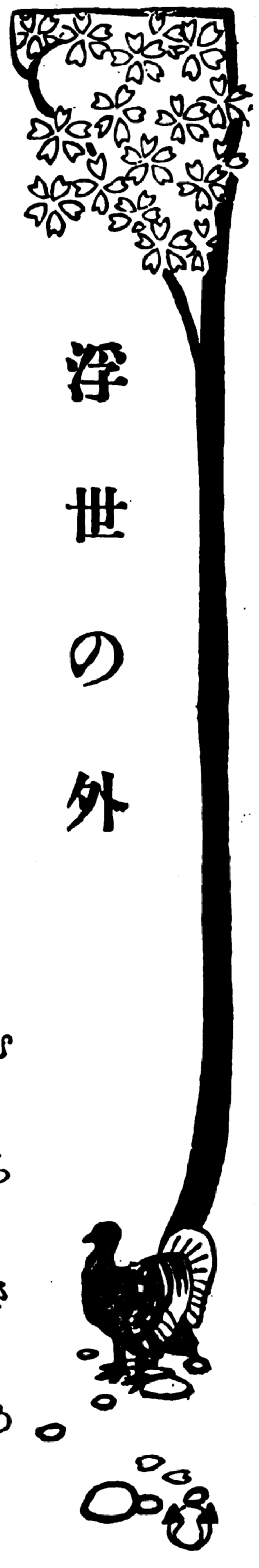


衣服の保存は何うすれば宜いか

衣類の保存には先づ入梅前に、一旦日光に曝して夫々整理するのが肝心で、木綿物は手數でも年々洗張りする方が安全です。又絹物は日光に曝した後、餘り毛の硬くない刷毛で丁寧に汚塵を拂ひ、油垢其他の汚點を能く揮發油かベンヂンで拭き取るのです。汚點を拭取るには、木綿物や絹物は白木綿切れ又は眞綿に揮發油なりベンヂンなりを附け、輕く汚點の部分を擦するのですが、ネルや羅紗物なら刷毛か齒磨楊枝で擦る方が宜い。併し自分の力で駄目な物は他日と言はず直ぐ『しみ拔屋』へ賴む事が大切です。夫から揮發油なりベンヂンなりを使つた場合は是非一應日光に曝して蒸發させる必要があります。日光へ曝すにも一樣ではない赤い物は直接にすると色が褪める虞があるから、かげ干にする事です。若し汚點を拭取らずに垢染みた儘藏つて置くと、イザといふ場合急に手當をしても迚も拔けるものではなく、又急に手當をしては地質に損傷が出來て代なしにして仕舞ひます。

簞笥の中には矢張ナフタリンか樟腦かの蟲除を入れて置く方が宜い。ナフタリンは一種の臭氣がある爲め嫌ふ人もあるが、效能は確かにあります。簞笥も亦壁の上へ直接に置かず、二寸か三寸の臺を置く方が宜い。斯して保存した衣類は、入梅が上つたなら、餘り日數の經ない內に、日光に曝す事が大切です。

從來ネルや唐縮緬類は普通の洗濯石鹼を用ゐて揉むと、毛ばたつて地質が惡くなると言つて洗濯屋へ賴みましたが、サッポンを適宜に使用すると決して其虞がない。分量は並の杯一つを一升五合の水なり微溫湯なりに入れ、搔廻して泡立た中へ洗濯物を入れ、暫時浸して置き、夫から洗ひ初めるのですが、長過ぎると色の褪せる虞れがあるから、實驗に徵して適宜の時間を作る必要がある。



浮世の外

むらさめ

午後四時、今日のお召替へは私の番だと思ひながら、縫ひさしの緋のお袴を下において、眞綿の指拭を黒塗の松に鶴の金蒔繪の針箱の中へカチンと投げ込むや、絲くづをはらひながら立ち上り、お風呂敷包みを持ちて小褄キリヽと長い〳〵お廊下を小走に行く。

里程にすれば三町位。片側にズット女官方のお長持が置いてあつて、一々、お名前がついてゐる。片側は窓で、松杉等が茂げてゐて、白い細かい石が一面に敷ひてある。

つま先上りの細道を、緋のお袴召した女官方が、緋のお鼻緒のお草履も見えがくれに、ゾロリ〳〵とお供をつれて御散歩の樣は、ほんとに繪のやう。

ヤットお召替へ所に行く。右手に大きなお姿見、左の方に三ツ四ツお鏡が並んでゐる。一番左のを前に引きよせて、紅葉に水の友禪模樣のお鏡掛けをとると。パット自分の顏がうつる。昨年迄はあのハイカラなウインナにして居たのに、今鏡にうつる面影は水も滴るような高島田。着物はあの時分と同じやうな紫矢絣だけれども。

お障子がからりと開いて旦那樣の御越し。（宮城では自分達の仕へてゐる女官の事を旦那樣と申し上げる）。スラリとお端居に御立ち遊ばす。急いてお化粧道具を出して左におき、お含嗽ひ茶碗にお湯を取り、御盆に乘せて參らせ、其の間に金だらひにお湯を

取つて右におき、熱きお湯でお手拭を搾りて差上げる御顏直しの間に長い〱お髮をおそろへ申し上げる。(鬢の出たお下髮で根元をきりゝと白丈長で卷いたお髮)。

白羽二重のお召に緋のお袴を召して、紫綸子に大きな亂菊を浮き出した袿を上からふはりとお召し遊ばしたお姿氣高くてお美しくて、ほんとに繪のやう。如何して三十の坂を御越え遊ばした方と見えやう。

お障子をお開け申して、「御機嫌よろしう」と申し上げると、アとお一言、奧へお入り遊ばした。

お跡かたづけをして、歸らうとすると、○○御局樣



のお高樣。いつものいゝ格構に高島田にして、黄縞の御召に紫繻子の帶をふつくりとお太皷にしてよくお似合になる。お召替ゝて伺つて、御苦勞樣といふと、恐入りますつてにつこり。いつ見ても可愛いゝ方。

元來た道をすた〱と。アラ彼方から○○御局樣の御越し。御辭氣をして居ると、御かまいなうと玉の樣なお言葉。一間計りお通り過ぎになつてからやう〱歩き出す。一寸振りかへると、御供はお清さん。今日は白丈長の桃割で、四田の帶が可愛い事。お部屋へ歸ると、皆樣が御苦勞樣といつて下さる。お互樣よ

つていひながら、お召を御箪笥にしまつて臺所へ來ると、もう膳立てが出來てゐる。御晝のお下りのおすもじと御まな（お肴のこと）を戴く。
顔なほしをしてから、八疊の御寢所にお床をのべる。雪をあざむく白羽二重を二枚重ねて、お掻巻は秋の七草の友禪模樣。
御枕元には、お手燭とお烟草盆を置いて、六枚折りの金地に松の御屏風を立てめぐらしておく。中にほんのりとボンボリをつけて、下に緋の錦に桐の縫のした袋入の御守刀を黒塗の臺にのせて置く。



夜は自分達の裁縫。私は紅、白、青、紫とり〲の細かい縮緬の切れをはぎ合せて、白二羽重の裏をつけ、大きな巾着をこしらへる。出來上つたら國のお祖母樣に送つて上げるつもり。お寺參りにでも持つてお喜びになることだらう。
一生懸命に縫つて居たので、時間の過つのも氣がつかなかつた。もう九時。そろ〲片附けて髮をかきあげ、一寸粉おしろいをはたいてお歸りをお待ちする。
さら〲と御衣ずれの音がして、お手燭持たお花樣が先に、旦那樣の御歸り。

お出向へ申上げて、お化粧部屋でお召替へ。紫絞りの縮緬のお召に、緋のおみ帯をふつくりと前でお結び遊ばして、お被布は藤色で梅の縫のしたもの。お召替への後、御部屋で御書見遊ばす。

御定紋の付いた黒塗の高足で薄茶を參らす。

御次の間で御用を伺ひながら一寸盗見をすると、何だか夢の様な感がした。

蒔繪をした圓ひ行燈の火はぼんやりして、紫檀の御机の前には、氣高い旦那様が側見もあそばさずに御書見。お床の間の燕子花はくつきりと白く浮き出して、長く影を引き、壁にかゝつて居る御寫眞の金縁が、すごい様に光かつて居る。

十一時がなつて御寢なる。

明日の御召を廣ぶたに乘せ、お次の間においてボンボリをお屏風の外へ出し、御機嫌宜しう御寢なさりませと申上げて部屋に退く。

お菊さんが起して下さるまでちつとも知らなかつた。禮をいひ〳〵飛び起きると正五時。

お湯をつかつてお化粧して、黄八丈の着物に、帯は七寶つなぎの紫にする。食事をすましてお化粧部屋のお掃除。御姿見の塵を拂つて、水色のレースを絞つて、御障子の傍に定紋の附いた黒塗のお鏡立に丸いお鏡をかけて、緋縮緬の覆をとつておく。

左の方にお含嗽のお道具、右の方に御瓶臺を置いて、ねりと粉のおしろい、京紅にまゆずみの御筆はけなど取りそろへ、御櫛は御櫛臺に並べておく。

黒塗御定紋ちらしのお化粧道具と、緋縮緬のお座布團とが、朝日に榮えて……。

風のこない様にお屏風を立てめぐらしておく。

八時にお起し申上げる。白羽二重の御寢召のまゝ、ふわりと桃色のお被布をお着せ申上げて、約一時間のお化粧。御眉づくりも御すみ遊ばして、お食事參らせ、お召替へ、緋のお袴召してひわ色のお袿、白羽二重のお足袋で直にお出勤。

今日のお供はおしづさん。皆御廊下に出てお送り申上て、お姿のお見えにならなくなつてからお部屋に入

る。お跡をかたづけ作らそれからそれへといろ〳〵の事を考へる。

旦那様方の内には随分お氣むづかしいお方もあつて、そんな方に仕へる者は朝に夕に涙ばかりで暮すとか。例へばお食事の時などに高足のお膳を參らするのに、疊の目一つ異つても御氣に召さないで御小言を頂戴するなど。

幸に此方の旦那様はお優しいお方だから、そんなに悲しい目に合つた事はございませんが、白粉塗つて紅つけてきらびやかな御召を着かざつた旦那様方の中には、昔の物語にあるやうな尾上岩藤のやうな暗討が絶ないのですとか。



お優い此方の旦那様でも、あのお美しいお目が涙で曇て居る時もあります。時には御書見の折など、深い深い溜息を遊ばす事もある。爾かと存じますと、かるた會、三月の御節句などには心から面白さうに遊ばす時もございますが、何しろ三人よれば姦しいと昔からいひ傳た御婦人方のお集りですもの、表面は美麗でも、心は冷やかなのでございませう。

方丈と離れ

山茶花



門には黒田一峯の瓦斯燈が高う懸つて居るが、寺の名の西願寺の札は門と共に古けてそれとも讀めぬ。其の門を入て數歩、先づ方丈の勝手に廻つて、御布施花筒代などと書た古反古を持つて不器用に貼られて居る障子を見れば、此の寺の住職の人柄は分らう。年は六十餘り。大い顏で、さまで憎くげは無い。黄い大黒頭巾を著、白衣の上に茶色のお被布など著て居る。朝はまだ薄暗い中に起きて、木靈に響く様な不思議な聲をする。氣に向けば本堂に入て殊勝らしう木魚打つて、絞り出す様な大い聲で御經を讀むのであるけれども、それは三日に一度位なものであらう。小僧は置かず。七十餘りの婆さん一人を置て總てを任せてある。稀しい達者な婆さんで朝夕の戸の開閉から、水仕、用使ひ、庭掃除から墓場の掃除、洗濯、風呂焚き、張物裁縫迄すつかり綺麗にしてしまつて、猶隙には裏の畑の野菜や花まで時候遅れずに作る。二十年の餘も此家にかうして居る事とて、實の息子や娘は皆相應の家を持つて暮して居るのに、此の年をして此所に奉公人ともつかず、我が家ともつかず「人間は働くのが佛様への勤めぢやで、私はかうして働きまする。其の代り夜丈は休ませてもらつて、有り難い御說敎を聞きに參らせていただきまする。」といつて、袖なしのちやん〳〵でいつも元氣に暮して居る。この婆に家の中を任せて安心して居る和尚さんも、一方ではまことに考深い經濟家である。二十四五年前はただの野ら藪で有た寺の裏を打ち開いて、大い池を掘り、疏水の水をそつと引き入れ

て魚を養ひ、掘つた土を山にして、上にも下にも家を建てて人々に貸した。始めは僅五六本市で買つて來た檜木や杉を年々に差し木にして植ゑたのが、池を廻る家々の間にいつか林と茂つた。今は其の年々切る庭木の枝が一年中の厨の焚物と成るといふ。或時日傭を指圖して墓の石を少しづつ寄せて居たが、軈其所へも一つ小い家が建つて、間も無う夜は燈火がつく樣に成た。

方丈の座敷の緣傳ひに、六疊二間の離室が有る。それが即門の瓦斯燈の主、黒田一峯といふ書家の家で、此の書家は熊の樣な大ぞやかな、子供の樣なあどけなさを持つた人。書けば幾干でも相應に賣れる字を、何と思ふてか餘り書かぬ。折々頼まれる屏風、看版、額などもはかゞしう書かぬ上に、日に一升は雨でも風でも缺かさぬといふ今の世の李白故、其の生活は哀れに、妻君は昔は美しかつたらう。髮も拔け、身は苦勞に痩せて見る影も無い。此の妻君は物いへば、『はあ左樣か』と押し付けた頬縛い東北辯で間返答する。何時も髮は櫛卷で前や後は縞目の拔けた古い物著て、朝も晩も、方丈の厨で洗つた、野菜や米など味噌漉に入れて、片手にはバケツに水を汲で手拭被つて離の緣側へ持つて來る。臺所も無い家



故、縁の端へ小い流しをつけて、破れた簾の影で僅に煮焚きをして居る。此の人、一寸した事に心が沈むでは食事も進ます。二三日も寢る事が有る。かういふ時にはいつも十年餘昔二人有て二人共死でしまつた女の子の事を思つて、しみ〴〵と考へるのであるが、二日三日と寢て考へて〳〵考へ拔くと、また元氣が出て、甲斐々々しう働くのである。

方丈の表座敷は若い書生に貸して有る。之は極めて口の惡い人で、和尚さんが穢い風で頬冠りして枯れかかつた松の上から、

「おお一寸其の竹を取つておくれやす。」

といふと懐手してぶら〳〵と見に來た書生は。

「拜むだら取てやる。」

「拜むのに譯は無い。」

と拜む眞似をすると。

「金のかかる事で無いからなあ。」

「何、拜む事は馴れて居るから。」

「む、商賣か。」

といつた樣な風である。

方丈の厨の隅には湯殿が出來て居る。婆は上る煙に小い目を瞬り乍ら頻に火を焚いて居た。側には豌豆蔓の枯れたのが、山の樣に積んである。それを焚くのである。先程からじつと側に立て見て居た書生が、

「其の豌豆はよく出來たなあ。」

といふと、

「よく出來てませうがなも。これでお前樣、和尚樣はまだ出來ん〳〵といはしやるがなも。裏の畑で野菜や花を作つたとてあかんから、來月からお竈屋に月五圓で貸しまする相で御座りまする。其の中何もかも作り物引かならんしな、何も御仰だで爲樣が無い。家を建てるには元がいりますけれどな。」

と莞爾する。

「さうか、此所の和尚さんは死んでも極樂へは行けんぞ。家賃呉れ金呉れと西願寺の門へ出るよ。」

「いや〳〵和尚さんはお金持つて極樂へ行かしやるのぢや。死んだらお庭先へ出られまする。」

『だが一つ感心して居る事が有るよ。和尚さんはよくこれ丈の庭へ蜜柑や柿など植ゑないで、何もならない檜木や櫻など植ゑた物だと思つて。』

『それはお前様、蜜柑や柿は子供が取りまするでなも。』

といひ〳〵火を焚いて居る。二三日前婆は和尚さんに強く叱られて叩かれた無念があるので、今日は和尚さんは留守だし、よい相手を得た樣に話す。婆は名古屋の人である。



晝食の後書家の妻君は方丈の厨へ水を汲みに行て見ると、今日は入口の障子も開かれて、廣い土間には臺の上に、小桶や蒸籠や、箱が出て、野菜や昆布、豆、鯛、烏賊、膳、椀所狭う取り散らして有た。料理人が二人襷がけで働いて居る。

『お婆さん今日はいつもの…』

といふと、

『お施餓鬼で御座りまする。』

といふ。婆も髮を美しく結つて、新しい紺足袋など穿いて居る。

『一寸御免やしてお呉れやす。』

と料理人は忙し相に釜の中へ水を移す。五つ連つて居るお竈には悉く火が焚いて有る。

妻君は思つた。道理で二三日婆が庭や本堂の掃除を

して居たと。歸りかげに座敷の方を見ると、書生さんの机や本箱は皆奥の間の方へ運ばれて有た。

二時打つ頃から幾度か車が門に止つて、方丈の座敷は男の聲や女の聲で次第に賑かに成た。藤鼠に紅梅色の帶した娘や、地味なお納戸の羽織著た年増や、紋付の羽織袴や、ちんと後で締めた角帶の子僧などが庭の小道をそちこちと歩いた。

やがて本堂に讀經が初まつて、鐃鈸の音が高う響くと、人々は口々に念佛する。これが濟むと和尚さんは階廊めいた所を、金襴のお袈裟かけて、口には猶念佛を唱へながら、人々に先立て裏の墓地へ行く。二つ並んだ大い石碑の前に立て、又ちいんと鉦を鳴らして暫く祈つて、新しい木の札を一つ建てて歸つた。

八疊と六疊打ち通した方丈の座敷は早薄暗う成つて居る。兩側に座布團を敷き並べて、それ〴〵火鉢が出て、お茶菓子が紙に載せてある。和尚さんはお袈裟を取つて、先づお床前に座を占め、人々も打ち寛いで座に著いて、話し聲や笑ひ聲が入り亂れた。やがて立派な本膳が運ばれて、御酒が出て、人々の影はぱつと障子に映つた。

離室の方の妻君はなる丈手の込まない御料理を簾の陰でこしらへて、夫の膳に揃へ、溫まつた燗筒を拔いて燈をつけて夫を呼むだ。すぐ並びの座敷が餘り浮き立つて騷がしいので、妻君は強く不愉快な沈むだ顏をして居る。和尚さんが例の絞り出す樣な聲でいふ一言一言の合圖には、人々はどつと笑ふ。笑へば笑ふ程圖に乘つて大きい聲で呼吸を切つていふから、何をいつてるかと耳を傾けて見ると、私などは生れた時の事をとんと覺えて居らんが、お前樣達は知つて居るかどうちや、といつて居るのである。

書家は何ともいはず、無邪氣な顏をして頻に傾ける。時は移つても方丈の和尚さんは猶一人で喋舌り續けて居るが、後について笑ふ聲は次第に淋しく成た。何時か一人二人と客が歸つてしまつたのが知れる。夜も大分更けた。和尚さんは猶喋舌り足らんのか、先生といひながら廊下傳ひに離室へ來た。小鉢に今日のお料理の

殘り物を盛つて持つて來て居る。それと見て妻君は内職の縫物を片寄せて、又盃を出した。和尚さんは遠慮なく受けて、嗄れた聲を絞つて、耶蘇敎攻擊から無神論を、物讀む樣にいひ續ける。話はそろ〳〵堅く成つて居る。書家も最早大分よい御機嫌に成つて來た折とて、廻り兼ねる舌で。

『いや世の中には確に神樣が有る。黒田一峯といふ神樣が有る。』

と大聲を擧げる。妻君は今迄の幽鬱を離れて、ふと浮き立つた心に、箍の弛むだ桶の樣、締りの無い大い聲で、二人のいふ事を聞ては止めどなう笑ひ續ける。

方丈の柱時計は冴えた音で、早十二時を打つたので、婆さんは思ひ出した樣に、南無阿彌陀佛々々といひ乍ら、勝手元の戸締りをして和尚さんの寢床も取て、また長火鉢の側へ坐つたが、間もなくふら〳〵と居眠りをはじめた。



櫻ちる木の下風は寒からで
空に知られぬ雪ぞ降りける　貫之



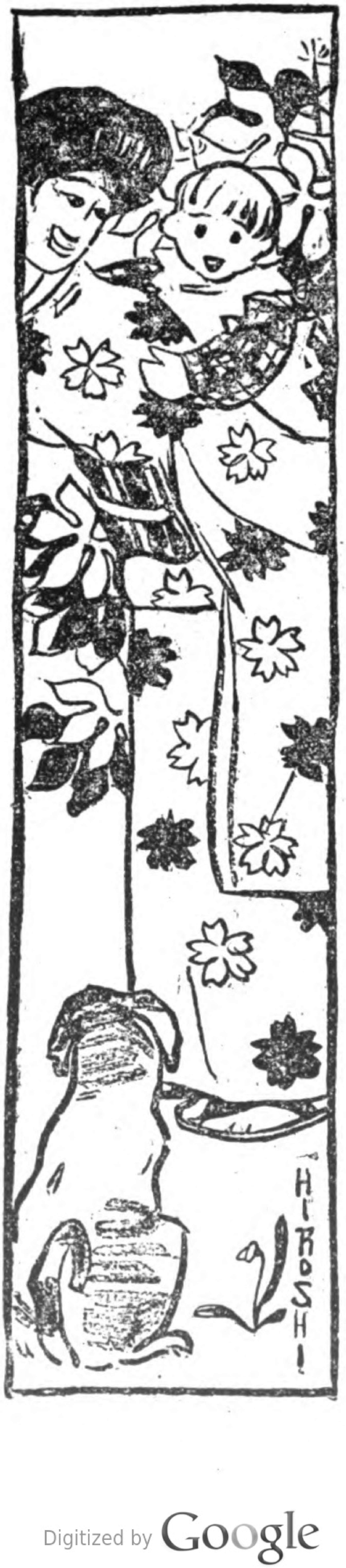
師の面影

みゆき

女學校の國文讀本の著者としてどんな片田舎でも山の中でも先生のお名前丈けは知らぬ者はないと云ふ學者で近々博士におなり遊ばすとか云ふお噂。純粋な日本式の先生で洋服も稀にはお召しになりますが大抵は和服、高貴か糸織の二枚重ねに黒七子のお羽織、仙臺平のお袴、何から何まで一寸の隙もないのですがたゞ一つ縞ネルのシャツだけが目障りで莫大小にでもなされればよいにどいつも生徒同志でいらざる處に氣を揉みます。平安朝文學はお得意の殊に枕のお講義ときては天下一品とか云ふ評判、例の耳遠いなん侍るを搗いて砕いて丸めてお話しになる面白さは到底外では伺はれぬお講義振り、それ故この先生の時間には卒業した人迄もぞろ〳〵と傍聽につめかけるので一脚の椅子に二人掛けと云ふ大繁昌。

「昔は今の香水を使ふ代りに香をたいたものですが矢張り香水よりは奥床しいやうですね。男女共に髪の手

入れなども届いたものでした平安朝の上流婦人は皆下げ髪でしたから別として徳川時代になりましては結んだ髪は一筋でも亂さぬのが嗜みのよいので、その頃にはチックなど云ふハイカラなものは勿論ありませんが皆鬢付けで張り付けたのです。今の女學生の髪なんか見るのに廂のまはりにばれんのやうに毛を下げて居ますが、よく聞いて見ると下つてる方がハイカラだとか本當ですか、今の人のは廂を突き出すのですが昔のは鬢を張り出したのです、御殿女中の髪などと來た日にや大變です、鬢張りと云ふものを入れて鬢のつぶれないやうにするのですがこれが所謂繻子鬢と云ふので繻子の布で張つたやうに艶〳〵とぴつたりとかしてあるのです。それでうつかりして居ると耳とびんとの間に燕が巣を喰つたさうです、まさかそれも大袈裟ですが確かに覗く位の事はあつたでせうよ、十分その間に隙があるんですからね、白粉なども今と同様いろ〳〵の種類があつて顔に塗るのと襟につけるのとは別で唐の土だとか何だとかそれ〳〵の名があつたのです、今あなた方のお用ひになるのも矢張りさうでせうな、白粉も女の身嗜みではありますが女學生時代にはあまりこて〳〵と厚塗りはいけませんな、笑つても顔にひゞが入るなんてのは下品ですね成る可く薄すりが宜しい



でせう、東京あたりでは皆白粉をつけるとかリボンを縛るとか中々お洒落をしますが地方へ行つて見ると實に質素なものです、九州あたりへ行くと質素を通り越して寧ろ殘酷のやうに思はれますな、妙齡の娘が頭はリボン處か油氣もない椶梠箒のやうな毛を拳骨を固めたやうに結つて木綿の筒袖に洗ひ洒しのひだもなくなつた木綿海老茶の袴をつんつるてんに一着に及んで足袋もなしに埃まみれの足をニヨッキリ出して學校へ通ふ有樣と云つたら‥‥いゝえあなた方お笑ひになるが本當ですよ、現在つい先頃地方を巡つて覗てきたんですもの‥‥」とやゝ早めな流暢なお言葉でのべつ幕なしに仰しやる。

「それから又學生時代にはお洒落の必要はありませんが一度學校生活を離れて一家の奥樣とおなりになつたら、その中は少々おめかしをする必要がありますな、こんな事を申すと又お笑ひになるかも知れぬがまあ一寸考へて御覽じろ、旦那樣が終日外の勤めに疲れて歸つてきた時にその細君が不動樣のやうな髮で眞つ黑な顏に目ばかり光らせた佛頂面をして足音がしても出迎へもしない『今かへつたよ』と云ふ聲を聞いてから『オヤお歸りでしたかい』と投りだしたやうに一言云つたぎり見向きもせずに襷がけの尻端折りで流し元をさゝらでつゝ突いたり、お釜のお尻を磨いたり、澤庵石をあつちへ運んだりこつちへ轉がしたり計りして居るのでは成程實用的經濟向きには相違ありませんが夫にとつては餘り有がたくはありませんな、さうかと云つて決して朝から晩までお化粧三昧で、しやんと火鉢の前に坐つてゐろと申すのではありません。流し下の仕事も家の廻りの用事もそんな事は夫の留守の間にすつかり手を廻して置いてお歸りの頃には髮でもなでつけ、火鉢に鐵瓶でもかけて甘黨の夫ならば羊羹の二きれ三切位用意して置くと云ふ調子で欲しいのですな。‥‥‥今日はチト話が横道に外れましたから又この次に埋め合せを致しませう、私は早口ですからどうしても一時間に人の倍位講義も進みます。と御身分の仰しやる事だけ云つてさつさつとお歸りになる。

近視眼者の心得

◎元來眼と全身の健康狀態とは、密接の關係があつて、眼は人の健康及び精神の鏡であると云ふ程大切なものであるから、常に健康と思つて居る眼でも時々專門家に檢査して貰ふことを忘れてはなりません。

專門家に眼の視力を度つて貰つて、凹レンズを用ゐる時は、先づ暗室で眼底を診査して貰ふのです。其時初度の進行性近視で、眼の乳頭の圓形が餘程挾縮して居るのは、腫脹して居る症候であります。若し之れが健康の眼底ならば血管が乳頭部を穿行して、網膜に移行する時で、少しく眼底上方に傾斜する狀態を示す時です尙此の外に脈絡膜層の血管は著しく欝血して居ますから、常に頭痛を覺え、從つて秘結の模樣があるのです。

◎安靜の必要　以上の如くに斷定されました場合には必ず身體を安靜にして、顳顬部に水蛭か人工蜞針で放血し、且つ便通をよくする樣な手當をし、色眼鏡を用ひて成たけ強い光線を避ける樣にしなければなりません、而して其場合には、一切の仕事を止め、細い文字を讀む事を禁じなければなりませぬ、若し患者其者が腺病質の樣な體質の惡い虛弱の人ならば、勉めて全身治療に重きを置き、殊に食物に注意せねばならぬので、若し其人の胃腸が健康で、常に少量の肝油を服する事が出來れば頗る結構です、又都會の人ならば海邊に轉地して全身の健康に十分注意を拂ひ、眼の攝養に勉めねばなりません、此の時期は患者に取つて最も大切な時で十分に攝養すれば、漸次癒する事が出來ます、ですから決して失望する事はありません、以上の療法は早く眼疾を自覺して、醫師の診察を受けた時の處置ですが、若し手遲れをした場合には乳頭の一部に三ケ月樣の缺損を示し、又眼底に廣く荒蕪の狀態を殘す時は近視の末期でありますから、治療の効は格別顯れません、故に初期に油斷なく治療に努めなければ不可ません。

◎讀書と細字　愈々近視の最期と決定された場合には、讀書に一層の注意を拂ひ、殊に小文字を避ける樣に心懸け朝は八時より正午乃至午後三時位迄の間は少々讀書してもよいが、夕方からは極めて害になります、而して一定の時間の切り目〳〵には、キチンと眼を休め、眼の安靜を保つ事に注意しなければなりませぬ、尙腺病質や角膜病から來て、角膜が薄くなり、前方に擴張し、近視の容態を呈したと檢査された場合には、其質の固まる迄、持久的繃帶を施して居なければならず、其上全身の治療は此の種の患者に最も必要です。

◎素人治療は嚴禁　是迄の事は素人の出來得る事を、搔摘まんで述べたのですから、誰方でも近視と檢定された時は、如何なる原因から來た近視眼かを醫師に質し、醫師の云ふ通りに治療しなければなりませぬ、素人治療は、徒らに害があつて益のない事ですから、患者自身は注意に注意をすると云ふ事が肝要です。



心得て居乍ら行ひ難き食事の作法

神崎花枝

◎開會は午後の四時、何アに例によつて三十分や一時間の掛け直があるだらう。時間通りに出掛けて、人の來揃ふまで欠伸をして居るのも餘り氣の利いた圖でないなど、時間に後れて出席することは、西洋式の會堂では一番の禁物であることは云ふまでもない。食堂に入つてからも定めの席にも著かずにウロ〳〵立て居たり、又は知人を引捕へて雜談に耽るなども、食堂では不作法の一つに數へられる。何でも會堂に入つたら猶豫なく自席に著くことである。席へ著てからも日光見物のやうな顔をしてキヨロ〳〵と見廻すなど、是も隨分見苦しい態度である。殊に人の顔を見て隣席の人と耳語するなどは、無調法の至りである。

◎洋會に限つた譯でも無いが、給仕が皿を置いて行くや否や、待つて居ましたと云はぬ許りにホーク、ナイフを把つて、大急ぎに頰張るなどは傍から見ると下司張つて見共ないこと夥だしい。猿が李でも頰張つたやうに、口一杯に食物をふくんでのムシヤリ〳〵などは無頓著な男の眼から見てすらイヤになる。婦人同席のテーブルなどでは、大した無禮に當るといふことだ。殊に物を嚙み乍ら口をあいたり、物を言つたりは、重々の禁物と知るべしである。物を嚙むに音を立てたり、口中に指を入れて齒をほじくつたり、バタやスープで汚した指を舐めたり、又はテーブルクロースで拭いたり、嚙み切つた殘りの食物を又皿へ入れたり、一旦口に入れたものを出して皿へ置いたりは尙更の事、ナイフやホークを舐めたり又は自分のナイフでバタを取るなどは無作法千萬なことだ。





◎パンは手で裂いて食ふべきものになつて居る。雪白のテーブルクロースの上へ皿の中のパンを摘み出して其處でナイフで切つて食べたりする人がある、是は米國風だとかハイカラがつて、故らにそんなことをする人もあるやうだが、米國だとて上流の人もあり下層の人もある筈、亞米利加の木賃宿に泊まつて居る人の眞似などは餘りハイカラ自慢にもなるまいと思ふ。魚類、オムレツ、其他の柔らかいものは、ナイフを用ひず、フォークのみにて食すべきもの。

◎衣服は、朝、晝、晩によつて、それ〴〵異る習慣であるが、定めの衣服たりとも著やうの見苦しいのは宜しくない、殊に病氣でも無い限りは餘計なものを著ては可けない。テーブルに靠れ、倚子の背に倚りかゝつてフンぞり反るなどは見苦しい態度である。卓上には愛嬌のある無邪氣な談話は寧ろ必要であるが、議論がましきことやら、人を攻撃するやうなことは、座興をさます基ゐである。洋食を喰べつけた事のない人が皿へナイフを突當てゝガチャンと音はさせたので給仕が何か用事でもとやつて來たり、並居る人達は卓上演説が始まることと早合點して皆其人に目を注いだなどは、屢々あつたことだと聞いて居る。

◎あゝしても可けない、かうしても惡いと一々ほじくつて書き立てたならば數も限りもあつたものでない。けれども、日本と西洋とで多少習慣の相違があるにしても、下司張つた野卑な振舞は、黒い眼玉で見たからとて碧い眼玉で見たからとて、そこに大した違ひのあるものでは無い。日本の小笠原流とか、伊勢流とかいふ禮法から定められた食事の作法などは恐らく西洋の卓子の式以上に込入つた面倒臭いものである。それに飲食は低い膳の前へ大胡坐をかいて無遠慮に突ツつき散す事を日本の食事の常法でもあるやうに心得た人には西洋式の食事作法は面倒に思ふも無理はない。



増子



△大悲の加護

増子は伊勢國飯高郡時春といふ人の子なりしが、七歳の時母におくれ十四歳の時父大病を煩ひければ、夜晝となくよくいたはりかしづきて寢食を安んぜず、父末期にいひけるは、我若き時長谷の觀音に祈誓して汝をまうけしなれば、我が亡き後も觀音の加護をあふぎ、我菩提をも訪ひ汝が一期をもねがひ奉れと遺言して終に空しくなりければ、増子は泣く〳〵野邊の送りをすまし、其後は月毎に長谷に詣り、親のかたみの鏡に此歌をそへて寳前に納めけるに、折節國の守詣でて増子を見給ひやさしき女なりとて家に伴ない寵愛淺からず、富貴の身となりければ、生涯法華經を誦して佛恩に報じけるとぞ

化粧阪の少將



△夢路の宿

少將は化粧坂の遊君なれども、心ざし優しき女なりけり。曾我の五郎深くなれそめ通ひけるに、或時思ひ立つことのあれば、別れを告げんため少將に會はんとて來りけるに、梶原源太景季十四五騎にて來り此家の遊女を惣揚して少將をも人にあはせず。五郎無念に思へども、貧は諸道の妨ところへて胸をさすり

あふと見る夢路にとまる宿もかなつらき別れにまたもかへらん

此歌を書捨て歸りけるに、少將あとにて是を見てさめ〴〵と泣きけり、其後は絶へてあふこと無かりければ、歎きの餘り出家して

かずならぬ心の山の高ければ奥の深さをたづねこそすれ

兄弟裾野の露と消えしあとは、厚く菩提をとむらひ虎の尼と共に一生行ひ澄しけるとぞ。

玉瀾



△琴瑟和合

玉瀾は町子といひて京都祇園林の百合子の女にして當時名高かりし畫家池大雅の妻となる、夫大雅は畫に秀でたるが上に諸藝に長じたる人なりしが、町子も畫の道を善くするにぞ、大和の柳里恭に玉瀾の名を貰ひぬ、玉瀾或時夫と共に和歌のことにて或堂上方へ參りけるに、玉瀾の名の美しければ、御内の女房達、之を見んとて今や今やと待うけ居たるに思ひの外にも糊ごはなる木綿布子を著て、手には肴籠を提げ、如何にも鄙びたる姿なりければ、聞きしにも似合はぬことよとて驚きしといふ。夫大雅三味線をひけば玉瀾は琴かきならして雅びたる唄をうたひて合せ、生涯風雅を樂みし人なり。

△當意即妙の才

葉山は常陸國の住人信太の三郎に、鎌倉殿より下したまはりたる女なりしが、如何なる失やありけん、鎌倉へ送りかへさんとの沙汰なりければ如何がはせんと思ひなやみし程に、或日夫の申しけるは、御身は歌をよむとの事なれば、此前栽の鞠かゝりの木四本を一首の中に詠込みなばいみじかるべしといふに、難題とは思ひしかども、即座に此歌を詠み出でければ、夫深く感じて、それより鎌倉へ歸さんと思ふ心も失せて睦まじく來さかへけるとぞ、此頃は蹴鞠の坪に梅、櫻、松、楓を植ゑ置くならはしなりければ斯くなん詠み出でけり。

常陸の葉山



△和歌の布施

玉櫛は都今出川のほとりのものなりしが、二親共に世を去り貧しき暮しをいとなみしに、亡き父母のあと訪ふべき日のいたれば實源律師といふ僧を招じて經を誦ませ供養をなす、僧其家を見れば、ことの外荒れ果てはか〴〵しき人も見えず、齋など出すべきさまも見えれど、僧も心ありて念ごろに誦經してけるに、玉櫛手づから衣一ツと蒔繪の手箱一ツを取出して布施としける、僧之を受けて手箱を開き中を見れば此玉くしげの歌あり、僧もあはれに思ひて檀越に此事を話しければ、其やさしきを感じて或富家より迎ひ取られ、行末めでたく榮へけるとぞ。

都の玉櫛



道女



△卒塔婆の説法

道女は深草邊の者なりしが、二十三歳の時に夫を亡ひ、七十三歳になる夫の父と三歳の我子とありて、身のかせぎならざれば父を養ふこと能はずとて其子を仁和寺のほとりに捨て、一尺餘りの卒塔婆に此歌を書きそへ置きければ、山法師拾ひ取り乳人を付て育てしに、成人の後三塔一の學匠となり、栗仙法師とてかくれなき人となり、母を尋ねんとて坂本にて百日ヶ間説法して左の手にかの卒塔婆を持ち施行をひくに、七十日過ぐれども手がかりなかりければ、歌の末をかきかへて

子を捨るかたみの卒塔婆いかばかりさらでは何と親をたづねん

としけるに其日群集の中に老女ありて涙を流し僧都にたづねあひて不思議に親子の對面をなしけるとぞ。

△姨捨の山には行かじ

小野のお通は織田家に仕へし侍女にて諸事に達し、殊に能書の聞えあり又世に翫ぶ浄瑠璃を作り始め、和歌の道に心を入れ、後に塩川志摩守の妻となり男女二人を産む、女はお伏といひて容貌美しかりければ信州の領主に召されて寵愛浅からざりしが、母お通をも養はんとて信州へ通へる折から姨捨山の麓を通る時、供人の申すに名高き山なれば之よりて見たまはんやとあるにお通唐の勝母の故事を思ひ

姨捨の山には入らじ名を聞て車かへせし人もありしを

とよみて姨捨には行かざりしとぞ、又此旅衣の歌は荒井の宿に泊りし時に詠みけるとなん。

小野お通



小野千代女



△思ひ出多き

千代は幼き頃より小野のお通に仕へて文道に心をよせ、やさしき女なりしが、都の人喜藤左衛門といへる者に心を通はせ、思ひ余れる秋の暮に、此歌をば詠みける、お通ひそかにこれを聞き、千代を喜藤に添はせけるに、其頃は世も靜かならず、家おとろへて是非なく妹背の中も絶えなんとせしかば、其よし文してお通に歎きけるにお通もあはれみて、喜藤の方へ身を落つけ方の手當など細々と文に認めその奥に

とにかくに折ふしごとのたがひめを恨むる中ぞ契りなりける

喜藤も此文に感じ睦く過しけるに五年程の後、夫病みて亡り、よるべなき身となりお通が文を捧げては泣き臥もそゞろにうかれ歩きしとなり。

白いもの黒いもの（其一）



厄年のお產

丹科美保子

十二日曉方より降り出した雨の音しめやかに生暖かい風が吹く、此樣子では何もかも一時に咲きさうに思はれる。昨夜から時々輕き痛を覺えたけれど未だ〱大した事もあるまいと、思つて居ると、追々規則正しく痛んで來るので、故障のない内に產婆を迎へにやる。其間に六疊の方に床を移して火燵に寄りかゝりながら、消毒した產褥の上に穩かならぬ胸を强て靜めつゝ坐つた。痛は次第に强くなつて來る、少しも早く產婆が來て下されぱよい、さなきだに女のお產は生死の境にあると言ふのに、まして私は今年は厄年、よく世間では厄年のお產は重いと言ふさうだが、若しや私も難產するのではあるまいか、亡き母樣は此年に父上にお別れなされたが、嗚乎、私も……いや〱こんなに弱い事でどうなる、何事も氣の持ち樣一つ、もつと勇氣を出して、立派に生みませう、女の子三人もあるのだから、今度は如何しても男の子をと思つて居ると、不意に後の襖が開いて寢衣のまゝの良人が立つて被入る。

『產婆は直に來るさうだ、看護婦も一緒に連れて來る筈だから、暫く待つて居なさい……、併し未だ大丈夫かね。』

何だか不安らしい顏付で見て被入る、私は刻々に增さる痛を凝と押へながら『え、未だ大丈夫です……』がう〱と玄關に車の音がして待ち兼た產婆と看護婦の白い姿が見へた。

『どうも遲くなつてすみません』と早速分娩具を出して消毒して居る、私は橫になつた。雨は少し强くなつた樣である。お隣の奧樣がお產と聞て早速安產守護の鹽釜樣のお掛地を持つて來て下さつた、看護婦が枕元へ掛けたのを私は一目見たばかり、もう此時は陣痛益益强く、凝と目を閉て何卒一時も早く安產致します樣にとお祈をして居る。昔は聖賢の畫像を產室の四方に掛けたといふ事だが、此場合とても其れを見たり、感じたりする勇氣はあるまい、女は此苦勞は眞實につら

いもの、子供のない方はどんなに樂だか知れやしないと思ふ。併し〳〵此苦しみも五分か十分やがては勇ましい孤々の聲を聞く時の嬉しさは、とても經驗のない方には分るまい、ア、ちつとも早く生れます樣に。

「……」此痛でこそと思つたのに未だ生れぬ。

「そんなにお焦慮になつてはいけません、自然に出て參りますから」

と言はれても如何して凝として居られやう

「さ、是を召上りませ」看護婦の差出した赤酒一口、偶と目を上げると眞正面の壁間に掲げられた祖父樣の御眞像、慈愛あるお顔のお口のあたり、なつかしい微笑を堪へて凝と私を見下して被入る「お產は女の天職ぢや、何の苦しい事があらふ、今一息に其榮ある天職を果して仕舞ふがよい」と勵まして下さる樣に覺えたので「ア、今生れる此子も祖父樣に似て、何卒男の子をと思ふ一刹那。身體は輕くなつた、ほつと安心の一息、冷水に咽喉を濕す、……一分。二分。待ち設けた泣き聲は起らぬ、產婆は氷々と連呼して土瓶の口から水を含んでぷつぷつと嬰兒に掛て居る、私はあやしみながらも默つて居た「アツ、安田さん奧樣の腹帶を〆めて下さい」看護婦は確と結へて來れる私は遂に堪へ兼て。

「如何したんです一向泣きませんね」

「え。今直ぐで御座いますよ、一寸假死したんですから。」

切々と人工呼吸に手を盡して下さること半時餘り、未だ產聲は起らぬ、一應御醫者樣をといふので、早速近所の醫師に來て見て戴いたけれど、とう〳〵駄目であつた、嗚乎、折角苦しんだ甲斐もなく、遂に嬰兒は冷き軀となつて白木の函に納められた、原因は二重に臍帶を卷いて居たためである、私は別に轉んだ覺えも何もないけれど、やつぱり厄年だから私の代りに総ての厄を脊負ひ去つたのであらふ、今度は男の子を樂しみに思つて入しつた良人は又女の子と聞てさまで失望もなさるまいけれど「赤チャンが出來たら私に負ぶさせて頂戴よ」と待に待つて居た正子や美津子は嘸失望

することであらう、私も疲勞と失望のためがつかりしてしまつた。同時に寒さが身に沁て來る。

十三日昨日と引きかへて今日は寒いこと、湯たんぽ入れて寢て居る肩のあたりがぞく／＼する樣だ看護婦の白い姿が一層寒さうに見える。案じた程の事もなく熱もないし、氣分も惡くはないけれど四邊が何となく寂しい、其れもその筈友禪メリンスの可愛らしい搔卷に包まれて白い眞綿の帽子かぶつた、小さい人が居ないのだもの、昨日から何も慾しくないけれど「少しは



召上りませんと」と、安田さんがいふので朝飯と晝を兼てパンのトーストに牛乳一杯。

床の間に置かれた白木の函の上には暖さうなメリンスの綿入に白裏ついた羽二重友禪のチヤン／＼迄重ねて掛てある、嗚乎、それも今暫くすればお墓へ行てしまふのだと思ふと言ひ知れぬ思ひに胸が一杯になる既に三人の子供があるのだから一人位如何でもよかりさうなものだけれど、さて十ケ月の間、起居は勿論胎教とやらにも注意して樣々の苦勞した私はやつぱり悲し

い、併し何も知らぬ嬰兒は少しの苦勞もなく再び天國に去つて却つて幸福であるかも知れぬ私もつまらぬ思ひに頭を痛めるより心靜かに療養して早く元の健康に復しませう。何時の間にかうつ／＼としてしまつた。偶と目を醒ますと彼方の室で讀經の聲が聞える、「アヽお坊さんが嬰兒を迎へに來たのだと思ふと忘れかけた暗愁が又更に湧き出して來る、やがて良人と女中に送られて緣薄かりし嬰兒は永久に去つてしまつた後には物悲しき香の薰りが我が枕邊に漂ふて居る。

十八日今日は七夜當り前ならば赤飯に心ばかりの祝をするのだけれど今も寂しき產室に看護婦も不聊に苦しんで居る。

生憎產婆も差支があつて今日は來られぬとの事に仕方がないから謝禮の包を添へてお料理代として別封持たせてやる。引續き發熱もせず頭も重くはない、只一昨日からお乳が脹つて苦しかつたけれど、氷で冷してからもう今日は樂になつた、四つになる秋子が赤チヤンが出來るとお姉樣になるのだからとよく聞き分て覗きにも來なかつたのが此二三日チヨイ／＼私の傍へ來る樣になつた。

地方娘氣質

中以上の女子は其地の女學校でも卒業すると、爭うて東京に出たがる。無論大なる抱負あつてのことだらう。田舍娘といはれるのは彼等に取つては無上の耻であるやうな。そこで彼等は何を措いても都會風に化せんことを努むる。女としては無理からぬことだが。唯氣の毒なは、彼等の見た東京は眞の東京ではなく、飾られたる東京である。誰でもお客樣となつて他家に往けば、如何にも其家は氣樂さうで、御馳走も出れば、チヤホヤもされる。誠に居心が好い。それから見れば、自分の家はつまらない。御馳走も少い。況して蜜の如きお世辭など、求めても得られない。もう家に歸るのが嫌。偶ま女と生れた上は、こんな麗はしい樂しい家の人となつて、あのピアノも彈きたい、活花も習いたい、綺麗な着物も着たい、と有頂天になるのが、虛榮心の強い淺薄な女の常である。所が眞の東京の生活は極めて約かなもので、若し東京に於て今日地方の人々のするやうに、大ザツパな呑氣な生活を營んだならば、三月も經たぬ内に乞食をせればなるまい。學校の寄宿舍や下宿屋に居て、眞の東京生活が判るものでない。電車に乘つても只他所行の姿の人を見るばかり。彼等は概して東京の最もゆるやかな部分だけを見、それと自分の田舍の最も苦しい部分とを比較して、東京ほど好い所はないと思ふ。其淺猿しさは、お客樣に往つて歸るを嫌がる駄々ツ子同然である。（横井時敬氏談片）

白いもの黒いもの（其二）


KARASU.
KUROICHIO
ATAMANO KAMI
SUMI.
TSUBAME
KUROI SOUSHI
KUROERI.
KUROMONTSUKI.
KUROMANTO
KURO GAWARA
YOKUNOHITO
KAISUI
KUROUSHI



花電車

江戸紫

城で持つと云ふ尾張の國は名古屋から、檜の木曾やなまよみの甲斐の山坂を漸々の思ひで走つて來た汽車が、ア、疲れ切たと許り息を吐いて、サテ、もう、三つで終だと大欠伸を吐いて出て往つてしまふ。と、間もなく、黑塗の色鮮かなボギー電車が、車掌臺まで人を溢れさしてトンネルから飛び出して來る。

此時、何時でも屹度――風が吹かうが、雨が降らうが――此驛のホームに立つて居る、そして此電車で學校にゆく。が、然しこれは空の一方に大きな入道雲がムク〳〵と頭を出さうといふ時分の事。風が吹いて、見附の櫻の葉が砂利の上に散り敷く樣になると、名古屋發の汽車には逢はない、其代り、八王子からのによくあふ。此汽車の跡に來る電車は、ソ

レコソ大變……汽車が、小驛を通過するので一杯な人で運轉手臺から車掌臺まで目白押しと云ふ有樣。

此電車に私は滅多に乘つた事はありません。大抵、次のを待つて乘ります。丁度、此樣なことが新綠の頃まで續きます。どの驛でも同樣でせう。此驛の人達と話こそしませんけれど、顏馴染になりました。

毎朝、毎夕、乘り降りする人は大抵極つて居る。可愛い顏の渡邊さん、赤靴穿いて弟樣や妹樣と一緒の山元さん、脊のスラリとした竹谷さん、色の黒い津田さんなどで、皆同じ學校の方です、月曜には、歸省したらしい一高の學生を三人や五人見ない事はありません



「學生の爲めに造へた樣なもんだ」とよく聞くのも無理もない事、全く背廣だの、カーキー服だのなんぞは藥にしたくも見られない。よし居た處で、學生で押さ

れて見じめなもの。男許りだつたら隨分殺風景なもんでせう。女許りなら又喧つて矢釜しい事でせう、兩方乘るからコントラストがいゝんでせう。

女では三輪田、雙葉、跡見、御茶水、其中でも御茶水が一番多いんですの、これを大にしては、蒲紫のバンドをキリヽと締めた女學部より、小にしては、元祿袖の可愛いゝ小學部、扨ては幼稚園の御孃さんに至るまで大分な人數が乘ります。

リボンの色はクリーム、黄色、青い色に桃色、オレンジもあれば、ホワイトもあり、終には、紅、緑、紫やと、一高の寮歌が歌ひたくなる。髪の形は、御下髪に束髪に又はローマだの、ルイザだの、まるで西洋史でも復習する樣、コロネーションはまだない。脊高の方、低い方、ソマトーゼを飲んだ人、飲まぬ人、白い方、黒い方、シヤンシヤンな方、ウイシヤンな方、もつと書けば二錢で三本のGペンでは堪らないでせう。

花ならば、御茶の水は西洋花チユリツプか、ゴールドメツソーか、跡見は日本花――桔梗か、撫子か――。

濃艶と瀟洒と、可憐と重厚と、とりどりに數多の花を滿載した電車が、朝な、夕な、老松の下、御壕に添つて波間の水鳥の夢を破りつゝ、西に、東に走る。

學生仲間では、此線の電車の事を「花電車」とニツクネームドして居るんですつて。「花電車」！ほんに相應しい名、毎年、四月になると花が替る。五年間、「學校」といふ花園に育てられた花は、其懷しいガルテンを出て他に移される。さうして、小さい、可愛らしいのが其跡に這入つて來る。毎年同じ事をするんです。

男では帝大、高商、一高などで、帝大の方なんぞになると既う「紳士」といふスタイル、「實務」な容子で居るのは高商、一高の方は、拾錢の下駄を穿いて威張つて居る。下駄で思出したのは、何日だつたか、制服を着たライン が乘合せたんですの、處が、間もなくポケツトに手を入れてモヂモヂして居るから、何をするんだらうと見て居ると、やがて取出したのは二尺餘りの荒繩、それで、バツクリと口を開いてる靴――し。

かも兵靴をムンヅと縛つたんですの、おまけに一杯な人の中で平氣な顔で。私、此時可笑しくて、可笑しくつて、プッと、噴出たいのを一所懸命で我慢したのを人の悪い、よし子さんてば私の横腹を頻とつッつくんですもの。ほんとにアンナ困つた、苦しい事はなかつたわ。



帝大は襟で其科が解る、Lもあれば、Jもある、Mに、Tに Sなんて、大抵解る。一高は帽子の白線に I、I、IV、K、Y AMADAだの、I、I、I、J、TODAだのと、御丁寧に姓名がローマ字で書いてあるので、御陰で大分名を覺えた。I、I、IVは一部一年四ノ組と讀むので、一部の獨法、又、I、I、Iは一部一年一ノ組といふんで、一部の英法だそうです。獨法の人で、十人の中八人迄は薄片な教科書を出して、「ビッチ、ゲーベン、ズイー、ミー、アイン、メッセル」だの、「ワス、イスト、ダス」など〻會話の稽古をして居るなら、其人は今年入校たまだラインの綺麗な一年生、英法の一年の人はスケッチブックで頭痛を製造して居るのを見受けます。頭痛製造なんどと人の事は云へなくつてよ。自分だつて試驗が目前に迫ると、吊革に鹽鮭よろしくの容子で教科書を可愛がる。いゝえ、私許りでなく、他の人もして居る、金釦も、

リボンも、何の事はない、正にこれ宛然たる一個の車中圖書館！

艶陽四月、花笑ひ、鳥歌ふ、世を擧げて人は春に醉ふのぞ、こはまた何事ぞ！ノート片手に此歡樂の世を人に背いてあるは、五年の星霜を鳥の子紙一枚で校門を出て、一橋に、藏前に、向陵に、江田島に、名譽の冠を戴かんとする人々。されば花咲いてから靑葉になる迄の電車の内は、書讀む人が夥しい。表題を竊と窺見れば、或は「英文解釋法」或は「代數學難問解義」

四月の中の書讀む人の眼の色はまだ穏である。花散り靑葉稍吹く五月になると少し變はる。六月になると殆ど變つて、七月には血眼となる。花に背いて百日の間夜も寢もやらずして勉め、僅か五日間に五年間の智識を試めされて、首尾能く入校れば上々吉、大抵は一年有難い名を頂戴して暮らす、有難い名とは何ぞや、子曰「中學卒業生の遊べる者之を浪人と云ふ」。

五月の末から七月の始め頃迄雨が降るのを、或人は受驗者の汗と脂だと云つた。全く左様かも知れない。

あの、苦しい勉强の有様を見ても、私達の試驗なんぞ考へれば優しいもんだわねえ。

そして旨くやつた人達が新しい白線帽を被つて、私達の目に映る樣になる。「花電車」で通學する人もある

私の三本二錢のＧペンも大分疲れて來た。も一つ書いて止める事にしませう。

此線で、私の知つてる限りでは、代々木の鐵橋の所と、水道橋の處が一番景色が好い。兩方共、富士山が能く見える。代々木では木立の上に、水道橋では瓦の波の上に。

春ならば、霞に茫として能く見えぬ、時々夢の樣に白雪を見る事もある、が、大抵は氣がつかずに濟んでしまふ、それも、無理もない事。見ずや、遥かに目白臺の常磐木の茂みに白雲が掛つて、下界を包んで、其中を江戸川が淸く流れる、江戸川の櫻花、江戸川の淸流。

夏は、御山も衣を脱がるゝ、滿員の車掌臺で、後の方を見るともなしに見ると、覺えず私は頭を下げた。

清々しき其御姿!!! 下界では、煙突から頻りと黒雲を吐かせる、外濠電車が走る、河岸の倉庫の白壁が暑相な朝日の光を照り返す。

櫻の葉が散つて、御濠の水鳥が目に著く樣になると、御山も白にかへる。秩父颪しが吹き荒れて、「晩秋」が何時しか「初冬」と變ると、純白の御姿ます〳〵神々しく、ポール綱片手に執る車掌も、外套の襟深く立てる樣になる。

吁!!! ヨコハマとカマクラとダイブツとトーゴーとを有せる國の山よ美しき國の更に一層美しき姫よ!

私も、追付此「花電車」を出なければならない。何時出づべきか、二年の後か三年の後か、何時出るのか兎に角、私は此「花電車」を見棄てなければならない。帝大工科の髭さん法科の黒さん、一高のYさん、Tさん、御茶の水の渡邊さん、さうして毎朝乘合はす人々、私は永久に忘れまい。

「運命」と云ふ神は私を此ガルテン「花電車」に押し入れて又押し出す。誰れも此力に抗し得ぬ。角帽も、白線帽も、高商も皆押し入れられて押し出されてるのだ。三月に押し出される人もある。九月に押し入られる人もある。私は三月に押出されなければならない。

「花電車」! 私は此名の甚だ相應しいのを喜ぶ。さうして自分も「花電車」に乘りつゝある一人であることを感謝する。

「花電車」よ。

■顏面皺延し法■

老衰者でもないのに若いうちに額に皺が出來て、四海波靜かならぬ心を持つ青年男女が少くない。此の如き人々に福音を傳へやう。頗る簡易で甚だ有効である。まづ一枚の强い白紙を取來り、それに表だけに鷄卵の白味を塗り之をよく乾かし、次に之を使用せんとする際に更に一度鷄卵の白味を塗り、丁度よく額の皺のかくれる廣さに此紙を剪刀で切つて、白味が乾かぬうちに之を其皺の部分に貼るのである。此紙を貼るは夜寢る前で、朝には剝ぎ取る(ひとりで剝ぎ取る)。數夜之をつづけると大抵の皺はきれいに消失せる

春の夜や再びはやるすたれ歌　楳面坊

近松は色ものかくや花の宿　月波

春風や生洲の鯛に待つ時鳥　不水



若草

つゆくさ

水仙が咲なくなりました、櫻も梅も美しいですけれども、此頃の花のうちでは一番これが好きですわ。麗らかな風、霞につゝまれた山々や、林檎の樣なほつぺたしてゐる田舎から來た子守の顔が、日光をうけてぼんやりしてゐるのや、ほんとに樂しい春は變りませんのねえ。人の心ものび〳〵して居て鎌の樣に鋭どかつた月影さへあんなに優しくなつたでは御座いませんか、いつになつても幼ない時の可愛いメモリーは私の胸からどうしてもはなれ去る事は出來ますまい。

秋に逢ふ毎に、心の秘密が見え透く樣に思はれて、年毎に心變りが致しますけれど、一度春の音信をきけば、胸の氷もとけ果てゝ昔の自分に歸れるんですもの、樂しい〳〵八九歳のなつかしい追懷がとめどもなくあふれて參ります。

柔かいビロードの樣な日光を背にうけて、眞白に咲いて居る「はたんきよ」の木の下で、せり、はこべ、ペン〳〵草などよせ集めて、紙で作つたのや、土製のお人形樣を飾りたて、清水で買つて來た赤だの、黄だのと、いろんな色のぬりつけた可愛いお辨當に鳥の餌の樣な草餅入れて、從姉と短かい春の日を毎日毎日忙がしく送つて居つたのですけれど、たつた一人の友達だつたその芳枝さんは亡き人に數へられる樣になりました。もう今年で足掛五年になります。十五の眞夏。私の十二の年でした芳枝さんこそほんたうにあはれなはゝのない少女でした。父は戰の場に花々しい最後をとげ、母なる君は三年の後、月見草の咲いて居る薄暗い夕べ、まだいたいけな四つの愛娘を殘して消えてしまひましたの。草の露と。

姉のない私は、ほんたうの姉樣だとばかり思つて居りましたけれど、學校の友達が宮部さんつて呼ぶんですもの不思議に思つて母にたづねましたら、ほんたうはさうなんだけれどもだまつておいでよと申し聞かされました。

「貴女は大きく成たらきつと大へんな病氣が出る」と學校の體格試驗で醫師から注意をうけたとかで、さめ〳〵と泣いてらしつた事もありましたわ。

とう〳〵肺といふ慈悲のない病はまだ世の中をしらぬ少女の尊い生命をうばひとつてしまひました。

はかなき定め！私はまだ其定めまで達しない常世の歡樂と希望に滿ちた、佐保姫の寵兒の一人で御座います。前途餘りある自分の生涯で、花の香こまやかなる春の日に、最も華やかに、またはげしく戰ひの門出を致す積りで御座います。細く長うに送ろこそ、眞に幸福なる生涯なれと、あたりの人は皆さう申して居ります。母も私のために幸のいつまでもつゞ



けかしと、祈つて居られますけれど、いづれ一度は逢ふ秋の風、おなじ散るならば櫻の樣に散り果てたいと望みます。しかも樂しみをつくつて――例へ平家の樣にはかなき最後を見るにもせよ。

……………

今年は雛祭も昔の樣に賑かに致しました。兄の誕生日も一緒で御座いますの。熊本へ行つてゐた間は女ばかりで遊ぶんですものどうしても活氣がなくつて淋しいでしたけれど、もう此頃では何をするにも面白く樂しく遊べる樣になりました。自分の誕生日とはいひながら、優しく床しかるべき雛祭の席にまで友達を集めて來てからさわぎ致しますの。けれど、私達の範圍内を犯されたにせよ、殿方の多勢が交つてゐらつしやる方が愉快で御座いますわ。だから私何々婦人會、音樂會などゝいふ集會に行くよりは、紀念會だの、ボートレースや運動會の樣な物の方が好ましう思はれます。どうせ音樂會と運動會とはてんでくらべものには出來ませんが、私には西洋音樂の美を解する力もなければ、音樂會などいふ公衆の場所で奏づる音樂には全く趣味をもつて居らないんで御座います。私は熱し易い方ですから、藝術のためには生命でも捧げうるだけの信仰をもつて居りますけれど。

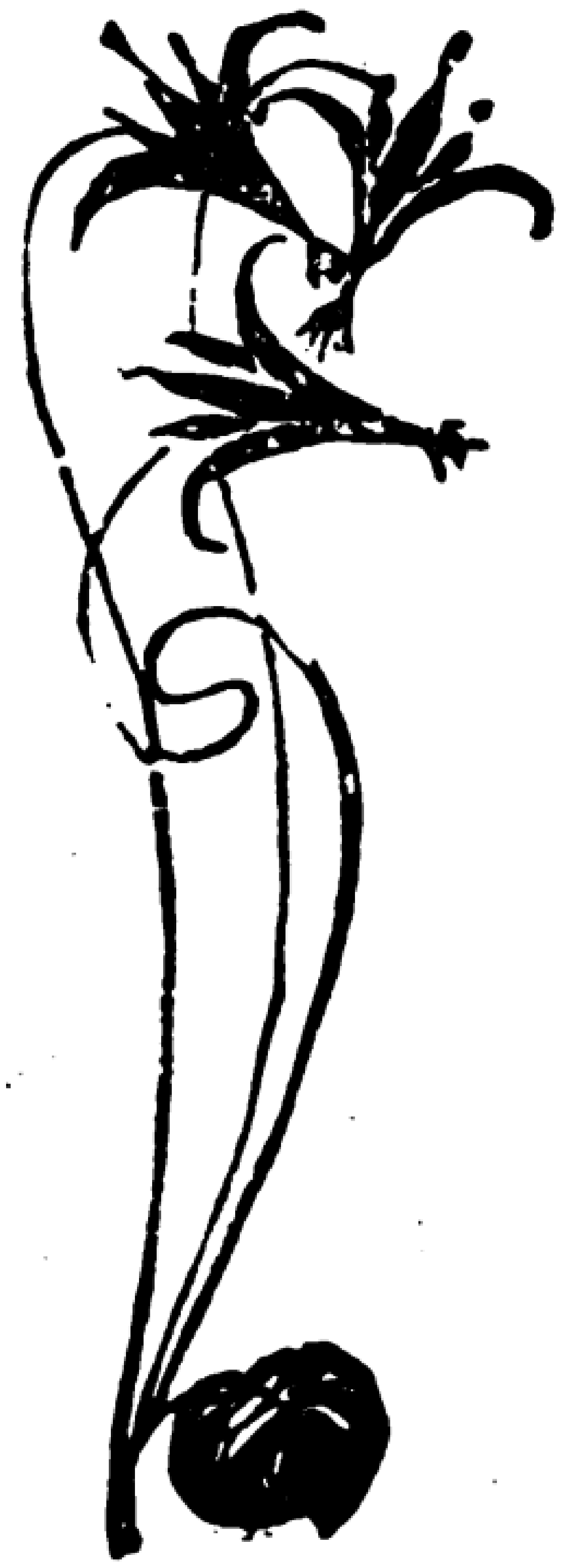
美術と音樂と文學の中で、大作のものよりは挿畫の樣な、琴よりは笛の音、小說よりは詩や歌が最も強

くスピリットに感ずる事が出來ますの、宗教よりは文學によつて慰さめられて居る身なんですわ。

クリスチヤンといふ名の下に日曜毎に敎會に出て居る私は、神と人と自分とをあざむいて居る罪人なんで御座いませう只美の爲に憧憬して、會堂に滿ちて居る聖い溫和な人達の顏にながめ入り、妙なる調べにあはせて歌ひ出るコアイヤの讃美の歌にしばしうつとりとして來るばかりで牧師の說敎などはなかなか心にしつくり入れる事はおぼつかなう御座います、私の樣な者ばかりがこの世に多くなつて來たなら敎會も日々に衰へて行くばかりで御座いませう。一層禮拜は止さうかと思はないこともありませんけれどやつぱり何故か慕はしくつてつひひきつけられてしまひます、私聖書だけは放したく御座いません敎會もひきつゞいて參りませう。わづかの時間でも此塵の浮世と放れて聖き父と聖子聖靈を讃へ得るんですもの。

青柳の糸めも見えず春ごとに
　花の錦を誰れか織るらん　舒恒

荒れはてゝ今は野となる庭の面に
　花のむしろをしく菫かな　慶永



摸倣の話

文學士　上野陽一

△人間の智惠の本

茲に摸倣といふのは、眞似する事をいふのです。猿の人眞似、鸚鵡の人眞似など言つて、猿や鸚鵡は特別に眞似をするものゝやうに思つてゐるが、實は人間が一番眞似をするもので、人間の智慧は皆な眞似から來て居ります。學校へ行つて物を學ぶのも、先生の眞似をしに行くのである。また赤兒は生後十ケ月目位から眞似をし始めます。それから我々の言語にしても、矢張り眞似から起つて居ります。之を人の眞似は嫌だからと言つて、自分一人の言語を使つては、人に分りません。實に眞似は大切な事であります。彼の飛行機の發明などといふ事も、實は鳥の飛ぶのを眞似したのです。修身の時間に學ぶ事も、あの人は感心な人だ、自身もあの樣になりたいと言つて眞似をするのです。

△西施の顰

併し眞似には餘り感心できないものもある。例を擧ぐれば、昔支那の西施といふ美人が、或時胸が痛んだので、顏を顰めて如何にも痛たさうにすると、其の樣子が實に美しかつたので、或る女が之を見て、成程あの樣子がよいと早速眞似をしたら、只さへ醜くい顏がます〳〵醜くなつたといふことで、かういふ風の眞似を『西施の顰に倣ふ』と申します。顏を顰めた西施が美しく見えたのは、顏を顰めたからでなく、元來美しかつた爲であるから、其處を考へないと飛んだ失敗をします。また或る女學校で、修身の時間に、或る婦人が肺病の夫につかへ、大變深切を盡したといふ話を生徒に聽かせて後、或る時生徒に何んな夫を持つかと

聞いて見たら、私は肺病の夫を持ちたいと答へたといふ話があるが、これも西施の顰に習つたもので、眞似の間違つたものです。故に眞似はすべて外形ばかりを見ないで、よく内容精神を見てしなければなりません。

△知らずにする眞似

以上述べたもの、其他商品の摸倣なぞは、態と骨を折つて眞似をする場合ですが、其の外に、眞似とは知らずに眞似してゐることが澤山あります。其の



一つは、觀念或は智覺が手本となつて身體が其の眞似をするものです。それを實驗するには、糸の先におもりを附けて手の先にぶら下げて、假りに後ろの襖の事なり運動場の事なりを考へるとすれば、自分では動かない樣にして持つてゐる積りでも、知らず〱それが襖の方向、或は運動場の方向へ幾らか動きます。又之れと同じ樣な道理で讀心術といふ手品のやうなものがあります。或る品物を室内の何處かへ隱させて、其の隱した者の手を握つて

室内をぐるりと廻つて、其の所在を言ひ當てるなどするのです。これは手を握つて室を廻はると、其の場所へ行くと、隱した者の筋肉が自分では知らずにゐるがピリツと動くから、當てる者は其の響きによつて隱した方角を知るのです。また體操をする時、不動の姿勢を取らせると言つても、實際は不動でなくて、後の室の事を考へてゐると、幾らか體が後の方へ動くといふ風に、腦の働いてゐる以上は、必ず少しは動いてゐます。つまり頭の中の考へ通りに、自分では知らずに眞似をしてゐるのです。此のやうに、すべて考へる事は必ず運動となつて現はれます。

食物に就ても同じことです。學生が學校の歸りに豆を買つて行つて、之を机の傍に置いて試驗の準備をしてゐるとすると、一所懸命書物を讀んで居る内に、何時の間にか手が豆の方へ行つて、之を食べます。試驗準備に氣を取られてゐるが、豆といふ考が頭にあるから知らず〳〵手が其方へ働いて、二時間位も經つと、すつかり無くして了ひます。此のやうに、頭に何か考へがあると、身體は何時の間にか其の通りに動きます昔の偉い人は、是れ故に惡い考へを持たぬやうに、惡るい事を聞かぬやうにと教へてゐるのです。

△容貌を變へる事

次に外形の摸倣、特に顏の事を言つて見ると、此の顏、容貌の工合は、元來生れつきのもので、何うする事も出來ぬやうだが、或る程度までは變へることができます。まづ學問をすると利發さうになります。これは事實で、湯屋に行くと、皆な裸體だから八百屋だか先生だか分らぬが、顏を見ると分ります。さういふ人人は生れた時から其んな顏なのではなく、平常の生活が變化さしたのです。それを逆にして、平常顏を眞面目に引き締つたやうにしてゐると、心まで眞似をして眞面目になります。またそれが容貌に變化を與へるから、常にさういふ顏付をしてゐる必要があります。昔の賢婦人といはれる人々は如何なる時でも侵すべからざる威嚴を具へて居て、剽掠などゝ手を下せなかつた

といふ事もあるから、此點から言つても、平常隙のない顔をしてゐることが大切です。他所行の顔をしてゐると、心も落ち着いて來ます。何か慌てるやうな事があつても、身體を先づ落ち着かせると、心も自然落ち着くもので、火事や地震があつても、身體を先きに落ち着けると、心も眞似をして落ち着きます。

△數息觀の敎へ

も一つ呼吸といふ事も大切です。これは生理上には別の意味があらうが、心理學上には又違つた意味があります。呼吸を調べる事は、心を落ち着かせる上に最も必要です。其の偉い人は、數息觀といふ事を敎へました。これは自分の呼吸を數へることで、面白い敎へです。呼吸を數へると外の事を考へるいとまがないから、精神がずつと落ち着いて來ます。人と喧嘩して腹が立つときなぞ、息を數へると落ち着きます。また眠られないといふのは、もや〳〵と色々の考へが出るからで、さう云ふ時にも呼吸を數へると眠られます。



△似た者夫婦の理

次に人格に對する摸倣に就ていふとこは人と人との眞似の仕合ひで即ち感化の意味に當ります。目上の人と目下の人と集ると、上の者に下の者が眞似るといふ事が多くの場合に起ります。先生と生徒間などには最も多く之を見るが、敎育といふまでゝなくとも、目下の者は目上の者の眞似をします。昔から「似た者夫婦」と言つて、初めは似て居なくても夫婦になると、妻の性質が變つて夫に似て來ます。夫が繪が好きなら、妻は私も好きとなる。猫が好き、犬が好きといへば、私も好きだといふ事になります。「亭主の好きな赤烏帽子」とか言つて、長い月日の中には自然と眞似をするやうになります。

△女中を使ふ呼吸

それが段々と眞似をして、目上の者と目下の者と一致して來れば問題はないが、例へば女中が奥様の考へ通りに行かぬとなると、命令禁止をしなければならぬやうになります。「おさんや、之をお爲」「そんな事を爲ちやいかぬ」と、斯ういふ風に奥様として女中に命令禁止しなければならぬ樣になるのは、極く拙い事です。奥様の感化力がないのです。斯う云ふ場合には、奥様は女中を咎るよりも、自分の足りない事を思はねばなりません。奥様が、するなといへば、女中の方では抵抗を感ずるもので、奥様としては實に拙いやり方です。故に感化を及ぼす爲めには、自分が先に立つて事をして見せるがよろしい。すると女中は抵抗を感ぜずに事を爲し、眞似をしやうと思はないでも自然事をするやうになる。之れが人間の普通の性質です。

東京は物見高いといふが、之れも右の一例と見てよい。或人が九段の上で何もなかつたがお壕をのぞいて居た。そうしたら其處を通る人がまたのぞいた。また其の後から來た人ものぞき〳〵して、人が黒くたかつて來た。そして最初にのぞいて居た人が神田で用を達して歸つて來たが、人はまだたかつて見てゐた、何ですか〳〵と言ひ乍ら人は見てゐた。實は何もないのだが、人の態度にすかされて見るのです。此處の呼吸を呑み込むことが必要で、奥様も女中をのぞかせて働かせるやうにしなければなりません。

△緣日商人のやり方

緣日の夜など歩いて見ると、大道商人が、シャボン齒磨粉などを、人を黒山のやうに集めて賣つてゐるが、あれが初めに何うして人を集めるかといふに、あゝいふ商人は大抵二人が組んで居て、一人がしやべり出すと、も一人は、如何にも感心したやうに聞いてゐる。すると人が集つてくるから、一人はお錢を出して買ふと他の人も買ふ。そして一方が疲れた時分には、他の

お客様のやうに見せかけて品物を買つた一人が代つて商ひをすることもある。といふ風で、すべて體度姿勢といふものは、知らず知らず人に影響するものだから此の呼吸を呑み込むことが大切です。

其の外、社會、自然界に於ても、其の社會自然界に對して我々は色々眞似をします。我々は日本に居るから、日本の言語慣習等をすべて眞似して居ます。また自然界即ち我我の住ふ場所が都會であるか、海岸であるか、或は山間であるか等も、其の人に非常な影響を及ぼすもので、山に住む者は大體陰氣になり海邊に住む者は陽氣になる等



色々關係があります。また性質は違ふが、彼の暴動、一揆などいふものは、多くは眞似から起るもので、一人ではなか／＼竹槍などを持つて出掛けられるものではないが、二十人三十人となると、眞似をして何んな事でもやり出します。或は若い女が往來を行くと、男がからかふ事があるが、これも男が一人の時ではなくして、必ず二人以上の時のやうで、これもやはり眞似をするのです。以上の如く、人間はいろ／＼眞似をする性質を有つもので、之を研究すると修養に非常に利益があります。（千代田高等女學校にて）



狹い窓から廣い世間へ

みざこ鳥

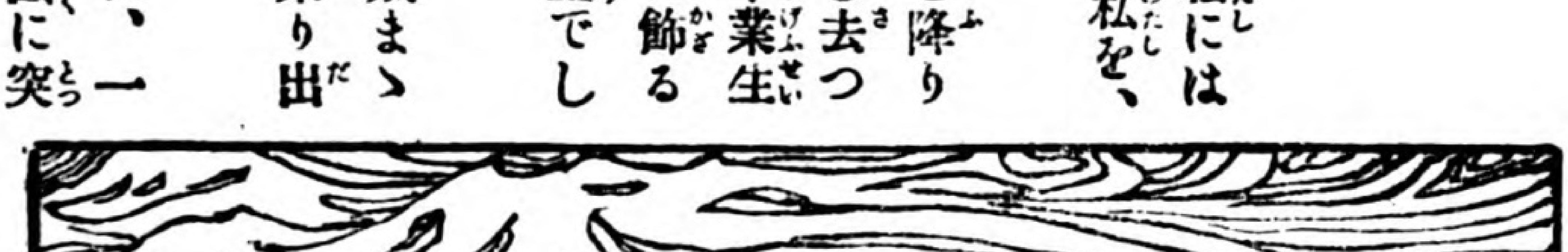
蒼生樣

待たぬ日は暮れやすきもの、お別れして早や十日となりました。今の私には住み憂き故郷も、春はさすがに思ひ出多く、溫き涙は現在をよろこびえぬ私を、追憶といふ過去の世界に導いて、しばしを夢の國によはしめます。

あの晩はありがたう、薄暗くて時々まばたきする樣な電燈、シト〳〵と降り暮した春の雨、斯うした淋しい宵に、蒼生さんタッタ一人に送られて都を去つた私、それでも、あれから二日の後には、今迄村になかつた、××校の卒業生として、迎へらるゝ身なんでした。しかしあの淋しかつた都落は、故郷に飾るべき錦を持たなかつた、私にはむしろ、ふさはしかつたんです、私は本望でした。

誰れに遠慮氣がねも入らぬ一人旅の呑氣さは、泣かうと笑はうと勝手氣まゝ私は不圖した氣まぐれから、山陽線を捨てゝ、此の春の日を、神戸から乗り出して、瀨戸内海の船の旅をしました。

船が大連行きでしたから、旅客の殆んど總ては玄海灘を越えた新開地に、一攫千金を夢る剛の者計り、甲板や食堂での話は、まるで湆れこそと黃金國に突





貫する一騎當千の猛者が虹の如き氣焰、私なんぞは頓と別世界に來た樣な氣がして、卒業際に旺んに口にした、實社會とはこんなものかと小さくなつて聞いて居ました。

此所の景氣のいゝのに比べて、三等客の甲板は人計り多くて不活潑のものでした。赤い襦袢の上に毛布を被つた女や、薄つぺらな敷蒲團を敷いて其の上に正體もなく寢そべつて居る、頭の禿げかゝつた勞働者風の男や、亂れた髮をかき上げ樣ともせず、靈ぬけたものゝ樣に煙草をくはへながら懷手のまゝ突つ立つて、白く碎くる波をみつめて居る、色の蒼白い女なんか、見るから食ひつめの、アブレ者の、さはいふものゝ氣の毒な寄り合ひと思はれました、夕方の散步の時、再び此處をのぞいた時は、大方キャビンに引込んで居ましたが、片隅の方に獨り橫向きに、ベンチに腰かけて、見えもしないだらうのに、膝の上に新聞を擴げて居た鳥打帽の男が、口元まで燃えて來る煙草を、プイと海の中に放り捨てゝ立ち上つた時、袴を著て居た事が解つて、一寸異樣な感がしました。

日本の多島海と云はるゝ瀨戸內海を縫ふてすべり行く船は、時々港々に泊りましたが、此の港と云ふ感は私に珍らしかつたんです。本船めがけて漕ぎよするハシケは、何れも多少の乘客を途つて來たのですが、其の中にはトマの陰から三味線の音の洩れ聞えるのもありました、姿も樣子も見えませんでしたが、歌は何處の國にでも聞く事の出來る、みだらな節で、合間々々には黃色い笑ひ

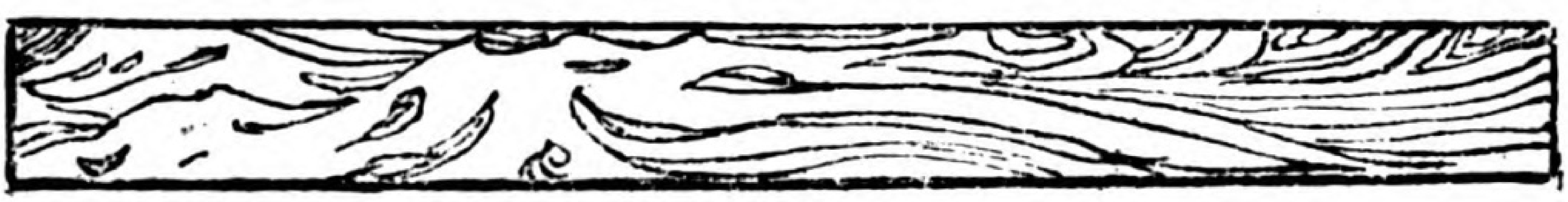


聲や、フザケまはる聲なんかも聞えました、それが午後の日を受けてギラ〱する海面を滑つて、岡の隅々までかすかに響く處なんで、まだ見ぬイタリーの面影があるなどと、獨り悅に入りました。時々嘴の赤い鳥が船の前後を飛びまはつて居ました。

いよ〱九州に上陸して故山の人となつたのは其の翌日の夕方でした。

○

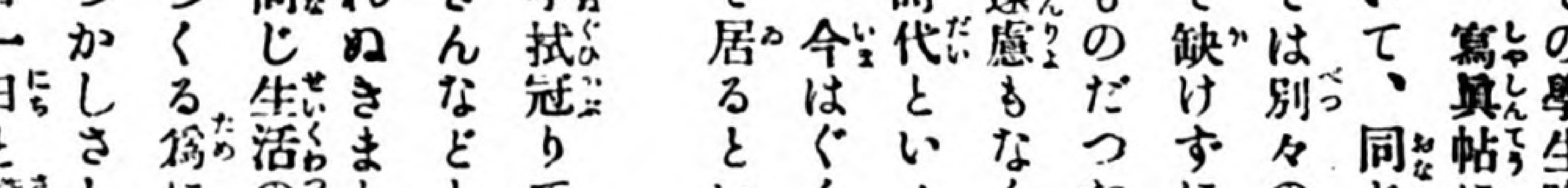
卒業といふ事を、さまで意味あるものと思はなかつた私は、故郷の土を踏んで始めて自分は卒業したんだなといふ事を考へました。同時に私が、自分自身の餘り賴むに足らざる事を見出して居る以上は、私は故郷の人の期待にそむいて居る事を悟りました、人は三年の月日を、私にのみ有益であつた筈にきめて居るんですもの、ですから日を經るに從つて、端書一本すら滿足に書けぬ事を見出したとしても、なほ彼等は彼等の期待が無理であつた事を悟りはしますまい、そして、其の期待にそひえぬ私の腑甲斐なさを思つて、彼等の石の樣に硬い頭に、女子敎育を呪ふべきものと刻みつけるだらうと、怖ろしく思ひます、さりとて私には小學校敎員の職ですら、その責任と、自分の養ひえた力とを比較する時は、さう無造作に引き受ける事は出來ません、だから蒼生さま私は矢張り、世渡術の第一頁より學ぶ外はありますまい、今の處、自分を爪の垢ほどもゑらいと思ひえぬだけが、私の幸福かも知れません。





いよ〳〵袴を捨てゝ、前掛けとなつた今、昨日までの學生時代といふ事を考へますと、種々の感に打たれないでは居られません、寫眞帖に納まつてる三十人近くの人々は、三年の間同じ敎室に同じ講義を聞いて、同じ問題に頭をつかつて來るものですが、わづか一月足らずを經た現在では別々の道を別々の手段で渡つて行かうとして居ます。此の幾人かゞ何時まで缺けずに居るかも疑問ですが、もしも何時か何處かで一緒になる事が出來るものだつたら、其の時はどうでせう。敎室の窓から往來を眺めて通る人毎に、遠慮もなく、皮肉な批評を浴せかけた元氣はなくとも一人々々があゝした學生時代といふ過去を持つて居る事を感謝する位ではありたいものと思つて居ます。今はぐくんで居る何物にも、若い血の氣の通つてるまゝで、幾程かでも成長して居るといふ自覺が持ちたいものだと思つて居ます。

私の小學校友達は大抵人妻となつて居ます、昨日も手拭冠りで赤ん坊負つて藁賣りに來る女と顏見合はせてオヤ末永さんオヤ松本さんなどとつい呼びかねて居る昔の姓を呼び合つて、餘りの不釣合に笑ひもされぬきまり惡さを感じました、あの樣にして彼女達は、祖母や、母が通つたと同じ生活の路を辿つて行きつゝあるのでせう、そしてまた彼女達に似た子供をつくる爲に自分の骨を削つて居るのでせう。私はかうした人達に逢ふ毎に、なつかしさと呪はしさとを同時に感ずるのです、しかし一方には昔の時の面影は日一日と蠶食せられつゝ





あるのです。

田舍は神の造れるものにして都會は人の造れるもの也。

とは云つてあるかも知れませんが、自分にかけ離れた神様より、タッタ一人でいゝから氣の置けない友の方が望ましい私には、矢張り人臭い都會の方がなつかしい、喜怒哀樂を感じ別ける事の出來る神經が持ちたい。田舍の生活を朴訥の神聖のといふのは皮想の觀だと私なんぞは思つて居ます。試みに村人の集會所である理髮店をのぞいて御覧なさい、其處に新聞の三面記事に聞き入つてる男女が幾人あるか。

○

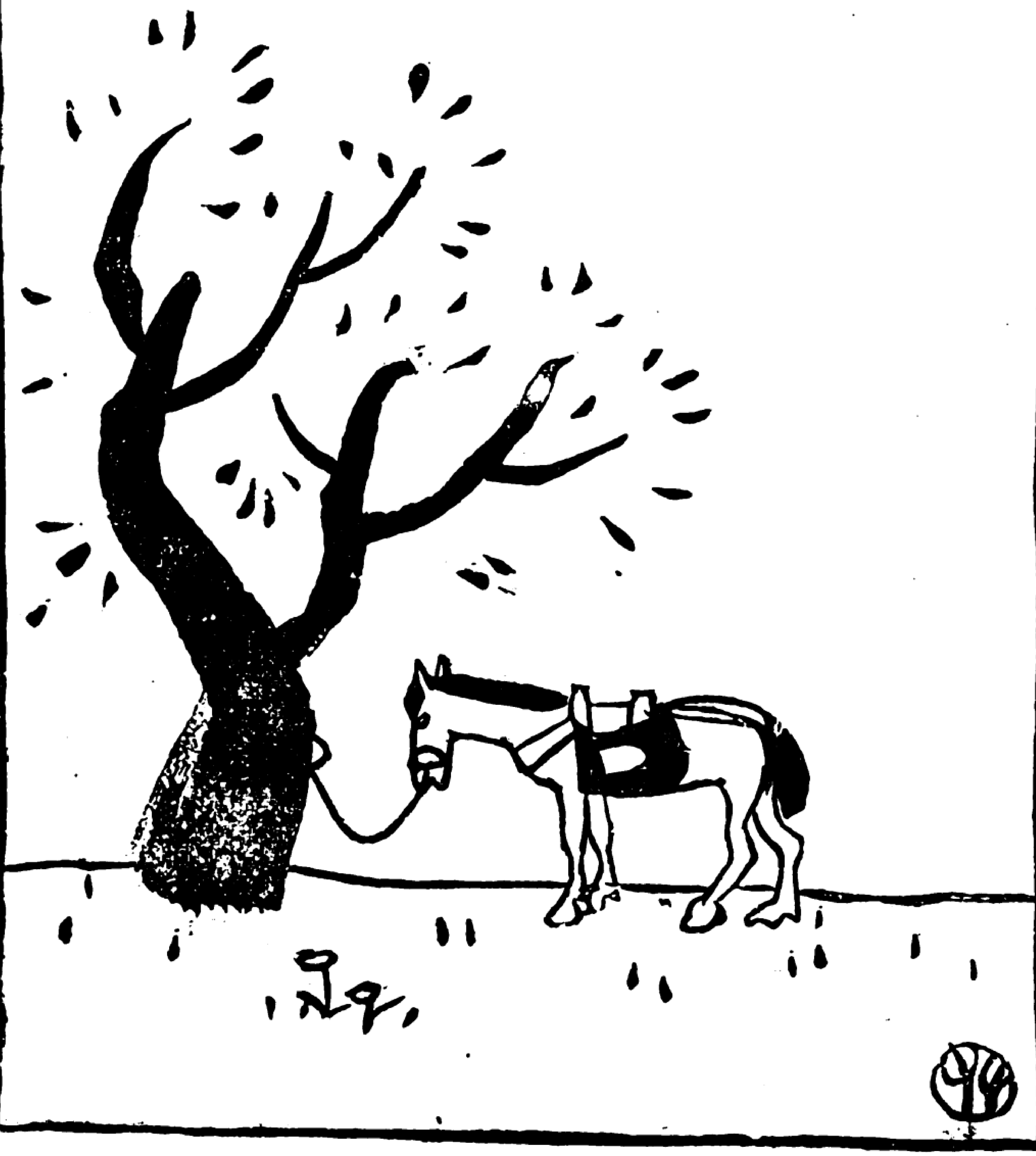
多感なりし春も、まさに暮れんとする時、雜司谷早稻田の杜かげには、去年の樣に、ふきながしの鯉が柔い風を受けてひるがへて居るでせう、玆九州も苺黄ばみ水田に蛙の聲がする樣になりました。

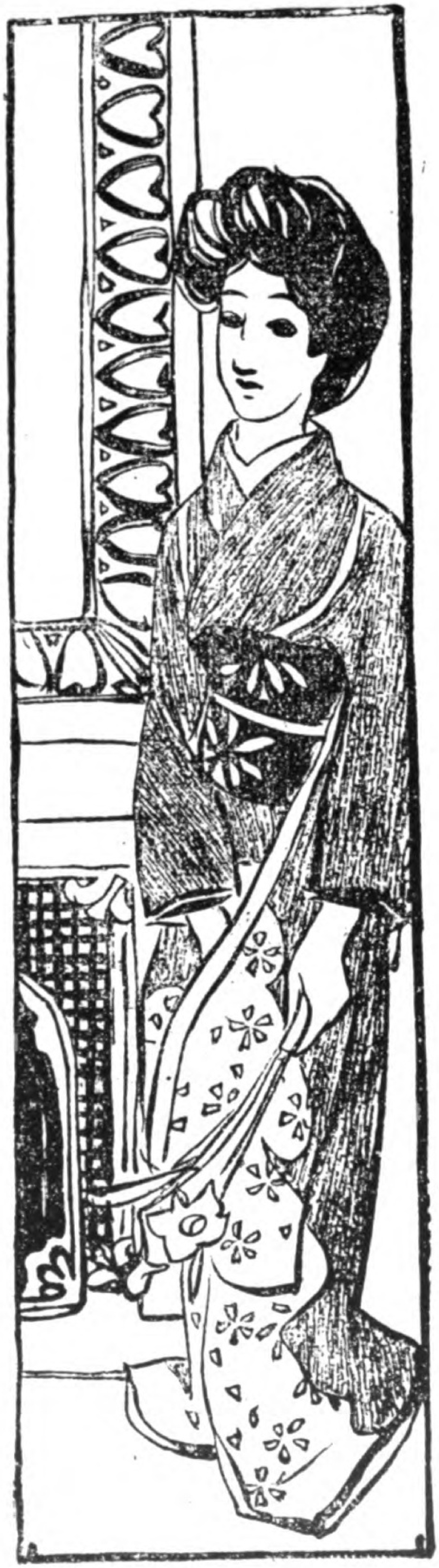
△廢物利用△

愚かしき兒、家に客のありける時、役にも立たねばとて、勝手にて七厘の下のみあふがせられ居たるを、出入りのものふと見つけ、大層御精が出ますねと云へば、あゝ母さんもほめてよ廢物利用だつて。

春野

野や静かなり、
糸遊夢のごとく
草のかをりは
酒よりも濃き。





蒲生君平の話

梅澤和軒

一

蒲生君平は、親もなく子もなく、妻もなく板木もなく、金もなければ死にたくもなしと歌つて、自ら六無齋と號した林子平と、

比叡の山のぼりて見れば哀れなり
　手のひらほどの大宮所

と慷慨した高山彦九郎と共に、寛政の三奇人と稱せられてゐる人で、餘程普通の人とは變つて居た。

下野宇都宮の人で、家は油屋をしてゐたが、非常に讀書が好きで、商賣の事はちつとも構はないといふ風で、油を買ひに來る客があると、器物の大小に應じて油を盛つて與へ、價の高下などは少しも顧みなかつた

といふことである。

こんな話は澤山あつて、或時近所に火事があつた際などでも、家の人々は非常に周章て丶家材を運ぶに忙殺されてゐるのに、君平は何處かへ姿を隱して了つて、いくら搜しても見當らなかつた。そして火事の消えさうに爲つた時分に、屋根の上から降りて來て、今晩は火事の火で明くて、本を讀むのに大變都合がよかつた」と言つて、家人を驚かした事がある。



また或時、生麥を庭に撒いて、鷄や犬の暴さないやうに番させて置くと、驟雨が降つて來て、それがダイナシになつても、平氣で讀書に耽つてゐて、家人が歸つて來てびつくりして其の譯を聞くと「鷄や犬の番はしてゐたが、雨の番はしなつかた」と言つたといふ奇談もある。こんな所を見ると、君平といふ人は、隨分奇人の如うであるが、其の實、極めて眞摯な、國史家として漢學者として實に造詣の深い人である。其の熱情が迸ると。往々常軌を逸するが、決して沒常識な奇人ではなかつた。親友馬琴が「蒲の花かつみ」に記して居る一節は、よく彼れの性行を示してゐる。

いと早くより石橋翁の門に入りて、勸學研究こゝに年あり。かゝりし程に大母の物語によりて、祖先の賤しからぬを知り、みづから氏を改めて、志いよいよ堅く、よしや忠義の狗となるとも、亂離の人とならじとて、切りに奬み學びけり。母に事へて孝なりければ、田園を半分ちてとらせんとしてけるに、いたくこれを推辭みて曰はく、わが兄不幸にして中空に身まかり給ひ、且つ其の子は倘をさなし。さるを今多くもあらぬ田園を我が爲めに分たせ給はゞ、幼なき者は何によりて荒年の飢寒を凌がん。およそ故なく田園を分つは、親族怨みを結ぶの本なり。我れは一歩の田を得ずとても、とかくして一期を送らん。甥はわが母の嫡孫なり。渠が身ゆたかなる時は、わが母も亦優におはさん。いつくしみをいろひまつるは、ひとり甥の爲のみならず、すなはち母の爲なればと、なく〳〵ことわりを盡ししかば、母はこれを賢として其の意に任せしとぞ。

甥といふのは、至つて愚かな、君平自身も「最も頑陋にして、人の敎を聞かず、聖人と云ふも賢人と云ふも知らず、君子と小人との辨を知らず、自ら其の心のまゝに任せて、世は濟むものと思ひ、人の指し笑ふことを知らず、誠に哀むべきものなり」と言つてゐる程で之を敎えるのに、色々心配をしたらしい。渠を戒むる詞に、

世に耻しく賤しき者は小商人の子なり。寢ても起きても金まうけ、金まうけ、金は親子の中でも別を立てねばならぬなど云ひて兄弟も踈々しくす。かくて萬兩千兩を積みても、心は貧しく、實に賴母敷からぬものなり。

と言つてゐるが、其他經書より齊家に關する格言二十餘篇を拔萃して「修身要錄」と題して渠をして座右の銘と爲さしめるなど、なか〳〵苦心をしてゐる。けれどもそれでも滿足出來ないで、恩師石橋翁の養嗣子松亭先生に托して薰陶を受けしめることにしたが、其時の依賴の手紙は、司馬溫公の謂ゆる、子孫愚と雖も經書は讀ませなくてはならぬと云ふ言葉に從ひ、懇々と

して甥の教育方を託したもので、其の文楚々として人を動かすものがある。奇人と謂はるゝ蒲生君平も、家庭にあつては、眞摯な家庭教育家であつたことが知らるゝ。

二

知典といふ妹が妙齢に及んで、福田家に嫁する時分に、曾大家の「女誡」を和解して、「女誡國字解」と名づけて與へ、日夜稱讀させて、女德を涵養せしめたといふ事も名高い話である。此れは君平が未だ石橋翁の門下にあつた二十歳前後の頃の事で、其の書の卷尾に、女誡の作者の事、作の謂はれを説明し、さて今頃の女は、徒に日をくらすのみならず、賤しき時の風俗に染みて、親の教もなく、夫の戒もあらず、其の心の任にして、物聞かんとすれば淫亂なる豊後節長唄、見んとすれば芝居のぬれごと狂言などに心を傾け集まる時は男などの善惡のみを語りあるまじきことのみ多く、一人も學問せんと云ふはなし、稀に物讀みせるも、伊勢物語や源氏などの淫を教ふる道具のみ。さて〳〵いたむべきことなり。



と言つてゐるが、今日の婦人の中にもちと耳の痛い人があるかも知れぬ。そして此の書は、妹の嫁入道具なればといふので、自ら表紙に松竹梅の圖を繪き、「於知與職」など書いて贈つてゐる深切は、感ずべきものである。

吉田松陰も女子教育の大切な事を論じて、「夫婦は人倫の大綱にて、父子兄弟の由て生ずる所なれば、一家盛衰治亂の界全く玆にあり。故に先づ女子を教戒せずんばあるべからず、男子何程剛勝にして、武士道を守るとも、婦人道を失ふ時は、一家治まらず、子孫の敎戒亦廢絶するに至る」とて、女誡を勸め、更に貞操儉節な婦人の養成を急務としてゐる。幕末の俊傑は、何れも女子教育に苦心してゐたやうである。

君平は京阪遊歴の際、大阪の儒者御牧氏と交り、其の知遇に感じ、其の女を迎へて妻としたのであるが、其の月下氷人を坂原愼六氏に依頼した文なども飽まで眞面目なものである。

秀賢(君平)不佞長く窮獨に處り、躬ら薪水の勞を執り、窶るゝも亦甚し矣。

獨身の自炊生活、さぞや難儀であつたらう。

然れども夙に文辭を學び、正名を以て任と爲し、幽憤を國史の亡絶典章の不昭に發し、竊に意を編修に留めて、居を閑散にトし、仕へず娶らず、但筆硯を弄し、宿志を償はんと欲す、近頃御牧先生に相得るに及んで、心其の性行和平にして先子の業を守り、儒素の風あるを愛す、遂に周旋數月、而して我を過棄せず、我に飲ましめ我を宿せしめ、東西一別してより、又書問相繼ぎ、情好の厚き兄弟の如し。是に於いて始めて結姻の心あり焉。

御牧氏の季妹は、江戸で御殿女中をしてゐた婦人である。御殿女中と云つても、「諸姫妾に教授す」とあるから、今日の家庭教師位の事をしてゐたのであらう。そして「女博士にして彤管の遺韵あり」とあるから、なか〳〵の學者で才媛であつたらしい。

然れども後宮富貴の間にあり、日に性を修飾浪華に移す、則ち其の驕期せずして驕、奢期せずして奢な

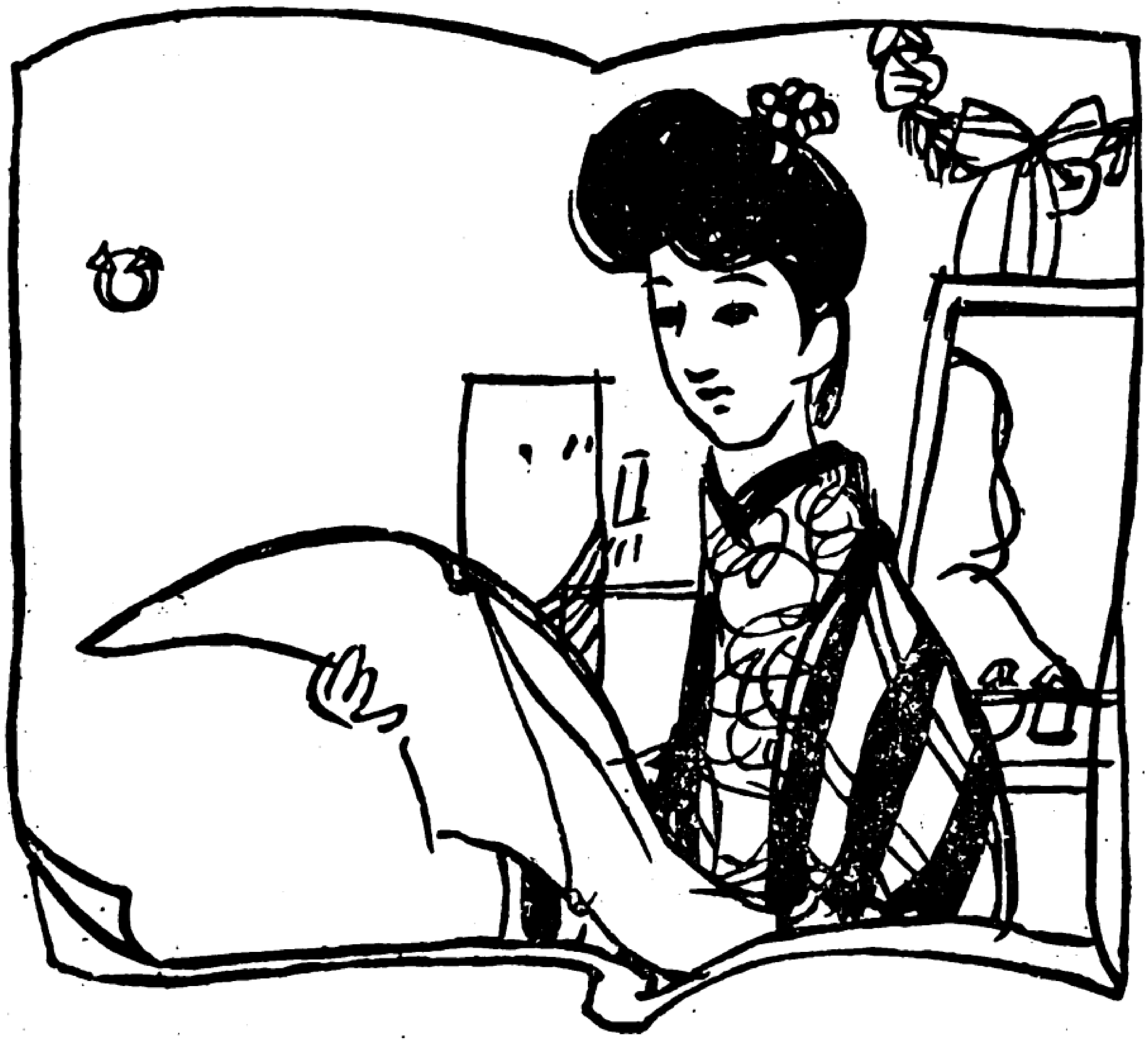
るにも亦物の情なり、夫果して然るか則ち吾が耦にあらざるなり。

と一揚一抑し、さて

今御牧の書浪華より來る其の姑と兄弟とを擧げて皆我に許す、唯姫氏之心未可知焉

因つて周旋を賴むと云ふので、大に心が動いたと見える。けれども彼が花嫁を迎へるのは、今日のハイカラの如く見合の寫眞を新聞に出す爲めでなく、「朝夕盥米の政を助けて、吾が志業を妨ぐる勿らしむるにあつた」のである。

結婚した時は君平は四十二才で、花嫁は三十前後であつた。而かも君平は四十



六歳で死んだので、新夫婦は甘い生活も、たつた五年しか續かなかつた。

蒲生氏は奇人の目があつたけれども、其の家庭は、儒者的で眞面目で、別に奇なことがなかつた。彼は時としては狂熱の人と爲つたが、其の狂熱は、憂國の熱誠、又は篤學の餘に出づるもので、詩人的な飄逸な、生れながらの熱血男子ではなかつた。嘗て佐渡梟陵の荒廢を見、石橋翁に告げんとて、宇都宮より鹿沼に至る途中、川を渡り裸躰のまゝ疾走したこと、古河の學館で、人の楠公を眞の忠臣にあらずと論ずるを聞き、厠の團扇を持たまゝ飛び出

して來て、滿座の人々の衣服を穢したこと、或は尊氏の墓を鞭いて、惡逆無道を罵つたなど、何れも眞摯より出でた狂熱である。

彼の家庭は有福でなかつた。著書を出板するにも金がなく、山陵を搜訪するにも旅費に乏しかつた程で、俗に「柿餅の手紙」と稱するものが、よく其の有樣を語るものである。

先夜は参上得ニ御意一、殊に柿餅の御饗應忝奉存候。其節時悪敷他人亟り候て、用事の談話申不レ盡候。扨て拙者義兼々申す通り 歴代帝王の山陵久敷荒廢して御祭を止、其所在も明に知れ不得候間、尋認候得共、猶未遂候。此度林大學頭殿に申し入候て其使として、來月五六日迄に出府、其より遂に上京可レ仕候。是は忝も 一天之君世々に御祀有りて尤可ニ崇敬一第一義に候得共、亂世以來禮法壞、今治平二百年に及とも、上にさまでの有識も無之に付、但々等閑に成來る事に候。幸に當今御老中伊豆殿を始、大學頭殿何れも皆一代の賢才に御座被成候。御政教を御勤給ふこと延喜天暦の昔にも劣る間敷候。此時にして其一二の闕を補うて忠功を竭てんこと拙者多年の願に候不幸にして去年父を喪ひ、此度一週忌を巳に過候得ば右申上候通に御座候。

是に付江戸にも親敷二三の御旗本にも合力四五兩は可得候。又佐野鹿沼など師友の間にて衣服腰の物の支度を被致、數年浪々の拙者漸く眞の武士に罷成候然ども關東より千里西遊六七十日の物入に心遣申候間、前に申義に兎角金子拾兩拜借仕度候。昔商人もに義を好申者は、奥州の金賣吉次が九郎義經に於る、山川屋儀兵衛が大石藏之助に於る、此外に金錢を輕じて忠義の名を立る者多御座候。

かくて一轉其の旅行に入る。

此度の義拙者も霜霧の寒を犯し旅行すること貴公にも御推察候はゞ御承知にて金拾兩時分柄にも御借下され候はゞ、是亦天下第一の義擧に御座候。忠感定て神明に達候事、貴公は拙者に於る母方の姻親家に千金を蓄て本より一鄕の頁と聞たればこそ拙者も外に不求して貴公に直に御願申事に候不備

十一月二十八日　　蒲生伊三郎

岡井仁右衛門様

此の書は今舊宇都宮藩主戸田子爵の所藏で、四十二年秋季大演習の折に忝くも 天覽に供せられた、名高い借金の手紙である。高山彦九郎の借金證文も名高いが、此の書の如きは、論旨堂々大義名分を說いて借金を依賴する所、飽までも蒲生式で、天下一品の名に背かない名物である。

汐干

幟さまく風に靡きて、
彌生の海はいと賑はし、
花はづかしき少女も、汐風に
色の黒まぬほどは、
干潟に立ちて遊ぶこそ
こよなく樂しけれ。



四月の總菜料理獻立（一）

日	朝	晝	夕
一日（月）	汁（わらび）ざぜん豆	ぎせい豆腐 おろし	コロッケイ 百合
二日（火）	汁（いてう大根）ふきからに	鰈白あへ	鮭、（松風焼）菜にんじん胡麻醬油
三日（水）	汁（根芋）がんくひ豆	きんぴら牛蒡	鯛、煮ざかな そぎ豆腐、めうが たけ、清し汁
四日（木）	汁（百合根）梅干	こんにやく、うど 里芋うま煮	蛤、フライ しゆんぎく、（浸し物）
五日（金）	汁（嫁な）納豆	フライドキヤベーヂ	豚、（カツレツ）むし かぶら、わさび味噌
六日（土）	汁（天王寺蕪）きりするめ	乾海老、蕪大根 煮つけ、なびたし	筍めし、三葉、ちく わ、麩、清し汁
七日（日）	オムレツ ハットビスケット	はす、くわゐ ごま和へ	鰯、（ぬた）やつがし ら、（ふくめ煮）
八日（月）	汁（松露、豆腐）生玉子	さけ（酒むし）	牛肉、（シチユー）青菜、（海苔巻き）
九日（火）	汁（さや豌豆）鮪甘露煮	大根、人参、油揚 ごま酢	さしみ 莢隱元、玉子清し汁
十日（水）	汁（うど）茄子からし漬	はんぺんつけ焼（青海苔をかける）	鰆たまり焼き 筍おちやら
十一日（木）	汁（うぐひすな）焼海苔	まて貝（木の芽和へ）	豚味噌漬焼 なびたし
十二日（金）	汁（小かぶ）牛蒡から煮	精進あげ（薩摩芋、蓮根、隱元、海苔）	小はだ煮びたし 菜スープ
十三日（土）	汁（つくし）うづら豆	わらび、莢豌豆 煮つけ、馬鈴薯白煮	牛肉鍋 赤貝、ばうふ三杯酢
十四日（日）	パントースト 根ミルク、コーア	烏賊、蓮根 みどりあへ	まぐろ山かけ 牛蒡そぼろ
十五日（月）	汁（馬鈴薯）生玉子	ずゐき 胡麻酢和へ	ボイルドフイツシユ グリ井ンピーソース ふわ〳〵玉子

四月の總菜料理獻立（二）

日	朝	晝	夕
十六日（火）	うの花汁、れぎ大根下し	筍、くず煮	押しずし（比目魚、かんぺう、椎茸、くろみ）
十七日（水）	汁（玉子）蛤佃煮	豆腐きじ燒田樂	きす（鹽燒）、燒豆腐、蓮根うま煮
十八日（木）	汁（ずゐき）でむぶ	ライスカレー	鯛、さわだ作りわけ、うづら豆
十九日（金）	汁（慈姑しんじやう）らつきやう	蛤なべ	さくら飯、むすびさより、せり清し汁
二十日（土）	汁（わかめ）もやし生薑味噌燒き	燒豆腐、小倉煮、田芹（おひたし）	カツレツ、菊小かぶ三杯酢
二十一日（日）	オートミールミルク	ぜんまいからし醤油	車蝦若鬼殻燒き、てつかみそ
二十二日（月）	ごま汁、根芋煮豆	フライドエッグ	烏賊、筍、木の芽和へ、いわしのつみ入れ、三月豆、清し汁
二十三日（火）	汁（みのぼし大根）款冬のとうからに	さやいんげん煮つけ	マカロニ、鶯菜、（おひたし）
二十四日（水）	汁（豆腐）生玉子	梅田牛房うま煮	まぐろすき燒、つくし、三杯酢
二十五日（木）	汁（蜆）富貴豆	生揚げつけやき	親子丼、つくだに
二十六日（金）	汁（筍）昆布からに	ボイルトスピネー	蛸のあんかけ、わらび甘酢
二十七日（土）	汁（はんぺん）佃煮	ふき、くわゐうま煮、貝柱、（三杯酢）	鰺鹽燒、いり豆腐
二十八日（日）	パントースト、牛乳泡雪	鹽鮭さしみ	牛、馬鈴薯、煮付、和布、酢みそ和へ
二十九日（月）	汁（さゝがき牛房）生玉子	ポテトーサラダ	茶わん蒸し、（鳥、しうすぼし、椎茸、さしや豚元、ふき）
三十日（火）	汁（つまみ菜）半熟玉子	くろみ豆腐（薄くず）	豚の味噌煮、蓮根あちやら



逆境の所感

毒だみ

辛らき運命に泣く身でした。女の胸から愛情を取り去つたら空虚である。血もない涙もない、空虚の形骸ばかりがたゞ人妻といはれたんですもの、如何して圓滿に暮せませう。

良人は私の不機嫌顔見るも厭だと日夜の外出。胸の不滿を私は召使に當り散らす。たえず暗雲に閉ざされた家庭でした。かくても私はその家に暮した。そして一度純潔な胸を傷つけられた憎むべき良人を荒んだ家庭で苦しめやう——良人さへなかつたら、この家さ

自由な意志を棄て親の定めた夫に滿足して自分の存在も認めず、夫への奉公、子供の守に一生を奴隷的に送り、それに盲從してゐさへすれば、從順な女、優しい女とはやされるが、そんな事は私には出來ない。覺めた人——少くも、現代の血潮の通つてる人に如何してそんな眞似が出來ませう。

あゝ始めて私は覺めた。しかしあまりにおそかつた。覺めた時はもう捕はれの身‥‥人妻でした。しかし愛情のない夫婦、義理に迫り親の命令辭み難くて嫁ぎ、

へなかつたら、といふ觀念は私の胸を離れませんでした。私が受けた胸の痛み、迫害は當然良人に返すべきものと思つてゐました。意地になつてひねくれた女になつてしまひましたの。

併し良人は只外出勝なだけでなんとも申しませんでした。

とう〳〵私は疲れました。泣いて〳〵涙の泉の涸れるまで泣き盡して後、母の慈愛、妹の純潔、その間で暮したら荒び果てた心も少しは昔に歸る術もと思つて、とう〳〵實家に歸りました。



荒んだ心、疲れた身體を癒やさうと、夫の家を出て三ケ月を草深い田舍の實家で暮しました。けれど十月より五月まで雪の消える事のない奥羽の地は、見るものすべてが氣を濕らしてしまふ。古い習慣に囚はれた人々の思想：：何事にも自身の意志も主義もない——女はたゞ男に從ふものと幼い時から壓さへられてのみ育つた人達：：其の間での暮しは、私にはあまりに單調で無趣味でした。母の暖い心は昔の通り、妹の私を慕ふ心にも變りはなかつたが、荒びきつた私には滿足が出來なくて、深く決心してきた事も解決もつけすに又飄然と故郷を出ました。

決心といふのは勿論離縁する積でしたの。嫁ぐ時はまだ夢みる女でしたが、夢より醒むれば身は人妻てふ繩に縛がれてゐる。とかう〳〵とあせればなほもつれる。あゝ光明もない。希望もない。故郷も私のかくれ家ではありませんでした。良人の許には如何しても歸りたくはなく、かくして私は東都の幸子樣をお訪ねしましたの。

幸子樣は何御不足ないお身體。順境に育だつて今は幸福なマダム。……突然な訪問を女中が通ずると驚いて出てゐらしつた。二人は無言でした。私よりは一つお上の丸髷姿、昔ながらの優しい〳〵幸子樣でしたけれども、御夫妻のお睦まじい御樣子を見ましては、氣後れがして、私の境遇なんか話せなくなりました。

「御病氣？京樣!!」と幸子樣はお驚き遊ばした。頰の紅はさておき、燃ゆるやうなと云はれた唇さへあせた。ドンヨリ生に疲れた眼、手入れもしないので亂れ勝な髮、これが京かと――十八の京かと一人泣きました。

藥指にさしてゐたリングが中指でもまだゆるい位‥都!!!都!!!なんて懷かしい名でせう。久しく憧憬れて居た其の都の人となつて僅に三日。今日はもう歸らなければならない。いやだけれど、あゝ私は嫌だけれども如何しても今日は此地を離れなければならないのです愛も知らずに大道を濶歩する人が羨ましい。あの人達の中には私と同年の人もあらうに。……私だつてまだ十八だのに。

歌に詩に憧憬れて胡蝶の夢を追つて居る年ですのに……華やかな青春の時代とては私になかつた。青春といふ事を知らずにうか〳〵過して、後に衰へたと自覺した時ほど、いひ知らぬ暗い思ひに滿たされる時はないでせう。紫袴の學生時代は私にもあつた。しかし都の華やかさは、私達田舍の女學生には夢想さへする事が出來なかつた。

一、リボン、簪其他の裝飾は一切之を禁じ櫛ピンの類も質素なるものを用ふべき事、

一、白粉をつけ紅を用ふるなどは固く謹むべき事、

一、袖丈は一尺六寸に限られ著衣は木綿の外許さずこんな規則に囚はれて、黑の襦子張の蝙蝠傘手にしてテク〳〵通つて居た身に、如何して少女の誇があつたでせう。母に連れられて花見の時さへ、道で先生に逢ふと頭のリボン氣にして、そと袂に忍ばせたやうな私達に、靑春も光明もなかつた。

偶に胸のそゝられるやうな詩にでも耽らうものなら、學校中評判になる位でした。

後のため〳〵にと著物一つ作るにも、都の君なら四十近い人がつけるやうなのを、十七の少女に……。

あゝ思へば惜しい過去のタイム……。



都に、都に、と悶へたのは十六の時であつたが、憧憬れた都の人となつた今の私は、もう純潔な少女ちやないのですもの……。大輪の百合の花を見ても喛い感情は起らぬ。美しいとも思ひませぬ。小川の囁きを聞かうと蛙鳴く夕まぐれ人の案ずるまで時の立つのも知らず眤と耳をすましたのや、若葉の香を心ゆくまで匂ひたいと思つた事なんか、今思ふと狂人じみた事のやうに考へられます。生々した眼、早足に歩まれる様子、あゝ都は活動の地ですわね。自分は敗殘てふ感じが犇々と胸に迫りました。

花物語

△山吹　玉路

「無慘、雨か」

精好の奴袴、豹の皮の行縢穿けて狩倉姿の太田持資。月毛の駒に跨りて重籐の弓は持てども目指す獲物は鳥にあらず獸にあらで攻防堅固の名城を築き起さむ地の利きわめに館を遠く今日の出で立ち。

卯月も盡くる頃なれば日和癖の雨催ひして見る〱雲の崩るゝやまだらの雨の早や降りかゝる。翠蓋空を蔽ふ巨松の許に雨宿りはしたれども。むなしく〱時の惜まるゝに。かく呟きてふと見れば。松の下はいさゝ小流れ。流れの彼方は山吹咲きて花の奥に草の家あり。榾の煙か低く這ふ。

「蓑などあらば賜やうぞ。」

駒はつなげるまゝにして持資は徐ろに家に近づけば心得て御伴の若侍の小走り行きて柴折戸を訪ふ。

軒かたぶきて孫庇苔青き家の奥は物音もなう暗かりしが扉はさと開かれて三五の少女現はれぬ。

露垂る眸ちらと動きて頬に颯と紅潮し優しく禮せば束ねし

緑髪脊に長う。縫はぬ小袖古びたれど光まばゆき月の顔尊きばかりの風情なり。

「卒爾ながら物申さう。我殿あれに御座す。見らる此雨。ちと道を急がるゝ折柄見かけて無心の申す。襲などあらば暫時が程の恵受けたい」と若侍はやや鼻白む。

「は」とは答へど躊躇いて打しほれたる様に殿を見若侍を見しが目鞘は端なくも従へる雑士の一人を見しまゝに動かず。と見れば瞬きの中に身を竄め胸を押へて内に入りしが。待つ間もあらで扉はまた開かれ少女は土に額伏しつゝ淑ましげなる肩のあたり微に揺れて耻を含める面得上げず右手に塗盃を捧げて……盃には山吹の花一枝。

「や。山吹を」

立縮める若侍の後ろより持資莞爾として。

「其花さても床しう……過分のう」

と少女を見れば雪の頸も染むかとばかり言葉もなくて手をつかふる。

狩衣に露散りて山吹の花一枝額にかざして引かへす持資に御伴の人々皆従ふを扉に立ちて見送る少女の其眸の注がれしは殿にあらず若侍にあらず。若干の雑士の中に彼の一人。

「にわかの雨に襲借る人のありつるは。襲一つだになき悲しさも歌によせて山吹の花出したる歌

人ありしと古への物語。そが歌は後拾遺集にて知りしまゝになせし業をそれと知りたまふ風流の殿は日頃敷島の道に志深しと承りし太田の殿によも違はじ。さるに彼の雜士、姿は變れど豐島の一族中、武勇の名高き横田四郎とはいつぞや沼袋にて荒れ牛をしづめられし時見覺えし顏の星にてしかと知れるを……怪しやさては間者としてか……思ひなやむ後より父なる御坊は輕く笑ひつ。

「故なき事を思ひわづらひつる、とねよ其方と父とは月花を面白う見て暮せば足る」

少女もつと內に入りぬ。

戰國の夢あともなく、うつり行く幾星霜。

武藏野の草より出でゝ草に入る月日の、やがて千代田の城のいらかを映して黄金咲く江戸のにぎわひもとは一枝の花よりこそ。

七重八重花は咲けども山吹の
みの一つだに無きぞ悲しき

△藤

石山寺の秋の夜に書き流せる五十四帖。

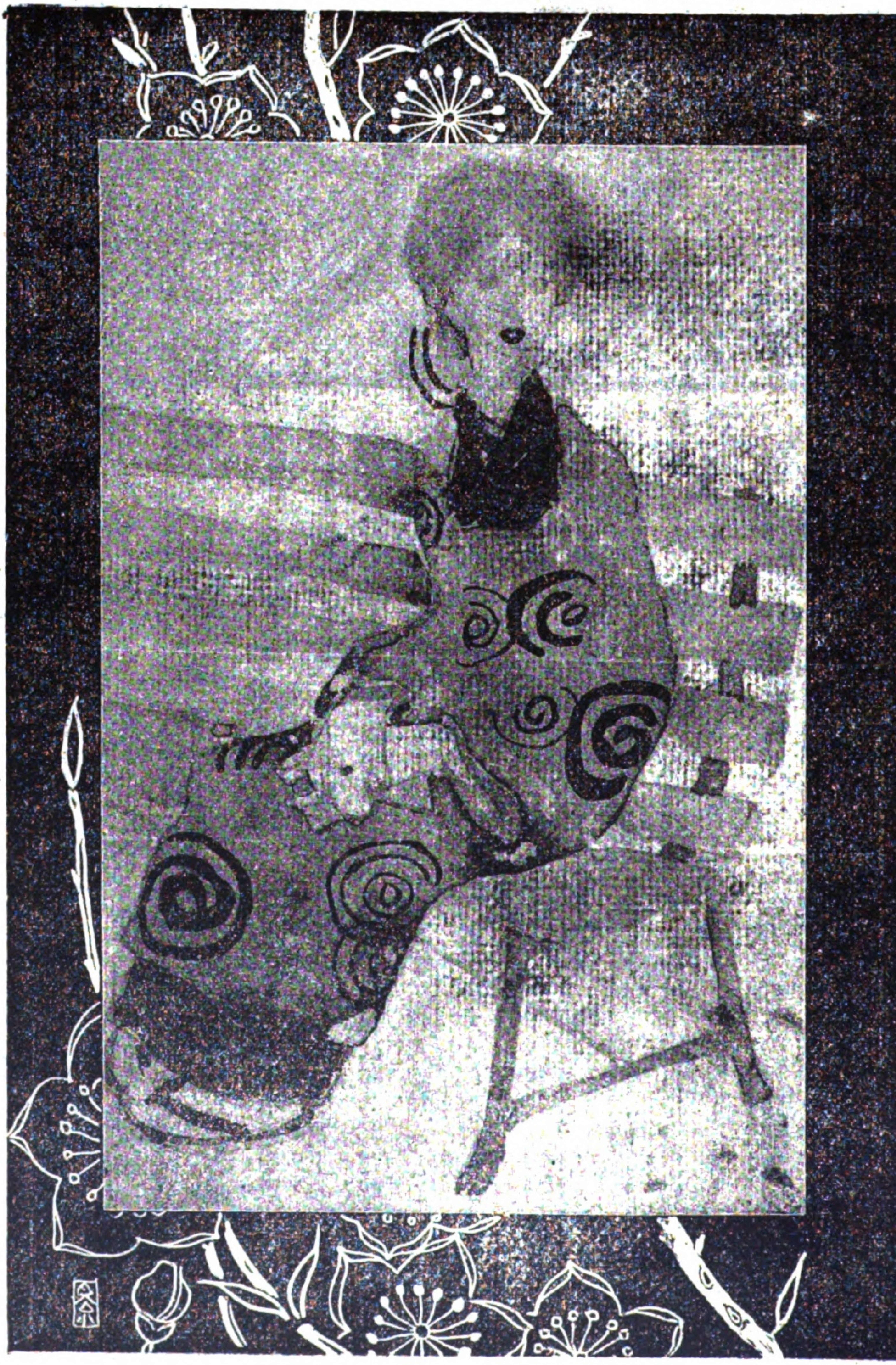
染めし紫幾世あせず、ゆかりの色の筆のあや藤なみのほまれは今も、式部の名は比ひなきいさほと共に……

天上の花を星と云ひ、地上の星を花と云ふ、人の花は女とよ、女の人の花の色香さま〴〵に咲き亂る。げに面白の世のさまや。

花こそ地球の笑がほと云ふなれ。

春の庭

散る花に來ぬ人に恨み長きかな（潮風）





好ましき結婚と避くべき結婚

澤田順次郎

不適なる結婚

不適なる結婚とは、生理上弊害ある結婚、即ち生殖不適を意味するので之れに二種あります。一は年齢上の不適で、他の一は體質上の不適です。年齢上の不適とは、年齢の餘り若いものや、或は年の甚だ懸隔したもので、生理上共に宜しくありません。早婚の害は皆人の知るところですが、六十七十の老人が若い婦人と婚したり、或は五六十の老婦人が、若い男子と結婚するのも、また害があります。そして此等の害は、啻だ自己のみならず、子孫にまで影響を及ぼして、不良の種を貽します。早婚者の子に健全なる者の少ないのは事實で、虚弱、意志薄弱、痴呆、畸形等が多くあります。老人と少婦との間に生まれた子も、やはり不良で、早婚者の子と似て居ます。

體質上の不適にも種々あります。其の主なるものは虚弱者の結婚で、次ぎは近親間の結婚、次は疾病不具者の結婚です。第一は自己の健康を害すると同時に、不健全な子を生じますから、つまり子供を苦しめる爲に結婚



する様なものです。第二も同様で、血族の夫婦からは良い子供は出來ません。第三は其の害が特に甚しくて、全く子孫を泣かせます。例へば黴毒は子孫に傳つて先天的黴毒となり、或は母の痳毒が初生兒の眼に入る時は初生兒眼痳と稱する恐るべき眼病を起こして、生まれながらの盲目となるの類です。癩病、精神病、酒中毒等も、親から子に、子から孫に傳染或は遺傳して、無限の苦痛を與へるのです。それですから如上の疾病あるもの、其の他生殖に不適なる者は、全然結婚を避けなくてはなりません。

弊害ある結婚

たとひ身體が健全で、年齢其の他に不適當な事が無いとしても、倘夫婦の性格が合はなかつたり、或は境遇が宜しくなかつたりする場合は、亦不幸に了ります。斯る場合に被むる害の程度は、常に男子よりも婦人に多いのです。其の例を擧げて見ますと。

(甲)　身元家柄等を取り糺さずして、輕率に取極めたる結婚。唯だ媒妁人の言を信じて、本人の性行人物は勿論、其の家系、家族等の關係を探らずして取り極めたる結婚には、兎角後悔することが多くあります。彼の夫婦相和せず、或は姑と嫁との間柄が惡くて、風波の絶えざるが如きものは、多く斯る結婚から生ずるのです。

（乙）放蕩なる者との結婚。　現に放蕩なるものは勿論、一度放蕩に身を持崩したことある者との結婚は考へものです。放蕩な息子を持つ親の考では、良い嫁を貰つて遣つたら放蕩が止むだらうと思ふのですが放蕩癖は一種の精神病で、癒り難いものです。相應の嫁を貰つて遣れば、其の當座は愼しんで居るが、時を過ぐれば持病が再發して、又も放蕩を始めるといふ鹽梅に、厄介千萬なものです。

それから、放蕩なものには花柳病の恐れがあります一度放蕩したものは方正になつても、黴毒の如きは感染後、八年、十年、甚しきは、二十年も潜伏して居て起ることがあります。痳毒なども同じやうなもので、全く癒り切らないで、七八年後に至り、花嫁に感染せしめた例もあります。

（丙）身分の釣り合はざる結婚。　諺に牛は牛づれと申すことがあつて。身分の釣り合はぬのも適當とは思はれません。氏なくして玉の輿に乘るのは幸福かも知りませんが、行末は何うか判知りません。ゆゑに成るべく虛榮を避けて、身分の釣り合ふところに、嫁入るのが安全と思ひます。

（丁）干渉せられたる結婚。　兩親同志が取り極めた縁談でも、自分の意に適せぬものは之れを否む方が宜からうと思ひます。併し父母は娘の行末悪しかれと祈るものは一人もなく、又父母の宜いと思ふものには間違が少ないから、よく考へた上に決斷することが肝要です。

（戊）一時の戀愛に驅られて結びたる婚姻。　小說などの戀愛論に誤まられて、道ならぬ戀に踏み迷ふた結婚には、後悔が多くあります。

以上の結婚は行く／＼は破鏡に終はるか、さらずば婦人をして終生浮ぶ瀨なき悲境に沈淪せしめます。

倘、結婚に就いて注意すべきことは、經濟上の問題ですが、是れは婦人よりも寧ろ男子に望むところです財産があつて生活に苦勢のないものは別として、無財産の者は妻子を養ふ資力を拵らへるまで、結婚を控へてほしいものです。妻子を養ふことの出來ぬものが、

漫然と結婚してとも共に苦しみ、其の結果不良の行爲をなして、社會の厄介になる例は多くあります。さなくとも貧家に生まれる子には、體格精神の健全なものは少なく、偶々傑物の出ることもあるが、それは例外です。

配偶選擇の標準

配偶選擇の標準は人に依り、又は時代等に依りて一樣ならざるのみならず、男の希望する點と、女の理想とするところも多少違つて居ります。今から二三十年前には、男の理想とする女は

1、容貌の美なること。
2、心優しくして怜悧なること。
3、家事經濟に達せること。
4、財産を有すること。
5、家事の系累なきこと。
6、健康無病なること。
7、世才に長じ交際に巧なること。

といふ風の資格の順序でしたが、今日は4、3、7、1、5、2、6、の順序になりました。

又女の理想とする男は、二三十年前は

1、風采ありて美貌なること。
2、深切にして愛情深きこと。
3、能力あること。
4、恒産ありて生活に不足なきこと。
5、舅姑其の他系累なきこと。
6、吝嗇ならざること。

といふやうな資格の順序でしたが、是れも今日は大分異つて來て、4、3、5、1、6、の順序となりました。

如何に世が物質的に傾むいたかゞこれでも知られます。現時の結婚を財産婚の初期と云ふのも無理はありません。然し財産婚も幸福なものではありません。眞に幸福な結婚は精神的で身體的なるもの、即ち愛と健康とを基礎としたものでなければなりません。



初陣の記

ゆかり子

時雨まじりの風のつよい日、私はいつもの柱によつて、かなしい此秋の、思ひ出の糸をたくつては、わき出づる涙をぬぐつて居ります。あの黄ばんだ木の葉が、あら〳〵しい風に取り去られて行く樣に、私の小さな胸にあふれた喜はもろ〳〵もぎとられて、にび色の悲しい〳〵影ばかりいつまでも〳〵殘る事でせう。

あゝ思出多き秋！生れて廿年、かつて覺えぬよろこびとかなしみ…出產の喜…愛兒の死…あゝ、私はこれ程悲喜の急變に、逢ふた事はありません。姙娠と知つた春の頃は、早母になるのかと、なんとなくかなしく、どうかして違つて居ればいゝのになどと、つまらぬ事をたのみに思ふて居りましたが、追々月もたち手や足をつゝぱるやうな感じがする樣になつてからは、同じ血の流れて居る兒どもの事がしみ〳〵とおもはれて、可愛い〳〵顏が夢の中に見えたり、夏の暑い日もいとはず、派手になつた長襦袢をほどいては、小さな著ものを縫つたり、おそろしい樣な中にも、一日も早く生れたらと、たのしい〳〵思ひに日を送りました。時々はまだ生れもせぬ小供のしつけ方など良人と云ひあらさうては、あとで大笑ひすることもありました。女だつたら僕はほつてお





くよ、と云はれたのをおもふて、もしや女だつたらと、泣いて笑はれた事もありました。

此待ちわびた日はいよ〳〵來て、小さな着物や自分の持物を袋に入れるのも夢心地で、○○病院へ入院したのは二十日の朝でした。

はげしい〳〵頭痛の苦しみも、高い赤兒の泣聲と、坊つちやんですよと云はれた看護婦の聲に夢の樣にわすれて、思はずにつこりと涌き出づる笑みを、禁ずる事が出來ませんでした。

男でよかつたねつて、にこ〳〵していらつしやる良人の顏、見た私の目からは、涙がほろ〳〵と流れました。

何の涙？けれども胸に滿ちて居る私のほこり！私の 喜！

其夜から私の傍に、小さな床が敷かれて、赤い〳〵色した小さな顏がふとんの間から見えて居る。

赤い程丈夫なと婆やは云ひましたのに……

小さな口をあけて、あくびをしたり、くさみをしたりするのが、ふしぎな樣で、ぢつと見つめて居る心の中には、かつて覺えぬ可愛い思ひが潮の樣によせてくる、體に似合はない大きな聲で泣いたり、可愛いゝ口に上手に乳くびを吸ふて、よくのんだ事、まだ十分にはらない私の乳では、たりなくてまた牛乳を貰つて居ました、この子はあなたに似て、ほんとに大食家ですよつて、笑つた程そん





なに丈夫だつたあの兒が、死ぬなんてほんとに〳〵露程もおもひませんでした。熱が出たのは六日目からでした、思ひなしかとしは頰がやせたやうな、それでも乳はよく吸ひますのですもの、明日にもなつたらと、たのみに思ふて居つた、かひもなく、翌日は昨日にもまして熱が高く、昨夜はうるさい程泣いて居つたのに、今日は只すや〳〵と、寢て居るばかりです。

赤味の失せた小さくなつた顏、力無い泣き聲、あゝもしや〳〵死ぬのぢやないのかしらんと、おもふたせつな氷をなげられた樣に、私の胸は戰慄ひました。私の身を案じて、赤んぼはそつと隣の部屋に、移されました、傍に居ないとてどうして忘れることが出來ませう、かすかにもれてくる小さなうめき聲を聞きながら私は神樣をも、佛樣をも、怨みました、罪もないこんな小さな體にあまりに〳〵烈しい苦しみ三十九度からの熱と云へば、大人でさへも、たえられぬ位であるに、あゝどんなに苦しい事だらう、代れるものであつたら、自分はこんな苦しい目に逢ふてもと、絶え入る樣な聲を聞きながら、起きる事も出來ない產褥の中で一夜もだえたのでした。

もしや〳〵との願ひも切れて、其翌日遂にゆきました。父とも知らず母とも呼ばず、唯八日のはかない命にて……

あまりに淸きもの、このけがれたる世に置くは惜しと佛樣の御呼びよせになつたのか知りませんが、それにしてもあまりに〳〵情ない……





何故かう張らないのかと、しれて／＼泣いた乳は、今となつて、痛い程はつて幾重にも卷いた切を通して、著物もぬれる程、あゝこんなにもるものを。隣の部屋の、赤兒の泣聲に、ふと夢さめて、乳を抱て泣いたのも幾夜でしたでせう。

寒き夜を乳ほしと泣いては居ないだらうか、一人先だつてどんなに淋しい思ひをして居るだらう、あゝ私もこのまゝ一しよにとおもひながらも、淋しさうな良人の顔見ては、私まで病氣になつてはと、氣をとりなほしつゝ、淋しい病院に廿日あまり、やう／＼本の體になつて、悲しい思出を致して歸りました。にぎやかになつて、歸りますよつて出た門を、たゞ一人淋しく。

御光のあか／＼とついた御佛壇の片すみに、白地金襴の御骨袋、あゝあれか可愛い／＼我子の姿かとたまらず泣きふしました。御經讀みます、父上の御聲もしめつて。

けれども今頃は、慈愛にあまる佛樣の、御そばで祖母樣や祖父樣に、可愛がられて、淸らかな日を送つて居りませう、せめてはそれをおもふて、心をなぐさめて居ります。

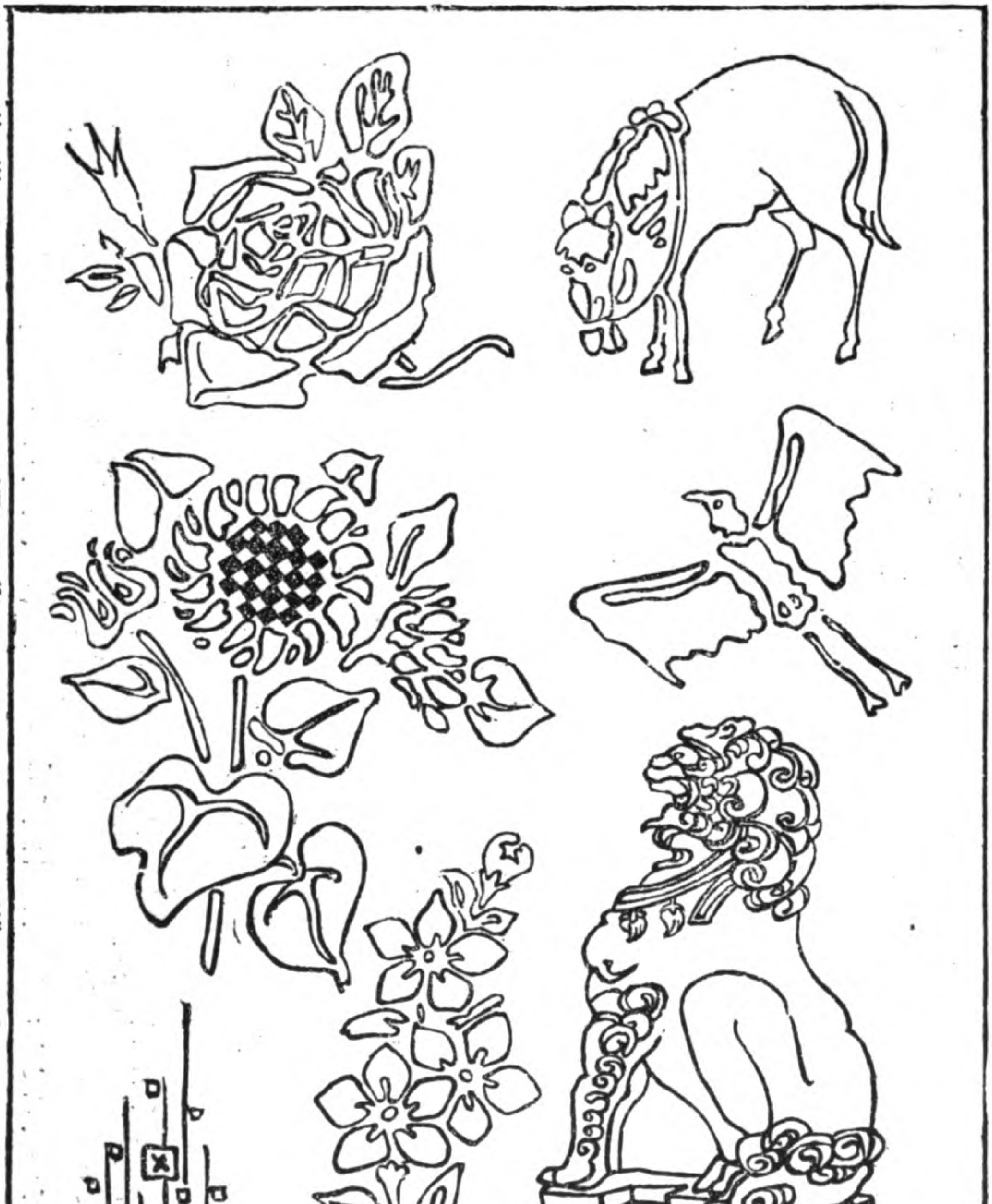
峯の雲すこしは花もまじるべし　野水
海棠に鏡立てたる化粧かな　子規
白黄色蝶もいろどりしたりけり　一茶
臥し慣れて左枕や宵の春　鳴雪
枕せむ其はるの夜の夢はかかり　大江丸
海棠や美人凡そ顔圓き　月斗



新案花鳥模様

△薔薇花
△向日葵
△梅花
△桔梗

△唐の馬
△千鳥
△唐獅子
△靈鳥





人間萬事に應用の出來る茶の湯の神髓

洋畫家　本多錦吉郎

畫伯本多錦吉郎氏は、多趣味多藝で、且研究的な方でございます。近くは日本名園圖譜と云ふ美事な圖書を著はして内外人の稱贊を得られました。この庭園趣味に相待て茶道に造詣深く、現今文明的社交や、家事經濟に直接關係ある茶道の眞意味を、一般の婦人に悟らせたいと云ふ考へを持つて居られます。（婦人記者）

▲茶道の意義はひろい

茶の湯は、隱居の道樂仕事か、嫁入のお飾り藝位に輕く見られて居ますが、その起原を調べ、その意義を味ひますと、社會に汎く活用の出來る、否活用しつゝある藝術です。藝術と云ふより處世術とか修養術とか云つた方が適當かも知れません。茶道を修めると、坐作進退の度が調ひ、應對に落付が出て來ますから、交際場裡で後れをとらず、自然の禮法を會得するために、高雅な友垣を作る事が出來ます。又器具の取扱ひに注意深くなつて、經濟が巧妙になる、これらは主に表面的の影響ですが、茶は戴いて飲め、忙てゝ飲むなと云ふ定義から割出した一擧手一投足には、自ら、一種の禪味が含まれて居ますから、生存競爭で麻のやうに亂れた

頭腦も暫時靜に歸つて、眞如の月は主客の心を照すと云ふやうな趣があります。茶道を敎ゆるものが、唯型にばかり拘泥せずして、これらの響きを傳へましたら大いに女子敎育を益することゝ思ひます。で蛇足ながら茶の大意を大略お話し爲て見ませう。



▲宇治は茶所の起源

支那で茶を衞生劑として熱さましや消化藥に飲んだのは、餘程古くからのことである、これを趣味的に翫そび始めたのは、唐時代が著るしく、陸羽が茶經と云ふ書を著はしてこの道を世に弘めたのもこの頃です。茶が日本に渡つたのは鎌倉時代で、京都建仁寺の榮西禪師が入唐して歸朝の際に、葉茶や茶の實を持歸つて賴朝公に献じた。その後入唐した千光國師が又茶の實を持歸り、筑前の脊振山へ植ゑたのが日本に茶の樹が出來た始めで、それから明惠上人が千光國師から分けてもらつた實を京都の栂の尾山へ植ゑ、後に宇治へ移し植た頃から世間に茶の飲用が始まりました。宇治は茶所と稱美される起原はこれであります。

▲茶道の原はお茶當

日本でも最初は茶を今日のやうに日々勝手には飲まず、藥用に飲む位でした。而して僧侶はこれを聖品として佛に供へたので、お茶當と云ふのはこれが始りです。その後、大應國師が入宋して金山寺から臺子一飾りを持歸りましたが、この臺子は黑塗の四脚の二段棚で、上段に臺付の茶碗へ茶筌、茶杓をのせたものと、茶入を置き、下段は風呂釜、水指、柄杓を配置した一組の飾りつけで、これが皆さん御承知の茶の湯道具の根本です。陸羽時代の僧達はこの道具で佛にお茶當を爲て、お餘りを分ち飲んだものださうです。

▲團茶即ち團子に丸めた茶

陸羽時代には、茶の新芽を取り、臼で搗いて團子に丸め、日光に乾かして貯へ置き、飲む際にこの團子を茶碗にいれ、白湯をつぎ、茶筌（今の茶筌とは少し違ひ、只竹のひごを寄せて結びしもの）でかき立て、乳を浮かして飲んだもので、これを團茶と稱へました。宋時代から團茶は廢れ、元明に至つては煎茶が流行し又葉茶を挽て粉末としたのを、掻立てゝ飲むことも行はれました。團茶の飲み方は遂に日本へ傳はらず、挽茶又抹茶の飲方が臺子と一緒に傳來したのです。

▲小笠原流と茶道の關係

茶當用として支那に起つた茶道は、日本に渡つても主に禪僧の仕事でありました。茶は興奮劑ですから僧徒が座禪に倦んで眠氣を兆した折に、一服の茶を喫して睡魔を拂ひ、精神を新たにしたので、つまり觀心三昧に茶を用ひたものです。其後武家や公家が追々禪宗に歸依し、足利時代には益々盛んになつて、彼の義政將軍なぞは應仁の亂に辟易して東山に隱退し、專ら禪を修めた。將軍が茶道に凝つたのもこの關係で、尙將軍は明惠上人の持歸つた臺子を待客の道具に應用したのです。その後戰亂が相次で、武家の作法、儀式も滅茶になりかけた際に、今川左京の大夫や、小笠原兵庫

介等が熱心に古典を調べ、武家古實を定めました。これが例の小笠原流の起原です、かく定めては見たが、これでは餘り儀式ばつて圓滑な交際が出來ぬと云ふところから、茶を土臺にした式法を立てましたのが、今の茶道茶式であります。

▲平民的の茶式を定めた利休

茶道はかやうに變遷しましたが、多くは世捨人や、貴族仲間のすさびてありましたのを、彼の千ノ利休が義政將軍式を土臺にして、もつと質素な平民的茶式を立てました。利休の茶道には實に人事百般を網羅して居ります。會食會飲の主客の禮、室内裝飾、香道等より衣服髮飾にいたるまで、交際的の智識趣味は盡くこれにて養はれ、日常の修養、質素、經濟の習慣も自然に養はれてゆくのです。特に質素は利休の立場で、春をのみ待らん人に山里の、雪間の草の春を見せばやと云ふ一首を詠じて大いに虚禮虚飾を排しました。



▲會の手順は文明的

さて利休式の茶會には、曉の茶、正午の茶、夜の茶、菓子の茶の四種ありますが、菓子の茶を除く外、皆酒食が出るのです。先

づ正午の茶式をかいつまんで申しますに、食物の嗜好も話し口も合ひさうな知己五人を一組とし、催しの五日前に主人側から案內狀を出し、來否の返事を受取つて、獻立を定めるのですが、普通一汁三菜か二汁三菜(二汁五菜となると小笠原流の奢となる)です。招かれた客は來會する際に直に茶室へは入らず、茶室と少し隔つた控へ室へ通り、こゝで連を待合すので、この室を待合とも袴著とも稱へます。袴著とは、上下、帶刀で來た士達がこゝで、上下を拔ぎ、歸りに又著る室といふ意です。五人の客が待合に集まれば、正客一人、中三人、詰一人を互選して定るのですが、正客には一番上顔で、斯道に老練な人を推し、詰の役は世事馴れた道具屋の亭主とか、葉茶屋の隱居位の人が相應して居ます。かく役割が定まる間に主人の用意整へば、取次を以て客に通じ、主人はつくばい(手水鉢)の水を淸め、洗手して枝折戶に客を迎へ、こゝで主客の默禮があつて、順次茶室即はちお茶屋へ繰りこむ。これを初座と稱へます。そこで主人は爐へ炭をつぎ、次に食膳を運び、客は打寬ろいで酒食を味ふのですが、酒も三獻を限りとしてあります。併し三獻の銚子なら上戶客も十分の獻を盡すことが出來ます。膳を引て餠菓子が出てから客は一先づ前の待合へ引上げる、これを中立と云ひます。次に主人は座處を掃除して初座の折にかけた床の軸をはづし別に花を入れ、炭をつぎ直す等の仕度が整ふと、合圖の鐘を鳴らす、客は再び洗手して茶室に入る。これを後座の入と稱へて主眼の茶の湯が始まり、濃茶の飮まはしがすんで薄茶を喫し散會となるのです。客が待合へ下る時、主人は中門まで見送り客は歸宅後必らず禮狀を發し、又は自身出かけて謝辭を述べると云ふのが一通りの順序ですが、送迎の鄭重にして、時間の正確なこと、沐浴洗手して食事を神聖にすること、相口の友を組合して愉快な會談を計ること食後の茶を以て淸淡に會を結ぶ等の工合が丁度文明國の交際法と一致して居ると思ひます。序ながらこの淸雅な茶會に用ゐた待合や、お茶屋が今日極端に俗化したのは惜しいのではありませんか。

▲趣味津々たる曉の茶

曉の茶事は日本特有か知れませんが、最も趣味深き會です。この會は一に夜込と稱へて、曉の五時頃から開らき、大抵盛夏の頃とか、有明月の良い折、又は雪の朝等に催すのですから、打合せはしませんで風流の友垣が折にふれて思ひ立つ雅會です。此時は、主人は手燭又は路次行燈を持つて枝折戸に客を迎へ、目禮して席へ歸り、上客はこれを受けて、つくばいの傍にある手燭石へ置き、洗手して茶室へ入り、詰がこれを携へて入口の傍らに置きます。座敷には短檠に燈火を點じて正午の式と同樣の食事と茶式を試むるのですが、三献の酒に顏稍熱した客達は、中立に座敷を辷るころ、丁度夜はほの〴〵と白みますから、庭草に露結ぶ夏の曉色、軒の氷柱に朝日影さす雪景色を賞しつつ後座の入りに一服の茶を喫する心地は實は清快なるものです。雪の曉茶には給仕人が豫め茶室と待合の通ひ路へさん俵を敷いて置き席入の折それを取り除け、雪を汚さずに一筋の道をつけます注意はどこまでも細かいものです。



春の夕暮

▲勝手元に迷惑をかけぬ注意

茶席の食事の際は、主客が肝膽相照らすの好機會で、大閤も之を英雄の心を攬るに利用したのです。併し打

解けた酒宴にも盃盤狼藉の跡仕末に勝手元を泣かせる不行儀のないのが茶式の極意です。一寸例を擧げると、小肴の骨をくづさず綺麗に食べ、取肴類は汁椀飯椀の蓋に受てよけいな皿を汚さず、殘汁のある皿、椀は飯椀の湯で一寸ゆすいで啜つてもよし、それなりで椀に置てもよし、懐中紙でふき、食器は都合よく重ねて置く、若し食べ切ぬ菜があれば、用意の油紙へ入れて持歸る、乞食の眞似と言ふのは心なき者の惡口で、流し元の手數を省く注意は綿密なものです。而して茶席の食事には主人が給仕の役を務めて人手を煩はさず。客の方も詰に坐つた者が膳の取いれ等の始末を受持て主人を助けると云ふ風に秩序がよく立てあります。

▲茶道を知る者は場後れせず

過渡時代の今日は禮儀作法も自然一定しにくゝなりましたが、茶式の主義を土臺にすれば、そんな場合にも、調節がとれませう。例令ば座敷へ招じられた時にも自分の坐るべき位置が分りますから無益な心配をせずに茶席が出來る、主人側ではこれがために茶菓や膳部の通ひ路に便利を感ずるのです。心得のない者は惡遠慮の尻込して通ひ路を塞ぎ、先方へ迷惑をかけることが往々あります。特に婦人はこれが甚しく、席を譲りくらに無益の時間を費やし、果は入口に目白の推合をやつて主人側の迷惑を心づかぬのをよく見受る。こんな遠慮は却つて禮に叶ひません、常識的から割出した利久の茶道はかう云ふ事を一々心得て、先方に不都合をかけぬやう、又粗野な動作に流れぬやうによく工夫してあるのです。茶道を知る者は決して場後れいたしません。

▲型よりも意味を學ぶべし

茶の稽古は一週一回で三年卒業と云ふのが通例ですが、敎へ方によつては一年位で會得が出來やうと思ひます。型を敎へるばかりでは年月を費やしても只虚禮を覺えるだけで眞意が分りませんが、指手引手の意味を一々説明して敎へれば、呑込も早く、且これを日常

に應用して多くの益を得るものです。形式ばかりの數授は兎角虚飾に流れ易く、特に婦人の茶會には衣服を競ひ、献立を奢る弊が生じますから、雪間の草の春を見せばやを、凡てに應用しなければなりません。とりわけ稽古中は丼を茶碗に代用し、鯛を鰯で間に合せても結構修業は出來るものですから、意味を解するのを專一として處世術の栞とすることが肝要です。

兩女史の光榮

多年女子教育に從事して、其功勞淺からざる廉を以て三輪田眞佐子、棚橋絢子の兩女史は去月八日を以て孰れも勳六等に叙し、寶冠章を授けられたり。從來女流教育家の功勞者に對しては藍綬章を賜はる例にて、是迄下賜せられたる人も少なからざしが、勳章を下賜せられたる例は、前に下田歌子女史一人あるのみなれば、兩女史の光榮や大なりと云ふべし、兩女史の經歷、功勞等は世人の普く知るところなるが、三輪田女史は夙に私塾を開いて女子教育に從事し、慶應年間より明治に亙りて岩倉家内殿の侍講を勤め、明治十三年には伊豫の松山に私塾を興し、三十五年に至つて今の三輪田高等女學校を立て、爾來今日に到るまで教鞭を採ること五十年に近く、其間專心一意に盡瘁したる功勞は女子教育者の模範とするに足るべし。女史の家は代々勤王家を出し、女史も其氣風を受けて人となりしが女の事故、せめては教育を以て國家に盡さんと志して今日あるに至れりと云ふ。棚橋女史は明治五年名古屋に於て小學校より女學校に奉職し、其後東京女子師範學校訓導、學習院教師より名古屋市立高等女學校長、私立愛敬女學校長等に轉任し、明治三十六年に東京高等女學校を創立して今日に至れるが、當時文久元年に家塾を始めて以來五十年の久しき女子育英に力を傾けたる功顯著なるものなり。女史は大阪茨木の人なるが幼年より學問を好み十四五歳の頃、親に隱れて四書五經を獨學せる程なりしが後、奧山小山に通學せる弟の監督を名として同道して勉强せるを小山先生も感心して後、友人の大作と云ふ漢學者に媒介せるが、それは今の令息一郎氏の嚴父なり。

花のたより待つや夫海濱院の晴れ



百合の香

餘花の里

△寫眞よりも美し

墺國の公主マリ、ルイーズが、佛蘭西へ輿入になつたとき、此方にはナポレオン帝は待ちこがれてゐたことゝて、皇妃の來着を非常に喜びました。そして花恥しきマリ、ルイーズの口から『陛下は御寫眞よりも美しうおいで遊ばします』と聞いた時には、ナポレオン帝は得意滿々、實に一大勝利を得たやうに思ひました。

結婚してから直に北國巡幸の途に上りました。ナポレオンはマリ、ルイーズに對して、其の門地の高いのを敬ふたのみならず、心から機嫌をそこなはないやうにと注意しました。マリ、ルイーズが國の父君に對して、『妾がナポレオンを畏るゝには御座なく、ナポレオンが妾を畏れ居り候』と申し遣つたのを見ても、如何にナポレオンがいたわつて居たかゞ分ります。夫婦の仲は極くよかつた方で、マリ、ルイーズが父に宛てた書翰には、『吾等は善く意氣相投合いたし居り候』といふやうな言葉もあります。

△自ら苦境に立つ

マルクス、アントニウスは羅馬で有名な將軍であります。初め夫人がマルセルルスの未亡人であつた時、心の中に思ふには『私の弟オクタヴイウスとアントニウスが、此の廣い羅馬の國を治めやうとしたならば、國は私闘の犧牲となるであらう、で自分がアントニウスと結婚したならば、二人は親戚の間柄となつて、仲善く國が治まり、人民も苦境に陷らずにすむであらう』と考へて、愛國の衷情から意を決して結婚したのです。



けれど兩雄は竝び立たず、夫人が折角愛國の衷情から考へたことも水泡と消えて、弟と夫のアントニウスとの間は兎角面白くなく、動もすると衝突しやうとしました。殊に夫がクレオパトラの美貌に迷ふやうになつてからは、弟は之を辭柄にして折りあらば内亂を起さうと企てました。

夫人は大層驚いて、此は眞人の一大事、又國家の一大事と、色々思案を巡らしました。此時夫のアントニウスは、女王クレオパトラと一緒に希臘の雅典に居たので、夫人は其雅典に赴いたが、夫は女王の手管にまるめられて、いくら待つても逢はず、餘儀なく悄然と羅馬に歸りました。

弟のオクタヴイウスは、之を見て心竊に喜んだけれども、表面は怒つた色を裝ひ、姉なる夫人に向つて、『かうなつては是非がない、此の上は速にアントニウスと離別れなさい』と言つたが、夫想ひの夫人は、『假令如何なる事があつても、妻の身として夫と離別れるなどは思ひも寄らない』と言つて、只管夫の上を案じ、夫の留守を守つて變らなかつたと申します。

尙ほ感心なことは、夫人は夫の家の保つことに苦心し、自分の擧げた子供の教育に力を盡し、先妻の遺子をも實子のやうに慈みながら、夫と弟との間に立入つて調停を試みた爲に、流石野心家のオクタヴイウスも、姉の貞節に感じて、容易にアントニウスを謀ることが出來なかつたと申します。

△息災延命

待ちかねし初兒は男ときくより、里の母親取るものもとりあへず、いそぎまかり出で、ヤレ〳〵お手がらでござりましたな、お母子とも御達者で何よりと云ひかくれば、かたはらの老母、ホク〳〵ものですゝみ出で、はい、仕合せと息災延命で。（紅梅）



家庭に於る德育の方法

文學士 松本孝次郎

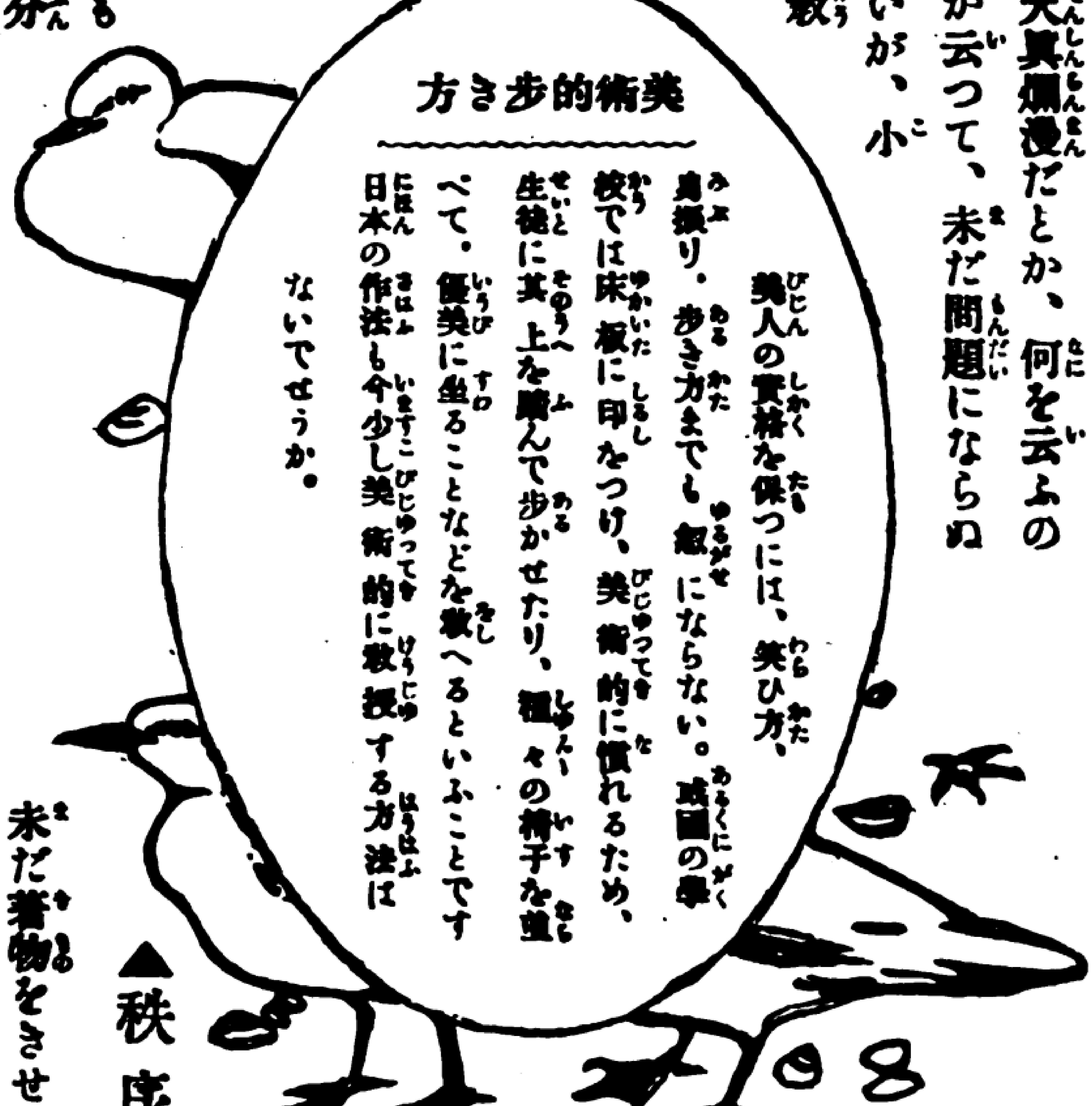
▲放任と干渉

子供は親が世話を燒かないでも、過ちをする度に自から利害得失を悟るものであるから、唯悟る機會を與へさへすれば良いと云ふのが、放任主義の育て方であります。これも一理あるやうですが、無經驗なものを全で放任して置いて自覺を待つのは、德育の目的を達するのに餘り迴り遠い方法でせう。去りとて小兒の發達程度も分からずに、生た人形を取扱かふつもりで、大人の理想通りに導かうとする干渉主義も勿論宜しくない。この二つは何れも極端で好結果は得にくいのですから、どうしても學術的を土臺にして子供の心理に根據のある德育方法を執るのが一番近道でせう。子供の心理は發育と共に變化甚しく却々一朝に調べ盡せませんが、唯人類の兒の道德心が次第に發達する階段を大略研究して、その時に應じて手段を講ずることは一般の家庭で出來やうと思ひます。

▲未だ問題にならぬ時期が大切

小兒が發達する階段は、生れてから成年になるまで

と成年時代との二期に大別して注意するのが適當でせう。で先づ極幼い頃は、善とか惡とか批評するほどのこともありませんから、天眞爛漫だとか、何を云ふのか分らぬ、當にならぬとか云つて、未だ問題にならぬやうに思つて居る人が多いが、小兒の事實がよく現はれて敎育上に一番意味のあるのはこの時期であります。幼兒は自分の手に持つて居る玩具を他にやらうと爲作ら、貰はふとすれば、直に引こめる。これは慈惠心と慾心を同時に現はすのです。又怒つて他の子供をなぐつてもその兒が泣き出すと、自分も一緒に泣くのは、敵意と愛意とが一緒に現はれるのであります。こんな反對の性は大人にもあるものですが、幼稚時代には興奮性が强いから一時に様々な様子を現はすのであります。この現象をつかまへて善い癖をつけることが一番大切で、いかに頑是ない兒でも惡いことを度々繰かへす内に腦に習慣が出來て、チャンと性が定まるから、うつかりこの時期を逸すると取かへしがつきませんこの兒は大分惡智慧がついたと思ふ時は、もう療治が手後れになつた時です。



▲秩序好になる時期

未だ着物をきせてもらふ小兒が、シャツ、ヅボン下、靴下なぞを何時も同じ手順にきせてもらふのを好み、進ふと承知しなかつたり、食事の席も自分の

場所を定めて、茶碗や箸でも、パンの切方でも、少し平常と違ふと食べなかつたり、寢床が違ふとぐずつたりするやうになると、家の兒はこの頃妙な癖がついて困ると云ふ親がよくありますが、これは漸く規律の習慣が出來始めた時で、困るどころか至極結構なことです。兎に角規律の習慣が出來始めれば、道德的の良習慣を守らせる躾をするのに、大層都合がよくなるのです。食時、睡眠なぞの規律は、衛生の目的ばかりでなく、德育も含まれて居る。賤民の子弟が多くふしだらなのは、境遇上幼い時から睡眠、食事の規律を養はなかつた結果でせう。一寸牛乳を飲ませるのにも、一定の時間に與へると云ふことに、德育が含まれて居るのであります。

▲正邪觀念の基

子供の正邪觀念は、父母が禁ずることゝ、許すことが基礎となるのです。親が自分の都合で禁じたり許したり、命令がグラ〱したりすると、子供の正邪觀念は漠然となつて、道德心が不明瞭になる。又子供は親の言ひ付を他人にまで當はめやうとするもので、子供は煙草を飲むでは惡るいと言れゝば、喫烟する客を見て、あれは惡い人だと言ふやうなことがよくある。これは他日自分の正邪觀念を他に及ぼす基となるのですから、親の責任も却々重い次第です。

▲子供の人格が著しく變る時期

就學時代になると小兒の人格は著しく易り、男性女性の差が急に判然となつて、自身にもチヤンと認識されて來る。而して摸倣作用が始まつて、友達や大人の身振りを眞似ますが、度々眞似る内に、その意味を考へて、誰のやうになりたいと云ふ望が起り、模範人物の必要を感ずるものです。而してその人物は、平常自分のよく知つて居る目上か友達の中から捜す。これは理想の第一期ですから接近する者は餘程注意せねばならぬ。尚一層發達すると、現時代中の誰になりたい。假令ば東郷大將とか乃木大將とかになりたいと考へる

これが理想の第二期です。もつと進めば太閤とか正成とか歴史的の人物を模範とする理想の第三期となるのであります。かやうに摸倣作用の盛んな小兒も、お伽噺中の人物は模範にしません。桃太郎になりたがる者も少いし、修身讀本の虎吉や一郎になりたいとは云はぬ。假設的人物は手本にしないものと見えます。この原因ははつきり分りませんが、お伽噺全盛の今日これも一つの研究問題かと思ひます。

▲子供が嘘言を覺える原因

可なり敎育に注意する人でも、子供に話しかけられた時、良加減な返事をすることがありますが、子供は良加減と云ふことを案外よく知つて居る。これが嘘言の手本となる一つです。第二は一寸子供への愛嬌にからかつたり、出鱈目の戯言を云つたりするのが、何でもないことのやうで嘘言の印象を與へる。第三は大人の心に左ほどにも思はぬことを、そんなことを爲ると酷い目に遇はすぞと大袈裟に脅すやうな場合に小兒が嘘言を覺えるものです。世間の父兄は、うつかり嘘言を敎へて居るやうに思はれます。



▲天性から出る嘘言

小兒は又嘘言を發する自然性があるので、その一は、他人の知らぬことを、自分だけ知つて居る豪いものと思はれたる名譽心から起る第二は人類の祖先時代に用ゐられた敵に具へる策略が遺傳したもので、隱れん坊や、鬼ごつこなぞの遊びに狡猾な眞似をする。第三は言葉を面白く使ひたいために、つい云ふ嘘言。第四は事實を大げさにしたがる性があるため。第五は智力よ

り想像力の發達が大きい場合に友達にも分るやうな嘘言をつくことです。

▲徳育を受けた兒の嘘言

徳育を受けて居る小兒が、弱者を助けるために嘘言をつくことがある。或小學校で、教場に習字双紙のちぎれが落て居たので、教師が厳しく調べると、尋常三年の一生徒が、それは私が破つたのですと答へた。教師はこの生徒を訓戒しましたが、實は身代りに立つた嘘言で、他の生徒も皆これを知つて居て、豪らい所爲と思ふたのです。父母のために嘘言をつくのは善事と思ふて居る小兒もこの種類で、つまり道徳心に伴ふ弱點とでも云ふべきでせうが、教育者は一考せねばならぬことです。

▲忍耐の快味を感ぜしむべし

就學時代になれば、日常の場合を利用するとか、特別に事を設けるかして艱難に堪えることを奬勵し、實行が出來た折には、度々忍耐するほど報ひの大きくなると云ふ味ひを教へて愉快を感じさせるのが宜しい。未だ辛抱力のない幼兒が泣て要求する時にも、親が負けて了はないで、泣止んだら物を與へることを勵行して、忍耐の快味を悟らせるのが肝心であります。

▲青年期の心理狀態

小兒時代には唯規則として服從して居た事を、青年期になると追々理由の説明を求め始める、又大人なら承知の出來る事でも、理論の基がなければ納得しない云はゞ大人と子供の中間で、一般に推理力が發達する時期です。而して餘り説明を求めるために疑ひに陷り間違つた良心が出來て決斷力が乏しくなり易い。この病的良心に苦しめられる青年男女は澤山あります。或女子は知己に花を貰ふ時、一枝取つてくれる度に有難う〳〵と云ふ。自分でも一度で澤山と云ふことは承知して居ながら病的でかうなるのです。又友達の針をもらはなければ氣の濟まぬ病的の女子がある。若し青

年男女に。自分の心理狀態を打明けさせたら、この類の病的が乾度澤山あるに違ひない。この原因は樣々でせうが多く興奮性を刺激しすぎた結果です。尚青年は解釋を求めるのがかうじて、例の不可解に陥り厭世家となるのですから、出來るだけ智識の滿足を與へてやることが肝心です。

▲抑壓しないで性を利用すべし

青年は少年時代より模範人物の要求が甚しくなり且各方面にこれを求める。假令ば忠君の側では誰、成功の方面では誰と云ふ風に求めるものですから、この性を利用して圓滿な理想を發達させた方が宜しいのです。

世の中に捨つべきものは無い

◎茶殻は庭の植木の根元に捨てれば肥料になる、又乾して溜めて置いて枕に入れれば逆上引下の効があると云ふことだ◎木の葉や塵は掃溜めて焼けば肥料になる◎玉子の殻は溜めて置けば壜の中を洗ふのに重寶だ◎靴足袋の古いのを外して巻いて置いて座布團に綴つた人がある◎蜜柑の皮は丁寧に洗つて乾して置けば、陳皮になつて藥種屋が買ふ◎又夏の蚊遣りにも用ゐられる◎日常百般の物、少しく考へれば何一つ捨つべきものはない、面倒臭いからとて塵芥箱に捨るは、勿體ないよりも主婦の機轉の無いことを表白する所以ではあるまいか。

▲社交的智識の芽

又彼等の盛んな感情を抑壓しないで、詩歌、音樂等好むところを或程度まで自由に試みさせ、自立自認が強くて大人の注意に一々反抗することも、惡性として壓制せずに理性の滿足を與へてやり、秘密結社や黨派をよく拵へることも、或方面によつて社交智識に利用させると云ふ風に成るべく壓制をさけて青年時代の性を利用した方が良い結果を得られるやうであります。

兎角年齢に應ずる德育方法は目下の急務ですから、私は尚皆さんと共に研究して見たいと考へて居ります。(南葵文庫講演)



釣革物語

潮風生

▲紅く脆かりし少女▼

文明は詩の領土を挾ばめて、飯以上のパンを以て人々を脅やかす。韈うたれんとする翼は、餘裕と香氣のなき生活を爲して、愛せざるに嫁ぎ、おもはざるに娶る。美しくして冷やかなる家庭、氷づけの花の様な生活、――イヤそれすら送り得ないのである。夢と笑ふ乎。幻と嘲げるか。笑ふ者は笑へ。嘲る者は嘲れ。このセチ辛い人の世を、寒くなり勝さる人の心を、普通の理窟で滿足は出來ない。夢でも見やう。美しい夢でも見やう。吾人は摩天樓を作る傍に、愛の殿堂をこぼつ、文明なるものを呪ふ。

機は去るにやすく、紅顔はうつろひやすし。命を刻む心臟の高き鼓動は、逝く春を送る歌ではないか。金と云ひ、名と云ふ、冷やかなる名ではない。美人を得んが爲めに金を積むだとさる高利貸は自白した。されどアラッス！　青春は彼れに背いて逃げ去つた。記せよ人生の榠樝に横はる見えざる偉大の力を。ここに利害の打算と、文明の叫喚をよそにして、紅く脆かりし、青春の物語を述べて見たい。

▲花電車の其日〳〵▼

東京市を縱横に貫いて飛びかふ電車、便利は便利であるが、四錢均一の非美術的、押しあふ、へしあふ、足を踏まれる。懷中物御用心と、大變な騷ぎ。夫れに較べては舊の甲武電車、今の山の手線の尋常さ、客種から、車體から、車窓から見る光景から、一段も二段も立ち勝つて居る。ことに、花時分の風情。お壕づたひた流星の如く過ぎゆく電車で、窓外松は綠に、花は紅ゐに、コバルトと澄む空、白金碎くお壕の波、此時、此場合、若き人々の心はよく踊らずして過ぎ得られやうか。

山の手線の學生と云へば、男の方では學習院、一高、帝大を主として高商、早稻田など少々、女はお茶の水を盟主として、三輪田、跡見、稀には學習院女學部もある。

鳳顏鸞眉――眉目淸秀――豐頰細眉――玉容花顏の陳列會、これでよく電車が脫線せぬと不思議な位。いつしかこの美しき人々を乘せたる電車を花電車と



名をつけて仕舞つた！！

中野を發して、ゆく〳〵學生を積み込むで行く。一番多いのは四谷あたり、あの特別のバンド締めたるお茶の水の女生徒と、その附屬に通ふ、可愛い幼年幼女、選まれたる學生なる一高の二本筋、帝大の四角帽子。毎日同刻に乘りあはす處から、いつとしもなく顏なじみになつて、何となくその人あらぬ時は物足らぬ樣な氣もする。

▲秀才と美少女▼

指折りかぞふれば早や一昨年、春淺き頃代々木からこの花電車で一高に通ふ樣になつた青年があつた。彼は實に混血兒で、そして、才氣溢れるばかりの秀才であつた。二本線の帽、肩に斜めにかけたズツクカバン、白皙人の血をうけて、身體の平均もよくとれてゐた。

代々木から毎朝來る學生が他に五六人あつたが、この中でお伽噺のクインの樣に愛らしい女學生が一人目立つて見えた。學校はお茶の水、年は十六。某の銀行重役の愛孃と傳へられた。假りに澄子とつけておく。

青年名はフリーマン。父と弟妹とは英國に。自分はたゞ母とともに代々木の僑居に身をよせてゐたのだ。毎朝々々、ステーションのプラットホームで澄子にあふ。別に何と云ふ事はあるまいが、もとより憎くは思はなかつたらう。滿目未だ蕭條たる青春の時、お互に、その姿を美し、凜々しと見あつた——は勿論と筆者は推定してはゞからぬ。

花が咲いた。野には雲雀の歌、春風春水四澤に滿ちた。二人はいつしか詩の領土に入つた。

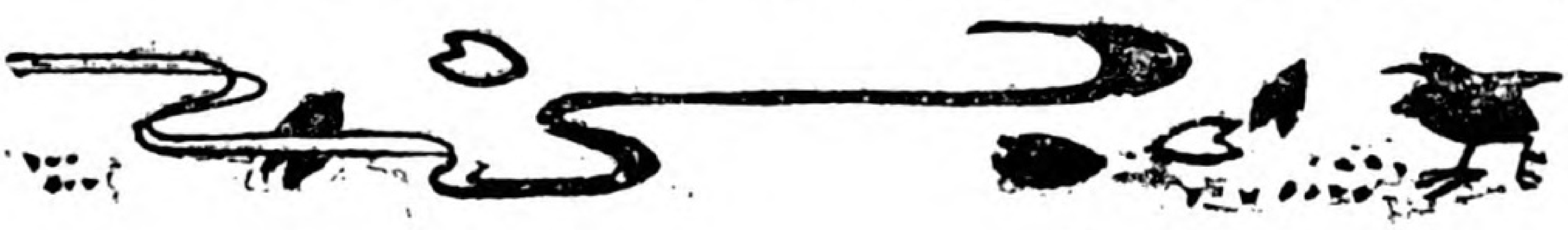
電車が込みあふてゐる時なぞ、二人は默して釣革にブラ下つた。發車のはづみに、澄子はよろめいて、輕くフリーマンに支へられた事もあつた。其他要するに、第三者としては一顧にも價せぬことも、二人の記憶に鮮やかに殘つた。

自然は片時も止まらぬ、花は一夜の嵐に春泥に委した。暮春の恨みを表象して躑躅が咲いて、やがて散つた。卯の花月夜、春葉の頃と移りかはつてゆく。

この頃には二人はもう默禮位ゐを交はす樣になつた。折には

『どうしてこんなに電車が遲いのでせう。』

などとも語つた。





ネルの單衣の快よき頃、二人が前後して電車に來る處など、何となく人目を曳いた。

時は移る。世は動く。二人の間は算術級數的に進むだ。

若き人々をして若き人の心を想像せしめよ。筆者はわざと何も云はぬ。

▲運命の神の呪ひ▼

暦は一年捲きかへされた。また花の時が來た、また若葉がおとづれた。相想の人の心は一年を一ヶ月とも見ろ。甘き夢未だ醒めざるにすでに暑中休暇に入つた。

澄子は湘南に濤の音をきく身となつたが、人の羨む避暑よりも、寧ろあのフリーマンと、七日に一度でも交通したかつた。

が、然し——運命の神はこの人を妬むだ。

秋風都門に入つて學校のあたり色めき渡る九月、代々木驛に到つた澄子は茫然自失した。居らぬ。居らぬ。かの二本筋の青年は居らぬ。

その翌日も翌日も、また翌日も！

半月の後、フリーマンはすでに病を得て死の神に囚はれて終つたと聞いた澄子の心の中!!

星よ碎けよ、蕾よ枯れよ。倫理乎。宗教乎。人乎。吾乎。あゝ。

澄子は醒めてはかなき日の來れるに身も世もあらず泣いた。

＊　＊　＊

ことし三月一日は一高の紀念祭。

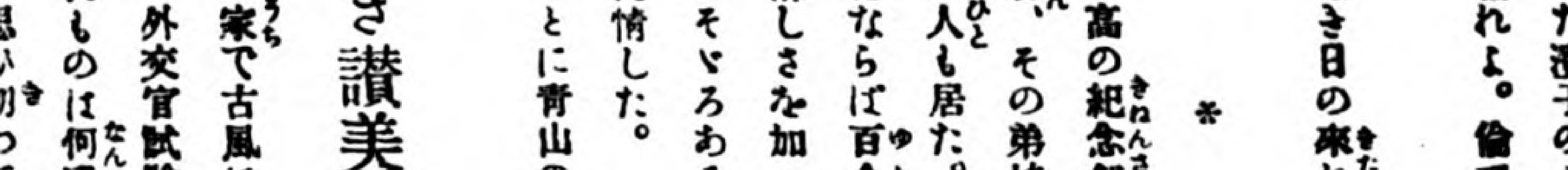
潮風生は大學の某君、その弟妹、學友と之に赴いた。その中に澄子その人も居た。

細面の優しき姿。花ならば百合の風情に撫子のおとなしさと、水仙の淋しさを加へたと云はう。なつかしかりし人の母校のそゞろあるきにいかに魂を奪はれたらう。思はず同情した。

聞けば澄子は日曜ごとに青山の墓地に詣で、香華を手向けるとやら。

▲淋しき讃美歌▼

一高の歸り大學生の家で古風に加留多會をやつた。大藏省のA學士、外交官試驗及第の秀才K君、また落ちあひ、負けたものは何でも藝をする事。僕は賄征伐の歌、K君は思ひ切つてチョボクレ、學士





の新體詩朗吟、姫子軍ではあぶなかしい英詩 レジデーヨンをやつた。最後に澄子の番となつた。はしやいだ連中と打つて變つた彼の女は淋しい讃美歌をうたつた。それも次の間へ行つて、聲細々と、百六十番「み國へ行く」の一節、逝きぬるものをなつかしみて、脆くはかなきおもひを歌に托してうたふその聲は、一座の胸に沁み入るやうであつた。

「今度の日曜にはまたお墓へ西洋草花の種を播きにゆきなさるんですつて、詩的ねエ」姫子軍の一人は囁いた。

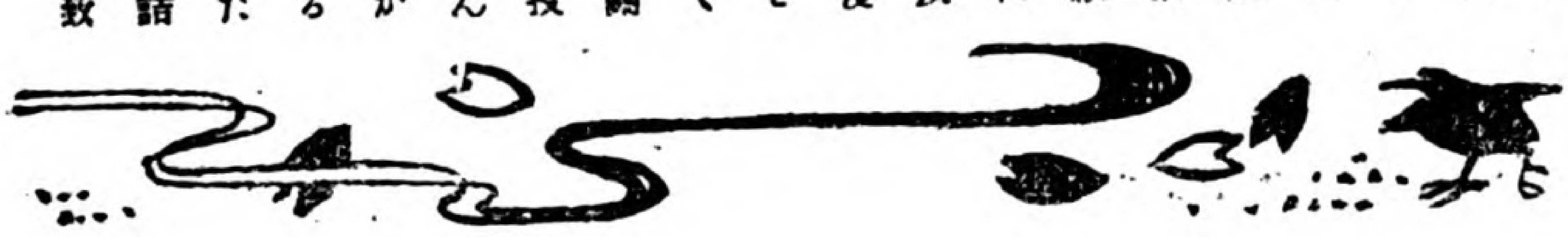
夜十時散會。

いつしか空は月になつて、一庭の梅はたゞ白かつた。

其夜澄子の夢は圓らかではなかつたらう。忙がしい實利的の社會に、まだかうした美しい心を持つて紅く脆い戀する人もある。

●活花が示す東京各區の氣風

活花の流義も多いが最も隆盛な古流、池の坊、遠州流の三つが市内の如何な處に如何云ふ工合に流行してゐるかを調て見ると其流派の特色が自然に見えて頗る面白い▲池の坊流を稽古するものは官吏社會の家庭が最も多く會社員ならば高給のものが稽古するだけに流行の範圍は麹町、牛込、小石川、芝、四谷、赤坂、麻布、本郷等である何故に池の坊が此階級の人々に歡迎されるかと云ふと此流は花の形や振は第二位に置いて自然の雅味を尊重する夫が此階級の要求にシツクリ合ふからであらう▲古流の範圍は日本橋區と京橋區を中心として神田、淺草、下谷に及び商人の別莊とか寮とかを有つて居る根岸邊まで侵入して居る此流派は花を成るべく意氣にスツキリと垢拔けのしたのを尙ぶ更に云へば池の坊が關西的であるなら古流は關東的江戸前式とも云はれる此の關東的江戸前式なのが即ち商人や藝人社會の嗜好に投ずる所以であらう次に遠州流はチヤキ〳〵の兄さんかお神さんの側が多く範圍は本所區、深川區方面が中心だが神田區の一部に侵入して居るのは妙である此流派は技巧を重んじて花の枝を挽めたりくねつたり自然の趣味を悉く犧牲にしてまで形に苦心する詰り人工美の分量が甚だ多い夫が此階級の肌合と一致するのであらう。



女學世界增刊

悲劇十番

四月十五日發行

人は絢爛たる櫻花に憧憬れ、人は朧々の月影に逍遙ひ、三春の行末盡くる所なからんとするも、唯だ束の間の歡樂なり。忽ちにして嫉風吹きすさびては落花無情の悲哀あり、忽ちにして妬雲捲きいでゝは閉月暗澹の痛苦あり。此時に當つて才子天を仰いで長嘆息し、佳人地に伏して慟哭するも、天何をか憐み、地何をか憫まん。今や花は地に零ち鳥は古巣に歸りて、限りなき哀情は新綠の萌え出づると共に滿々として暮春の天地を蔽はんとす。嗚呼『悲劇十番』に現はれんとするものは、抑も明眸血に泣く涙か、將た皓齒華殿の飛沫か。玆に秘密の玉手箱の一端を開けば——

△大奧の悲劇
△谷間の姫百合
△涙の玉の緒
△破れ井筒
△黑髪綠髪
△姉の形見の日記
△牡丹の蟲
△裏屋住居
△獨り寢の夜
△殘らば花に

△涙の十年間
△伐り倒されたる根株
△柳散る里
△破鏡嘆
△雁風呂
△粉骨三十年
△谷間の花
△涙の生涯
△高島田
△骨肉の情

△思ひ出深き若葉の頃
△濁流日記
△別れ霜
△乾かぬ袖
△辻卜箱
△鬼の姑と佛の嫁
△自から欺ける境遇
△呪はれたる蕾の花
△蛇とならばや
△涙々日記

令嬢評判記

四

忘草

これは想像ぢやアない、現在の學友の事實談ですから、そのおつもりでお讀み下さいよ。しかし學校は山の手の方ですから、スタイルも粋な銀杏返しやコッテリした束髮とは自然趣を異にした、山の手式のハイカラとびきりと思召して頂戴よ。

△S子樣

クラスの中で一番早くローマにお結ひなすつた方です。せいがお高くて、色白だから、よくお似合ひ遊ばします。それは燃ゆる樣なローズをおさしになるかと思へば、これはまた雪をも欺くホワイトローズをおさしになる時もあります。何しろハイカラ向に出來てるんですから、ローズが一番似合ふやうです。無論英語はクラス一、四年で英語の十點をお取り遊ばしたのは開校以來始めてなんですつて。それもその筈、この方のお母樣は混血兒で、お祖父樣が英國人なのですもの。御當人は隠していらつしやるけど、そりや爭れませんわ。お目こそ靑かられ、お髪は赤く、お顏色だつて普通の人の白さとは違ひますもの。こんな方がテニスなんか遊ばしたらそれこそふるひつきたい位でせうけれど、お生憎樣とこの方左ぎつちよでございますの。その代りセンタボールの御手並は、流石運動家の〇〇先生も舌をお卷きなすつたさうです。許婚の君は、ネーピーだつて話ですけど、それはどうですか分りませんが、なんしろネーピー狂だつて事はたしかです。それで私たちはネーピーつてニックネームをつけてますの。ネーピーについちや、可笑な事があるんですけど、そんな事まで素破抜いちや、S子樣かわいさうですから、まあ〱おあづけにしときませう。

△T子樣

運動家でその名を校中にとゞろかしたT子樣！。お轉婆な私とはシスターの契りまで結んだ人。淡泊で快活で、そりや面白い事ばかりおつしやるの。何の學課でもよくお出來遊ばすんで、先生方から隨分とお寵愛されますので、一方ぢや嫉妬のあまりない事まで言ひちらす人もありますがそんな事はありません。

こんな方がお坊さんのお子さんとは振つてませう。でもほんとうなんですよ。私そのお寺にや何度も〱遊びに行きましたし、お父樣の坊主頭も拜みました。人つてほんとうに見かけによらない物ね。S子樣の混血兒はまだしも、T子樣のお坊さんに至つちや、だれもほんとうとは思ひません。テニスのチャンで、ネットの上を一二寸ヒユーッと

球が通つた時は、うつとりしちまひますもの。ブランコから落ちて氣絶する事も、浮動木から跳ねとばされて怪我する事も、こんな人には免れませんか、でも御當人は平氣なものです。體が丈夫だからでせう。

こんな方が大きくなつたら、どこへ嫁くんでせう、お坊様にやどうしても似合ひませんねえつて、五六人柴の上に集まつた時話しました。

△K子様

この方は詩人なので、毎月クラスで出す〇〇雜誌に、紅の花だの、自然美だのつて、ステキな口語詩や新體詩なんぞ澤山お出しなさいます。

花の下で秋袂ふて泣くのがK子様のくせ。詩人と花！涙！想像してさへ美しいでせう。況んやまのあたりその有様をみた私たちの、チヤームされるのは無理もないでせう。ですからクラスで少しステキな人は、皆なK子様と仲よしになつてしまひます。でもよつぽど妙で、今まで悲觀してたかと思ふと、ラケット片手に盛んにはしやいでるんですもの。テニスのチヤン？といふよりは、むしろスタイルのステキなんで有名なのです。バツクの手並から何から、どうしてこの方はこんなに人を魅する力があるんでせう。舞踏の時も、そりや氣取るんで、××先生からは非常に可愛がられていらつしやる。

お轉婆のT子様が、ある時校庭の櫻をめちや／＼にふへて、「きれいねえ、花吹雪！」とやつたら、K子様は、かあいさうだわつて泣き出したんですつて。お父様が海軍大佐だから、S子様にことに好かれていらつしやる。すみれ袴とホワイトシユースが、この方を代表するものなんです。

ある日ある話中に、「あなたの理想の病氣はなに？」つて云つたら、「肺病よ」つておつしやるんですの。隨分不如歸熱中で、あれを十三度も讀んだんですつて。いくらなんでもあきれちまひますわね。でも肺病になんかとてもなれやしません。體が丈夫で、お顏色なんか艶々していらつしやるんですもの。二つ違ひのお妹さんは、少しあの氣味がおありなさるんで、時々學校をお休みなさる。さうするとK子様は、きつと「なんか面白い本貸して頂戴な、妹が可愛想だから」なんておつしやるから、「どんなのがいゝの？」つて伺ふと、「彼は殊に冒險談を好みます」なんて、英語でおつしやる。優しいわね。尤も優しくて涙もろいのが詩人の特長なんでせうけど。

△O子様

今は御病氣で鎌倉に行つていらつしやいます。御病氣は腦がお惡いつていふんですけど、御親友のお話ぢや、精神錯亂なんですつて。いゝえヒステリーぢやないの。學校にお通ひの時分も、なんだか少し妙な事が時々ありました。原因は、S子様と首席を爭つて負けたんだらうつて、皆の



評判なんですのよ。私もてつきりさうだらうと思ひます。無論それぱかりぢやないんでせうけど……。よくお出來遊ばすんですけど、熱しやすい方で、負けぎらひなんでせう。試驗の前も、「私今度S樣に負けたら、この松の木の御厄介になるわ」なんておつしやつたのを私聞きました。その時から少し違つてたらしいんです。何でも一所懸命していらつしやる時は、なんと云つてもきかないんですつて。

御病氣の始めで、まだ赤坂の御本宅にお出での頃、S子樣五六人で、クラス一同の花籠とお菓子持つて上つた時も青い顔して變な事ばかりおつしやいました。親友の×樣が鎌倉にお見舞に行つた時は、大分病勢が進んでいらつしやつたやうです。それで×樣に「海岸に行きませう」つておつしやるから、「もうこんなに暗くなつたから明日にしませう」つて黄昏の空を仰いでおつしやると、「ホヽいゝわ、二人で海へはいりませう、そして死ぬのよ、おかしいわれホヽ」つて笑つたんですつて。こわいわれ。だもんで兩親は大變な御心配、それに一人娘ですもの、御母樣なんぞ御自分も氣違ひのやうになつて御看病、夜もろく〱およらないんださうです。それに若い女中が二人交代に夜番なしてるんですつて。もしもの事があるといけないからでせう人の噂も七十五日とやら、その當時は隨分評判でしたけどこの頃ぢやX子樣が思ひ出しては淋しさうにお話なさるばかりで、あまり噂も出ませんが、いかゞなんでせう。少しでもおよろしければよいがと思つて居りますの。鎌倉材木座あたりにお住ひの諸姉樣方　若しや十七八の中ぜいの、顔の圓い、髮の美しい、それらしい人にお合ひ遊ばした事は御座いませんか。

△H　子　樣

質屋のお孃さん！お孃さんていふと、桃割にでも結つて拔衣紋にして、ぢやら〱れつて歩く所謂お孃さんをお想像遊ばすでせうけど、大違ひ。ステキに出した前髮に、五吋巾のピンクリボン、裾高に、そして胸ひくゝはいた袴を編上げ靴にけつて歩く時は、あはれ道ゆく犬君もしばし歩みを止めるといふ。徒競爭にはきまつて一番。高飛もお上手なりや、浮動木なんてステキなもの。流石のSさんも、この方には少々負けぎみ。學課はなんでもまろでだめ。ただ一つ字は流れる樣にお書き遊ばす。さうれえ、文も可なりの方よ。ある意味のお姉樣が十人で、妹が九人とか隨分れ銀時計をさげてるかと思ふと、ゴールドに變つたり、ニッケルに化けたり、ホヽ面白いぢやございませんか。何れ質物なんでせう。いつかXさんが大きな裁縫包持つて朝誘ひにいらつしやつたんですつて。おまけにお店の方からですよ。そしたら番頭どんや小僧たちが、ジロ〱その包みをみたんですつて。ホヽそれからX子樣が、「H樣もういらつしやいまして？」つていつたら、急にペコ〱して、「へいまだお出かけなさいません、少々おまち下さいまし」つていつたんですつて。なかしいわれ。

この方のお母樣は藝妓だとか伺ひました。ですからH樣もなか〱の美人ですが、どこか品がありません。私なんぞ、やつぱりK子樣たちの方が床しくていゝと思ひます。

日 ら 麗





和歌

一等

○　品川　花うばき

伊勢の海や眞珠を秘めし海底に乙姫舞はむ春のおぼろ夜

評　艶麗の極、而も神秘的韵致に富む。

二等

○　神田　津川なつ子

あけがたのうまし少女の息のごと淡く烟れる京の春雨

評　京の雨は京の少女に似たり、詞調いと優し。

○　小倉　西原千代子

若草に眠れる山羊の白き毛をのどかになぶる春の風かな

評　宛ら油繪を見るが如し。

三等

○　群馬　田島澄江

花すみれ摘みつゝ唄ふ少女子の群にまじらば君忘れえむ

評　戀に惱める人の心は斯くもあるべし、切なる情を優しくうたひたるは嬉し。

○　福井　池上小芳

沈丁花なゝ夜の雨に散りにけり化粧の窓に香ひ殘して

評　沈丁花咲く閑窓には如何なる佳人や住める、春も稍々暖かならむとする頃、化粧の水に散り落れたるさま、美しき限りなり。

○　大阪　入江雛鳥

强ひられて飮みたる酒はいとにがし戀の犧牲の少女は哀れ

評　詞調やゝ散文的なれど、却つて面白味あり。

○　仙臺　武山泰子

海棠の雨に散る宵湯の宿の杜によれば友の戀しき

評　春夜温泉宿に泊りて靜かに雨の海棠を眺むる時、卒然として徒らに友なきことを物足らず思ふ、眞情の嬉しきを取る。

秀逸

○　淡路　國分光枝

書刷毛洗ふ春のやり水むらさきにかたへ濁りて流れゆくかな

評　春の景色の中に、何となく謎のある如くして面白し。

○　本郷　横田佐久

雨霽れを絹行燈の朧ろより庭の丁字の香のゆらぎける

評　繪畫を見るが如し。

○　大阪　金田初子

猿舞に泣くは信田の物語さげすむ子等の悲しめるかな

評　詞調佳ならざれど、着想面白し。

○　秋田　片岡きみ子

わが戀のよみがへるらむ春よ春よ懐しきかな若草萌ゆる

評　胸に結ばれし思ひの和かなる春日に遭ひて再び甦らむとす喜びの情よく現はれたり。

○　山口　佃とみ子

金襴の小箱に秘めし文がらをそと出して見ぬ春の灯の前

評　風情艶麗。

○　神戸　森きよ子

二階より山を眺むるうら若き女役者に春の雪降る

評　田舎廻りの女役者ならむ、賤しきものをよく美化せり。

○　茨城　今泉義子

天少女黄金の甕をうちこぼち悔み泣くごと春雨の降る

評　着想よし。

○　信濃　吉川静子

ひばり野は草かげろひて夕がすみ玉蟲色に野路つゝみ來ぬ

評　技巧たくみなるが、亦た却て嫌みあり。

○　西大久保　高尾君枝

繭あまた取りちらしたる六疊に絽蚊帳して寢ぬ上毛の宿

評　能くローカル、カラーを現はせり。

○　和歌山　紫煙子

黄ばら咲く小川のほとり蝶飛べば茶色の蛇の頭もたげぬ

評　前に茨の刺あり、後ろの蛇のはあり、危き哉可憐の胡蝶。

佳作

○　信濃　吉川多美子

雨霽れぬ夜會は果てぬ花吹雪く衢に消えゆく轍の音よ

○　福岡　大坪登

音たかく石碑きざむ鑿の手をとめて雨聞く石屋根の中

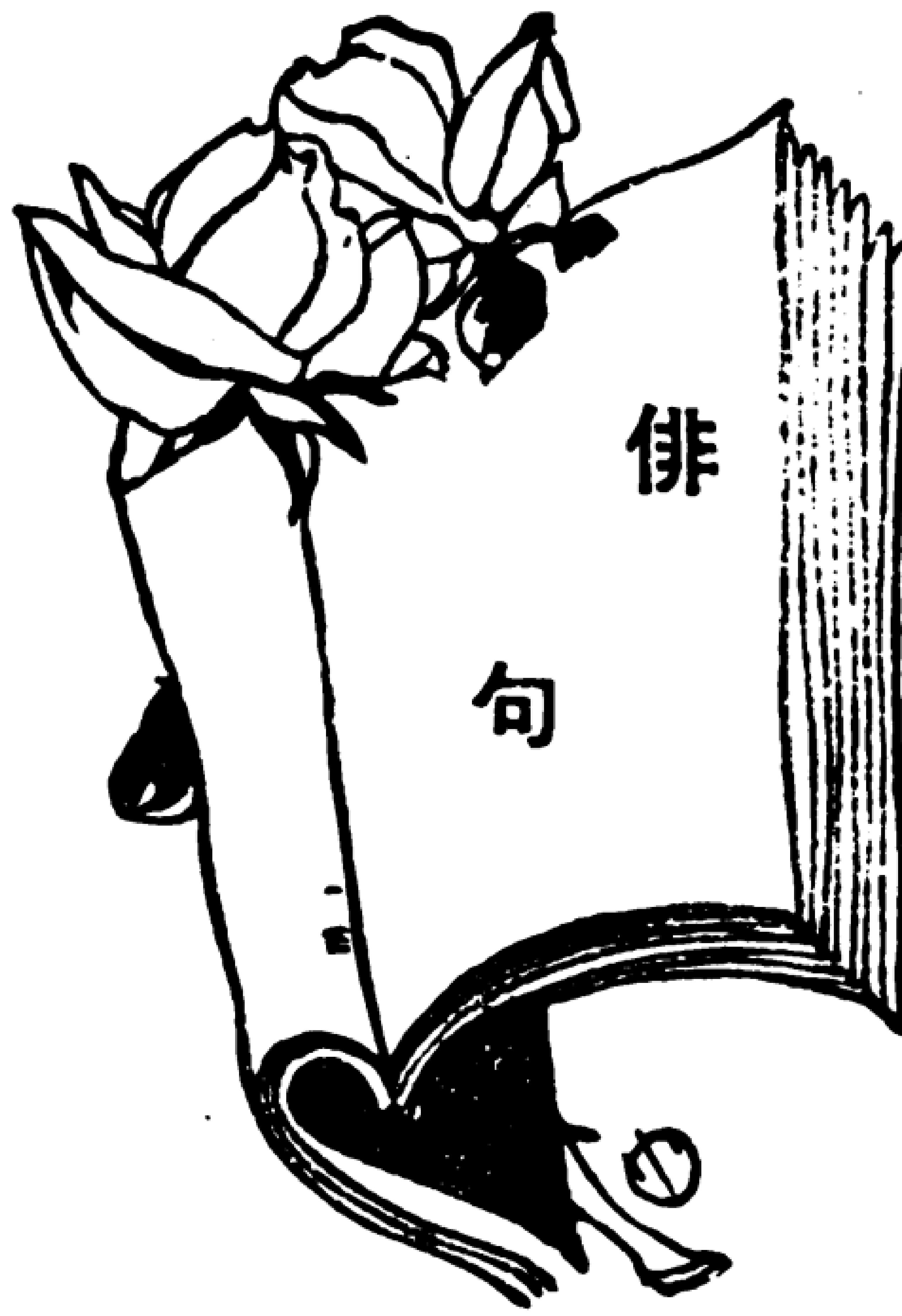
○　横濱　高橋すみ子

雛だんにともしびつけば金屏に瓔珞はえて緋桃にほひぬ

○　山口　花たちばな
都こふる心は失せぬ父守りつ針持つ人の指の細りよ
○　佐渡・晴子
銀沙越え金沙の星路月ゆくや玉車のひゞき雁が音にきく
○　麹町　豊子
親のためとこをとめにて過す身は戀死よりもはかなかりけり
○　西ヶ原　會田秀子
のどやかに機織る音も野の人の唄もまじりて春の風吹く
○　下澁谷　山崎てい子
椿咲く母の御墓にぬかづけば春雨細う袂うるほす
○　靜岡　蓮子
雨線髮を洗へばほろ〳〵と紅梅の花こぼれ初めける
○　新潟　田中よしの
磯に得し色うつくしき櫻貝春の歎かき砂に埋めぬ
○　横濱　原瑠璃
沈丁花遠かる君を思ふときまどべ冷たく夕小雨降る
○　本郷　美代子
縁に出てしづかに姉は髮をすく音もなくちるゝ紅椿かな
○　目黒　後藤とく子
舟下りてひとかたまりに上りくる人影淡し夜るの棧橋
○　廣島　古田よし子
ほか〳〵と日影さしたる河底の藻草がくれに小鮒群れ泳ぐ
○　神戸　白菊
なにとなく泣かるゝ日なり春雨の音も靜かに黄昏るゝ窓
○　木曾　瀧澤初子
春雨のけぶりてくるゝ村里はかなたの森も紫に見ゆ
○　尾道　小林さと子
陽炎のもゆる花野をさまよへば繪日傘落ち居ぬまだ色のよき
○　福岡　わか葉
ほろゝ散る桃の林に人絶えて鐘の音低う春の日は暮る
○　埼玉　羽鳥寛子
末とげぬ運命とならば如何にせん死よと答へて君は泣くかな
○　奈良　武野せつ
わが憫をなくさめくれし鶯の病めるや如何に今日は訪ひ來ず
○　奈良　守井章子
春雨のしと〳〵と降る夕まぐれ何處ともなく琵琶の聲する
○　廣島　楢崎美保子
忍ぶ身は闇ふる胸をたゞ僅か泣ける瞳に告げて別るゝ
○　岸和田　寺田ひで子
旅人に村に入る道をしへやりて雲雀の歌に鍬止めて聞きぬ
○　本郷　市川あき子
春雨のしと降る宵の湯上りは堪へられぬまで物欲しきかな
○　下谷　大上菊子
つゝましく膝に手を置く淋しさを味ふ如き白躑躅かな
○　上總　恭與か女史
紅あせし戀の反古歌ひくゝ誦して胸にのり行く春の野の道
○　美作　杉山信子
木の芽ふく春し來ぬれば古き戀それもめぶきてひたうづく胸
○　美作　田鶴子
戸に倚れば又思ひ出ぬ年二つ多くみられし歎きかなしみ

○ 京都 三宅嘉賀子
たひらかに鏡の如く澄みたりし心になりぬ君と別れて
○ 大阪 小泉貞子
山ざくら咲きてみだるゝ果敢なさを涙して見る少女となりぬ
○ 靜岡 北川和子
我が母のいたつき重き枕邊に瓶の花散る春の夜寒き
○ 赤坂 濱野花子
一ひらをそと唇におしあてゝほゝと打笑む桃の木の下
○ 淺草 瀧口南香子
去らばとて別れける時贈られしリングに昔偲ぶ雨の夜
○ 肥前 服部つき子
我がなみだくろがねに似て大いなる君がみ膝に瀧と流れぬ
○ 信濃 前島節子
なぐさめんと思ひしものをわりなくもなぐさめられて君と別れぬ
○ 芝區 老沼桃香
咲き匂ふ櫻の許に飛行機の翼に降りけり春の夕暮
○ 本郷 さく子
なげうてば聲ある水に石落ちぬさびしき山の日の射さぬ谷
○ 仙臺 黒川朝子
さくら雨南より來し駒鳥の紅き胸毛を思ふ夜をふる
○ 淺草 内田三千子
美しき杵屋のむすめ弟子たちと埒なく三味を弾ける夕ぐれ
○ 大阪 伊藤つな子
君を送り宵に松原吾行けば空はおぼろに細き雨ふる
○ 淺草 森村峰子

○ 兵庫 葉山靜子
近江路や夕のうみに鐘消えて心落ちつく春の旅かな
○ 豐崎 杜子美
嬉しさよ霞來る窓を押し開きネルの着物に鳥の餌を撒る
○ 麻布 溝部惟子
紫の蚊帳と藻の香を吹く風に髪なぶらせて潮の音を聞く
○ 出雲 友千鳥
柳けぶる大路の瓦斯は淡く照り玉突く音のさやかに聞ゆ
○ 香川 白露女
うつし身にまた落ちそゝぐ我が涙瑠璃の玉とや君は受くらむ
○ 福岡 田鶴子
花よ香よ戀よダイヤよ何かせん我世はたゞにあけてくれゆく
○ 千葉 芳子
山まろう空にくろめば灯かげあかう水にうつりぬ川そひの家
○ 大阪 梅邑秋香
香ばしき霞の中にまどろめり女詩人の住める山庵
○ 下總 河原ゆき子
業平のあづま下りの錦繪の似顔うつくし春の灯の下
○ 飛驒 萬京子
君に似る人だに見たく思ふかな小雨そぼ降り紅椿落つ
○ 越前 三成美蒔子
焼山のかる石よりもはかなかりいづこに捨てむ戀のぬけ殻
○ 靜岡 白露
寄宿舎の窓に向ひてをちかたの山の煙をなつかしむかな
春の緑蓄の花の群なして樂しきあたりのどか日の射す



天

歌の蝶落花の雨にまみれけり　美作　須江八重子

評　靜にして美、好句と謂ふべし。

地

病閑の心中歌ふ櫻かな　東京　夢　子

評　清麗比なし

人

夕風に鴉なくなり宿の花　下關　奈良野倭文子

評　淋し味の中に春あり

秀逸

蠶家の窓草山見えて朧なる　岡山　松崎しづ子

評　夜べの疲れ眼に照る日の眩ゆくて

緋桃散るや温泉のほてり逍遙ひて　麹町　牧野銀杏子

評　ホネームーンの詩想も湧く

裏田草知らず花咲く彌生哉　大分　高橋　梨花

評　實景亦實感

山吹や村富みて殖産の會　福岡　橋本　操

評　豚見も殖ゆべし

梅殘る沼垣や雨を鳴く蛙　麻布　夕紅葉

評　上五にて生命あり

佳作

山麓の青田に遊ぶ鹿の子かな　豐多摩　高尾　[illegible]枝
新開の茶店佗しや木瓜の花　府下　黒須　敏子
行く雁に地鳴り怖づ温泉里夜客哉　淺草　山本　春子
水利碑の主今なし芦の角　三河　たか子
櫻名も美し貝や磯の春　神田　水露　幸子
草餅に名も古き土橋茶屋のあり　芝　大村　ふさ
篝火焚く里夕暮や桃の花　下關　奈良野倭文子
積柴に伏す雉子見たり夕山家　豐多摩　高尾千代子
この大河源の奇勝椿も咲く　大分　吉田　彦子
南に山低き庭や春の草　熊本　松本　每子
春宵や温泉宿に客知尋れ來て　豐多摩　菊　香
屋根の上に鷄鳴く郷の長閑かな　靜岡　北川　和子
詩の神の囁きや花の宵灯　東京　佐久間紅梅

鷗飛ぶ沖島煙や春の海　下関　宮藤光子
冴え返る佛鉢や梅薫るなり　神奈川　植木とよ
名所松使る流言雨をなく蛙　高知　北村美佐夫
奈良の鎗の光る萬龍や山笑ふ　栃木　赤堀・千代
浦島が亀の行方や海長閑　京都　君子
熊笹に兎逃しぬ春の雪　伊豫　吉良信子
縁下の蛙なく日もありて春の雨　京都　小野盆子
梅が香や灯ほのかに宮詣　高知　野安蕗美子
蝶々や夕暮さむき河原風　京都　加藤亀代
夜調べも濟める村里囀りす　麻布　吉田かつ子
潮満ちて鳥居陽炎ふ名所哉　神戸　吉田金子
洲近舟日がな流る蔭かな　瀧の川　山田水月
鶏の一羽かへらぬ朧かな　西ヶ原　會川秀子
春雨や玉藻集など拾ひ讀む　靜岡　佐藤松子
鶴引や濱邊の雨月くるゝ時　京都　中島照女
春雨や汀に繋ぐ捨小舟　北海道　杉村かめ
平蕪として麥千反や揚雲雀　大阪　古賀水子
塔掃除するや雀群晴れて啼く　本郷　富田喜代子
菜の花やお染が化粧うつす水　本郷　松下昌子
垣花や下もえ出づる庭の隈　京都　田中愛子
美し娘の鷄飼ふや春の風聞に　大阪　松浦いと子
春月や今日榮えし屋臺練り捨てに　神戸　上田倭文子
よし野路や秋に袖に花ふゞき　麻布　加藤政子
置く霜に牡丹の若芽赤きかな　秋田　安藤月嶺
さく〳〵と小犬歩くや夜の宿　同　同

夕風に蝶わたりけり春の浦　東平　渡邊梅子
花吹雪狂女の髪の長きかな　淺草　奥田稔子
青柳に絹糸の如き小雨かな　淺草　奥田映子
寺柳井戸埋めて怪の解かれけり　麻布　小倉うた
春風に小町の眉の匂かな　奈良　上田郁子
青空に白雲つゞく櫻かな　山口　梅田キヨ
里の灯の花咲く頃を霞みけり　本郷　田村澄子
春寒や褒似が閨の細灯　千葉　恭よか子
春風や上使な迎ふ小城門　新宿　原山しげ子
一廓の里暮れ雨や花卯木　朝鮮　佐藤元子
屋疎らに東風生温き灯かな　紀伊　富永かづゑ
紅捨りし船江にあり春の雨　大阪　君川春子
神木に擱らめる藤や二軒茶屋　南千住　海老原み
蜑女が鷗の齒鳴く聲や潮干潟　神戸　渡邊榮
寒牡丹散りて日もある月夜哉　磐城　馬目延子
香爐の火も消えがてや千鳥啼く　四谷　中村若子
行く春や歌日記もかほど積む反古に　靜岡　原崎富士枝
曲水の杯川下に流れけり　備後　上林芳枝
うき人の笛のしらべや櫻散る　日本橋　有賀綾子
雨晴の傘さし行くや春の月　府下　和泉なほ
寒食や干物侘しき菴所　高館　つばき
雛僧の木魚しめるや春の雨　麻布　上野松代
雛育つ藁屋斗りの在所哉　芝　道川久子
瓦斯燈も青みて春の夜雨哉　東京　小貫みれ子
朧夜や裏町な諸連れ立ちて　神戸　大野きよ子



誌友倶樂部

▲愛らしうほゝゑむ花にくちつけて蝶さゝやくよ天地のなぞ——近江の冷露様、私あんまりよくて幾度かくり返し拜見致しました、陽炎もゆる春の野に、美しき花にそと口つけし蝶の私語、ほんとに美しい天地のなぞで、繪卷ものを見るやうな心地がします(園世)

▲私は當地の外國人商館に務めて居る娘です、商館諸姉方の内、成るべくは年召した方にて、商館の務御希望の方はお世話致し度うございます、英語の力は高等女學校五年、(ミッションスクールなれば結構)、英字に達筆の方、格別六ケ敷き事務でもありませんが、極めて精密を要する職務です、御希望の方は住所姓名を私までおしらせ下さい、但し廿五歳未滿の方は斷り致し度う御座います、私の住所は誌友倶樂部の記者様まで申上げてあります(神戸、浩知子)

▲梅が散つて、柳が青み、霞が棚引いて、花の都の春は音づれて來ました、而して私等も卒業せねばなりません、今更に流るゝ年月に驚きます、八重櫻咲く運動場に、淸い美くしい瞳の裡に、前途の理想に憧がれた事もありましたが、同じ學び舍に、朝夕いそしんだ友垣にも、もう別れねばなりません、お下げからマガレットにマガレットから高髷に變つて行かればならんのです、もう一度幼な時代に立返つて、心行くばかり其頃の希望に輝いた眼に、此自然の春を映して追想に耽つて見たうございます、今から顧みれば是迄の悲しみは美くしい悲しみでした、是迄の樂しみは、懷しい樂しみとなつて行く、さらばよ皆樣(東京市小石川區金富町廿六、橘本方愼野雪枝子)

▲「友のゆくゑ」をお書き遊ばした若葉さま、讀み行く内に何とも云へぬ思ひをいたしました、私も明けくれを同じ學舍に笑つたり泣いたり共共にした學友と、去年の三月の末に別れて、今はチリ／＼バラ／＼に淋しき月日を送つて居ります、クラスメートの内でも、殊に親しかつた友は、東京神田區に居りますの、あゝ我れも東京にと思ふけれども、それも出來ず、東の空より毎月來る本誌と友のたよりをのみ待つてゐます(吳五番町にて淋しき梅子)

▲内尾直二先生の「結婚しらべの内幕」のお話、ほんとに面白く拜見しました、あゝいふ世間の内面のお話を伺ふと、私共のやうな世間知らずは、どんなに益を得、また危險を免れるか知れません、どうか折々先生のお話をお揭げ下さい、それから是非お調べを願ひたいことがございますから、先生の人事興信所のある處をお知らせ下さい、お願ひ申します(麴町若草)——人事興信所は、京橋區弓町十七番地にあります

▲深雪女樣の「煖爐の會話」、すつかり氣に入りました、あのコンパニーの所の「淸子さんは?」「オフコース」、なんて、ほんとに御元氣でゐらつしやいます事、羽子板さんつて、ホヽヽ讀み乍らふき出してしまひました、どうぞお振ひ遊ばして頂戴、磯千鳥樣の「少女ごゝろ」、讀みゆくうちに淋しさと同情の感にうたれました、私お葉の行方が安んぜられますわ(近江愛知の町にてホワイトローズ)

▲御同情ある諸友の諸姉へお願申ます、私は元東京の淺草三筋町に居たものですが、今より貳拾年前、實妹こまと云ふ其當時十歳の者を、近所の宇田宗四郎と云ふ處へ養女にやりました處此家が一家分散し悲運に陷り、養女のこまを連れて埼玉縣方面に參りたる後、絕へて音沙汰なし、其後實母は病死しましたが、私には一人の妹で、實に會ひたくてたまりません、萬一お知りの方は、何卒下名へ御知らせを願ます(橫濱南太田二一〇五秋山たま)

▲米國の中村君子樣、私も實は渡米いたし度いと存じてゐましたれどあなたがあんなにお知らせ下さいまして、斷念致しました、感謝致します、してあなたも女學世界を唯一の友としてゐらつしやるつて、私もさうですの、何卒これを御緣に永くお交り下さいませ(わすれな草)

▲男は男らしく、女は女らしくと云ふやうに、女學世界の讀者なら、女學世界の讀者らしくなければなりません、數ある婦人雜誌のうちで、最

も讀んで味のあるのは女學世界でせう、他のものとくらべて何處か垢拔けて、高尙で、その上平民的なところがあります。かやうな女學世界を讀むでよく解かる人は、やはり何處か垢拔けて、高尙で、その上平民的な人であつてほしいと思ひます、それにも拘らず、誌友倶樂部の方を見るのに、讀者らしい人は數へる位もないやうなのが殘念です(仙臺櫻子)

▲くせ直し女樣とやら、何卒御姓名をお明し下さいまし、本誌にくせ毛直しのことを出しましてから、御申込の方が五百名にも及びまして、其初めのお方は私より僅少ながら進呈致して居りました、小包料お送りになつた數十名のお方は皆少し遲れましたが、それ〴〵御送り申上げた筈ですが、何分多數の中の事ですから、貴女の樣な方もあつたかも知れません、それは幾重にもお詫び申上げます、然し貴女はあの樣な事をお出しになる前に、一應何故お申越下さらないのですか、それからお申込の方で、御返事を申上げない方がまだ半分程ありますが、三月の中旬迄に是非終つて仕舞ふ積りです、若し御返事の屆かない方がありましたなら、是非お知らせ下さいませ(京都にてつれ子)

▲私は旗野如水樣の胃病全治實驗談を拜承し、乳薬の大滋養劑なるを知り、早速之を需めて其効能書を見ますると、其内に內務省衞生試驗所の乳薬定量分析報告寫と、牛乳を分析したる成績寫とが、左の通り對照してありました、

	脂肪	含窒素物	乳糖	植物纖維素	澱粉及糊精
乳薬	一、九二	一〇、三六	七、六五一	〇、七七	六六、八五
牛乳	三、六五	四、毛窒素	一、八二	其他略す	

右表を一見せば、牛乳より乳薬の方が滋養分が多く見えますが、併し牛乳中の含有水分八四、四二を控除し、乾分の比例にして見ますと、牛乳には脂肪二一、五、窒素二五、八、乳糖二一、八四を含む割合となり、乳薬の滋養價値は牛乳に及びませぬ、何分乳薬の効能書は、液體たる牛乳(多量の水分を主とせる)と、粉末たる乳薬の分析對照ですから、乳薬が牛乳よりも効能があるといふ旗野樣のお說は如何かと思ひます(丹後國舞鶴町、味田幸子)。

▲三月號胡蝶樣の「大學病院受診の記」、私はハツと思つて一番に讀みました、人樣事とも覺えず、恐怖と不安に胸とゞろかしながら、御診斷の結果は如何で御座いました、死刑の宣告云々は、きつと〳〵御杞憂に過ぎなかつた事と存じます、また私は夫れを遙かの空から祈つて居ります、あゝ私も貴女の御心情に、過ぐる日病院へそして悲しい宣告を受けました、絕望の胸を抱きて今は空しく病床に(病める女)

▲三月號ほんとに宜しうございました、其の中でも武田藍渓樣の「姑と嫁の親睦策」、目前に新妻に成るべき私共には、よき敎訓でありました(仙臺、淸香)

▲「かすむ野道」ほんたうに感心なお絹さんね、私終りのお母樣がお詫びをなさるところ、思はずホロリとしました、お絹さんはどんなに嬉しかつたでしやう、あゝ私もお母樣がほしいわ、だけど私のお母樣は、あの天國へいらしつてもうお歸りはない、アゝ(神奈川、波多野禮子)

▲御存知のお方もございませうが、雜誌新聞などに、此頃廣告が出てなります高柳孝子といふお方の、色白くなる云々のあれは實際に効がありませうか、多くの愛讀者樣中には、定めし御存じのお方もゐらせられませうと存じますから、どうぞ色黑きものが用ゐて白くなりますか、又どれ程用ゐて効がありますか、詳しくお知らせ下さいませんか(金澤市の一少女)

▲此度の增刊「悲劇十番」は、どんなに悲しい事が集まる事でせう、私悲劇が大好よ、今から增刊が待ち遠い(中津片田舍の路草)

▲樺山伯を會頭とせる大日本園藝協會にては、廣く園藝趣味を普及せしめんとて、左記の種子を無代進呈する由、希望者は、送料箱代として金參拾錢封入、同會主幹横濱市青木町千葉晩香宛申込まるべしとなり。△優等ダーリア種子△ダーリア球根△千島產五葉松種子△變化朝顏△ハイブリダム△長糸瓜△石竹△其他西洋草花類

▲深雪女樣の「婚姻の會話」コンパニー、ずゐぶん素破拔いて居らつしやるのね、私もそんな經驗のあつた一人よ、けれども今は埋木(南紀、埋木)

▲私は當布哇島ホノカアに住んで居る田舍者でございます、昨年六月から、梅酒葉子樣と同樣に、通學かた〴〵本誌を無二の友として愛讀して居ります、元より不束な者でございますが、今後は妹とお思召し遊ばして、玉章の交換や、私が見る事の出きん本國地理歷史の參考となる繪葉書の交換をお願ひ致します、お禮には布哇島の繪葉書差上げます　住所は下の通りです(大和增代)M. Yamato. P. O. Box 33 Honokaa, Hawaii.

▲三月號は相變らず百花撩亂たる美くしさ、分

けて松平さまの教訓話承つてしみ〴〵感じました、又々「悲劇十番」で御置筆お振ひ遊ばせ（濱花にて貞代）

▲諸姉様の中で、佛蘭西語をお學び遊ばした方と、御交際を願ひます、又佛語の小說でもお持ちでしたら、拜借いたし度う存じます（東京、志保女）

▲紀伊の里なるもゆる女様、よく似て居りますのよ、私三月號を受け取るや否や、又お仕ごとの歡が來たつて笑はれました、お互に母様泣せですれ、けれど私は母様には隨分つくして居りますわ、もゆる女様、これを御緣に何卒末長く御交際下さいまし（羽前、野の雪）

▲皆様の内で、懇切に和歌を添削して下さる先生を御存じの方は、何卒敎へて下さいませんか（釜山、むらさき）

▲私は多年本誌愛讀者ですが、今回左の様な會が出來ましたから御紹介申し上げます、外國の少年少女と御文通を希望の方は、今回設立なつた極東交換倶樂部が一番近道で、會費は一ヶ年が一圓二十錢、隔月には會報を下さいます、世界一と思ひます、妾も會員の一人です、二錢切手を送れば規則書を下さいますからお望みの方はお申込みなさい、所は、關西申込受取は、神戸市海岸通一丁目日本郵船會社の極東交換倶樂部支部です（神戸市にて森本みき）

▲私の様な田舍に居る者は春が來ても何んの樂しみもありません、其れに四月は卒業して淋しい山里の故郷に歸るのかと思へば、嬉しいにも淋何とやら悲しみの涙が頰をつたひます（出羽路にて葉末の露）

▲昨年の十一月號で見出しました秋ハツエ様、貴女の住所をお知らせ下されば、私の渡航致したる理由をくはしくレターにてお知らせ申します（北米加州、常子）

▲私は鏡子様が一等好きよ、近頃お見えになつた尾崎恒子様のも結構ですわ（琵琶湖のほとり露の玉）

▲私の身に御同情下さいました水仙花の君、貴女様はどなた様で居らつしやいますの、おなつかしうございます、私も最早何事も運命とあきらめては居りますけれども、實際貴女の仰せられた様に、子供の將來が案じられて、今日に至るまで一日として思ひ出さない日はありませんですの、お情け厚き水仙花様、並に諸友の諸姉様よ、お察し下さいませ、たとへ夫はどの様に人非人の行ひすとも、私は生涯子供の爲め獨身にて世を終る覺悟でございます（山梨にて朝顏）

▲官立東京音樂學校は何區何町何丁目にありますかお知らせ下さい（みどり）――上野公園にあります

▲記者様、美顏術師の御住所お知らせ願ひ上候（芝、多村たれ子）京橋區竹川町理容館主遠藤はつ子様です

▲野菊様、此の節は如何遊ばしたので御座いますか、ある友なんかは野菊様〳〵で、夢中になつて入らつしやいますのに（下總の國、姫子）

▲どなた様か増刊「賢く手紙」お持合せの方は、恐入りますが下名までおゆづり下さいませんか必ず御禮致します（茨城縣水戸市上市五軒町角瀨田方若木みどり）

▲在米田中千代子様、もしや貴孃は、三四年前名古屋にいらつしやつた方ではございませんかお年はたしか十六七でせう、次號でお返事を下さい、私は今も名古屋にゐて、高女學校に通つてゐます（名古屋、美佐子）

▲皆様のお内に、増刊「さま〴〵の家風」今年の一號二號、御不用のお方はお惠み下さいませんか、おれいにはいろ〳〵のエハガキをさし上げます（京都市西洞院花や町上る淺野方吉田たみ）

▲諸友の皆様、繪葉書の交換をお願ひいたします、又雜誌や編物等をお送り下さいませ、お禮には必ず相當のものお送りいたします（大阪市東區谷町四の一六石原内中山嘉香）

▲姉様方の中に、繪葉書のお好きな方は交換を致しませうか（京都府與謝郡吉津村須津三九、小谷道子）

▲皆様、どうぞ繪葉書を送つて下さい、わたしからも差し上げますから（北海道余市町　増山方深雪女）

▲諸友の皆様、私は東濃の四方みな山で何處かへ行くにも山坂を越されば成らぬ田舍に住む者です、女學世界を何より慰藉者又親友として居りますが何卒皆様と御交際を願ひます（東濃土岐郡泉村字大富、田中菊枝）

▲仙臺市北鬼の子様、何卒御住所を御知らせ下されませ、それから四方の御姉上様、繪葉書交換をお願ひします、妾は肉筆風景上等品に限ります、古蹟の畵は特に歡迎致しますから何卒送つて頂戴（佐賀市新馬場石井宅高尾靜枝）

▲御文の御交換を願ひます、返信は屹度致します（奈良縣吉野郡大淀村增口高木方渡邊美那子）

▲諸姉様達よ、妾名所繪葉書が大變好きでござ

いますから、どうぞ五ヶのものをお送り下さい、代りに下關市名所の小でも鮮明な分を選んでお返し致します（福岡市中間町中野生花堂内辰子）

▲姫路片田舍においでの殘月樣、以後御交際を願ひます、失禮ですが御住所とお名をお知らせ下さいませ（佐賀縣佐賀市松原町百十二番地藤井ため子）

▲本誌にお見えになりました檜村の宮原よし子樣、私下手なのですが繪葉書さし上げますから御住所を下名までお知らせ下さいな（下谷區仲御徒士町四ノ三〇、大川婦子）

▲皆樣の内で名所、古跡、學校の繪葉書をお送り下さるお方はございませんでせうか、私は非常な繪葉書好きでございますの、お禮は必ず致します、私の方にはいいのはありませんから、外の品でお禮を致しますから……どうぞおねがひ致します（出雲、千代香）

▲北米パクレ市の稲村北子樣、いろ〳〵お地のお話が承りたうございますが、おさしつかへがございませんでしたら、御住所おしらせ頂き度うぞんじます（大阪にて　ＴＨ）

▲皆樣の内に、嫁ぐ人、マダム振、靡く手紙、御持ちの方は、いづれでもお惠み下さいませむかお禮には、淡路名所繪葉書一組お送りいたします（兵庫縣津名郡釜口村、岡本清子）

▲誌上にて大和の方の投書家のまれにお見受け申しますうちに、中富よしみの君が、ほんたうに和歌に御熱心でおはしますのね、わが大和のお方と思へば、人事ならず嬉しうございます、何卒今後もおふるひ遊ばせよ（吉野河畔にて清子）

いま優しい皆樣よ、何卒拙なき妹と思召しておお玉章や、繪葉書などをお惠み下さいませ、必ずお返し致します（茨城縣那珂郡神崎村字本米崎久保五七番地武藤繼之介方にて喜美子）

▲諸姉樣、御交際願ひます、海外の皆樣へも御願致します（新潟縣佐渡郡兩津町字夷五ノ一渡邊方中川香津子）

▲繪ハガキの交換をお願ひ致します、海外の姉樣方にもお願申上げます（土佐國幡多郡宿毛町野村喜久子）

▲海外の諸姉樣と繪はがきの交換をお願ひ申します（京都押小路鉄屋町西入安居、船木ﾜﾞ子）

▲諸姉樣、各地風景、人物の繪葉書の交換を願ひます（靜岡縣榛原郡地頭方村、原崎富士枝）

▲諸姉樣、繪葉書の御交換をお願ひ致します、御寫眞をお惠み下さつた方には、特に小說船來繪葉書にて御返禮致します（兵庫縣伊丹町常盤町栗山方小笠原夏子）

▲繪葉書玉章等交換をお願ひ致します、海外の方は特に御心安く御交際下さいな（本郷區弓町二ノ三鹽野方、佐々木夏子）

▲作品を匠されるなら、それは人によつて見樣もございます事、寄稿され方の私事に立入つて彼是言ふは中傷としかとれません、前號にも、磯千鳥樣を早大の方と言つてる方が有りますが、根も無い話、詳しくは遠慮しますが、其名によつて皆樣の想像なさる樣な若いお方です、（千代子樣の事も必と噓ですわ）、千代子樣に比べて、磯千鳥樣の地味の内に情趣のある筆致——隱れたる貴讀の友はお作の出るのを待ちこがれてをります、（神戸、くれなゐ）

▲私今日古い女學世界を讀で居ましたら、女中が來たので、私に最も力を與へた「猛き妻」の話して聞かせましたの、松下樣御姉樣不幸でゐらしたのね、私お可愛相でなりません、難波行きとある上は、濱寺ですわ、母校とは淸水谷、夕陽ヶ丘、宮島、どちら、私この中の某校生徒、私何んだか御なつかしくつて御寫眞もみたいし、いろいろ日常の御事なんか御認めの日記も承りたう存じます御身お大切にあそばしませ、（天王寺にて月見草）

懸賞十二支合せに就て

豫て募集中の懸賞十二支合せは、都合あつて賞金の割當方を變更し、豫定の壹百圓を左の通りに分つ事に致しました。つまり賞金高は同じことで、之を受くる人數が多くなつたのです。其の結果は四月十五日發行の増刊號に於て發表致します。

一等（金五圓）五名　二等（金貳圓）十名

三等（金壹圓）三十名　四等（金五拾錢）五十名

合計金壹百圓　人數總計九十五名

募集（四月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）……金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內｛定刊數……十二冊
　｛增刊四回……一、五、九、十一月價格同一

郵税　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十五年三月廿三日印刷納本　第拾貳卷第五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　市川七作
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番
　　　　　千十八番　三千二百二十九番

□少女の方一番喜ばるゝ雜誌□

第七巻第五號

少女世界

四月一日發行

菊判紙數百廿八頁
美麗口繪數葉挿入
正價十錢
郵稅壹錢

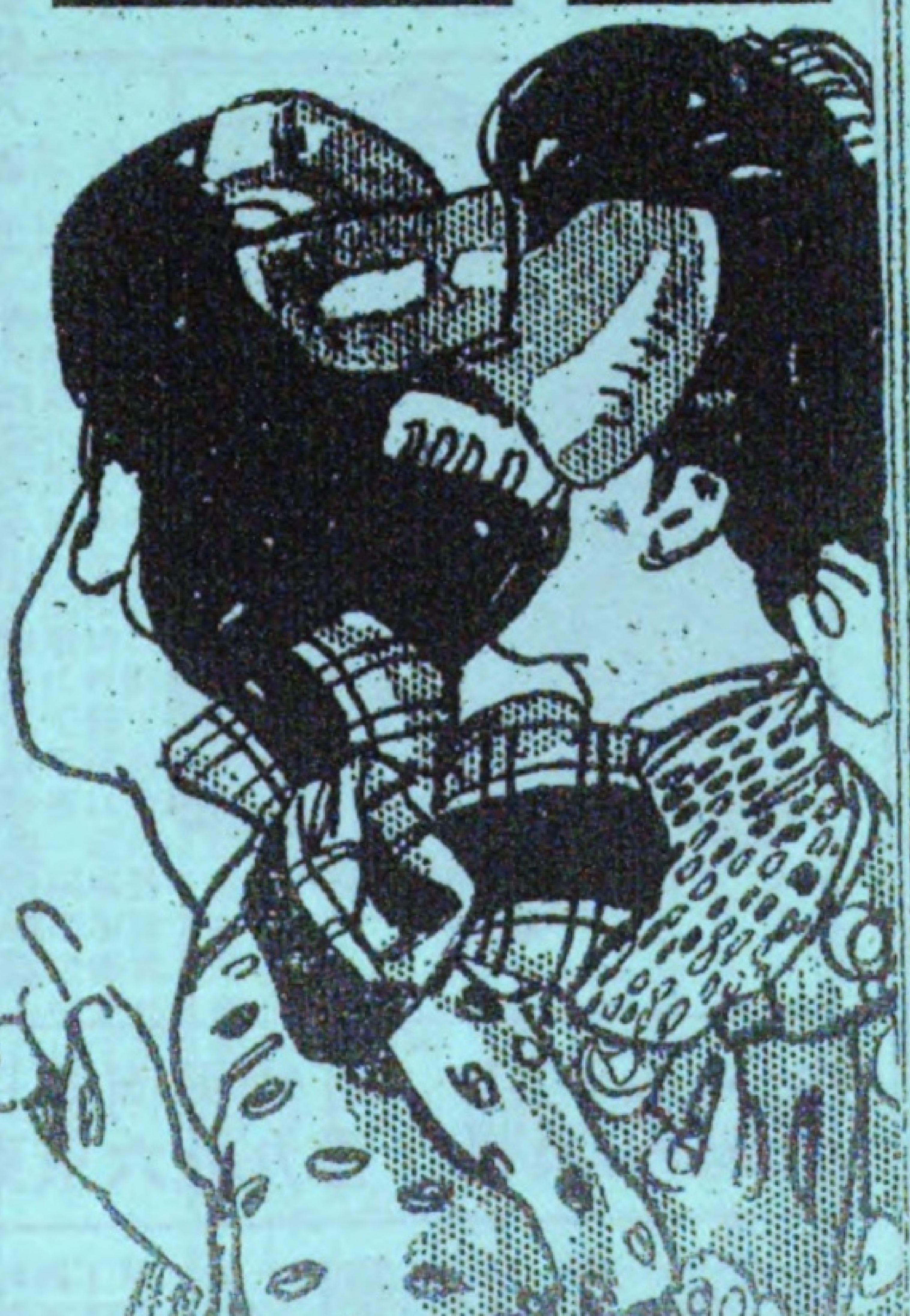
口繪
▼春日の鹿（三色版）中澤弘光
▼おもひ出し（石版）竹久夢二
□寫眞版……四頁□

□卒業生と一年生　沼田笠峰
■新學年……記者
□春のおもひ……與謝野晶子
■輪やなぎ……三宅花圃
□市松リボン……巖谷小波
■冒險小說人形の奇遇　押川春浪
□緋桃さく頃……三枝子
■仰げば尊し……記者
□少女家事土曜日……ひさ子

□姉樣の指環……永代美和代
■おぼろ夜……多摩子
□さくら月夜……川島みゆき
■草野の里……小野小峽
■手帳の中より　沼田笠峰
□とき色縮緬……松平鏡子
■第廿五回筆踊……
□少女の日……ほしう

少女會館は本誌の誇りにして學藝室娛樂室、顧問室、談話室ともいよ〳〵盛況を呈す

東京本町
博文館
振替東京[illegible][illegible][illegible][illegible]○



女（後付の二）

少女世界第七巻第六號增刊

學校時代

四月十日發行

菊判紙數百廿八頁
口繪、三色版、石版
寫眞版等數葉挿入

正價十錢
郵税壹錢

華やかで樂しい少女の學校時代！　生涯の運命をさだめる大切な學校時代！　この時代にはさま〴〵の注意！必要ですし。またいつまでも忘れ得ぬ思ひ出もあります。その意義深き學校生活と、なつかしい思ひ出とを記した『學校時代』だ、少女は必ず一讀せねばなりません。殊に、學校へ入學することの出來ない不幸な少女のためには、親切な學修法や教室日記も揭げてあります。

内容の一斑

●女學の五ケ年
●新らしい教科書
●樂しいクラス會
●忘れ得ぬ友垣
●教室日記
●少女學修法
○少女對話　同窓會……巖谷小波
●寄宿舍の夕
●忘れ得ぬ先生
●好きな學課
●運動場のポプラ
●女子師範より
●遠足の歸途



東京
本町
博文館

三島中洲先生題字
山本章夫先生考訂
門人井上麟吉君俗解

考訂 孝經

（全一冊袖珍本總洋布）特製紙數百六十頁 **正價廿五錢** 郵税四錢

孝は天の命人道の大本なり然るに今や智巧の學術盛に人其途路に昏迷せんとす此時に當りて忠孝の天理を鼓吹し根本不易の道を誘導し以て暗夜の燈火風浪の磁針たらんとするものは本書也考訂者の學識高遠なる解說者の意義に明に喩を取るの適切にして豐富なる而も讀み易く解し安く眞に得難きの寶典なり。

惟ふに子として誰か其親を愛せざらん然れども彼の山鹿素行の説したる如く晨省昏定の勤めは缺き易し殊に父母高年其事ふる所の日短き者は大に省みざるべからず苟も島國の臣民たるものは皆此一本を得て日夜翫味し實踐躬行に努めよ

東京本町 **博文館** 振替口座東京二番

木村小舟君著 田代古崖君畫

日本神話 劍と愛

◉全一冊四六判上製◉美本
紙數三百四十頁◉口繪極彩色
定價金五十五錢▲郵稅八錢

艶麗花の如き美文をもて、上古以來君臣父子夫妻の間に於ける節義を述べて我國固有の日本魂の依って來る所を知らしむ、文體は朗詠の調を帶びて朗詠にあらず、謠曲に似て謠曲にもあらず、一種の新體をなして朗々吟唱するに足るものあり、切に天下好文の青年子女の愛誦を俟つ

目次大要

△あだ片見 △かたわ車
△三寶の玉垣 △高佐士野
△淺茅が宿 △月の乙女
△紀念の橋 △蝴蝶
△糸の行方 △千引の岩
△羽衣以下十項

東京本町 **博文館**

冒險世界

怒濤號

定期増刊

海洋には怖しい傳説がある！美しい詩歌がある！驚膽すべき怪異がある！人間のまだ捜り得ざる無限の財寶がある！

怒濤號は此傳説と詩歌と怪異と財寶とが藏められたる秘密の國に入るべき黄金の鍵を、天下一百萬の讀者に與ふるものである！

痛絶！快絶！

本號一度び出でんか、洛陽の紙價恐らく俄然として勃騰せん！

第五卷第六號　四月十五日發行

大判百卄八頁　壯快口繪澤山　正價十五錢　郵税一錢五厘

(東京日本橋本町三丁目)　博文館　(振替口座東京二四〇)

醫學士 森 友道君著

淘宮術と處世

全一册菊判和裝
紙數三百三十頁
定價五拾錢
郵稅八錢

要目

著者森友道氏は醫を業として而かも打診投藥を專らとせず、所謂精神的衞生の觀念を普及するを以て醫師としての第一義の天職なりと主張して斯界に一異彩を放てる篤學の士也。本館曩に著者の「謠曲と心身修養」を發行して洛陽の紙價を高からしむ。今復た「淘宮術と處世」の著あり。其の說く所先づ淘宮術の本體を解剖して道德的意義を闡明し以て心身の衞生と新處世術の大綱に及び各一章を分つ事更に三五節、理論と實例と共に多方面の興味を以て日常道德と現代處世術のあらゆる疑問を解決す。實に是れ行住座臥の座右の銘、一擧手一投足の活教訓以て立身出世の鑑とすべく、安心立命の杖とすべし。現代道德の頹廢に思を潜むる者、教育家宗教家の一讀を要すべきは勿論、一般の紳士實業家學生諸君は本書によりて淘宮術の眞本體を知ると共に處世上最後の勝利者たるを得べし。

女(後付の六)

發兌元 東京本町 博文館

河岡潮風君著

五々の春

奮闘と大膽と健康增進法を教ふる快著

▲早稻田にあつて毫も講義を聽かず、圖書館に入り浸り、吾諷して『早稻田大學圖書館出身』と自稱する本書の著者は、浮世の鑄型にはまらぬ自造的(セルフメードマン)人物也。

▲レコード破りの病氣になり自殺せんとして死なず、つひに病魔を擊退す。年今や滿二十五にしてなほ志望定らず。政治家の權謀を解し、演說に巧みなる傍、文士の筆と詩人の情を併せ、商人の算數に通ず。この男、畢竟、何になるや、將來はX(エッキス)なれど、どうで、たゞでは死ねぬ男也。

▲『人生五々の春』と云ひけむ、知力充實の男性の二十五に、書きも書いたり六百餘頁。而かも氣焰は若からず上辷りせず、獨特の處世法と健康法とを說く。それかと思へば支那革命の詩あり。戀の歌あり。演說速記あり。所謂英雄の氣と兒女の情と併び行はれて悖らざるもの也。

讀書界未前の奇怪著。之を讀んで三嘆せざるものは人にして人に非らざる也。嗚呼

三月八日發行の處、四月八日に延期

四六判上製六百頁
寫眞版無數三色版石版數葉
定價八十五錢 郵稅八錢



發賣元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

女ノ後付の八】


商標
東京日本橋通二丁目
美術小間物
化粧品
柳屋本店
電話本局二〇一
フロラー
香水
美髪の御料には
柳清香油
けい素香油
が最も愛用されます
二十銭
一圓廿銭
一圓八十銭


貴婦人令孃方にして
今世界に著名なる
此美顔用
「シモン、クレーム」を未だ愛用せられざる方あらんや……
それは真に化粧を解せられざるお方なり
三越始め各地和洋小間物化粧品店にあり
横濱山下町七〇
エー、ハイム商會
大坂市心齋橋筋安土町四
關西特約店
河井商店化粧品部
rèmeSimon
シモンクレーム

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界 第拾貳卷第五號 ([illegible])
明治四十五年三月廿三日印刷納本